

---

# ANOTHER WORLD ~ 叶えたい夢のため ~

加羅紅里人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ANOTHER WORLD ～叶えたい夢のため～

### 【Nコード】

N2940J

### 【作者名】

加羅紅里人

### 【あらすじ】

『どうやっても叶えたい夢はありますか？』

都市伝説である夢集めの質問に答えて、異世界に飛ばされた同じ高校の6人、主人公浅村 秀は人には言えない暗い過去があった。しかしその暗い過去でした約束を守る為に、他の5人はそれぞれの夢を叶える為に異世界に旅立つ物語。

物語が進むにつれファンタジーぽくなります。

7月17日に投稿ミスがありました、ミスはすぐに直しました、  
すいませんでしたm(\_\_\_\_\_)m

## 第一章一話 夢集め（前書き）

初投稿です。

読んでくださる方々にいろいろな所を指摘してくださると助かります。どうか暖かい目で見てください。

## 第一章一話 夢集め

窓の外は雲一つない快晴で、その広大な景色に見とれる青年がいた、教室にいる生徒と誰とも話すことなくただ窓の外を見ていた。

「秀、意識あるか？」

「……（無反応）」

ドカツ！

「いつてー、何するんだよ連！」

窓の外を見ていた秀と呼ばれたのが浅村 秀で成績不良だが、運動神経だけは良い黒髪の青年で

どついた茶髪の短髪青年が夜坂 連で成績、運動神経ともに秀と同じくらいである。

「人が呼んでるのに何ボケーってしてんだよ」

「呼ばれてたんだ全然気がつかなかったやごめん」

中学校、高校と一緒にすごしてきた連は秀が空を見ることについていつも不思議に思っていた。

「また外を見てたのか、好きだねー青空」

両手を頭の後ろにあてながら飽き飽きしている。

「そんなこと言いなさんな、良いぜ青空は見てるとすごく心が落ち着く」

退屈そうに秀の話聞いていた連に秀は続ける。

「何か話があるから来たんじゃないの？」

二人がいるクラスが2年4組で連は5組で違うクラスであった。

「よくぞ、聞いてくれました、面白いニュースがあるから秀に知らせようかなって思ってな、聞いて驚け秀・・・」

「ZZZZ・・・」

ドカツ!!

「うつつう」

連の鉄拳がまた秀に入って秀は顔を歪めながらも痛みを耐えていた。

「寝るな！」

「だってお前が言う面白いことって大概外れだし」

面倒臭そうな顔を全面にだしながらも連の話の聞くことにしたとき

キンコーンカーコーン

「さあ帰った帰った」

少し悔しそうにクラスに帰って行く連に対し秀は笑みを浮かべた。

連がクラスに戻ったあとしばらくして担任がクラスに入って来てSTが始まった。

STが終わり担任がクラスを出ると、仲のいいもの同士喋る者の声が響くなか、秀が一人窓の外を見ていると

「ねえねえ浅村君、さっき夜坂君と話してた事なんだけど、もしかして夢集めのことじゃない？」

秀に話しかけてきた女子生徒は石月 紫音でこの北合高等学校陸上部の長距離のエースである。黒髪のみディアムヘアで可愛いと思う男子が数多く存在し噂ではファンクラブが存在するとかしな

いとか・・・

「ゆ、夢集め？」

「あれ、知らないの？さつき夜坂君から聞いたんじゃないの？」

「ああ、チャイムがなって時間切れってわけ、で夢集めって何？」

「夢集め、別名ドリームコレクター」

楽しそうな表情を浮かべながら喋っているのを見てみると、やはり女子高生というのは嗜好きだなと感じる。

「んで夢集めは何をするの？」

「夢集めは人の夢を叶えるんだよ」

「叶える？集めるんじゃないか？」

夢集めというネーミングからして集めるのかと思いついていた。

「突然人の前に現れてある決まった言葉を言うんだよ」

「・・・決まった言葉？」

『どつやっても叶えたい夢はありますか？』

「そう言ってその人の夢を叶えるだって」

「・・・あほらし」



いきなり初対面の人に会って、その人の夢を叶えるなんていう、それ自体が夢みたいな話に飽きた秀は夢集めの話を終わらせようとする。

「聞くかぎりじゃ都市伝説だな、そんな馬鹿げた話あるわけないだろ」

「でも、もし夢集めが浅村君の前に現れたら、浅村君だって叶えて欲しい夢があるでしょ？」

石月の言ったことに対し秀は背を向け一言だけ言った。

「俺の夢を叶えられる奴なんてこの世にいないんだ」

「えっ？」

(叶えられるわけないだろ俺の夢は・・・)

そのまま秀は外見ることもなく一時間目が始まる前に眠りについた。

## 第一章一話 夢集め（後書き）

どうでしょうか f ^ | ^ ;

自分の文才の低さに泣きそうです ( < | > )

文才の低さにめげずに頑張ります。次回は主人公の過去について触れてみたいと思います。

二話 秀の過去偏1（前書き）

一週間ぶりの投稿となりました

これからも一週間投稿とかになるとと思いますが、よろしくお願ひします。

## 二話 秀の過去偏1

床、壁、天井、全てが白色で統一されている部屋に少年や少女が複数いる

皆が全員身を震わせる。

その原因は二つ

一つは寒さだ、部屋は冷えきっているのにそこにいる者達が着ているのはボロボロの布切れ一枚、寒さを耐えるにはあまりにも酷だった。

ドアが開くと同時に部屋にいる者全員が体を震わせる、ドアの外には武装した兵士と傷だらけの少年が立っていて、少年が兵士に突き飛ばされ、ドアが閉まり部屋の中は静寂の二文字が包んでいた

これが二つ目の原因だった、ドアが開くたびに兵士が来て誰かを連れ出すか、連れ出した者を部屋に戻しに来る。連れ出した者に戻しに来る事に関しては、あまり恐怖心は覚えることはなくなつたが、誰かを連れ出す時には恐怖心が襲ってくる。

連れ出され何をされるかは連れ出された者にしか分からないものだ。

(ん？何処からか嗚咽のような音が聞こえる)

嗚咽の正体は先ほど兵士が戻しに来た少年だった  
おそらく連れ出された所で何かしらのことをされ、そのことで泣いているのだろう

・  
いままでは泣いている少年を慰めたりすることはなかったんだが・

「大丈夫？痛い箇所はどこ、擦るだけでもだいぶ違うからさ」

できるだけ少年を怖がらせないように話しかけると、少年は泣きながらも背中と絞るような声で言った。

背中を擦っていると少年と自分の所に少女が来て

「うんうん、慣れてきたね秀」

「お前ほどじゃないよ・・・凜」

俺がここで労ったりし始めたのは、この白羽　　凜のせいだ。

「秀、後は私に任せて休んでいいよ、この間からずっとこの子達の為に動き続けてるじゃない」

「それは凜だつて一緒だろ」

「私はいいいのでも秀はダメ」

「わけのわからない屁理屈たたきやがって」

「いいから秀は休ん・・・で」

凜が途中で言葉をつまらせ秀の後ろ側を見ていた。

凜につづいて秀も後ろを見ると、ドアが開いて兵士が立っていた。

「いつも言っているだろう騒がしくするなと」

兵士の迫力に耐えきれず泣き止みかけていた少年がまた泣き出してしまった。

「おい騒ぐなと言っているだろう！」

兵士が声を荒げるが、そんなことで泣き止むはずもなく、少年は泣きつづけていた。

「泣き止めと言っているだろうが！」

ドカ！

兵士の蹴りがお腹にはいり少年は後ろに倒れてお腹を押さえていた。

俺は兵士の暴力に我慢の限界がきていたが、俺よりもさきに我慢の限界がきていた者がいた。

「あんな小さい子になんてことしてるんですか！」

凜だった

「お、おい凜危ないって」

兵士に対して怒りを顕にする事に関しては嬉しいことだが、兵士に反抗するということは、暴力を覚悟しなければならぬということだ。俺はそれがいやでいつも兵士が暴力を振るっても見て見ないふりをしてきた。

「お前も、五月蠅いんだよ。」

パチン！

凜の頬が叩かれその場に倒れこむ

「・・・最低ね」

凜の言葉で怒りが頂点に達した兵士は腰に付けている警棒を両手で持ち、凜に振りおろそうとしていた。

「分からないなら分からしてやる！」

（あ、危ない！）

気付けばもう走り出していた、何故自分が動いたのだろうか分からなかった、自分の中にあるどの感情が自分を動かしたのか、ただまっすぐ兵士の方角に走っていた、一言叫びながら

「や、やめろおおおー」



「・・・秀・・・ろ秀・・・起きる秀！」

連の声で秀は目を覚ましたした

「大丈夫か少しだけうなされてたけど？」

「ああ、大丈夫 大丈夫ちよつと嫌な夢見ただけだからさ」

「んで、何か用？」

「何か用って今から昼飯だぞ食堂行くんだろ」

(ふん、昼飯かまあなんかお腹も減ってきたし・・・ん？待てよ俺が寝たのは確か一時間目では昼飯・・・)

「えっ！俺4時間眠り続けてたの！」

驚愕の睡眠時間に自分で驚き呆れる秀であった。

「はいはい、さっさと食堂行こうぜ、早くいかないと混むしな」

連と食堂に向かう時にさっきの夢を思い出していた。

嫌な夢だった、自分にとっては最悪とも言っていていい夢だった、もうあんな思いは絶対にしたくない。

そう心に誓い食堂に向かった。

二話 秀の過去偏1（後書き）

どうでしょうか？

ちょっと過去について語り過ぎたかなって思うところもありますね

（汗）

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

三話 彼らの学校生活（前書き）

前話で一週間投稿とか言ったばかりなのにこの失態すいませんでしたm(´`´)m

### 三話 彼らの学校生活

~~~~~食堂~~~~~

二人が着く頃には既に定食などを買い求める生徒でごったがえしていた。

「ほら見てみる秀が遅いから、ごったがえしてんじゃねえか」

「ごめん悪かった、てかいつもこんなに混んでたかな？」

みるかぎりではいつもの人数の倍以上であろう人数が食堂にいた。

「ああ、俺達が遅いのも理由の一つだけど、最大の理由があれだな」

連が指差した先には地味な食堂には似合わない派手な貼り紙があった。

《本日発売！一年に一度しか出ない幻の親子井限定50食まで》

「ああ、あれ今日発売なんだ」

「幻の親子丼か・・・去年発売してたから食べたな」

貼り紙の通りこの高校では一年に一度だけ幻と称される親子丼が食堂で販売されるが、日時などが全て非公開なので、生徒にとってはかなりレアな食べ物である。

「確かに去年食べたけどそこまで美味しく感じなかったかな、普通の親子丼って感じだったけどなあ」

「その意見に同意だな普通の親子丼だもんな、てか50食までなのに、50人以上並んでるよな」

「当分順番こないな・・・」

二人が買うまでにはそれから5分かかってしまった

「秀、何かおかしくないか？」

「何が？定食の味か？俺は普通だと思っけど」

「違うわ！お前だよ、お前」

「は？俺ですか？」

「いつも昼食食ってる時はテンション上がってるけど今日は食堂に来るときからおかしかったぞ」

今日見た過去ののおかげでがた落ちだったテンションを隠していたつもりだったが、連はいつもと違う秀のテンションの低さに気付いていた。

(よく見てるな〜感心するよ、そういってやるは)

「そうかな、まあ誰にだってそういう時があると思っけど」

「あっそ、ならいいけどさ、何かに悩んでるならいつでも相談してくれよ恋愛のみ受け付けるからよ」

「大丈夫、出来たとしても絶対にお前には相談しないから」

たとえ好きな人が出来たとして、どうすればいいか悩んでるとしても連にだけは相談しないだろう、コイツにそんなこと言ったら、3日で学校中に広がるだろう。

「そうかい、そうかい、さてと飯が食い終わり次第帰りますか」

俺達二人は昼食をおえ、食堂をあとにした



〃〃放課後〃〃

「秀、部活行こうぜ」

「何でそんなにハイテンションなんだ？」

「逆に何で秀はテンション低いんだ？」

「これが一般的なテンションの水準値だと思うけど」

「まあ、俺のテンションが高い理由ぐらい分かるだろ」

何故連が朝とは段違いなテンションなのか、その理由は部室に着け

ば分かるだろう・・・

ここいらで二人が所属している部活を紹介  
部活名はKK部<sup>かいけつ</sup>で、部員は3名で廃部を先生方に迫られている部活  
で、おもな活動は学校内の問題解決で生徒達の依頼で部活始動とな  
るのだが、この部活自体知らない生徒の方が多いので始動した回数  
も指で数える程度の部活だった。

～～部室～～

部室のドアを開けて、中を見ると既に部員が一人来ていた。

「あ、こんにちはお先してます」

「相変わらず早いね西脇」

俺達二人より早く来ていた最後の部で唯一の女子部員西脇 茜  
少し茶色がかったロングヘアで、前髪を分ける為に使ってる花の  
ピンがとても印象的な女の子  
部活に唯一花を添える重要人物であるが、それがめんどくさ悩みの  
種でもあった。

「茜ちゃんーん！」

(始まった・・・)

これが連がハイテンションな理由だった。  
見ての通り連は西脇 茜に首っただけである。

「い、こんにちは連さん」

「俺のこと、さんづけしなくていいって言ってるじゃん」

「あ、はいそうでしたね・・・」

連の猛烈なアプローチに耐え兼ねた西脇を見ていた俺は助け船を出した。

「いらいら、遊んでないで部活、部活」

「そ、そうですよ、今は部活ですよ連さん」

「でも、い、最近俺達なんもしてないじゃん」

「そらそつだ、依頼0だからな」

「開き直らないでください!」

確かにこのままじゃ廃部は免れないだろうから焦る気持ちはわかるけど。

「でも二人とも今日はなんと依頼がきてるんですよ！」

「まじでー」

椅子に座っていた俺達は二人とも転げ落ちる衝撃を受けた。

「二人が来る前に部室のドアに挟まっていたんです」

そう言って一枚の封筒をみせる西脇だったが

(ん？あの封筒職員室で使われる封筒だったな・・・まさか！)

「西脇さん！その封筒を開けずに俺に渡して」

「何ですか、3人で見ましょうよ」

「そつだぜ秀、3人で見たらいいじゃないか」

「いいか、世の中には知らなかった方がいいもんもあるんだ、さあ西脇さんいい子だから渡しなさい」

「何で急に子ども扱いなるんですか！」

そうこう言い合いしつつも結局西脇は封筒を俺に渡して、俺は二人に見えないように封筒の中身を見たが・・・

(はあ、やっぱりな)

#### 廃部通告届

今日から一週間内に部員3名、顧問、副顧問、計2名を入部させなければ、廃部決定がなされることをここに通告する。

（おいおい無理だろ・・・）

西脇と連はどうしても封筒の中身が気になっていて

「もう何なんですか封筒の内容は？」

「そつだ、そつだ話しやがれ」

「わかった、わかった俺の負けです、でも聞かない方が良かったかもよ」

息をはき、二人に廃部通告の紙のことを話した。

## 四話 帰り路

「……………」

「えーーーーー」

予想通りの反応だった

「えっ、えっ、何なんですか？こんな重要な物を隠そうとしてたんですか」

「いや隠そうしてた訳じゃないよ、取り乱すと思ったから、現に取



り乱してるから良かったかな」

「それは今だけです！それに私達に教えないつもりだったんですか？」

「まあ、ちょっとしたときにさらっと教えようかなーって感じかな」

「それなら結局先に教えてもらったほうが、対策とかをたてやすいです」

「わかった、わかった悪かったよごめん、じゃあ今日の活動はその対策についてでいい？」

西脇は俺がとつた行動に頬を膨らませ怒っているのを見て、少しドキッとしてしまったことは連には内緒にしておこう

「よし秀、茜ちゃん、今日はその対策についてだな」

俺達3人はその対策について話し合いを始めたのだったが・・・

一時間後

「ふ——」

何も出なかった・・・

「あゝ——週間しかないの」

「落ち着けっつて西脇さん、焦ってはダメだよ」

「そうそう、焦ってもいい案は浮かばないって、まあ俺は焦ってる  
茜ちゃんを見てるだけで幸せを感じれるからいいんだけどね」

結局一時間、みっちりと3人で話し合いをして、浮かんだ案が、帰宅部の連中を誘うという案だったが、この高校は部活が勉強という  
感じで、部活に入っていない者は、ほぼ勉強一筋で、誘うことは少し  
難しかった

「とりあえず帰ろうか、各自家で考えていい案が浮かんだら明日の  
部活で発表ってことで」

「はい、それでは今日は解散ということ」

俺達3人は部活動を終了して学校を出ることにした。

～～昇降口～～

「では皆さん私は図書室に行きますので」

「えー、それなら俺も茜ちゃんについていく」

相変わらず西脇が絡むと、すぐにこうなる連には本当呆れたものだ

「おいおい、連が静かに出来るわけないだろ、今日は大人しく帰ろ」

「そ、そつだよ図書室では静かにが鉄則だよ」

二人に言われたのがこたえたのか、それとも西脇に言われたのがこたえたのか、連も帰ることになったのだが

「おい夜坂、お前今日の小テストお前だけ引っ掛かっているのに、なぜ再テストに来なかった？」

「げっ、バーバリアン山本」

「そうか、夜坂そんなに先生と二人つきりになりたいんだな」

(あゝあ、やっちゃった)

「あ、いや先生あの、そのあーれー」

首根っこを捕まれバーバリアンにテイクアウトされて行った。

「連さん大丈夫ですかね・・・」

「・・・無理かもな」

学校を出るとグラウンドが夕日に染まり、いつものグラウンドではないかのように思わせる人が踏みしめるアスファルトさえも一種の芸術品に変えてしまう夕日、その道を帰る自分に少しだけ幸福を感じていた。

駅に着いて、電車に揺られること10分、自宅がある駅に着いてホームの階段を上がりきった時だった  
急に目眩に襲われ、その場でぐらついてしまったが、なんとか階段まで後半歩というところで踏み止まることができた。

(あぶない、あぶない)

冷や汗をかきつつ歩き出そうとした時、秀の目にはあり得ない光景が映っていた。

「ひ、人が・・・いない？」

秀の目に映った光景は人気が多い駅なのに、今は人っ子一人いない状態だった。

自分の置かれた状況が掴めない秀はただただ周囲を見渡すしかなかったその時

「どうかしましたか？」

「だ、誰だ！」

秀が後ろを振り向くと、そこには全身黒色で統一された服にフードを深く被った人が立っていて、いきなり秀に一言呟いた

「どつやっても叶えたい夢はありますか？」





五話 遭遇（前書き）

いよいよ夢集めの登場です

## 五話 遭遇

「・・・へ？」

「あなたには叶えたい夢はありますか？と聞いているんです」

いきなりのことでは何がなんだかわからなかった秀だがとりあえず、  
相手が誰だか知りたかったようで

「あなたは一体誰何ですか？」

「失礼しました、私は・・・夢集めと申します」

「な、何だって！」

(本当にいたんだ・・・)

「ご理解して頂けましたか？」

「え、ああ・・・うん」

石月から聞いて、あり得ない話だと思っていた夢集めが目の前にいることに驚きを隠し切れなかった。

「では、もう一度聞きますが、あなたには叶えたい夢はありますか？」

石月の言葉を思い出す・・・

「その人の夢を叶えるんだよ」

「もし、俺にどうしても叶えたい夢があるって言ったらどうするの？」

「あなたの夢を叶える為にお手伝いさせていただきます」

夢集めの言葉を聞いた秀は考えて込む

確かに俺には夢があるが、果たして叶えられるのだろうか、考えてみれば俺の夢は、ちょっとやそつとで叶えられる夢じゃない・・・

けど、

(チャンスがあるならのってやるーじゃん！)

「ありますよ、俺にはどうしても叶えたい夢がある！」

果たして、この決心が正しかったのかは、この時には分からなかった、これから始まる不思議な体験をするまでは・・・

「そうですか、分かりました、ではこちらの条件を一つ飲んでいただきます」

「条・・・件？」

夢集めは一步、二歩と歩いて、右手の人差し指を立てて秀の額に当たってこう言った。

「あなたの夢を覗かして頂きます」

「・・・っ!!」

これまでに、味わったことのない衝撃が頭に走り、秀はその場で膝をついた。

「はあはあ、一体・・・何をしたんだあんた」

「夢を覗かして頂いたんですよ、衝撃が走ることを言い忘れてましたね、申し訳ありません」

衝撃がかなりの威力のため、いまだに秀は立ち上がれずにいた。

「それにしても、凄いですねあなたの夢・・・いや約束は」

約束という言葉に過剰に反応してしまった。

「どうして、そんなことがわかるんだ!」

「言ったはずです、夢を覗かして頂きますと」

「人並み外れた能力だな、でも条件は飲んだぞ」

「残念ながら、今すぐあなたの夢を叶えるわけじゃありません、また近い日に会うことになるでしょう、それまで、これを持っていて下さい」

そう言って夢集めはポケットから定期券ほどのサイズの無色透明のカードを差し出した。

「何なんだこれ？」

「あなたの夢を叶える為に必要な物ですよ、大事に持っていて下さい、まあ捨てようと思っても無駄ですけど、それでは私はこれで失礼します」夢集めは駅のホームに向かって行って、秀の位置からはもう見えなくなっていた。

「待てよ、まだ聞きたいことが有るのに」

立ち上がり夢集めを追ったのだったが・・・

(そんな・・・いない)

夢集めはすでに居なかったそれに

「浅っちじゃんか」



駅のホームから同じ高校の生徒の新山　蒼士が声をかけてきた。  
つまり人が出てきたということだ。

「何してるのさ、階段で一人突っ立て」

「あ、そうだ蒼士さっき・・・あれ？」

（俺、何を思い出そうとしてるんだっけ？）

夢集めのことを忘れていたというか、思い出せなくなっていた、理由は分からないがいくら思い出そうとしても夢集めのことが出てこなくなっていた。

「おい、大丈夫か？」

「ああ大丈夫、大丈夫やっぱ何でもないや」

曖昧な言い回しでお茶を濁したが、秀は胸の中にあるもやもやが気になっていたが、蒼土と一緒に駅を出ることにした。

（何なんだろう、このもやもやは・・・）

## 六話 帰り路その2

駅を出た時にはすでに夜になっており、上を見上げると夜空には綺麗な星が輝いていた

蒼土と駅を出て10分、二人は公園のブランコに座っていた。

「時に浅うち」

「いきなり何だ？蒼土」

「あの時間に駅にいたってことは、あの部活活動してたのか」

あの部活とは、もちろんKK部のことである。

「まあな、KK部始まって以来の大きな壁にぶつかってね」

「大きな壁？」

廃部通告のことを話すつもりはなかったが、何か情報を得られる可能性があると思い、今の現状を蒼土に話した。

「はははは、まじかよ廃部通告されるなんて凄いな」

「笑い事じゃないんだよあと一週間しかないんだよそこでだ情報ある？」

「情報？」

「部活で上手くいってない人、顧問と上手くいってない人、辛い練習についてけずに辞めそうな人がいるかどうかってこと」

秀の言葉に聞いた蒼士はふっと笑い秀に言った。

「他の部活がどうかは知らないけど、少なくとも俺が入ってる陸上部にはそんな奴はいないぜ」

蒼士は石月と同じく陸上部に所属しているが、種目は長距離ではなく短距離で、一年からレギュラーであり次期部長候補でもある。そして、石月に思いをよせる一人でもある。

「そうか、そりゃ残念蒼士が入ったら、たちまち脚光を浴びてたのにな」

「俺が陸上部を辞めるなんてことないよ、俺は陸上が好きだしな」

「石月のこともだろ」

秀がそう言ったとたんに、周りがしーんとなり、ブランコの鎖と鎖がすれる金属音しか聞こえなくなっていた。

「な、な、何言ってるんだよ、別に俺はアイツのこと何とも思っていないよ」

（動揺し過ぎだろ）

「そうか、何とも思っていないなら良かった、ライバルが一人減って  
な」

「嘘だろお前も石月のこと好きなのか？嘘だよな」

「うそー、てかお前もっていうことは、やっぱり蒼土石月のこと好きなんだ」

ブランコから降りて地面に置いていた鞆をとって、先に公園の出口に向かう

「やっぱり蒼土ほどこらかいがある奴はいないわ」

「誉めてんのか貶してんのかどっちだ」

「もちろん両方だよ」

公園の出口で家が違う方向のため、蒼士とはそこで別れた。

くく自宅くく

自宅に入りリビングに入るとすでに家族が食事を始めていて、家族が迎えてくれた。

55

「あらお帰りなさい、珍しく遅かったわね、悪いけど先にご飯食べ  
てるわよ」

母親の浅村 洋子

家の家事全般をこなしつつ、とある小学校教師で我が家の稼ぎ口

「お帰り、ほんと珍しく遅いじゃない」



姉の浅村 咲恵

短大生でスタイルはいいが性格が最悪のため彼氏が出来てもすぐ別れてしまう

家事は一切できず、姉が作った料理で彼氏を二人ほど病院送りにした威力を持つほど

浅村家はこの二人と秀を合わせ3人家族である

父親は秀が小さい時に死んでいて、記憶すらあまり残っていない

「着替えて、手を洗ってきなさい」ご飯温めておくから

「ああ、わかったよ」

「んで、あんた今日こんなに遅かったのよ」

「お、何心配してくれてんの」

「ば、バカねそんなわけないじゃないの」

少し頬を赤めながら猛反論する

「冗談だって、姉さんの性格上そんなわけないし」

「あんたね、人をからかうのもいい加減にしなさいよ」

味噌汁を飲もうとした時真横から拳がとんでくるがそれを簡単にかわし、次の攻撃が来る前にごちそうさまをして、部屋に逃げ込む

「はあー何か今日はどっと疲れたな」

ふと時計を見るとまだ8時ごろであったが、想像以上の疲労のため、さっさと風呂でも入って、いつもより早く布団に入って眠りについた。

七話 早起きは・・・(前書き)

この話で最後の6人目の登場となります

七話 早起きは・・・

いつもより早く寝たおかげか、とても目覚めが良かった。

リビングに入り母親しかいないことで、姉がいないことに気付いた

「姉さんまだ寝てるのか」

いつも秀が起きる前からすでに起きている姉が起きていなかった

「ちょっと秀、母さん今手が離せないから、咲恵起こしてきてくれる」

（しゃーなーなー）

リビングを出て姉の部屋をノックする

「姉さん、朝だぞ起きろ」

「……」

「姉さん？」

「……」

「入るよ姉さん」

ガチャッとドアを開けるとベッドですやすや眠る姉がいた

(このままだったらスゲー可愛いのに……)

「姉さん朝だぞ起きろ！」

体を揺さぶって起こすとやっと目を開けてくれたのだが……

「レデイの部屋に許可なしで入るんじゃないよ！」

ブチギレモードで起きて来た姉の手はすでに拳をしっかりと握っていた

「ね、姉さんとりあえず落ち着こつ」

「問答無用じゃーい！」

午前7時8分43秒

浅村家の姉対弟の格闘勃発

「はあーったくひどい目にあっただな」

朝から余計な体力を使ってしまった。

「ご苦労様、姉さん待たずに先にご飯食べときなさい」

姉対弟の第二次格闘対決だけは、何としても避けたいためにとつもないスピードでご飯をかきこみ、そのまま家を出ることになった。

外は快晴で空気も澄んでいて、秀が一番テンションが高い状態だった駅に入り改札口を通る為に財布から定期券を出そうとした時、財布には夢集めから貰った透明なカードが入っていた。

いつもより早いせいかわ、通学路にあまり人はおらず、おかげで時間短縮になってかなり早く学校に着いてしまった。

自分の学年の階に上がっているとき、上から焦りまくった声があった。



「あゝ！あぶないー」

その時、かすかに見えたのが、自分の方向に落ちてくる段ボールと、それを呆然と見てる女子だった。もちろん段ボールは見事に自分の体に着地して、自分自身は大ダメージ受けた

「い、いめんなさい」

「いや、大丈夫だよ」

段ボールを運んでいた女子は生徒会で書記をしている新藤 麻里で運んでいる途中、階段で手間取っているときに段ボールを前に落としてしまい今になる

「まったく、段ボール3つ重ねて運ぶからこんなことになるんだよ」

そう言って、3つの内の2つを持って

「運ぶの手伝うよ、何処に持っていくの？」

「いいよ、いいよ浅村君の上に落つことしたのに申し訳ないよ」

「じゃあ、落つことしたお詫びとして段ボールを運ばせてよ」

新藤は一本取られたというような顔をしていた。  
そして残りの段ボールを持って、ありがとうと一言言って、階段を降りていった

「どうも、ありがとうございますおかげで、運ぶ回数が一度で済みました」

「いえいえ、どういたしまして」

資料室を出て鍵を閉める時に新藤が

「私やっぱりお礼なしってというのは嫌です、何か一つお礼をさせて下さい」

「・・・わかった、じゃあ最近部活を辞めそうな人知らないかな、この質問に答えるだけでいいよ」

「分かりました！今、調べますから少し待ってください」

そう言って、スカートのポケットから手帳をとりだしページを次々とめくっていった。

(・・・尊通り)

新藤 麻里の別名、北合のデータベース

ほとんどの北合情報が彼女が持つ手帳につまっっていて、自分に必要な時にしか使わないかなり貴重な物  
そして待つこと5分

「うーん、残念ながらもいませんね」

「そうか、わかったよ、ありがとう、それじゃあ俺はこれで」

「はい、ありがとうございました」

新藤が手帳を閉じた時、手帳から何かが落ちていき  
秀の足下にその物が滑ってきて、それを拾おうとした秀はその物を見て驚いた

「透明の・・・カード」

七話 早起きは・・・(後書き)

やっと、6人全て登場しました。

## 八話 カードを持つ者達

自分が持つものと全くおなじ物を持っていた新藤に聞いたです

「おい新藤その透明なカード、いつ何処で手に入れた？」

「ああこれね、実は私もよく分からないの」

「そうか新藤もなのか」

ポケットから財布を出し、透明なカードを新藤に見せる。

「浅村君も、持っていたのこのカード」

「まあね、いつ何処で手に入れたのかも分からない、気付いた時はもう財布の中に入れてたんだ」

「何なんだろうねこのカード」

新藤のカードを見たことに、だいぶ驚いた秀だったがさらに驚いたのはこの日の部活の時だった

部室に着くと、連と西脇が珍しく何か考え事をしていた。

「一体二人とも何やってるんだ？」

「こんにちはは浅村君、突然ですみませんけど、これに見覚えは有りませんか？」

そう言っつて西脇が見せたのは今度は2枚の透明のカードであった。



(何なんだよこのカードは)

「一体何処でこのカードを手に入れたの？」

質問をするが返ってくる言葉は決まって

「それが不思議なことに気付いた時にはもう手元にあったんです」

2枚の内、一枚は連のもので連も西脇や新藤と同じく、気付いた時  
にあったと話す  
自分は自分も同じということと、新藤が持っていたことを二人に話  
した。

「今、透明のカードの枚数は4枚ってことか」

「いえ、6枚です」

「え、何言っただ俺、連、西脇さんと新藤で四人だろ」

「実は、私達の他に陸上部の石月さんと新山君が持ってるんですよ」

「へー、そうなんだ、てか何であいつらが持ってるのを知ってるの？」

石月と一緒にクラスの自分が知らなくて、違うクラスの西脇が知ってることに疑問に思った。

「石月さんは昨日の帰りしに会ってその時にカードの話をしたんです、新山君は連さんが自動販売機でジュースを買ったときに財布に入ってたのを見たんです」

「そうだったのか、でも深く考えることじゃあないと思うな」

「そうですか？普通こんな不思議なカードがでたら何に使つか気になりませんか？」

「いや、俺が言いたいのはカードもいいけど廃部のことについての話だよ」

廃部まであと6日、6日などすぐに過ぎてしまうのでいろんな対策を立てるものだが、西脇と連はカードが気になってしょうがないようだ。

「確かにそうですね、でもそれはいい案がなければいけません、かといってまた話し合いを開いても、また同じ結論にいたるのが見えますからね・・・それに、するならこのカードが一体何なのかについて話し合いをしたら面白いと思いますけど」

西脇の言葉を聞いた秀はもう何を言っても無駄だと感じ

「そうだな、あと6日しかないじゃなくて、まだ6日あると、今は考えときですか」と聞き直すこととした

そしてその日のKK部の活動は終わった。

これから長い間KK部に行けなくなることも知るはずもなく・・・

その日の帰り道、公園の横を通り過ぎるとき、公園で少年が泣いていた

体が無意識に反応して少年の元に向かおうとした時、すでに少年の横には少女がいて、少年を慰めていた

その光景を見た秀は一瞬、自分の過去と照らし合わせている自分がいることに気が付いた。首を横振り再び家に帰ろうとした時、後ろから聞き覚えのある声があった。

「懐かしいですか」

足を止めてゆっくりと後ろを振り向くと、そこには昨日の夜に会ったフードの男が立っていた。  
そして、そのフードの男を見た瞬間、頭の中の欠落していた部分の記憶の欠片が次々と繋がっていった。  
昨日の夜に夢集めに会ったことも、透明のカードをいつ何処で手に入れたかも全て思い出した。

「あの時の・・・」

「どいつもこんにちは浅村さん、あなたの夢を手伝いに来ました」

## 九話 夢集め再び

「あなたはあの時の」

「ええ、夢集めです」

昨日会ったにも関わらず久しい感じがした秀は夢集めを質問責めにしていた

「何でまた現れたんだ昨日の今日だろ」

「簡単ですよ、あなたの夢をお手伝いをさせていただくために来たんですよ」

「一時的に記憶が混乱してたんだけど、これはあんなのせいなの？」

「ええ、あまり目立ちたくないのね、悪いことをしました」

等々いろいろな質問をしていたが、夢集めの方が切り、話の主導権を取り返す。

「あなたはどうしても叶えたい夢があると言いましたね」

「ああ、そういや言ってたなそんなこと」

「では、あなたの夢を叶える為に行きましょうか」

「行きましようかって、一体何処に？」

秀に質問された夢集めは口元に笑みを浮かべながらこう答えた。

「異世界ですよ」

そう言っ指を鳴らすと辺り一面が光に包まれて、秀が次に目を開けたのは、のどかな公園ではなく、周りが色と色が混ざり合った風

景でぐにゃぐにゃと曲がっていて、要るだけで平衡感覚を失いそうな場所だった。

「・・・何処だここ？」

「世界と世界の間と言っておきましょうか」

後ろから夢集め声がして振り向くと、そこには夢集めとドアがあった。

「何だそのドアは？」

「どうしても夢を叶えたいならドアを開けてください、皆さん待っています」

（皆さん？）

夢集めに言われた通りドアを開けるとそこには意外な人物達がいた。



「連！蒼土！それに石月に西脇と新藤！」

「おお、秀じゃねえか」

「最後の一人って浅村君だったんですね！」

まるで久しぶりに会ったかのように話す6人だったが夢集めが咳払いをすると、6人全員が黙り夢集めの話に聞き入る。

「では、今から説明に入らせていただきます、皆さんカードはお持ちですね」

夢集めに所持の確認されそれぞれの所からカードを取り出すと、6

枚のカードには同じ数字の20という数字が浮かび上がっていた。

「な、何だこれ？」

「その数字はあなたが異世界に旅立つまでのタイムリミットですよ」

「じゃあ、私達が異世界に行くまであと20分ってことですか？」

「これはあくまでも説明ですから、例を上げたまでですから、その数字は何の意味もなさないですよ」

「じゃあ、何でこんな数字を出したんですか？」

「それは、あなたがいくつもの異世界に行く必要があるかもしれないんです」

夢集めがそう言うのと、全員の頭に？が浮かび上がっていたのを見て、夢集めは捕捉説明をする。

「ですから、一つの異世界に行っても、夢がかなうかはどうか分か

らないんですよ、例えばあなた達の中の一人が夢を叶えたとしても他の方が叶えられるとは限らないんですよ」

「つまり人によってはいくつもの異世界に行かなければいけないってことか」

察しのいい蒼士は説明を聞くと何かに気付いた

(・・・さてよ?)

「いくつもの異世界に行くってことと異世界に行くまでのタイムリミットがあるってことは、俺達は異世界からもとの世界に戻るってことか?」

「ええそうですね、しかし異世界からもとの世界に戻るには条件があります」

「条件?」

「あなたが行く異世界には必ず大きな闇を抱えています、あなた達にはその闇から世界を救ってください、そうすればもとの世界に戻る事が出来るでしょう」

「・・・はあ!?!」

「世界を救うなんて無理だって、俺達はただの学生だぞ」

「大丈夫です、あなた達ならきつと出来ますよ、それに夢を叶えたいなら有無を言わず頑張ってください」

そう言つて、夢集めがある方向に指を指すと、指を指された所には  
またもやドアが存在していた。

「さあ、いまこそ旅立つ時です、ドアに集まってドアの前でカード  
を掲げて下さい」

夢集めに言われた通りにカードを掲げると、いきなりカード光り、  
それぞれの腕のサイズにピッタリの腕輪に変形し始めた

「ええ!?!?!」

「驚くことありませんよともとそういう形でしたから、それとその腕輪はいろいろと役にたつと思います」

(ふーん、こんな腕輪がね・・・)

「異世界に行く前に、浅村君ちょっといいかな？」

夢集めに呼ばれた秀は仲間と少し離れた所に移動した。

「何ですか？」

「みんなに私これから長い間現れないと伝えておいてください」

「それだけですか？」

「ええ・・・それだけなんですけど・・・」

「・・・じゃあ俺は行きますね」

ドアの前で待っているみんなのもとへ向かおうとした時、秀は立ち止まり夢集めの方を向いて一つ質問をした。

「俺達昔で会いませんでしたか？」

「ほう、何故ですか」

「いや、ただなんとなくですけど」

「そうですね、でも気のせいでしょうね」

「そうですね、じゃあ行ってきますね」

秀が仲間の待つ方向に向かって行く姿を見て、夢集めは誰にも聞こえない声でこつ呟いた。

「浅村君、後は頼みましたよ」

## 第二章一話 異世界へ(前書き)

第二章に入ることが出来ました、これからバトルなども入れていき  
たいと思います



## 第二章一話 異世界へ

扉を抜けると、そこには広大な青い海があり、その砂浜に6人はいて、その広大な海を呆然と見ていた。

「なあ秀、これだけ見ると異世界に来たっていう感じしねーよな」

「確かに後ろには森があるだけで、俺達のいた世界とあんま変わらないな」

今日に見えている物は、元の世界でも存在していた物ばかりで、ここが異世界だと感じることはなかった・・・次の瞬間までは

後ろの森から何やらガサガサと音がしたと思って、後ろを向くと、牙を剥き出しにして涎をだらたら垂らした犬というより狼が一匹こっちに向かって走ってきた。

狼は俺と連を標的にしたようで、距離を詰めると一気に飛びかかってくる。

「「うわあああ」「」

俺と連の両者が左右に飛んでかわしたものの、狼は既に狙いを定めて、距離を詰めてくる、狙いを決めた狼は地を蹴って飛んで秀の方に襲い掛かった。

先程の攻撃を交わしたせいで体勢がかなり悪い秀は、再び横に飛んで避けるしかなかった。

狼は完全に狙いを秀に定めたようで、他の者には目もくれず、再び秀に近づき襲い掛かろうとしたが、何度も何度もやられるほど秀も愚かではなく、砂浜の砂を掴んで狼の顔面目掛け砂を投げつけた。

砂が目に入ったようでその場にて立ち止まった狼を見逃さずに、立ち上がって逆に距離を詰める。

「今度はこっちの番だ」

勢いを付けた右足でおもいつきり、狼を蹴り1メートルほど後退させたが、当の狼はぴんぴんしていた。

「うわー、タフな犬がいたもんだねー」

「冗談言ってる場合か！アイツ怒りが頂点に達してるぞ秀！」

連の言う通り頭に血が昇った狼はゆっくりと秀との距離を詰めていく、まるで目の前の獲物を確実に仕留めるように

（これはマジでヤバイ！）

本能がそういったのかは分からないが、気付いた時には6人全員走って狼から逃げたした。

木を避けつつ、でこぼこな道を必死に逃げたが、人の足が狼にかなうはずがなかった。

「グルグル・・・」

「浅村君・・・狼は何て言ってるのでしょうか?」

「さあ、大方一人位食べさせてもいいだろうって感じじゃないかな」

「おい、漫才してる場合か!くるぞ!」

走ってきた狼は貪欲に秀だけを狙って走って来たがそれがいけなかった。

あまりにも秀を狙い続けたせいで、横の動きには気が付かなかった。

「「せーの!」」

今度は連と蒼士のダブルキックをくらった狼は後ろに飛んで木に激闘して倒れたが、またすぐに立ち上がるがさすがにダメージがある

ようで先程みたいな動きができなくなっていたが、その目はまっすぐと秀を見つめていた。

「狼からのアプローチどう受けるつもりだ秀？」

「狼から告白されても、ぜんぜん嬉しかねーよ」  
狼と秀の睨み合いが少し続き、お互いに逃げるタイミングと襲い掛かるタイミングをはかっていると、狼の方が先に目をそらして、空に向かって遠吠えをし始めた。

（一体何してるのかしらあの狼は？）

いきなりの遠吠えに不信感を抱く新藤は顎に手をあて少し考えてから大声で叫んだ。

（・・・まさか！）

「みんな！早く逃げてあの狼・・・仲間を呼ぼうとしています！」

新藤の言葉を聞いた5人は体に走った悪寒を振り払い、急いでその場から離れるが遠吠えをした狼はこちらが逃げるのを見ると、追いかけるが遠吠えで仲間を呼ぼうとする。

走って逃げる途中で、遠吠えに反応した仲間の狼が横から飛び出して一番端にいた新藤を狙う。

「新藤！危ない！」

元々、体の反応が良かったのか、秀の声に反応したかは分からないが、ギリギリで攻撃をかわして走り続けたが足がつまづいて、新藤は転んでしまった。

そんな大チャンスを見逃さずに、新藤にゆっくりと近づいて今にも襲い掛かろうとしていた。

「新藤さん！」

(くっ！間に合うか)

秀が走り出した時、後ろから凄まじいスピードで走って来た馬が秀を瞬時に追い抜き、馬に乗っていた緑色の髪をした男が狼達を持っていた槍でなぎはらい、狼達は新藤に近づけなくなっていた。

「新藤、大丈夫か？」

「うん、私は大丈夫だけどあの人が」

当然、狼達の怒りがあった男は新しく来た狼二匹を合わせ、合計四匹の狼と睨み合いを繰り返していた。

「後ろにいる奴ら、聞けこのタイプのカーズは逃げる生き物を追いかける習性がある、だから逃げずにそこにいろ、俺がこいつらを倒すまでな」

(カーズ?)

そう言って、馬から降りると狼達に向かって走り出した。



## 二話 男対狼

状況は明らかに男が不利ましてや相手は人ではなく脅威的な運動能力、男が持つ槍のように鋭い爪と牙を持つ狼が四匹、一体男はどうするつもりなのか？

ジリジリと距離を詰めて二匹が同時に男に襲い掛かる。

襲い掛かる片方の狼の方に走った男は槍で素早く腹部を刺し、背中まで貫通させ狼を殺す

「まずは一匹！」

残りの三匹は、腹部を刺されて死んだ仲間を見て少したじろいたが、三匹が同時にジリジリと距離を詰めて行く。

「三匹は面倒くせーな……しょうがない」

「おい、お前らあぶねーから下がってな」

男が何をするかは分からないが、とりあえず言いつ通りに後ろに下がる

それを見た男は、少し狼と距離をとって

「来いルー！」

男が叫ぶと男の前に体に火を纏ったサンショウウオのような生物が現る。

「何なんだ、あれは？」

「ルーさっさと決めるぜモードオフエンス」

持っていた槍にルーが近づくと槍とルーが光り元の槍とは、ぜんぜん違う槍が男が手にあった。

「炎神槍・爆炎！」

「槍が変わった、それにルーってのが消えた」

三匹の狼がそれを見て、命の危機感を感じたのか、三匹とも後ろを向いて走り出した。

「ふん、悪あがきを」

「行くぜ、ルー」

槍を逃げる狼達の投げ狼達の前に突き刺さり

「業火旋風槍！」

突き刺さった槍を中心に火災旋風のような火柱が立ち上がり狼達を塵も残さないように燃やしつくした。

「すっごい、夢でも見てるのかな私」

「夢じゃないさ、嬢ちゃん俺がカースを倒した」

(この人いつの間に)

「さてと、次はお前らだこんなとこで何をしてる？」

「えーと、実は変な奴にこの世界に飛ばされたような感じでこの世界に来て」

「あーもういい、話は城に戻ってから聞くから付いてこい」

そのまま俺達6人は男の後を付いていった。

森抜けると高い草原に出て目前にあるのは東京　ームがいくつあつたら足りるだろうかと思わせるほどのでかい街があり外側はかなり高い城壁で囲まれていた。

「驚いたか、スゲーデカイだろ、これが俺が住んでる街レーガルだ」

「いやースゴいですね、浅村君もそう思わないですか」

西脇はあまりにもびっくりしたのか俺に賛同するように顔を近づけながら言う

「まあ、正直言葉に言い表せないねこれは」

「感動するのもいいが行くぞ、まだレーガルまで15分ほどかかるからな」

それから15分後俺達はレーガルの門前まで来ていた。

「お疲れ様です隊長」

門番をしていた兵士が男に敬礼して、俺達を見る

「失礼ですが隊長、この子達は一体？」

「ああ、任務中にカーズに襲われてたんでな保護することにした」

「さすが隊長、自分最高に感動しております」

少し警戒されたが隊長さんの機転をきかしたおかげで、なんとか城門を通ることができた。

「さあ、あとは城に行くだけだ」

レীগアル城

レীগアル城を見ての感想は恐らくみなと一緒にこつ言つたらう

「はあーでかいですねレীগアル城」

「当たり前だ、レীগアルを自治する機関が全て集まっているんだ、まあそれより早く入るぞ」

城の中は予想通り広く、清潔でホコリ一つ見当たらなかった。

「じゃあこの部屋に入ってきてくれ、俺は任務の報告をしてくるから」

入った部屋も愕然とする広さで、恐らく大家族が住んでも、広く感じるほどの広さだ

部屋をぶらぶらしていると石月がこちらに来て

「ねえ、浅村君さっきの隊長さんが来たら、全部話すべきかな？」

「全部話しちゃ駄目だと思う、こちらが隠すことは2つ、夢を叶える為に来たことと、この世界を救うということ」

「どうして、その2つを隠す必要があるの？」

「じゃあ石月、お前ん家前に外国人が倒れてて、助けたとしよう、そしてその外国人に何しに来たって聞いて」



「日本を救う為にやってきましたそれと夢も叶える為っていうのもあります」

「なーんて、言われたらどうする」

「警察に通報する」

( 案外酷い選択だな )

「要するにいきなりそんなこと言われたら側は対処仕切れないと思うんだ」

「なるほどね、じゃあどうするの」

「気が付いたらあそこにいたの一点張りかな、とりあえず俺達はこ

の世界を知らなすぎるしな」

石月と話し終わると、さっきの隊長が一人老人を連れて部屋に入ってきた

「それでは今からお前らの話しを聞くとしようか」

俺達は知らなかった、ここからが本当の旅の始まりになることを、俺達の運命を大きく左右すること・・・

### 三話 レーガル

「えーと、とりあえず自己紹介だ、俺はこのレーガルで二番隊隊長のラウル＝リーで、こっちのじいさんが」

「シリル＝ホスローじゃよろしくな」

「次はそっちの番だ左から順に名前と年齢を言ってくれ」

指示通り、俺、連、蒼土石月、西脇、新藤の順に自己紹介をする

「よし、本題だ何故あんな所にいたのか説明してもらおうか、浅村って言ったか、お前に説明してもらおうか」

説明を求められた秀は石月に説明した時の説明をした。

「嘘くせーな」

（だよなー）

「でも本当なんですよ、第一カースが出るって知ってたらあんな所に行きませんって」

「ふむ、確かに浅村君の言う通りじゃな、ラウル」

「……」

「……」

しばらく沈黙が続く、秀を睨むラウル、そして目を逸らさない秀ど

ちらも譲らず沈黙が続いた。

「はあ、やめだ、止め、これじゃあ進む気配しねーから終わりだ」

「じゃあ、シリルのじいさんあとは頼んだぜ」

「ふむ、任しておれ」

ラウルが退室すると、シリルが一呼吸おき

「すまないの、ラウルは口調は悪くてな」

「いえ、ぜんぜん気にしてませんから」

確かにラウルは口調が厳し過ぎると思った、隊長だから部下を厳しく育てるのも仕事だが、あの感じだとアメとムチは使いこなせていないだろう、恐らくムチのみの教育だろう

「すまないが、君達の正体が分からない以上、明日もう一度話しがあるので、城に来てもらう方がいいかの？」

「かまいませんよ」

「そうか、ならそろそろ行くところか」

「は？何処にですか」

「決まっておる、君達の宿じゃよ」

〃〃宿屋ホスロ―〃〃

「ホスロ―さんこっつてもしかして」

「うむ、わしの家じゃ」

「ねえねえ、何か私この先の展開が分かるんだけど」

「うん、私もそんな感じがすごいです」

新藤と西脇の予感は見事に的中した

ゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシ  
ゴシゴシゴシ

何故、今風呂場を掃除しているのかといつと、遡ること一時間前・  
・

「働かざる者休むべからずじゃ！」

（食つべからずだろ！）

無一文の俺達を泊めてくれる代わりにこの宿の雑用仕事を全て引き受けることになった。

「風呂場の次、何処だっけ蒼士」



「浅っちは男子トイレ、夜坂っちは俺と二階の部屋のベッドメイク」

「そうか、じゃあ行きますか」

蒼土と連は二階上がり、自分はトイレに向かうさえに曲がった時にいきなり目の前に人が現れ、無論止まることができずに、ぶつかった

「す、すいません」

「いや、俺の方も前方不注意で」

ぶつかったのは赤い髪の女の子で、顔立ちもスタイルも良く、たいていの男子はストライクゾーンに入る位の女の子だった。

「あの一新人さんですか」

「あ、はい今日から働くことになりました浅村 秀ですよろしくお  
願います」

「はい よろしく願います私はラニア＝リーです」

（・・・ん？リー？）

「・・・間違えてたらごめんね、もしかして三番隊隊長のラウルさ  
んの・・・」

「そうですね、娘ですよ私はラウル＝リーの娘です」

どうしたらあの敵つい男からこんな可愛い子ができるのかが不思議  
でたまらない

「あ、私買い物行かなくちゃ行けないんだった、それじゃ」

「・・・俺もトイレ掃除しますかね」

その日の夜食事も済ませ男女2つに別れて部屋に泊まっていた、相  
当疲れたかの男達はすでに眠りについづいた、秀を除いては

（眠れないな・・・）

二人を起こさないように部屋を出て一階に降りると、受付でラニアがいた

「あれ、どうしたのこんな時間に？」

「ああ、ちょっと眠れなくて、ラニアこそこんな時間にまだ受付してんの」

「ええ、まあ帳簿の整理とかもあるので」

「そっか、あのさ今から風呂とか入れるかな」

「どうしたんですか、今からお風呂なんて、まあ入れますけど」

「特に理由はないけど、眠れそうにないから、風呂でも入ろうかな」

っと思ってね」

「そうですね、ではいっしょくごじゃいね」

〜風呂場〜

「はあー生き返る」

かなり遅い時間だったため誰もいない風呂場満喫していた。

「この広い風呂を一人占めってのもいいもんだな」

「残念だが今からは一人ではない」

「げ、ラウル將軍」

「隊長だ、それとお前に隊長とは呼ばれたくないから呼ぶなよ」

「了解」

「・・・」

「・・・」

(気まずい……)

沈黙が続く中、沈黙を破ったのはラウルだった

「こつちの世界には慣れそうか」

「えっ？」

城で話を聞いている時は厳しい口調ばかりだったラウルからは想像できない、優しい口調の言葉だった。

「お前こつちに来たの初めてなんだろう、だから慣れそうかどうか」

「ああいやまだ初日なので分からないです」

「そうか、何か分からないことがあれば聞いていいぞ大サービスだ」

何がサービスかは全く分からないが、この世界に来て疑問に思ったことをラウルに聞いた

「じゃあ、遠慮なく2つほど・・・」

「たった2つか、いいだろう何だ？」

「俺達が襲われたカーズって一体何なんですか、そしてカーズと戦っている時に出てきたルーって何なんですか？」



四話 カース(前書き)

この話はほとんど会話になります m ( ) ( ) m

## 四話 カース

「……………」

「あれ、何か俺まじいこと聞いちゃいましたか？」

自分が聞いたとたん黙りだしたので自分がやらかしたかと思っ  
てしまった。

「いや、大丈夫だ意外な質問だったんでな驚いてな」

「そうですね、普通は気になってしょうがないと思いますけど」

「そんなもんか、じゃあその気になってるカースについて話してや  
る」

「カースってのは負に取り付かれた生物や植物のことだ」

「負？」

「負ってのは負の感情のこと、憎しみ、悲しみ、苦しみ、嫉妬心や殺意みたいな、どす黒い感情のことをまとめて負っていうんだ」

「それじゃあ感情が取り付くっていうんですか」

「厳密言えばそうじゃない、正の器はが耐えきれなくなるとカースになっちまうんだ」

「正の器？」

「平たく言えば心の強さだ、強ければ強いほどでかい器になる、そしてでかければでかいほど、負を受け止めることができる」

「つまり、正の器が負の感情に耐えきれなくなるとカースになるってことですか」

「まあ、そういつことだ」

「でも、俺達を襲ったのは動物のカースですよ、動物にも負の感情があるってことですか」

「違う、動物や植物がカースになるのは俺達人間のせいだ」

ラウルの言ったことには妙な重みを感じられた、まるで自らが人間を恨むように

「人間の住む場所の為に動物達の住む場所を奪い木々を切り倒して自然破壊、こんなことをして動物が負の感情がわかないというほうがおかしい」

「動物のカーシ化は人間のせいなんです」

「だが動物や植物のカーシなんか可愛いもんだぞ、人間のカーシ化に比べればな」

「カーシ化は負の感情に耐えきれなくなることでおこることですよ」

「なんだ、人間はそんな簡単に負に負けないって言いたいのか」

「そうです、人間は誰しも負の感情を持っていますですがそれを発散する方法も持ってますよ」

「だから余計に厄介なんだよ、人間がカーズ化した場合はな」

「動物のカーズ化とは違うんですか」

「動物型のカーズはとりあえず目に映る人間を襲うが、カーズ化した人間は、自分をカーズ化した負の根元を消そうとする、例えば失恋のショックでカーズ化したなら、恋人だった人をまず殺すだろうな、次に恋人の家族や親戚を殺すだろう、そしてしまいは自分が分からなくなり無差別に人を殺す」

「・・・ひどい」

「そして、そんなことを起こさないようにするために俺のような奴がいる」

「ラウルさんはカーズを倒す仕事してるんですね」

「まあな、しかし最近じゃあこの仕事がいやになるぜ」

「いいじゃないですか、市民を守る正義のヒーローですよ」

「カーズ化した人間を倒さなくていいならな」

「えっ？」

「カーズ化した人間を倒す時にいつも思うんだ」

「このままカーズを殺し続けていいのかなって」

「カースっていつても、ベースは人間だ、つまり俺は人間を殺して  
るってことになる」

「でも、それで助かった人もいるんですよ」

「分かってるさ、じゃなきゃこの仕事は続けられないからな」

「さてと暗い話はここまでで、次は何だったけ」

「森で戦っている時に出てきたルーのことです」

「ああ、精霊契約のことか」



「精靈・・・契約？」

## 四話 カース(後書き)

次も多分会話が中心となると思います f ^  
| ^ ;

## 五話 精霊契約

「カース化した生物は身体能力が上がる、しかも通常時の数倍な」

「そんなにですか」

「ああ、だからカース化したら一般人には手をつけられない、まあ鍛えられた兵士ならまだ戦えるかな」

「だが普通に剣や槍で戦うより、さらに有効にカースと戦うために存在するのが精霊契約だ」

「精霊契約って一体何なんですか」

「精霊契約ってのは名前のまんま、精霊と契約することで力を得る」

「……もっと平たくお願いします」

「……人間には皆生まれつき魔力って物が存在する」

「ってことは俺にも……」

「ああお前は知んねー」

(少しは期待させてくれよな)

「だが魔力を持ってるだけじゃ意味をなさない」

「魔力は精霊がいて初めて使うことができる、身体強化に使ったり、お前が見たように炎を出したりな」

(なるほど、じゃあ火柱が立ったのは魔力の力ってわけね)

「ところで話を最初に戻しますが、精霊と契約するっていうけど、具体的にどういうこと？」

「そんなこと聞いてどうするつもりだ？」

「いいじゃないですか、気になってるんですから」

「まあ、別に構わねーけどな・・・」

「精霊と契約する方法はシンプルだ、精霊に自分の正の器を見せればいい」

「どづいつことですか？」

「精霊と契約することで身体強化ができて、カースと戦えるが、奴らは負の塊みたいなもんだ、そんな奴らと戦っている俺が負の影響を受けないはずがない」

「つまり、戦っている内に、ラウルさんもカーズ化しちゃうってことですか」

「半分正解だ」

「前に言ったように、正の器が小さけりゃカーズになりやすい、だから精霊は契約者の器を見るんだ、契約者がカーズ化しないぐらいでかい器を持っているかをな」

「じゃあ、とりあえずはラウルさんがカーズ化することはないんですね」

「ああ、精霊と契約した時のように、このまま強く心を持ち続けければの話だな」

「なるほどね、でも何で精霊は力を貸してくれるんですか？」

「まあ、詳しいことは分かんねーけど、人間が出した負により次々とカーズが誕生した、ついには人間のカーズも、それを見兼ねた精霊はやむなし、人間達に手をしたのが精霊契約ってことだけは知ってるがな」

「なるほど、なるほど、大体分かりました、じゃあ俺は先に上がりますね」

そう言って、風呂から上がり脱衣場に入る

(長く入りすぎて体が変な感じがする)

さっさと着替えて寝ようと部屋に向かう途中にふと窓の外を見ると、見覚えのある人影があった。

(あれ？あいつ何してんだ？)

そう思った秀は部屋には向かわず外に通じるドアに向かった



五話 精霊契約（後書き）

ちよつとグダグダな文になつちやいましたf^  
|^  
^  
;

六話 真夜中に・・・

静寂の二文字が包み込む夜空の下で一人の少女はどこかに焦点を合  
わせるわけでもなく、ただ呆然と突っ立っていた。

「・・・・・・・・」

「おい石月こんなとこで何してんだ？」

自分を呼ぶ声があった方を向くと体から湯気が出ている秀がいた

「浅村君！どうして湯気が出てるの？」

（そこに注目するか）

「ああ、ちよつと風呂に入ってたんでね」

「浅村君まだ入ってなかったの」

（そっちかい！こいつもしかして天然か？）

石月につっこみを入れるのもしんどいのでつっこまないようにした。

「石月、何してるのこんなところで」

「ちよつと眠れなかったから外に出て考え事、浅村君も眠れないの？」

「まあね、そりゃいきなりこんなところに来たら眠れないと思っけどな」

「そっだね、・・・ねえ浅村君」

急に声のトーンを下げ、少し暗い顔になった石月は秀に一つ質問した

「私達のこと親は心配してるかな？」

「してるだろうね、いきなり子どもが消えたんだ、あっちでは大騒ぎしてるだろうね」

「浅村君よく平然としてられるね、親に心配掛けてるんだよ」

石月の言葉に力が入っているのがよく分かる、相当親に心配を掛けたくないんだろう。

「どれだけ心配掛けてるって思ったり、考えたとしても、解決する問題じゃないだろ」

「それは、そうだけど」

「心配掛けてるって思ってるなら、さっさとこの世界救って、さくって帰ろつぜ俺達が神隠し扱いになる前にな」

「・・・っ」

秀の掛けた言葉で暗い顔から元の明るい顔に戻った石月は“ありがとう”と小さな声で呟いた

「それにしてもさ、この世界の夜空は綺麗だよなーこんなに星が光ってる空見たことないな」

まるで新しいおもちゃを買ってもらったような子どものような顔しながら夜空を見上げている秀に石月はもう一つ質問をした

「何で浅村君って空ばかり見てるんですか？授業中も休み時間も良く見てますよね、あれだけ見ると、好きとかいうレベルじゃないですよ、何でなんですか？」

「単に空が好きただけなんだけどな・・・まあもしかしたら俺は空に憧れを抱いているかもしれない」

「憧れ？」

「うん、まあこの綺麗な夜空も澄んだ青空もよく考えたら俺の夢に関わってるかもしれないな」

それを聞いた石月は少し間を置き

「・・・浅村君の夢って何なの？」

「逆に石月の夢は何なんだよ」

「それは・・・秘密です」

「じゃあ、俺も秘密」

「えっ、じゃあ私が教えたら教えてくれるんですか？」

「さあ、どうだろうな」

顔に笑みを浮かばせながら石月をからかう秀に石月は一言言った。

「意地悪……」

「じゃあ、俺はもう湯冷めしちまった体を休めるわ、お休み石月」

宿戻った秀はベッドに入って眠りにつき、激動の1日が終わった。



## 七話 多忙な朝

「浅っち、休んでないでこっち手伝ってよ」

今日の目覚めは最悪だった・・・昨日遅くまで起きていて夜に風呂に入り、帰りに石月を見かけ、外で話したせいで湯冷めして、そのままベッドにダイビングして眠り、そして今日の朝まだ朝日が昇ってないのに、シリルがフライパンでモーニングコール、全然体が起きてないまま、他の宿泊者の朝食準備中である、そして何より誤算だったのが連と蒼土だった。

「おい連、みじん切りなのに何でこんなにでかいをだよ」

「蒼土も千切りなのに何でこんなに幅が長いんだよ4、5センチあるぞこれ」

極度に料理が出来ないこと、ただでさえ忙がしいのにこのありさま、朝食の準備だけで体力の3分の1を消費してしまった。

「はあーまじで疲れた」

「お疲れ様浅村君、はい水だよ」

食堂のテーブルでへたれ込む自分に新藤がコップに入った水をくれた

「ありがとう新藤」

「大変だったねー浅村君は二人の仕事も結局浅村君がやってたもんね、ていうか料理上手いね」

「家庭の事情でな、俺が料理の腕を上げなければ、今日まで俺は生きていかなかっただろうね」

秀が料理を出来るようになったのは、秀の姉の美咲のせいだ、姉が殺人兵器をつくるため、自動的に秀は料理が上手くなっていた

「あははは、何それ面白いね」

「他人事だからって面白いがるなよ」

「あ、シ ril さんがもうすぐ城に行くから準備しときなさいだってさ」

「ありがとうございます新藤、じゃあ俺は用意でもしてきますか」

部屋に戻ると見覚えのないハンガーラックが2つあり、片方には服、一方にはズボンがかかっていた。

「なんじゃこりゃ?」

「ああ秀か、シリルが制服のままじゃ嫌だろってことで、いろいろと集めてくれたんだよ」

「シリルさんは、どれでも好きに着てくれたってさ、浅っちはどうする?」

「俺は制服のままでもいいや」

「えー、せっかく用意してくれたんだからさ着たらいいじゃん、女子の方も着替えるっていうし」

「また今度な、いまは着なれてる制服でいいよ、じゃあ俺は先に下

にいるよ」

先に部屋を出て、一階に降りるといつも通りの制服姿の西脇がいた。

「あら、西脇は着替えなかったのか？」

「浅村君こそ着替えなかったんですか？」

「ああ、二人には着なれてる制服がいいって言ったけど、本当は服選ぶのが面倒だね」

「そうなんです、実は私もそれで制服ままにしたんですよ」

「……こんな服着てんの俺達くらいだよな」

「ええ、そりゃこの制服は北合だけのものですから」

「じゃあペアルックみたいだな、まあ他の四人が制服以外の服を着てくるならの話だけど」

秀は冗談で言ったつもりだったのだが・・・

「に、西脇？」

「あ、浅村君／＼／それってどういう意味ですか！」

「えっ？いやまんまの意味だと思いますけど・・・」

秀がそう言つと顔を赤らめて

「私、ちょっとトイレに行ってきますー！」

ものすごいスピードで走って行った。

「・・・何だあいつ？」

それから5分後全員が集まり、シリルと一緒にレガール城に向かった。

前に話を聞かれた時と同じ部屋に入ると、ラウルと科学者っぽい服を着た男がいた。

「さて今日集まってもらったのはお前達がどこから来たのかをはっきりさせる為に来てもらった、ここにいる男がいくつか質問をすれから正直に答えろ」

「では質問を始めます」

質問1、あなた方が来た国の名前は何ですか？

A、日本

質問2、あなた方の職業は何ですか？

A、学生

質問3、あなた方の国を治めているのは誰ですか？

A、総理大臣

質問4、その人の名前は何ですか？

A、羽住 総一



「・・・分かりました、ご協力ありがとうございます」

「私はこれからこのデータを照合してきますので、私はここで」

科学者っぽい人が出ていき部屋はラウルと俺達だけになった。

「まあ適当にくつろいどけさっきの男が来るまでな」

ラウルに言われた通りに部屋でそれぞれが時間を潰していると部屋のドアがかなりの勢いで開いて一人の兵士が入って来た

「大変です隊長・・・街で人間のカーブが暴れています！」

「了解、すぐに向かうから住民を緊急避難させろ」

ラウルは立ち上がり部屋を出る時に俺達に

「いいか、お前達はここから一歩もでるなよ」

それだけ言って部屋から出て行った。

## 八話 激動の始まり

「街に出たんですかねあの狼が」

「いや人間のカーズって言ってたぞ」

「カーズには動物型と植物型、そして人間型があるんだ」

全員が黙り秀の方を見た、自分達が全く知らない情報を知っていたから無理もない。

「何で浅っちがそんなこと知ってるの？」

一つ一つ答えるのもしんどいので、昨日風呂場でラウルに聞いたことをその場で全員に話した。

「じゃあ、今暴れてるカーブは人間型だろ、大丈夫なんかね」

「大丈夫だろ、ラウルが行ったんだから、ほれ外見てみ」

秀が指差した方向を見るとそこには森で見た火柱が上がっていた。

「……大丈夫だな」

くく街くく

「おし、これで終わりだな、大したことねーな」

カーズを退治したラウルにまた息を切らした兵士が走って来た。

「どうしたそんなに息を切らして」

「た、大変です今度は西側と東側に人間型のカーズが出現しました」

「何だと・・・」

「東側に兵士を集中させて時間稼げ、俺は西側のカーズを倒してからそちらに向かう」

「は、了解しました」

「一体何なんだよ、こんなにカーズが同時に出るなんて普通じゃねえぞ」

レガール城

「長いナウルさん、火柱上がったからもう15分たってるぞ」

「いろいろあるんでしょ住民のこととか被害状況の確認とか」

「まだ時間あるっぽいから俺ちょっとトイレ行ってくるわ」

「でも浅村君、ここから出るなって言われましたよ」

「トイレなんてどうせここからちょっとだろ、大丈夫だってすぐ戻るから」

「浅っち、だったら俺も付いてくよ」

それから部屋を出て蒼士とトイレを探すこと10分

(ヤバい迷った・・・)

「浅うち人を探して聞こう」

「でも外騒ぎでほとんど兵士は出払ってるじゃん、そのせいかさつきから人っ子一人いないぞ」

「確かにそうだけど・・・あっ、浅うち向こうに人がいる」

蒼土が指を差した方を見ると、確かにうつすらだが人のシルエットが見えた。

「本当だ、じゃああの人に場所を聞きに行こう」

二人は駆け足程度のスピードで人に向かって走りだした、この後待ち受けるのが惨劇の始まりだと知らずに・・・

一方その頃ラウルは報告のあった西側のカーズを倒して、東側のカーズと戦っていた。

「とどめだ業火旋風槍！」

「ふう、やっと終わったぜ・・・ん？」



東側の方のカーズを退治したラウルはあることに気が付いた。

(何だ？カーズが燃えた後何かが落ちたような・・・)

燃やし尽くした場所に近づき、目を凝らし、ある物を発見し、発見したと同時にラウルは気付いた。

(・・・しまった！)

「おい、よく聞け兵士達俺はこれから城に戻る、カーズがでたら出来るだけ時間稼ぎをしろ、無理だと思ったら退いてかまわない」

兵士達にそう伝えると、馬に乗り城に向かって走りだした。

「頼む、間に合ってくれ」



九話 逃亡(前書き)

この話はころころと視点が変わります m ( ( m

## 九話 逃亡

二人が大分近づいた時、蒼土は人を見て、異変に気付いた。

「浅っち、何かあの人がおかしくない？」

足を止め、目を凝らすと蒼土が感じた異変に秀も気が付いた。

「一瞬あの人の体から黒い煙みたいな物が出たぞ」

とりあえずまずいと思った二人は引き換えそうとしたが、時すでに遅し

「あら、まだネズミがいたのね」

（（気付かれた！））

二人が全力で走って、距離をつけたつもりだったが、後ろにいた女

は二人の前に立っていた。

「「う、嘘だろ！」」

「逃げることはないじゃないの、私は君達に質問をしにきただけよ」

「質問？」

「簡単よ、このレガールを治めてる一番偉い人を探してるんだけど知らない」

「し、知らないよ俺達このこと全く知らないんだ」

それを聞いてにっこりと笑った女は次に両手で秀と蒼土の首掴み吊り上げる

「ねえ、本当に知らないのかな？」

「がああああ  
」

「知らないんだったら、死んでよ  
」

首を掴む強さが更に強まり二人をさらに締め上げる

「くぐあああああ！  
」

「くくく、この野郎！  
」

ドカツ！！

「ぎゃあああああ・・・  
」

一か八かで繰り出した蹴りが女の目に入り、女の支配から抜け出す。

「はあはあ、今の内に逃げるぞ蒼土！」

「ああ、分かってる」

女が苦しんでる間に二人は角を曲がり女の視界から消えていった。

「あ、あの糞ガキどもが見つけれ次第ぶつ殺す！」

蹴りが目に炸裂したせいで、タイムロスをした女は最初の目的を忘れて、二人を探しに行った。

「どうする、みんなに知らせに行くか？」

「知らせた方がいいかもしれないけど、どこの部屋なのか忘れてる

「んだよな」

「まあ、とりあえず見つけ次第知らせよう」

連Side

「おっせーな秀と蒼土のやつ、何してんだよ」

「確かにちょっと心配ですね、四人で探しに行きませんか？」

「いいねー茜ちゃん俺、賛成だよ」

「そうだね、私達であの二人探してみようか」



ラウルSide

「くっ、遅かったか」

ラウルが城に入った時には、死体が多く転がっていた。

「ぎああああ」

悲鳴の方を向くと死体を見てショックを受けている四人だった。

「な、お前らどっしって」「」「」「」

「ら、ラウルさん!」

「部屋から出るなと言っただろう!」

「秀と蒼土がトイレに行ったきり帰ってこないんですよ」

「あんのポケどもが!」

「てかどうなってるんですか、城の中はこの有り様だし」

「・・・話は後だ、今は二人を探すぞ、俺から離れるなよ」

秀Side

「今のところ、女には見つかってないけど、どこから来るか分からないから怖いよな」

「そんなに怖いかしら私のことが」

「っ!!」

二人が振り向くとそこには、今一番会いたくない人物がいた。

「走れ蒼士!」

再び逃げる二人だが先ほどのように、女は回りこんでいた。

「どっついう仕組みだよ」

「さっきはよくもやってくれたわねえ」

「先に手を出したのはそっちだろ」

「でも痛かったわよ、だからお詫びをしてもらいたいね」

「お詫び？」

「うちの子と遊んでもらいますわね」

「レイラいらっしやい」

女が名前を呼ぶと、女の後ろから小さめの女の子が現れた。

「精霊・・・契約」

「ママ、あれって私の新しいオモチャ？」

「そつよレイラ、でも兵士さん達とは違って頑丈じゃないから、慎重に遊びなさいよ」

「分かった、レイラ出来るだけ壊さないようにするね」

レイラが女との会話を終えると、「こちらを向いてゆっくりと歩き出しました。」

## 十話 レイラの遊び

「お兄ちゃん達、レイラと遊ぼうね」

にっこりと笑うレイラに秀が言う

「悪いなレイラちゃん、今お兄ちゃん達忙しいんだ、また今度に・・・」

途中で言葉に詰まったのはレイラが秀にボディブローを入れたからであった。

「ダメだよお兄ちゃん、お兄ちゃんは私のオモチャ何だから、ただ私と遊んでればいいの・・・壊れるまで一生ね」

「くっ、しつげがなくてないようだなこのガキ」

「そうだな、少し俺達が生け直す必要があるようだな」

ラウルSide

「ラウルさん一体何があっただんですか？」

「おそらくだが今回のコースは罠だ」

「罠ってどう意味ですかだってコースは自らの負に耐えきれなくなつた場合に発生するんですよ」

「ああそうだ、だがある国では意図的にコースを造り出す実験をやつてると聞いたことがある」

「意図的にコースを・・・」

「聞いた話では、人間にある薬物を投与して、肉体を改造して自我を無くさせ、操り人形のための特殊な道具を貼り付けるといふ話なんだが」

「何てことを・・・」

「俺がカーズを燃やした時にその特殊な道具の切れ端を見つけてな、  
困だと思って戻れば、このざまってわけだ」

「でも誰が何の為にそんなことをする必要が？」

「恐らく、レガールと敵対するガリア帝国だろうな、カーズを造り  
出す方法もそこからの情報だし、以前からレガールを占領出来ない  
かといういと悪巧みをしてたはずだ」

「なるほど、だからカーズでラウルさんを誘き寄せたのね」

「さあ、おしゃべりはここまでだ少しスピード上げるぞ」



「はあはあ、何て強さだあのガキ」

「あれ、もうお兄ちゃん達おしまいなの？じゃあ」

「もう、潰れちゃえ」

素早く秀の後ろに回り込みチョークスリーパーをかける

「があああ」

「浅つちを離せよこのガキが！」

レイラに右フックをかまそうとするが、レイラはチョークスリーパーをといてかわし、逆に蒼土にカウンターをかまし、蒼土に片膝をつかせる

「大丈夫か蒼士！」

「うん、大丈夫、それより浅っちは大丈夫」

「ああ、蒼士のおかげで助かったよ」

なんとか立ち上がった蒼士だが、もはや秀も含め二人には限界がきていた

「ママ、このお兄ちゃん達なかなかやるよ・・・でも、もう飽きちゃった」

「レイラちゃん、じゃあいつものこれでおしまいにしてきなさい」

そう言って女はレイラにナイフを渡した。

(まずい・・・)

ジリジリと距離を詰め、ターゲットをしばり床を強く蹴り飛び出した

「蒼士危ない！」

蒼士の首を掴み床に共に倒れ間一髪でかわしたがレイラは休むことなくこちらに近づいた後、遠くにいる女に一つお願いをした。

178

「ママ、いつものやってくれる」

「いいわよ、少し待っててねレイラちゃん」

そう言って右手を二人の方に上げると、二人の体が勝手に立ち上がり、背中合わせになり、そのまま動かなくなってしまった。

（何で動かないだよ！）

「お兄ちゃん達、バイバイ」

## 十一話 終焉

「ここまでか……」

観念するように目を瞑った秀だが、いつまで経っても変わらない状況を不審に思い目を開け、秀の目に映ったのは、壁に槍で串刺しになっているレイラだった。

「ぎあああ、痛いよ、痛いよママ」

「ふーん、もう来ちゃったんだ」

その瞬間秀と蒼土を縛っていた何かを外れ、動けるようになった。

「ラウル……それにみんなまで」

「まったく、一々心配掛けんな」

「うつ、ごめんなさい」

「まあ説教は後だ、今はアイツを倒すことを先決する」

「ふん、倒してからね残念だけど、私はここでさよならするわね・  
・レイラちゃん帰るわよ」

「分かったわママ」

自分に刺さっている槍を自ら抜いたレイラは何事もなかったかのよう  
うに女の元に行った。

「それじゃあね隊長さんとボウヤ達、それと隊長さん、兵士達より  
そのボウヤ達の方がずっと楽しめたわよ」

そう言って体から黒い霧みたいな物を発生させ、その黒い霧が晴れ  
る頃には女とレイラの姿はそこにはなかった。

「大丈夫か秀？もう体がふらふらじゃねえか」

「大丈夫、大丈夫ちょっと多めにもらっちゃっただけ・・・だよ」

その瞬間、体が言うことを聞かなくて、そのまま床に倒れ、自分の意識が遠退いていった・・・

次に目が覚めた時にはシリルの宿のベッドの上で、外から朝の日差しが入っていて、近くにいたラニアが自分が起きたことに気が付いた。

「目が覚めたんですね」

「ラ、ラニア？」

ベッドから起き上がるうとするが、体に激痛が走り、ラニアに手伝わしてもらわなければいけないほど、体が痛んでいた。

「本当に大丈夫ですか、お城で倒れてからまる2日寝てたんですよ」

「そんなに寝てたのか・・・そうだラニア、蒼土はどうしてる」

「蒼土さんは残念ながらまだ寝込んでます」

「そうか・・・ありがとう」

「あと、みんなはどうしてるか分かるかな？」

「えーと、茜さんと紫音さんは宿屋の仕事していて、連さんと麻里さんは買い出しに行ってます、仕事の方はみなさんがやってくれるので、秀さんは体を休めることを最優先させてください」



「分かったよ、今はお言葉に甘えさせていただくよ」

再びベッドに入り、少しすると秀は眠りについていった。

「……んん？」

その日の夜にまた目が覚めた秀

(よし、体がまだ痛むが動けないほどじゃないな)

おもむろに立ち上がった秀は部屋を出て、ある部屋に向かった。

「……………」

「蒼土……………」

「……………う…うん」

「蒼土！気が付いたのか」

「あれ浅うち、俺、どうしてここに？」

「あの後気絶してここに運ばれてきたんだよ」

「そうだったのか」

「その、ごめんな蒼士」

「何で浅っちが謝るんだ」

「あの時、俺がトイレに行かずにしていれば、こんなことにはならなかったかもしれないから」

それを聞いた蒼士はいきなり笑いだした。

「はははは、そんなことで謝ってたらこの先どんだけ謝るんことになるんだか」

「結構真剣に話してるんすけど蒼士さん」

「悪い、悪いでも本当に浅っちが謝ることはないよ、あれは俺が勝手にしていることだからさ」

「そう言ってもらうと助かるよ、じゃあお大事に」

部屋を出て自分が休んでた部屋に戻ろうとした時に新藤にばったり会ってしまった。

「ちょっと大丈夫なの浅村君？」

「おかげさまで動ける程度までには回復したよ」

「そうなんだ良かった、そうだ浅村君、今みんなで晩御飯食べてるから行ってかたら」

「そうか、ちょうどお腹が空いてた頃なんだ、ありがとう新藤、じやあ行ってくるよ」

## 十二話 復活

食堂に着くと、全員の箸が止まり秀を見ていた。

「秀、もう大丈夫なのか」

「ちよ、ちよつと浅村君大丈夫なの？まだ休んでた方がいいよ」

「そうですよ、まだ休んでた方がいいですよ」

「みんな、心配かけてごめん！でももう大丈夫だから心配しないで」

これ以上みんなに心配を掛けない為にも、少し体が痛むが、みんなの前では笑って過ごした。

その日の夜、外に出てあることを考えていた。

（このままじゃダメだ、このままじゃ、きつとまた誰かが怪我をする）

「なあ、どうすればいいんだろう・・・凜」

「どうしたんじゃ、こんな時間に外に出て」

「シリルさん、まあちょっと考え事ですよ」

「まだ、引きずっているのかな？」

「こちらが考えていたことを簡単に見抜いたシリル、年の功といったところか」

「・・・はい」

「気を揉むでない、あんなのが出てきたら仕方がないむしろ出て来たほうじゃ」

「あれ、シリルさん城での出来事知ってるんですね」

「まあな、宿にいる人から聞いたんでな、それより終わった事を悔やんでも仕方がないぞ」

「ありがとございませうでも悩んでいる事が一つあるんですよ」

「なるほど、誰かがまた怪我をしそうで嫌か」

「はい、「このままじゃ、また誰かが怪我をしそうで怖いんです」

「何故かな、何故自分じゃなくて、他の誰かが傷付くと怖いんだ？」

シリルの言葉に少し口ごもったが、一つため息をついてから答えた。

「嫌なんですよ、自分は何もしないで目の前で誰かが傷付くのは、それが知り合いだったら尚更です」

「ほう、ずいぶん仲間思いな奴じゃな」

「まあ、俺がこうなったのも、ある奴がきっかけなんですけどね、さっき言ったこともそいつの口癖なんですけどね」

「いい言葉だが、行動しなければ意味がないぞ」

「分かってます、だから今決めたんです」

「何をかな？」

「強くなるんです、もう誰も怪我しないで済むように」

（ふっ、いい目をしておる、さっきとは全然違っ）



「さつきも言ったように行動しなければ意味がないぞ、一体何をす  
るつもりだ」

「ああーえーと、腕立て伏せ？」

それを聞いたシリルは手を頭に当て、大きなため息をついた。

「はあ、もし覚悟があるなら付いてきなさい」

そう言ってシリルは宿には入らず宿屋の後ろへと歩いて行き、秀も  
その後ろを付いていった。

着いた場所は風呂の薪などが置いている倉庫だった。

「あのーまさか薪割りしろって言うんですかね？」

「はっはっはっ、そんな生ぬるいもんじゃないぞ、ちょっと待って  
おれ探し物中じゃ・・・あった、あった」

シリルから手渡されたのは木刀だった

「ワシに一撃でもいれたら合格じゃ」

## 十三話 特訓開始？

「・・・はい？」

「だから、その木刀でワシに一撃でもいれたら合格だと言っているだ」

「いや、合格とか不合格とかの問題じゃないですよ」

シ ril も木刀を持っているが、老人相手にこちらと同じく木刀で殴りかかるのはどうも否めない

「そつちが来ないなら、こちらから行くぞ」

「ちょ、ちょっと待ってシ ril さん話を・・・がはっ」

突進してきたシ ril は木刀を秀の腹に躊躇なく勢いよく突いた。

「まじ……かよ」

「中途半端な気持ちでくるからだ、ワシを殺すつもりでこい」

「……なら、遠慮なく行かしてもらいます」

秀は力強く地を蹴りシリルに向かって走り出した……

その時のシリルの目はよく覚えていた、いつものような優しい目ではなく、目の前の獲物を狩ろうとする目であった……

（風呂場）

「つつ、いてて、朝より多くなっちまったなキズが」

結局あの後、シリルに一撃もいれることは出来ずに今日の特訓は終わり、疲れを癒すために一人で静かな風呂に浸かっていた、奴が来るまでは

「な、お前もう大丈夫なのかよ」

「あつ、將軍お疲れ様」

「だから、將軍じゃなくて隊長だ」

「ははは、冗談ですよ」

「どうして、またこんな時間に風呂にいるんだ？」

今日から始めた特訓を話すかどうか迷ったが、話さなければ、また

沈黙が続きそうだったので、ラウルには話すことにした。

「はあ、まじかよ！あのじいさんまたやってんのかよ」

「えっ、また？」

「・・・実はな、俺を特訓してくれたのはあのじいさんなんだよ」

「えええええー！」

「バカ、うるさいな耳元で叫ぶな！・・・で、どうだった入ったか攻撃は」

「全然ですよ、打っても打っても、かわして攻撃を逆に打たれるか防がれての繰り返しですよ」

「そうか、そうかでも気を揉むなよ、俺だって最初はそうだったからな」

「そうなんですか、とりあえず頑張ります、じゃあ俺は先上がりです」

部屋に着き、ベッドに入ると、相当疲れが溜まっていたらしく、すぐに眠りについた。

## 十四話 特訓開始その2

朝はいつも通り早起きでその時には昨日受けたキズの痛みも和らいでいたが顔についた木刀ですって出来たキズは隠せず、朝から問いただされてしまった。しかし悪いことばかりではなく、朗報なことに蒼士が動けるようになっていた。

「んで、その顔のキズはどうしたのかな？」

「やだなー連、風呂場で転けて角で擦ったんだよ」

「あんなに角ばった角で擦ったら切り傷ができるわ！」

「まあまあ、こんな傷じゃあ人は死なないから大丈夫だって」

「そういつ、心配してんじやねえけどな」

心配してくれるみんなの気持ちは嬉しいが、なかなか話すことは出来なかった、

話せば余計な心配を掛けることになると思った、だからみんなには



話せなかった。

食堂から自分達の部屋に行く途中にシリルに呼び止められた。

「ええ、準備ができしだい特訓をするだって、無理ですよこれから新藤と俺買い出しに行かなくちゃ行けないんですけど」

「その一分一秒がおいしいのじゃ、誰かに変わってもらえ」

シリルに言われた通り、買い出し当番を代わってもらおうとしたが、今日の非番が西脇と石月しかいなかったが運のつきだった。

(うーん、石月に交代してもらおうか)

パン！石月の前で手を合わせてお願いした。

「石月、この通りだ今日の買い出しに俺の代わりに新藤と行ってく

れ頼む」

「別にいいよ・・・ただし、さっきシリルさんと話してた特訓について教えて」

「くっ、聞いてたのかよ」

少し迷ったが特訓という言葉を聞かれちゃしょうがないと思い、石月に誰にも話さないという条件で全てを話した。

「・・・そうだったんだうん分かった、代わってあげる、そのかわりに早く合格してよ、あんまり長いとみんなにはれちゃうからね」

「ああ分かったよ、ありがとな石月、じゃあ行ってくるわ」

みんながそれぞれの仕事をしている中、秀はシリルと昨日の特訓の続きをしていた。

「おりゃー！」

縦や横から振る木刀だが、シリルに簡単に防がれてしまう

「ふん、昨日とは少し変わったな、木刀に力がある、だが・・・甘い」

シリルの一振りが秀の頭部に直撃した。

「うっ、くそもう一回」

「いくらでもかかってくるんじゃない、相手してやる」

「ふー行くぞ、でりあ」

シリルとの距離を一気に詰めて、素早く振り下ろすが木刀で防がれ、逆に切り返してくるのを紙一重でかわして一旦、シリルとの距離をとった。

(ダメだ、どんな攻撃でも防がれちまう、一体どうすれば・・・)

「考えている暇など与えてくれんぞ敵は」

「くっ」

昨日始めて受けた時の突きを繰り返してきてそれをかわすが手を休めることなく次々と打ってくるのを防ぐのが精一杯だった。

「防ぎ方があまい！」

「ぐっ」

結局昨日と同じ突きで腹を刺されて後ろに倒れた。

「はあ、このままじゃあいつまでに経っても合格出来んぞ」

「太刀筋は昨日とは違いかなり良くなっている、太刀筋はこのまま行けば十分レガールの兵士にも通じる位になるじゃろ・・・じゃが今のお前には明らかに足りてない物がある」

「何なんですか、俺に足りない物って？」

「それが見つからない限り、ワシには届かんだろっなその木刀はな」

「はあはあ、まだまだもう一回お願いします」

立ち上がりながら、そう言つと後ろから聞き慣れた声が出た。

「じゃあ次の相手はこのラウル＝リーが特別に相手をしてやるっ」

「なっ、ラウル仕事はどうしたのじゃ」

「今パトロール中だから大丈夫だって、さくつと終わらせてやるからよ」

「カッチーン、頭きた、パトロール再開出来ないぐらい粘ってやる」

「しょうがない……では始め！」

十五話 特訓開始その3

「かかってきな浅村」

「それなら遠慮なく！」

次々と攻撃を繰り返すが、赤子の手を捻るよつに簡単に受け流す

「どつした、どつしたこんなものか」

(くそ、打っても打っても簡単に流される)

「次はこっちの番だぜ」

シ ril より早く秀との間を詰め、次はラウルが攻めてくる、ラウルの一振りは間違いなくシ ril より一振り一振りが強く、防ぐことも苦であった。

「そこだあ！」

ラウルの渾身の一振りでも木刀が弾かれて、気付いた時にはラウルの木刀が首もとにあった。

「勝負ありだな・・・」

「くそ、また負けだ」

「あたりまえだ、隊長が素人に負けるわけねえだろが」

「浅村よ、休み次第風呂の薪割りをしときなさい、その時も一振り一振り、力を込めてやるんじゃないよ」

倒れてる秀を後ろにしてシリルとラウルはその場を後にした

「ラウル、打ち合ってる時に何か感じたじゃろ、アイツの違和感を」



「ああ、普通人間はあんだだけ打ち込まれてりゃ反射的にどつかで目を瞑っちまうもんだ、なのにアイツは一度も目を瞑ることなく俺の攻撃を見ていた」

「確かに、あれだけ昨日打ち込んだのに、恐怖心がまったくないのか浅村には」

「考えられる理由は、昨日の内に恐怖心を乗り越えたか、それとも・  
・打ち込まれることに慣れているかかってとこかな」

「ふん、まあそれはあやつ自身のことじゃからワシらには分からんな、それよりラウル、さっさと持ち場に戻らんか」

「いつけね、じゃあ俺戻るは」

シリルとラウルは別れ、それぞれの持ち場に戻る

「ふー、まじで疲れた」

薪割りも終わり宿に戻ったところにタオルを持った石月がいた。

「あれ、特訓終わったんだ」

「ああ今終わったんだ、お前には悪いけど今日も合格出来なかったよ」

「そうなんだ・・・まあ気を落とさないでよ、はいタオル」

浴槽にあるタオルを運んでいたタオルの一つを秀に手渡した。

「おお、石月サンキューなじゃあ俺は少し部屋で休むわ」

（俺に足りない物って一体何なんだろう？）

部屋に戻ると部屋には誰もおらず、連や蒼土が仕事をしてると思うと、寝ることに良心が若干いたんだが、夜も特訓があると思うとゾツとしてしまい、そのまま眠りについた。

起きるとすぐにシリルと特訓を開始する

「じゃあ、始めるぞ！」

昨日と同じ様に基本練習のような練習は一切せず、剣術バージョンの乱取りをする。

相変わらず鋭く、素早い攻撃を繰り出してくるシリルに防戦一方だった。

「くそっ」

一旦、後方に下がり距離をとるがすぐにシリルは距離を縮め、打ち込んだ為防御が間に合わずに、突きをもろに受けてしまった。

「くそっ、もう一回！」

「・・・ストップ、もうやめだ」

立ち上がる秀に静止をかけて、木刀を渡すように促す

「えっ、どういふこと」

「進歩がないからな、太刀筋はいいが今日の言った通りに足りないものがあるって言ったじゃろ、しかし安心しろ、それを見つめるまで特訓を中止するってわけじゃ、別に個人的に練習はしててもいいぞ」

秀にそれだけ言い残し、シリルはその場を後にした・・・

「……くそっ！」

地面に拳を叩きつけて、秀も同じくその場を去っていった。

十六話 曇り顔

その日の夜、晩ごはんを食べている時に、シリルに言われたことが頭の隅に引っ掛かっており、上の空になっていた。

「おい、秀大丈夫か？さつきからブーツとして」

「ああ、大丈夫だよ……ごちそうさま」

みんなより早く席を後にした

「どうしたんですかね、今日の浅村君」

「確かにいつもの秀とは違うかもな」

「浅村君……」

みんなと別れた秀は部屋には戻らず、宿屋のテラスの柵にもたれ掛かりながら空を見上げていた。

「何なんだろう・・・俺に足りないものって」

一人で静かな場所にいても、大好きな夜空を見ている、その答えを見つけることは出来なかった。

「浅村君・・・」

「西脇・・・どうしたんだこんな所に来て」

あまり心配を掛けたくない為、平常心を装っていたが食堂のこともあつため、意味をなしていなかったようだ。

「それはこっちの台詞だよ、今日の浅村君、様子がおかしいよ」

「そんなことないよ、いつも通りだよ」

「嘘つき、石月さんから聞いたんだからね」

(あのバカ、誰にも言わないでくれって言ったに……)

「あ、石月さんを怒らないでください、私が石月さんにしつこく聞いたんですから」

「よく分かったな、石月が知ってるって」

「石月さんの様子も少しだけおかしかったんで、何か知ってるかな」



って思つて」

「西脇……今知ってるのってお前と石月だけだよな」

「うん、まあそつだよ」

「じゃあ、石月同様俺の事を残りの奴らには話さないでくれないかな」

少し考える仕草を見せた西脇は石月と同じく、一つ条件をだしてきた

216

「何で今日、様子がおかしいか教えてくださいよ、シリルさんとの特訓が原因なんですよね」

(つつたく、西脇も鋭いんだなあ)

一つため息をついた秀はシリルに言われた言葉を西脇に話した

「浅村君に足りないものですか・・・」

「おいおい、お前が考えても仕方ないだろ、こればかりは自分で何とかしないとね」

「でも、少しは楽になりましたよね」

「まあそりゃね、楽になったよ、ありがとつな西脇」

「どういたしましたて、それじゃあ私は戻りますね」

夜空を見上げていた秀は西脇のおかげで、少しはましになった雰囲気  
を確かに感じ取っていた。

## 十七話 侵略

次の日の朝にはいつものテンション程ではないが、昨日よりはましになっていた。

「おお浅うち、元気になったみたいだな」

「ああ、まあな」

「やっぱり、浅うちが沈んでるのは似合わないな」

「そりゃべつとも」

朝起きてから昨日のせいもあるのか、石月と西脇を除く5人が声をかけてきたが昨日とは打って変わったような変わり映えのうようで、話しかけてくるみんなも心配なさそうな顔をしていたのが自分にとって何よりだった。

みんなの心配も解けたようでなによりだが、自分の中にはシリルの言った言葉がまだ分からないでいた。空いた時間にみんなにはばれ

ぬように素振りなどをしていたが、答えは分からずただ時間だけが過ぎて行った・・・

この世界に来てから早くも1か月が経とうとしており、今ではよく笑ったりなどもするようになっていた、夢集めに言われたその世界を救うという意外に大事なことも忘れつつありながらも、みんなは必死にこの世界に慣れようとしていた。

その日の仕事は特になくいつも通りにいつもの場所で素振りをしていたこんなことをしても自分に足りないものが何かが分かるはずもないのに、秀はひたすら木刀を振り続けていた時だったどこかで爆発音が鳴り、その音に続いて人々の悲鳴が秀の耳に入ってきた

「なんだ、今の音と人の悲鳴は？」

何をしていいかは、全く分からないが木刀をしまい宿屋に戻ることにして、角を曲がった時に飛び込んできたきた光景は悲惨なものであった、いたるところから煙が舞い上がっていて、一般市民はみなある方向へと向かっていた。

「何してるんですか秀さん！早く宿屋に入ってください」

「ラニア！いったい何が起こっているんだ」

「話中ですですから、入って下さい」

ラニアにいわれた通りに宿屋に戻ると宿屋に泊ってる人達が宿屋のある一室へと移動していた。

「さあ、秀さんもあの部屋に行ってください、あの部屋に隠し部屋がありますからそこに避難してください」

「ちょっと待てラニア、いったい何があったんだよ？」

あまりにも急なことで、理解することすらもできていない秀にラニアは信じ難いことを言った。

「ガリア帝国が攻めてきました・・・」

「なんだって！やばいじゃんか」

「だから逃げて下さい、私もあとで逃げますから」

「分かった・・・あ、みんなはもう避難したのかな？」

「ええ、まあ・・・」

ラニアにそう質問したがラニアが答えるのに少し詰まったため、秀は今みんなが危険にさらされているっことを察知した。

「ラニア、正直に言ってくれ誰がまだ避難してないんだ？」

「実はまだ買い出しに行った連さんと、麻里さんがまだ何ですよ」

「そうか、でもあいつらだって避難してる人達に付いて行ってるだろ」

まるで自分自身を説得するかのようにラニアに言ったが、ラニアの顔は晴れていなかった。

「・・・実は街の避難シエルターに逃げるにはある認証システムがありました。その認証システムがなければ避難シエルターに入ることが出来ないんです」

「何てこった・・・」

ラニアが言う認証システムとは、他国が攻めて来たときに発動するシステムで、シエルターにスパイが紛れ込まないようにするために多くの審査を乗り越えた者が手にすることが出来るものだそう。勿論のこと連と新藤がもっているはずがなかった。

(「このままじゃあ、蒼土の時と同じだ・・・」)

その時、秀は何を悟ったのかは分からないが、気付いたときには宿屋を飛び出している自分がいた。





## 十八話 逃げる者追う者

連Side

「何でだよ、何で入っちゃいけないんだよ」

「ダメだダメだ、認証システムが認証していない以上君達を入れる訳にはいかないんだよ」

ラニアが言った通り、認証システムに認証されずに連と新藤は困り果てていた

「どうすればいいのかな」

「どうせ、認証システムには認証されないんだ、急いで宿屋に戻る  
う」

今いる場所から宿屋までは少し遠いが、他にいい案が有るわけがなく、二人は急いで宿屋に戻って行った。

秀Side

「連！新藤！居たら返事をしてくれ」

必死に二人を探す秀だが周りは逃げ惑う人ばかりで、二人の姿は見当たらなかった。

連Side

人々が逃げ惑う人ごみをできるだけ避けて宿屋に向かっていると、起こってはいけないことが起こってしまった。

「やべえー迷った！」

「ええええー何してるのこんな時に」

「しゃーねーだろ、人ごみの中を進んでる方が時間がかかると思っただから」

「でも結果的には最悪の結果でしょ」

「だあー言い合っても仕方がないまず宿屋の方角はどっちだ」

「俺が教えてやるつか、お二人さん」

二人が声のした方を振り向くと、そこにはガリア帝国の兵士がそこに居た

「今日はまじで踏んだり蹴ったりだ」

「どうすればいいのかな夜坂君？」

「決まってるだろ・・・逃げるぞ新藤！」

ガリア帝国の兵士の逆方向に向け走り出した二人だったが、さすがに相手が悪かった。

「きゃあー！」

「へへへ、お嬢ちゃん捕まえた」

「新藤！」

兵士の肘で首を束縛されている新藤に兵士は持っている剣を突きつける。

「やめろ！」

「はははは、やめるって何だよ俺たちは兵士だぞ、しかも今は他国を侵略中だ、そしてしたっぱの俺に命じられたことは・・・一人でも多く殺すことだそれに、こいつを殺せば自己ベストなんだ」

新藤を束縛する腕と違う方の腕で持っている剣を逆手に持ち直し、そして振り上げた。

「やめろー！ー！ー！」

連が叫ぶて同時に兵士の後方から何かが飛んできて振り上げた剣に当たり、兵士が持っていた剣が飛ばされ、剣が飛ばされたことよつてできた隙に新藤は兵士の束縛から逃げ出す。

「っ！！誰だ！」

「うおっ、当たった！」

「秀！」

「浅村君！」

「ギリギリ間に合ったみたいだな」

「誰だ、てめえは？」

剣を飛ばされた兵士はすぐさま剣を取り、秀に対して怒りを露にする。

「んーまあ、あなたの敵なことは間違いないよ」

「ははは、てめえの勇氣ある行動を評価して俺の新記録の獲物をてめえにしてやる、光栄に思え」

もう一度、剣を強く握った兵士は秀の方に走り出して行った。

十九話 実戦

向かって来る相手にに対し相手が持っている剣と同じ剣を持った秀との間を詰めて一気に降り下ろす

「くっ！意外に重いなさっきの奴とは違うな」

「ふん、同じ剣を持っている理由はそういうことか」

「まあ、手ごろな人がいたんで、ちょっと拝借させて貰ったんだ、力づくでね」

つばぜり合い状態から兵士を振り払った兵士との間をすぐに詰め今度は秀が畳み掛ける。

「おいおい、秀のやつ兵士と渡りあってるよな」



「う、うん正直言って何で渡りあってるのかが分からないよ」

兵士との戦闘すること10分楽勝ムード全開だった兵士にも焦りが見えていた。

（何だコイツ？本当に一般人かよ、さっきから本気でやってんの、簡単に俺の剣受けてやがる・・・くそっ）

「さっさと死ねー！」

「人殺しをすることに何も感じねえような奴には負けらんねえんだよー！ー！」



喉元に突き付けられている剣から素早くはなれて、スイッチのよう  
な物を出していた。

「一緒に逝こうぜ!!」

(まさか!!爆弾)

その瞬間何故か目を瞑った秀だったが、何か鈍い音がして自分に何  
が凭れ掛かって来た感じがして、ゆっくりと目を開けると、凭れ掛  
かっているのは兵士だった。

「まったく、命を簡単に捨てるのはもんじゃないぜ」

「見た感じまだ若い感じじゃないですか、だからまだそう簡単に命

を捨てないでください」

兵士がの後ろには剣と盾を持った連と新藤が立っていた。

「……………」

「よしまず聞こう、連は分かるよ、うん、だが新藤は殴ってないよな、盾を持ってるけど」

「え、えーと多分」

とつさに後ろに隠した盾だったが、地面には血の雫が落ちた跡があった。

「・・・・・・・・」

「ま、まあとりあえず宿屋に帰ろうか」

連達と合流した秀は二人を連れ、宿屋に向かって走って行った。

二十話 断罪の雷

宿屋に向かうこと15分ほど運良く敵に見つからずに宿屋に到着することができた。

「連さんに麻里さん！無事だったんですね」

ホッとした様子をみせるラニアを見ると、本当に心が優しい子だと三人は思った。

「ああ、何か良く分らんが、秀のおかげで助かったんだよ」

「本当、いつ何処であんな剣術身に付けたか聞きたいぐらいだよ」

何故か二人の言い方が随分皮肉るような言い方だけどスルースルーと

「なあラニア、外にいた俺と新藤が思ったんだけど、ちょっとヤバくないかレーガル」

「押されてたつて意味ですか？・・・まあ大丈夫だと思いますよ、レーガルにはまだ切り札が有りますから」

ラニアが言う切り札がとても気になった三人だが、ラニアに急かさね非難する部屋にラニアと共に入っていった。

## レーガル城

敵が攻めて来たことだけあって、レーガル城内は慌ただしく、ラウルが兵士達に指示をしていた。

「おい！準備までにまだ時間が掛かるようだ、城内の敵を一掃次第、外に出るぞ！」

ラウルの言葉に一気に士気が高まった兵士達は城内に入って来た敵に向かつて行く中、ラウルは窓から戦場になつている街を歯をくいしばっていた

(すまない・・・城内にいる奴らを片付け次第すぐに向かうから、もってこれよ)

## 宿屋

非難部屋に入ってから30分ほど経っており、宿屋の非難部屋で全員が不安にかられている中、秀達はラニアが言った切り札について聞いていた。

「えーと、切り札ですがレーガルが侵略的なことをやられた時に発動するんです」



「結局、切り札ってどんなのですか？」

「えーとですね・・・」

ラニアが切り札について言おうとした時にレーガル城から、聞いたことない音になり、全員の意識がその音に集中した。

「何だこのバカデカイ音は近所迷惑もいところだ」

「連さん、この音は切り札の“断罪の雷”発動の音です！」

「断罪の雷？」

勝ち誇った顔で話すラニアはどうやら、レーガルの勝利を確信したようで、長い間入っていた非難部屋から出て空に向かって指を指していた。

「あれが断罪の雷です」

ラニアが指を指した空には、レーガルを簡単に覆い込むような巨大な凶形のような物があった。

「な、何だありゃ？」

「魔方陣ですよ、あ、そろそろ発動しますよ！」

ラニアがそう言うと、いきなり視界が光りだし、たまらず目を瞑り、光が弱まった頃に目を開けると、先ほどと全く変わらない光景広がっていた。

「一体何があっただんだ？」

「外に出れば分かりますよ」

ラニアに言われ、恐る恐るドアを開けて外に出ると、外は静まりかえっていた。

「・・・どうなってんだ？」

「断罪の雷がガリアの兵士だけを滅したんですよ」

「ガリアの兵士だけ？」

「ええ、ほらレーガル兵士はいるでしょ」

ラニアが指を指した方向には何事も無かったようにレーガル城に戻ろうとしていた。

「・・・もう何がどうなってるか分からん」

「宿屋に戻りましょう、中で説明しますよ」

ラニアに促され、宿屋に戻り、侵略を終わらせた断罪の雷について説明をし始めた。

二十一話 圧倒的な力（前書き）

最近、身の回りのことが片付いたので、これからは一週間投稿の日にちの間隔が短くなるかもしれません f ^ | ^ ;

## 二十一話 圧倒的な力

「どこから説明したらいいでしょうか？」

「どこからってというか、断罪の雷がどういう力なのかと何故ガリアの兵士だけが消えたのかを教えてほしいかな」

「消えた理由は蒸発したみたいなものですよ」

「まず断罪の雷は太陽の光なんですよ、それで太陽光を魔法で集約させて、敵に浴びせるんです、浴びた敵は圧倒的な熱量によって消えてしまう、これがガリアの兵士が消えた理由です」

「すごいな太陽の光を操れるまでになると」

自分達がいた世界ではせいぜい太陽光の熱で発電する程度、太陽光が兵器になるなんて考えたことない6人達にとっては、想像できないものだった

「じゃあ何でガリアの兵士だけが消えたんだ」

「ああ、それはマーキングですよ」

「マーキング!？」

その時、6人の頭に浮かんだのは皆同じで犬と電柱だった。

「えーとマーキングって言うのは言わば標的選択で、マーキングをしてない人を攻撃するように設定されてるんですよ」

「……意味が分からん蒼土噛み砕いて説明してくれ」

秀から説明を頼まれた蒼土は一呼吸おいて話始める。

「つまりレーガルに住む人達はマーキングを受けてるんだ、ここからは推測だけど、おそらくマーキングは認証システムが認証するのに使われてもいるんだろう」

蒼土が説明し終わり、ラニアが驚いているのを見ると、蒼土が推測で言った認証システムのこともあるということだろう。

蒼土の説明で秀が聞きたかったことを全て説明し終わると、自然と解散の空気になり、6人はそれぞれの場所へと戻って行った

その日の夜、激動の1日の今日を振りかえって秀は一人テラスで考えていた。

「はあー断罪の雷か」

（あんなのが有るんなら別に何もしなくても大丈夫だろうな・・・  
今さら特訓なんかしても・・・）

今日に見た初めて見た巨大な力を見て、本来の特訓の目標を忘れさ



せる程の威力だった。

「……はあ」

断罪の雷を見て改めて自分の無力さを知った、連と新藤を助けたかもしれないが  
その後は宿屋に戻って隠れてただけで、結局自己満足に終わった自分が悔しくて仕方なかった。

（……もう寝よう）

部屋に戻ろうとして、テラスの柵から身を退こうとしたときに何気なく見ると

下には何となく見覚えがあるような人が一人歩いていた

（どっかで見たとような・・・誰だろう？）

その時に雲に隠れてた月が出て、月明かりのおかげでその歩いていった人を見た瞬間、秀はテラスを飛びだしていた。

「嘘だろ・・・なんでアイツがここに・・・」

（何で・・・何で凜が）

宿屋から出た秀は急いで先ほど見た人を探したが、もう秀が見た人はどこにもいなかった。

「・・・凜」

一つ深いため息をついた秀は何の明かりかは知らないが、明るく照らされているレーガル城を見て、思い出した言葉があった。

「力は使い方しだいで暴力に変わるけど、正反対の力にも変わる」

そう呟いた秀はその場で目を瞑りその言葉を教えてくれた頃を思い起こしていた。



二十二話 大切な言葉（前書き）

久しぶりに過去編です

二十二話 大切な言葉

「ねえ秀、聞いていいかな？」

「いきなり何だよ凜、別に構わないけど」

「最近思っただけで、力って不思議だよね」

「はあ？いきなりどうしたんだ、ついにおかしくなったか」

「もう、ふざけないでよ真剣なんだから」

「悪い悪い、んで何を聞きたいんだっけ」

呆れたと言わんばかりの深いため息をついていた

「力って不思議だねって話だよ」

「いやまじで意味不だつて、ちゃんと説明してくれよ」

いきなり力を不思議だと言われても100人中2人が分かるかどうかの質問だ

こんな不思議な質問をする凜は間違いなく不思議ちゃんだろう  
だがしかしこんな不思議ちゃんから俺は大切なことをたくさん教えてもらった

“力は使い方しだいで暴力に変わるけど、正反対の力にも変わる”

この言葉を聞いたのも、凜が不思議な質問をしてきたことから始まったことだ。

「例えば秀、水はどうするもの？」

「何だよクイズ感覚か、まあ飲むものたる水は」

「そうだね、でも火事が起こった時に火を消すときに水を使うよね」

「まあ、そりゃ使つだらうよ」

「そして、人を殺すことも出来るよね」

声のトーンを落としたせいか、白に支配された部屋に暗い雰囲気の流れる

「でもね、今言った水の使い方は人がやれることなんだよ、言い換えれば使う人次第で凶器にも変わるし、人を助けるものにも変わる」

「なるほど、でもその水の話と力がどう関係するんだ」

「それは・・・」

会話を遮るようにドアが開き、一人の少年を連れ出そうとして腕を掴むと、少年が急に暴れだし始めてしまった、おそらく体が拒絶したのだらう。

「おい、暴れるんじゃない！」



なかなか静かにならない少年を静かにするために兵士が拳を振り上げると

秀よりも早く少年と兵士の間を凜が割って入り、兵士の拳が凜が受け、凜はそのまま床に倒れ込んでしまった。

「凜！」

自分もすぐさま二人の元に駆け寄るが、抵抗は虚しく少年は兵士によって連れ出されてしまった。

「凜、大丈夫か！」

凜を両手で抱え、凜を気遣う秀だが、凜は自分の受けた暴力を気にすることなく、先ほど言いかけていたことの続きを話始めた。

「さっきも言ったように使い方一つで物の用途はいろいろなことに使えるようになるでしょ」

「ああ確かにそうだな」

「だから、力も一緒だと思うの、使い方次第で今みたいにただの暴力に変わるか、それとも暴力とは正反対のことに変わるか、でも使い方次第で正反対のどうしに変わるって凄くない、・・・だから私はこう思っんだ」

この時に凜からあの言葉を聞いた。

“力は使い方しだいで暴力に変わるけど、正反対の力にも変わる”と

その時の凜の顔は、先ほど暴力を誰かの代わりに受けた人とは思えないほどだった。

優しくて、暖かくて、見てる側が誰もがつい笑顔になってしまふ笑顔

何故彼女がこんなにも強いかは知らないが、自分はこの笑顔に何度も救われたのだと、秀は再び自覚することができた。

忘れかけていた大切なことを思い出すことが・・・

目を開けた秀は、少し笑み浮かべてから今一番輝いている星に向かって拳を握り締める。

こんなことで届くとは思っていないが、星に向かって言った、感謝と誓いの言葉を……

今一番、自分が想っている人に向けて

「凜サンキュー！なお前のおかげで気付くことができたよ、そして凜！必ず……必ず約束は守るから」

どことなくスッキリした秀は自分の部屋に戻って眠りにつくことにした。

二十三話 決意新たに

朝の目覚めは昨日のこともあってか、この世界に来てから一番良い目覚めであった。

昨日のことがあったか、自然といつもの口調より明るくなっていた。

「昏、おはよう」

「おはようございます浅村君、いつもより何だか元気ですね」

「そうかな、まあいいじゃないか元気に越したことはないだろ」

朝の食事も終わると、いつものように各自に別れて仕事につき、新藤と買い出しをしていると昨日のことが嘘のように思えてしまう。

「新藤これで全部か？」

「うんそれで全部だよ」

「そうか、じゃあさっさと帰りますか」

大型の袋を抱えて歩き出す秀と横に並びながら新藤はずっと気になっていたことを秀にぶつけた。

「はあ、昨日のガリアの侵略がおかしいって？」

「普通に考えたらおかしいと思わないの」

「どこが？」

深いため息をついた新藤は小学生相手に説明するように説明を始め

た。

「いい、普通侵略する相手のことを知らないで侵略するバカがいると思いますか」

「それって断罪の雷のことかな？」

「そうですね、昨日の侵略を見ると、ガリア帝国はかなりの兵を費やしてましたよね」

「・・・確かにそうだな」

確かに新藤の言う通り、昨日の侵略の時ガリア帝国はかなりの兵を費やしていたはずだ。

新藤と連を連れて宿屋に戻る時に、ガリア帝国の兵に見つからなかったこと自体が奇跡に近いほどだった。

「じゃあ新藤、あれだけの数を費やしたガリア帝国は何がしたかったんだ？」

秀の言うことに、少し間をおく新藤に一瞬寒気を感じてしまった。

「もしかしたら断罪の雷を発動させるためとか」

「どういふこと？」

「昨日ラニアに聞いたんだけど、断罪の雷を発動したら、次に発動するにはかなりの月日がかかるんだって」

「そりゃそうだろうよ、あんなもんを・・・ポン、ポン撃たれたら・・・」

新藤が言いたいことに、やっと気づいた秀の顔には冷や汗が流れていた。

「まさか・・・」

「もしガリア帝国のねらいが侵略じゃなかったら」



「断罪の雷を無駄撃ち指せるためか！」

「まだ分からないけど用心した方がいいかもね」

「そうみたいだな」

昨日のことを深く考えていない秀にとっては、新藤の話はためになつただろう

新藤との買い出しが終わった秀は自由な時間にシリルを探していた。

「あれ、シリル出かけてるたのかな？」

「シリルさんなら、連さんと蒼土さんと一緒に外に行きましたよ」

「ラニア、まじで外にいったのあの二人」

（なんだろう、すっごく嫌な感じがする）

宿屋を出て、いつも特訓していた場所にゆっくりと近づくと、秀の嫌な予感は的中してしまっていた。

「くそっ、もう一回お願いします」

「何度も向かって来るのはいいが、少し相手は代えさしてくれ、出てこい浅村」

「げっ、居たのかよ秀」

「ははははは、連何だよその顔は」

いつもの顔とは離れた顔になってる連を見ると、かなりの時間、特訓していたことが伺える。

「秀、お前一人で背負いすぎだぞ、お前は一人じゃないんだから、もっと周りを信頼しろよな」

「そうだよ、俺達は仲間なんだからさ」

「……………ありがとうな連、蒼土……………まあでも、そんな調子じゃ頼りないっいたらねえな」

「おいおい、このタイミングでよく言えたなその言葉」

「確かに、でもそう言ったからには見せてもらわないとね」

蒼士にそう言われた秀は連が持っていた木刀を取り、シリルに対して向かい合うようにして立って木刀を構えた。

「なんか、えらく久しぶりな気がするな」

「ふん、その様子だと何かに気づいたのかな」

「まあね、・・・連、蒼士、見てな」

そう言つと秀は再びしっかりと木刀を握り締め、自分に足りないものの答えをシリルにぶつけるために、走り出して行った。



## 二十四話 合格に向けて

シリルと秀との剣術の段取りが始まってすでに20分程経とうとしていた

「すげえ、どっちも一步も譲らねえ」

「確かにすごい・・・」

まだ特訓を始めたばかりの二人にとっては、シリルと渡りあっている秀がでかく見えていた。

「前とは随分違うようじゃな」

「おかげさまでね、一回り大きくなれましたよ」

シリルがどう打ち込んでも間合い見切ってかわすことや、全てをきつちするガード、すかさず反撃するカウンター、など

今までの秀には出来ていなかったことを急にしてくる秀にシリルは驚いていた。

(なんじゃこいつ、以前とは別物じゃな)

少しだけシリルが思慮する瞬間を今の秀は見逃さなかった。

「そこだあ！」

「ぐぐうう」

全力で振り切った秀の攻撃に、シリルは受けきれずに後ろに後退した。

「もらったあ！」

体勢を崩している一世一代のチャンスに、走り出した秀だったが、シリルは秀が走り出してくる時を待っていたのだった。

「せいやああ！！」

（突きか！）

いつもはこの突きを腹に直撃して終わる筈だったが、今の秀はそのシリルの突きを木刀でしっかりと防いでいた。

（な、何！ワシの渾身の突きを止めおった）

「どつやら俺の勝ちみたいですね」

シリルの喉元に木刀に向けてそう一言言って秀はシリルの特訓を終えることができた。



シリルから合格をもらった秀は、初めての勝利に興奮して眠れず、いつものようにいつものテラスで星を眺めていた。

「はあ、まじで嬉しいな」

「ほお、そんなに老人に勝つのが嬉しいか」

「なっ、シリルどうしたんだよ」

「どうしても聞きたくてなったんでな」

「もしかして俺に足りないもののことですか？」

秀がそう聞き、シリルは小さく頷くと、秀は自分に足りないものについて話始めた。

「俺、皆を守りたいと思ったから、強くなりたいと思ってたんですけど、シリルとやりあっている時に、ある気持ちが出てたんです」

「ある・・・気持ち？」

「はい、ただただ目の前にいる人を壊せばいいという気持ちです」

「・・・なるほど」

「でも昨日、ある奴の言葉を思い出していたら気付いたんです」

「一体何に？」

一呼吸開けた秀は、気づいたきっかけの凜に感謝しつつ、シリルに言った

「今持っている全ての力を誰かを守るために使わなきゃ駄目なんだって気付いたんです」

「ほう何でそう思ったんだ」

「簡単ですよ、誰かを守りたいと思って強くなりたいと思ったに、いつしかその気持ちが誰かを傷つける為だけにやっている、これだけ気持ちの矛盾があったんですよ」

「なるほど、気持ちの矛盾・・・か、いいこと聞かしてもらったな  
浅村」

「そうじゃ、今日の合格を祝して明日を出掛けるぞ」

「・・・はあ？」

その時のシリル気まぐれ発言が秀を大きく変える事件になることを、  
秀はもちろんシリルも知るよしもなかった・・・

## 二十五話 マナマ草原

### 宿屋臨時休業

「……まじかよ」

「言ったじゃろ、明日出掛けるぞって、つべこべ言わず付いてこい」

一人歩き出したシリルに付いていくこと20分、レーガルを出て森を抜けて着いた場所は壮大に広がる草原であった。

277

「凄いじゃろ、ここはマナマ草原って言ってな、娯楽にはうってつけの場所になっておる」

ここマナマ草原は普段こ多くの人達が集まる場所だが今日来ている人達は6人+シリルとラニアの8人だけだった。

あまりの広さに皆が感銘を受ける中、秀の耳にか細かい声が聞こえてきた。

助けて・・・

「っ!!」

すぐさま周り見渡すが見えるのは青々しく茂る草花と、抜けて来た森だけだった。

(気のせいかな?)

皆を見ても何のへんてつもない顔をしていたので、その時は気のせいだと思っていた。

助けて・・・早くしないと全てが壊れてしまう・・・

「へーこれは凄いな、でもここで何するんだ、娯楽って言ったって、ボールもなんも持ってきてないし」

「はて、娯楽場所とは言ったが、遊ぶと言ったかの」

）・・・まさか（

10分後



「ほれほれどうした、昨日のはまぐれかな」

「くそっ、何で昨日の今日なのにそんなに元気なんだよ」

昨日とは違い必死にシリルの攻撃を受け流す秀

「せやあー！」

「っ！しまった木刀が」

シリルが渾身に振り抜いた攻撃を防ぐが、その威力は恐るべきもので、少し握りが甘かったためか、秀の木刀は吹き飛ばされてしまった。

「ワシの勝ちじゃな」

「たあー、負けた」

秀はその場で大の字になり寝そべり、澄んだ空を笑顔で見上げていた。

「さあ次は夜坂じゃぞ」

「しゃー、行くぜシリル」

気合いを入れて意気込む連だったが、連は木刀を持たずに向かい合っていた。

「何だ連の奴とうとう頭がいかれたか」

「おい秀、聞こえてるぞ俺は木刀が合わないんで、これにしたんだ」

そう言うと、ポケットからグローブのようなものを取り出して手にはめた

「へえーリストか、でもアイツどうやって木刀防ぐつもりだ」

「そうだね、攻撃を腕で防ぐつもりかな？」

シリルと連の特訓が始まってから10分程……

「おい連、腕大丈夫か？」

「いてて、籠手を忘れてたとは不覚だぜ」

「大丈夫ですか連さん？」

「ああ俺の女神よ、俺を手当てしてくれー」

怪我をしてるのに、西脇が来るといつもの連にもどるが、今回も同じく西脇はひいていた。

「こんだだけ元気なら大丈夫だな、さあて俺はもう一度シリルに挑んでくるか」

「その意気込みはいいがそろそろ休憩にするぞ、ラニアが弁当を作ってきたんだ、なあラニア」

「ええまあ一様ですけどね」

「そうなんだ、じゃあ休憩にしますか」

ラニアが持っていたカバンからシートを広げて重箱を取り出して、弁当を広げると本当に一人で作ったのかいうぐらい、手の込んだ料理がたくさんあった。

「スゲーなラニア、これ程の物を一人で作るなんて」

「凄い美味しい！」

「これは旨いな！」

ラニアが作った弁当は運動した食べ盛りの男子もいるためか、あっという間に完食となった。

その後胃袋を休めるためにシリルと共にで休んでいた。

「ふうーにしても、ここの草原は何か不思議な感じがするんだよね」

「ほおー不思議な感じというと？」

「まあ何と言うか、風が気持ち悪いんですよ、人生で感じたことがないぐらい」

「そうかのー、ワシは別にいつもの感じしかせんかのー」

「それに、気のせいかもしれないけど、変な声が聞こえてくるし」

「多分疲れてるんじゃないやろ今日は早く休むべきじゃない」

体を気遣ってくれるシリルに感謝しつつ、一眠りしようかと目を閉じたときだった。

お願い助けて!!

「っ!!..やっぱり気のせい何かじゃない」

「おい浅村どこに行くんじゃない!!」

「声のする方です!!」

自分を呼んでいるという確信はないが、秀は声のする方に走っていき、森の中へと消えて行った。

## 二十六話 声のする方へ

森の中を走り回ることに10分、一向に声の主が見つかるどころか、人一人見当たらなかった。

「おかしいな、確かに聞こえてた筈なんだけど」

半ば諦めて帰ろうとした時に、微かに助けを求める声が出て、声の方向を向くと

「はあ、はあ、誰か助けて」

秀と同じ位の一人の女の子が見覚えのあるものに追われていた。

「カースかよ！・・・くそっ！」

女の子の体力が底をついたのか、その場でへたりこんでしまった。



もちろんカースがそのチャンスを逃す筈もなく、鋭い爪と牙で女の子に襲いかかった。

「きゃあああー!!」

やられると思い目を閉じた女の子だったが、来る筈の痛みが全くこないで、目をゆっくり開けると、目の前では秀がカースを食い止めていた。

「大丈夫かい？」

その間に何故か不思議そうな目で見てくる女の子は、息切れた声で大丈夫だと答える。

持ってきてきた木刀を強く振り抜き、カースとの距離を取ると、秀は強い眼差しでじっとカースを見ていた。

(絶対にこの人だけは守り抜く!)

そう胸に誓い、更に強い眼差しでカーズを睨んでいると、カーズはゆっくりと後ろ足を進めた後、後ろを向いて何処かに走って行った。緊張が切れたせいか、溜め息を吐き、その場で腰をおろし、女の子の方を向いた。

「何とか助かったみたいですよ」

「はい、ありがとうございます」

「でも良かった、怪我がなさそうで………ああ！」

急に大きな声を出した秀に女性はかなりびっくりしていた。

「あの時の声だ……もしかして助けを呼んだのは君かな？」

きよとんとした目でいた女の子は秀の質問を聞いたとたんに涙を流し泣き初めてしまった。

(ええええ、嘘だろ！)

「あのー、えーと、何だろう、失礼なことを聞いたんなら謝るよ、だからほら泣かないで・・・ね」

秀が必死に宥めていると女の子は目に涙を浮かべながら笑顔でこう答えた。

「すみません、別に悲しくて泣いてるんじゃないんです、ただ嬉しくて」

嬉しいという感情表現のせいか、いまいち状況の掴めない秀に女の子は続ける。

「あなたが初めてなんだよ私の声を聞いてくれたのは」

「え、じゃああの声は君の声だったんだ」

「そつだよ、助けてもらいたくて助けを呼んだの、だけど、私の声を聞いてくれたのはあなただけだった」

「そりゃ困ってる人が目の前にいるのなら、俺は出来る限りの手伝いはするよ、えーと」

「あ、ごめんなさい私はシルフィーっていいいます」

「よろしくシルフィー、俺は浅村 秀っていうんだ、呼び方はシルフィーが呼びやすい名前がいいよ」

軽く握手と会釈を交わした後、いよいよ本題へと入ろうとしたが、何かを察知したシルフィーは秀の腕を取り引っ張って少し大きめの木の後ろに隠れる。

「どつしたんだよいきなり隠れるなんて」

「しっ、静かにして、アイツらが来る」

「アイシむっ？」

シルフィーが引つ張った方向とは逆の方向からレーガルに侵略してきたガリア帝国の兵士が現れ、何かを探しているように見えた。

「何だアイツら何を探してるんだ、分かるかシルフィー？」

「多分それが・・・」

シルフィーが何かを口にしようとした時に、森の中からなにやら他の兵士とは違う鎧をした大柄で金髪の男が現れて兵士に指示を出しているのを見ると、おそらく幹部と言ったところだろうか。

幹部が指示を出すと兵士は二人がいる所とは別の所へと走って行った。

少しほっとした二人だったが、金髪の男がゆっくりと前に出てきて、二人がいる木に向かって

「そこにいる奴らよ出てこい！わざわざ兵士を減らしてやったんだ」

(コイツ気付いてやがったのか！・・・しょーがない)

「シルフィーじっとしてろよ」

木から出てきた秀はふーと深く息を吐いた。

「何を誤魔化しているんだバレバレだぞ、木の後ろから魔力が漏れてるんだよ」

男がそう言うと、観念したようにシルフィーが木の後ろからゆっくりと出てきた。

（くそつ、最悪だな……でも何でシルフィーから魔力が出てるんだ？）

魔力の疑問点を考えていると、男が大口を空けて笑いだして信じられない事を口にした。

「会えて嬉しいよ、この森の精霊シルフィー……」

「シルフィーが……精霊だった？」

秀が見ると顔伏せたまま黙ったままでシルフィーがそこにはいた。

二十七話 精霊シルフィー

「おい、どづいうことだよシルフィーが精霊って」

「そのままだよ、そこにいるシルフィーはこの森の精霊だよ」

「……んでシルフィーをどづするつもりなんだ？」

「お前には関係ないことだろう、何故気にする？」

「関係ないなんてことはないね、俺はシルフィーから助けを求められたんだ」

口では何とか言い争えるが、相手の男とたたかえば、秀の負けは明らかだった。

初めての相手にそれほどの実力の差を分からせるほどの力を相手はもっていた。



「そうか、なら言ってやるつ……シルフィーをガリア帝国に連れて行く、ガリア帝国繁栄の為にな……」

「そうか、ならやることはただ一つだな」

秀はくるりと方向を変えてシルフィーの手を握り男とは別の方向に走って行った。

「ふん、せいぜい逃げ回るんだな」

男はその場から腕組みをしたまま動かなかった。

あれからどれほどの距離を走ったかは分からないが、二人は泉に行

き着いていた。

「うわー綺麗な泉だな、水が透き通ってる」

「凄いでしょ、ここは私のお気に入りの場所なんだ」

「分かる気がするよここがお気に入り場所になるってことが」

秀がそう言い終わるとしばらくの間沈黙が続いたが、その沈黙がシルフィーが破る。

「ねえ、一つ聞いていいかな？」

まだ少し暗い顔をしてるシルフィーを元氣付けるために、秀は笑顔で頷いた。

「何で今日初めて会った私を助けてくれたの？」

「はあ？何言ってるんだよ目の前で困った人がいるなら出来る限りのことはしたいって言ったろ」

「でも、あの時逃げてなければ、秀は助かったかもしれない」

「俺はこういう性格なんだ・・・だから謝らないでシルフィー、俺はシルフィーを助けたいんだ」

秀の言葉のおかげでようやくシルフィーの顔もやっと明るい笑顔が戻った

しかし状況は変わらず劣勢状態、ガリア帝国の兵士に見つからないのがベストだが、あの金髪男が搜索に行かしたせいで、こちらは慎重に行かざるおえない状態だ。

「シルフィー、マナマ草原に繋がるように道案内してもらえないかな」

この状況を乗りきるにはマナマ草原で仲間と合流してレーガルに帰るのがベストだが、シルフィーの顔は何故か渋っていた

「ごめんなさい、実は私はこの森から出られないの」

「えっ、それってどういうこと？」

この劣勢の状況を切り抜けるにはどうしてもこの森を抜けたいのだが、シルフィーはそれが出来なかった。

さらにこの状況に追い打ちをかけるように、秀のよこに緑の色の球が転がってきた。

「ん？」

「秀、危ないその球から離れて！」

シルフィーがか叫んだのも反応したが、緑の球は秀の背後で爆発して、秀はそのまま吹き飛ばされてしまった。

「秀！！」

「あ、ああ・・・」

「秀、しっかりして大丈夫・・・っ！！」

倒れ掛かってきた秀を抱えた時に感じた生ぬるい感触赤く染まった自分の手

「おしゃべりはそこまでにしてもらおうか」

「っ！！て、てめえ、精霊契約してたのかよ」

「紹介しよう、コイツが俺の精霊のタトウナスだ」

ケケケよろしくな、にしてもゼファ、もう虫の息だぜアイツ

ゼファと呼ばれた男の肩に骨と皮だけの鳥が止まっていた。

「くそっ、逃げるぞシルフィー」

「ははは、逃げる逃げる時間はたっぷりあるんだから、まだまだ楽しんでませてくださいよな」

ゼファはまたもやその場所から動かずに突っ立っていた。

二十八話 命懸けの逃亡

背中に走る激痛と燃えてしまいそうな熱さ、ゼファから逃げて来て10分が経っているが、秀の視界はすでに揺らいでいた

(くそっ、真っ直ぐ歩くこともままならねえ)

「秀、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ」

口ではそう言うも、実際は痛みに負けそうだったが、そんな状況ではないのだから走るしかなかった、どんなに痛くても・・・

コロコロ



「マジかよ!!」

前方に転がってきた爆弾の爆発での直接ダメージはなかったが、狙いはそこじゃないとすぐに分かった。

爆発が起きた所の木がシルフィーに向かって倒れてきたからだ。

シルフィー本人は倒れてくる木と逆方向を向いていたために気付いていなかった。

(間に合え!!)

シルフィーに飛び込むように飛び、シルフィーをそのポジションからずらすことが出来た。

「はあ、はあ、大丈夫かシルフィー」

「ありがとう・・・私は大丈夫だけど秀が・・・」

今の秀は誰が見ても重症で、すでに体がいうことが聞かなかった。

さらに後ろを見ると、100メートルほどの所にゼファとタトウナスの姿があった。

(くそっ！こんな所で死ぬわけには……………)

相手に手も足も出ない自分の不甲斐なさに腹がたつてしょうがなかった。

「秀……………」

(私が秀を呼ばなければ秀がこんな怪我をしなくてすんだに……)

もはや長く持ちそうにない秀にシルフィーは深刻な顔をしてゆっくりと口を開いた。

「秀……一つだけ、この状況を乗り切る方法があるよ」

「……ほ、本当に！」

「でもよく聞いて、これが失敗すれば秀も私も死んでしまうの、その覚悟がある？」

「へへへ、どうせこのままいたら死んじまうんだ、だったらそっちにかけてみるよ」

「分かった、秀、肩貸すから少しでもアイツから離れよ」

最初よりは比べもにならないくらいゆっくりとだがゼファから離れて行った。

「ふん、悪あがきを」

またゼファから逃げることに10分、すでに空は夕焼けがかった。

「すまないシルフィー、逆に迷惑をかけてしまった」

「秀、今はアイツからできるだけ離れることだけを考えて」

「でも、奴から離れてどうするんだ、どうせすぐに追いついてしま  
うぜ」「

「よく聞いて秀、この状況を乗り切る方法は一つしかないの、それ  
をするには時間がある、だからアイツからできるだけ離れるの」「

「それはさっき聞いたさ、んで具体的に何をすればいいんだ」

森の中進んできて、ちょうどいいサイズの木に秀をもたれ掛け、真  
剣な顔でその方法について話した。

「私と契約を結んで秀」



二十九話 契約開始（前書き）

やっと精霊契約のところまでいけました（  
）

## 二十九話 契約開始

「契約を結ぶって、俺とシルフィーがが？」

「うん、これしか方法はないよ」

自分が精霊契約について知っているのはラウルから教えてもらった  
“正の器を見せる”ということのみ、いきなり精霊契約と言われ、  
かなり困惑していた。

「精霊契約がうまくいけば、秀も怪我する前以上の動きが可能にな  
ると思う」

「なるほど、うまくいけば、逃げ切れるってことね・・・ん、ちょ  
っと待て」

精霊契約をする意味はわかったが、どうにも解せないことが一つ浮  
かんだ



「さっき、この森から出られないって言ってなかったっけ？」

「詳しいことは、全てがうまくいけば、全てを話す」

真剣な眼差しで見ってくるシルフィーにこれ以上話しかけることが出来なかった。

「今から緊急用の精霊契約の結び方の手順を説明するね」

（緊急用？）

「精霊契約は契約者の強い想いに、精霊が持っている負の感情に打ち勝てば、契約終了なの」

（なるほど、ラウルが言った正の器を見せるってそういうことね）

「正規のやり方は特殊な道具や魔方陣で負を軽減して契約者の負担を最小限に抑えるんだけど、今はそんな暇はない」

いつ襲ってくるか分からない爆弾の恐怖に怯えて逃げるよりも、早く精霊契約をするのがベストのため、シルフィーは契約の準備に入る

「いい秀、強い想いって言われてもビジョンが浮かばないと思うけど頑張ってね」

「大丈夫さ、強い想いってのはもうあるから」

「じゃあ、いくよ秀！」

シルフィーが目を瞑るとシルフィーの周りに黒い霧のようなものがまとわりついていた。

(これが……負)

「来いシルフィー！」

シルフィーが飛ばした負は秀の体内に吸い込まれてるようにはいっていった。

「あれ、別に何ともないけどな？」

「苦痛はこれからだよ」

ドクン！

「っ!」

(何だ?いきなり心臓のが……)

ドクン!

(はあ、はあ、何だ?急に息苦しくなってきた)

「がああああ!」

負がもたらしたのは、息苦しさだけではなく、ゼファの爆弾のような激痛が全身に走る。

「精霊が持っている負はいろんな種類があるの、私が持つてる負は・・・悔やみだよ」

（く、悔やみ？）

「この森ではいろんな生物がいる、その生物達はいろんな死に方をする・・・普通に生活をしていて急に天敵食べられたり、人間の狩りによって狩られた生き物」

「その生物の全てが十分生きたと感じた筈がない、“まだ生きたかった”と思う生物の悔やみが負になって、この森の精霊の私に溜まるの、そして、その溜まった負を秀に飛ばしたんだよ」

「負に耐えきれなくなったら終わりだよ秀、体が死を選んでしまい、そして負を飛ばした私も死んでしまう」

「はあ、はあ………ははは、はははははは」

息苦しさで激痛に顔を歪めるのが普通だが、その時の秀は笑っていた。

「な、何で笑ってるの？普通は我慢するのすらキツいのに」

「確かに痛いよ、でも生憎俺は普通じゃないんだよ、俺は人生の半分以上我慢してきたんだよ」

痛みに屈してかた膝をついていた秀だったが、ゆっくりと立ち上がった。

( 凄い！こんなに早く苦痛に…………… )

「スゲー痛いけど……………こんな痛みで俺が夢を諦めると思うなよ！」

秀からまるで蒸発するように負が放出され、シルフィーが出した負が全て消えていった。

「はあ、はあ、どうだシルフィー」

苦痛を乗りきった秀が、シルフィーがいる方向へ目を向けると、姿が薄れて、宙に浮いているシルフィーがいた。

「んん？」

目の前でのことが訳が分からなく、目を擦ってから見るが目の前は全く変わらない光景だった。

契約が完了した精霊は前みたいに実態はなく、霊体みたいになるんだ

「おお、なるほどね、あまり理解出来ないけど」

何はともあれ、契約お疲れ様

「ああ、これからなよろしくシルフィー」

山を一つ越えたことで、お互い自然と笑顔が出る

しかし、それもつかの間で最大の山がやって来た



「ほう驚いたな、この土壇場の状況で精霊契約をしたのか」

「ゼファ・・・」

三十話 精霊契約の力

分かってる秀、アイツと戦っちゃダメだよ

「分かってる、でもどうすればいいんだ」

大丈夫、今の秀には魔力が備わっているけど、使い方なんて分からないでしょ、だから私に任せて

「任せてって言われてもどうするんだ？」

そ・れ・は . . . . . 失礼します

シルフィーが背後から近づき、秀と重なりあった

「. . . . .」

秀と重なりあつたシルフィーの姿が秀の体に吸収されていった。

しかし秀が次に口を開いた時の口調はシルフィーの口調だった

「選手交代」

おいおい、どうなってるんだ？

「ほう憑依したか」

憑依だと？

「そつだよ、私が秀の体に取りついてるんだ、秀の体は今私の物だよ」

何でそんなややこしいことをするんだ？

「それは秀が魔力の扱い方を知らないから、私が憑依して、使えないでしょ」

何も言えない自分が腹立たしいが、実際のところゼファから逃げにはどのみち一筋縄ではいかないだろうから、今はシルフィーに任せるしかない

緊迫した空気の中、先に動いたのはゼファだった。

「タトユナス、俺達も憑依するぞ」

おう、派手にぶっばなそうぜ

タトユナスがシルフィーと同じように契約者に入り込んだ。

「さあ、始めようか」

なあシルフィー、何でアイツ憑依したのに、口調はそのままなんだ？

「一口に言えば経験の差だね、何度も精霊契約で戦っていると自分の意志全てが精霊に支配されないようになるの」

なるほ……うおっ！シルフィー来るぞ！

憑依の疑問に納得する間もなく、ゼファはこちらに突進してくる。

「よく見ててね秀、精霊契約の力を」

木を背にしていた自分<sup>シルフィー</sup>に迫ってくるゼファの拳を横に飛んでかわしたが、その時の自分の移動距離に驚愕した。

ゼファとの距離が横に飛んだだけで10メートルは離れていて、感覚的にも横に移動したと言うより横にワープしたという感じだった

す、スゲー、これが精霊契約の力……

「これがまだまだ序の口だよ、秀がもつと鍛練すればもつと動けるよ」

シルフィーの言葉に自分の未知なる可能性に胸を踊らせるのもつかの間、ゼファはすぐに自分に向かって走ってくる。

「ふむふむ、ゼファは身体強化が苦手みたいだね、これはラッキー」

どンドン攻撃を繰り返してくるゼファだが、素早く移動してゼファの攻撃を全く喰らわなくなっていた。

「くそっ！ちょこまかと移動しやがって」

「へへん 追いつけるもんなら追いついてみなさい」

(シルフィーって意外に子供っぽいんだな)

それから逃げて追いかけて逃げて追いかけての繰り返しだった。

そしてそんな鬼ごっこの終わりはシルフィーのお気に入りの泉にて迎えることになる。

「ゼファ、そろそろお開きにしましょ」

「ああ、俺がお前達を殺して終わりだな」

笑みを浮かべて、ゼファはゆっくりと距離を縮めてくる。

「その結末は違うよ、本当の結末は・・・」

「あなたの任務が失敗して終わりよー!!」



後ろにある泉に勢いよく飛び込み、一気に潜水を始めた。

「しまった！」

しまった！水の中じゃ爆弾も大した威力を發揮しない……  
……くそっ逃げられた

「……タトユナス、信号爆弾で兵士に帰還するよう頼む」

了解した……ゼファ、気を落とすなよ

潜水を初めて2分後

秀が次に酸素を吸い込んだのは森の泉ではなく、マナマ草原の川だった。

「ぶはあ、意外にキツかった」

まさか、泉がこんな所に繋がってるなんてな

「とりあえずは安心だね秀」

ああ安心だね……ってかシルフィーそろそろ体返せ

「はいはい、分かりました、ほいよつと」

秀の体からシルフィーが抜け、やっと自分の意志が効くようになった。

「ふう、何かどつと疲れたな」

そりゃ初めて魔力を使っただもん、そりゃ疲れるって

「そうなんだ、さてシルフィー、落ち着いたから質問の答えを聞かして貰おうか」

何の質問かを思い出す為にシルフィー少し考え込んだ末ようやく質問を思い出して、その答えを喋り始めた。

何故出ることが出来ないかと言うと、私はこの森出ると、私の魔力は減り続けるの

「なるほど・・・続けて」

精霊は自身の魔力を失うと存在は消えてしまうの、でも出られる方法が一つだけあるの

「それが精霊契約」

うん、秀と精霊契約した理由はゼファから逃げる為だけど、精霊契約したおかげである森から出ることが可能にもなったの

「ん？ちよつとストップ何で精霊契約したからこの森出られるようになったんだ？」

いい秀、精霊は自身の魔力を失うと消えてしまうの、でも私の魔力を秀の魔力と混合させることで、たとえ魔力を使いきってしまったても、混合した魔力だから精霊だけの魔力じゃない

なるほどと、ポンツと手を叩く秀に、シルフィー最後に

にしても秀は魔力を使いすぎたから、早く休んだ方がいいよ、魔力を回復させるには休養が一番だからね

「ははは、でも休む前に仲間と合流しよう、居るか分かんないけど」

笑って答えると、シルフィーが示す方向に向け歩き出すことにした。

マナマ草原に移動する秀だったが、一緒に移動しているシルフィーを見て一つ不安があった。

「なあシルフィー、いきなり精霊のお前と会ってみんなビックリしないかな？」

ん？そりゃビックリするでしょ

「ははは、だよな」

軽く笑って答えるが、秀こ本当は笑っていないことなどシルフィーにはわかっていた。

ゆっくりと明かしていけばいいんじゃないかな、一人づつ、その間私を入れさせてもらうし

シルフィーの言っていることが分からない秀は、“入れさせてもらう”についてシルフィーに質問で返した。

「えっ？分かってないの秀がつけてる腕輪のこと」

(この腕輪のこと?)

「この世界にはを契約をした精霊を入れることができる素材があるの、んで秀のつけてる腕輪がその素材で出来ているってわけ

「なるほど、でも何の為に入れるんだ？正直みんなも説明すれば簡単に受け入れてくれると思うけど」

あまいな〜と言いながらチツチツと指を振ってシルフィーは説明した

「この世に意味のない物なんてないの、実はその素材で作られた道具に入ると精霊は、微量だけど魔力を蓄えることが出来るの

「なるほどね、それでまた精霊契約した時に、その微量分の魔力がプラスされるってわけね」

うん、そういうところかな、まあ秀も1日中浮いていらねると、しんどいと思うしね

「よし、じゃあシルフィーには悪いけど入ってもらいますか」

了解 秀、私に腕輪を向けて、腕輪に入るように念じて

シルフィーに言われた通りに、腕輪を向けて入れと念じると、シルフィーは腕輪に吸い込まれるように入って行った。

「ありゃま、世の中も便利になったもんだねー」

その言い方じじ臭いからやめてよ秀



「冗談だよ、さてと夕日が落ちる前に草原に行きますか」

気合いを入れ直した秀は力強い足取りで、草原へ続く道を歩いて行った。

三十一話 一夜明けて(前書き)

最近の気温の変化についていけない) ; ( )

三十一話 一夜明けて

秀がマナマ草原に向かっていている頃、草原にいる七人は秀の帰りを待っていた。

「おせーな秀」

「もうすぐで日が暮れちゃいますよ秀さん」

秀 Side

「なあシルフィー、草原まで後どれくらいだ？」

「もうすぐだよ、ほら見えてきたよ」

視界が全て森だったが、前方に微かに草原が見えた。

「おっ！やつと草原に着いたぜ………おーいみんな！」

「おお！！浅つち……つて、ええええ！！何でびしょ濡れなんだ？」

「大丈夫ですか！！浅村くん」

「大丈夫、大丈夫ちょっと疲れたけどな」

体はへとへとになっているが、会話ができる程度の体力はあった。

「再会を喜ぶのもいいが、暗くなる前に帰るぞ、浅村も帰ってから聞かしてもらうからな」

「はいはい、少し休んでからにしてほしいけどな」

こうして秀にとって記憶に残る1日が終わった。

翌日の朝、朝の仕事が終わるとすぐにシリルに呼び出されていた。

「昨日の件ですね」

「ああ、何があったか聞きたくてな」

もともと今日誰かに話す予定だったので、一番話が通じやすいシリルと会ったのは秀にとってラッキーだった。

シリルが特訓してくれた場所に行ってから秀は腕輪からシルフィーを出して昨日のことをシリルに話した。

「お前は本当に面倒事に巻き込まれるな」

「レーガル城で襲われたことは面倒事でしたけど、シルフィーのことに限っては面倒事なんて思ってないですよ、おかげで助かったんですから」

そうよ、私が契約したおかげで助かったんだからね

「……お前は喋るな」

「それでみんなには話したのか」

「いや、シリルがはじめてだよ、精霊契約が身近なシリルが一番話しやすかったしね」

「光荣じゃな、まあだいたい昨日のことが分かったからワシは帰るとするか」

そう言っつて、秀と別れたシリルは宿屋の入口に向かって歩いて行った。

シリルが戻った後、少ししてから宿屋に戻ろうとした秀をシルフィーが止めた。

ねえ秀、確か今日はフリーだよな

「ああ確かにフリーだけど、どうかしたのか？」

よかった、じゃあ私が言う方向に向かって

腕輪にいるシルフィーからの支持通りに歩いて行くと、秀が初めてシルフィーに会った森に着いた

「ここは確か・・・」

「うん、私のお気に入りの場所だよ」

水が綺麗に透き通った泉に用があったようだ。

シルフィーが腕輪から出すと、ここに来た意味を秀に話した。

「ええええええ！この森を救って欲しいだって」



うん、まあ別に驚くことないと思うよ、簡単なことだし

「いやいや、普通は驚くと思うよ、んで俺は具体的に何をやらばいいんだ？」

この森は私が居なくなったせいで、この森の負を受ける器が無くなったから、変わりに造ろうってこと

(スケールでけーよ！)

「もしかして変わりの器ってこの泉のこと？」

うん、一番適してると思うんだ、私が一番好きな場所だしね

平然と話している様に見えるが、秀にはシルフィーの顔はどこか悲しい顔をしているように見えた

一番好きだった場所を負を受ける器代わりにするのだから、分からなくもないことだ

「本当にいいんだな、シルフィー」

大丈夫よ、器にしたからって言ったって、泉自体が消えるわけじゃないんだよ、ただこの綺麗な水がどうなるかは私にも分からないけどね

「……強いんだな」

え？

「自分にとって大切な物を犠牲にしなければいけないにさ」

秀の話し方はまるで自らも何か大切なものを失ったような話し方であつた

もう決めたことだからそれに最初に言ったように泉に消えるわけじゃないからさ・・・さて暗い話もここまでとして、さっそく本題に移るよ

本題に入ろうとしたシルフィーに秀は人差し指をたてて静かにするよう促した。

「本題に移る前にやることがあるみたいだぜ」

秀が目配せで示した所には昨日に会ったカースが木の陰から一体で

はなく今度は3匹出てきた。

なるほど、行くよ秀

「シルフィー、今回は俺に意思が少しでも多く残る様にしてくれよな」

それは私がすることじゃないよ、しっかりと意思を持ってはいけるかもしれないけどね

「憑依！」

「ふー、今度はちゃんと俺の意思が残ってるな」

ゼファの時には意思が全てシルフィーのものだったが、今回の場合はキツチリと秀の意思が残っていた。

そしてカーズ達に向かい走り出して行った。

三十二話 カース再び(前書き)

本当に4月なのかな、寒すぎる) ; ( )

## 三十二話　コース再び

初めてコースと会ったときは身体能力などいろいろと負けていたが、  
憑依状態である秀は3匹のコースの動きを上回っていた。

「初めて会ったときは随分違うな」

へー前にも会ったんだコースに

「ああ、前に会った時は逃げてた所をラウルって人に助けてもらっ  
．．．」

ちよつと秀後ろ！

秀が言い終わる前に後ろからコースが飛びかかってきたが、秀はち  
やんとそのコースに気付いていた。

前に屈み、上を跳んだコースに持って来ていた木刀で腹部を突き、  
一匹目をたおした。

「俺にケンカを売ったことを後悔するんだな」

残った二匹を睨み付けると、二匹は地と足がくっついたように動けなくなっていた。

「そっちが来ないならこっちから行くぜ！」

地を強く蹴り二匹の内の一匹との距離を詰め、木刀を首根っこ目掛けて降り下ろし二匹目を倒す。

「さあ、残るは一匹」

最後に残った一匹は己の命の危機を感じ、尻尾を巻くように逃げていった

「残念だったな、前の俺とは違うんだ」



さて、邪魔者も居なくなつたし、始めるよ

「具体的に俺は何をすればいいんだ？」

私の中にある負を受け入れる器を私の中から取り出すとから秀はそれを泉に器を沈めたらいいの、ね、簡単でしょ

「うーん、簡単って言うてもなー」

はいはい、しのごも言わないで男の子ならやるの

後ろから背中を押され、急かされ、器を移し変える準備に入った。

シルフィーが目を閉じ瞑想を始め、二人がいる森に静寂に包まれる。

( 始まったか・・・ )

我が身に宿る器よ、私の想いに応え姿を現せ

シルフィーがぶつぶつとそう唱えると体から光の集合体のような物がシルフィーの体から出てきた

「あらまーこりゃ見事なもんだな」

さあ秀、この器を泉の底に置いてきてね、私は器を移し変えるまで動けないからよろしくね

「はあ、またす潜りか」

おもむろに服を脱ぎ出した秀を見てシルフィーは顔を真っ赤にしてすぐさま体を反転させた。

あのね、脱ぐなら脱ぐって言ってよ

「ん？悪い悪い、潜るに服は邪魔だったからさ」

森中でパンーの完全な変質者になった秀は泉の中に入り器を沈める為に息を少しだけ吸い潜水を開始した。

頑張ってねー

(本当にここの泉は綺麗だなー、泉の底が見える泉なんて元の世界じゃなかなかないよな)

一気にスピードを上げて底まで泳ぎ着くと、持っていた器を底にそっと置くと、器は底に吸収されるように入ってしまった。

(これで完了なのかな・・・)

底を強く蹴りすうーと上がっていき、泉から出てきた。

「ぶはあ、はあはあ、シルフィーこれで完了なのか」

うーん、私の体も動く様になったし、器の移し変えは成功したと思っよ

「そうか、じゃあ帰りますか、腹も減ってきたことだし」

「あら、もう終わったの早いわねー」

どこかで聞いたことがある声が後方から聞こえた為、シルフィーと同時に後ろを向くと、レーガル城で殺されかけた女の人がいた。

「げっ、あなたはあのときの」

「あら、女性相手にあんたは失礼よ、私にはちゃんとディアって名前があるんだから」

なになに、秀この人知ってるの？

「シルフィー！有無を言わずに憑依だ！」

突然のことで何がなんだか分からないシルフィーだったが、秀の焦りを見てすぐに憑依状態に入った。

「あら、前会った時とは随分成長したわね、戦闘状態に入っているところ申し訳ないけど、私はあなたと戦うつもりはないわ」

「はあ？じゃあ何しにここに来たんだよ」

「ここの森はレイラちゃんが好きな場所なのよね、レイラちゃん」

ディアが城で会ったレイラの名前を呼ぶと、ディアの後ろからレイ

ラがひょっこりと出てきた。

「ちっ、何が戦うつもりがないだ、しっかり精霊契約しやがって」

待って秀、あの人と戦うつもりなの

「当たり前だろ、精霊契約したってことわ、戦う気満々ってことだろ」

落ち着いて秀、なにがなんでもあの人と戦っちゃダメ！

「はあ、何でだよ？」

とにかく戦っちゃダメだよ逃げて！

先程までとは違ってかわって、秀と同様シルフィーが焦っていたため、ちっ、と舌打ちしてからゼファの時と同じようにその場から逃げ出した。

「あら、お帰りのようねまあ別にいいけど」

逃げる秀を見ても、ディアとレイラはまったく追おうとはしなかったため、何事もなく、その場から逃げる事が出来た。

そのまま逃げ続けた秀は憑依状態であるためか、前来た時より早く宿屋に着いた。

「あ、お帰りなさい秀さん、どこか出掛けてたんですね」

「まあちよつと気晴らしにね」

ラニアと簡単な受け答えをした後、自分部屋に戻った秀は精霊契約をしたせいか疲れて寝てしまった。

その日の夜

「なあシルフィー、そろそろ教えてくれないか」

あの時ディアと戦っちゃダメって言ったこと？

秀はこくりと頷く

まず聞くけど、あのレイラって子に違和感を感じなかった

「違和感？」

何も感じなかったと受け取ったシルフィーはこりゃダメだという顔してから続けた。



精霊契約したならレイラって子にも魔力を感じる筈なのに、レイラって子には全く感じなかったの

「確かにゼファの時にはタトウナスにも魔力を感じたな」

感じなかったってことは精霊契約じゃないってこと

「えええええ！」

シルフィーから聞かされたことにただただ驚愕していた。

「じゃあ、あのディアとレイラは何だって言うんだ？」

ディアがやったのは……屍契約だよ

三十三話 屍契約(前書き)

くっ) ;、 ( 風邪をひいてしまった。

医者に行ったらやはり「気候変化が原因ですね」って言われました  
f ^ | ^ ;

### 三十三話 屍契約

「屍……契約……」

屍という不気味な言葉に契約を足した屍契約という言葉聞いて、秀の背筋に少し寒気が走った。

「屍契約って一体何なんだ？」

屍契約は禁術だよ、死んでしまった亡骸を契約対象とする

「ちょ、ちゃんと待って死んだ人を契約対象に出来たりするのかわか？」

普通は出来ないよ……人が死んだことを受け入れることができないからね

淡々と喋るシルフィーだが、声のトーンが下がっているのと同じく、みると屍契約というのは嫌なことだと感じとれる。

屍契約っていうのは、死んだ人の死が受け入れなくなった人が発動することなの

「そんなんだつたら、年がら年中屍契約起こってるんじゃないのか？」

確かに秀の言う通り屍契だよそんなんことで屍契約が起こるんだつたらたたくさんの屍契約が起こってしまうそれでも屍契約が稀なのはそれなりの理由があるの

(それなりの理由?)

屍契約は精霊が受けきれないほどの負を持つ人が起こることなの

「おいおい知人が死んで受け入れることができなくて発生した負は精霊が受けるのか」

まあね、その地方に住む精霊達はその負を分割して受けるんだよ、

「そんなことして大丈夫なのか？」

大丈夫だよ、別に全部受けるわけじゃないよ、その人が屍契約をし  
ない程度までしか受けないしね

シルフィーが言うことは初耳のことばかりであった。

屍契約があることや、人が死んだ時に発生する負を精霊が受けるこ  
とがあることなど、知らないことが多すぎた。

「屍契約のことは分かったけど、何であの時逃げたんだ？もしかし  
たら勝てたかも知れないのに」

そう言ってシルフィーを見ると、呆れたと言わんばかりの顔をして  
いた。

魔力をまだまともに操れない人がよく言っよ

「うっ、それを言っなよ」

そもそも精霊契約と屍契約では力の差がありすぎるの

「はあ！そんなの理不尽じゃねえか」

精霊が持つてしても取りきれない負の力を使うんだよ、力に差が出て当然だよ………ただし屍契約にはそれ相応のリスクを担うの

「リスク？」

少し間開けたシルフィーはゆっくりとリスクについて口を開いた。

屍契約の力の源は負だけど、負に自分の生命力をプラスすることによって爆発的な力が使えるの

「おいおい生命力を使うってことはつまり」

シルフィーが言ってることは頭が緩い秀でも流石に理解できていた。

そう使えば使うほど生命力を使うことになって、最後には契約者は死んでしまう・・・

「酷いな・・・」

生命力と負を使う屍契約に精霊契約のせの字も知らない秀が勝てるわけないでしょ

その言葉に秀はただ何も言えない自分が情けなくて仕方なかった。

「シルフィーちょっと付いてきてくれないか？」



どこに？あ、まさかデートのお誘いかな？

この空気の中で冗談が言うシルフィーを見ていて自然とため息が出ていた。

レীগアル出た二人が着いた場所は秀が初めてコースに襲われた森だった。

大丈夫かな、もうだいぶ暗いけど・・・

「大丈夫だよ、ここに居るのは少しだけだから」

「ここで一体何するつもりなの？」

「ん？特訓だけど」

えええええ！何でいきなりそうなるの？

「分かったんだよ」

何が？

先程までとは違う雰囲気醸し出している秀に気付いたシルフィーは秀の話に耳を傾けた。

「今日のシルフィーの話聞いて、自分がどれだけ無力なのか、精霊契約しただけじゃ屍契約には勝てないなら、それを上回る位力をつけなきゃならないって思ったんだ」

別に秀がだけが戦うわけじゃないでしょ、助けてもらったラウルって人もいるんだし

「確かにシルフィーの言う通りかもしれない・・・けど、もう嫌なんだ何も出来ないまま誰かが傷つくのは」

秀・・・

「だから強くなりたいんだ、屍契約が来ようとも誰も傷つかないでいいように強くなりたい」

秀の言葉を聞いたシルフィーはその場で笑みを浮かべていた。

契約者があなたで本当によかった

「何だよいきなり、誉めても何も出ないぞ」

別に何か欲しくて誉めたんじゃないよ、ただ秀みたいな純粹に誰かを守りたいっていう人は多分屍契約並みにいないよ

「屍契約と比べるな」

先程までの真剣な空気が台無しになったものの、秀の純粹な気持ちにシルフィーも同意し、とことん特訓に付き合おうと言ってくれた。

ちなみに特訓って言っても何をするの、ここで決まってるじゃないんか言ったら軽蔑するよ

(そこまでしなくてもいいだろ……)

「分かってるけど、今俺に足りないものをあげたらたくさんあるだろ」

そうだね……魔力の基本的な使い方、魔力の総量の増加、魔力の応用……あ、あと馬鹿も治さないとね

「お前は俺を傷つけないのか」

あはは、冗談だよ、まあ挙げたらきりが無いよ、ていつか秀自身が決めたきやね

「そうだな……やりたいことが一つあるな」

へー、ちなみにそれは何？

「その技の名称は知らないんだけど、ラウルが持っていた槍に精霊が吸収されたと勝手に槍が変化したんだ」

ふむふむ、それは多分物質憑依かな

「物質憑依？」

名前の通り人に憑依するんじゃないで、物質に憑依するんだよ、憑依された物質は形状が変わるから多分ラウルって人がやったのは物質憑依で間違いないと思うな、ていうか秀がやりたいことってこれ

なにやらかなり驚かれているが、秀がやりたいことは物質憑依だった。

「何か問題でも？」

おおありだよ、前にも言ったように魔力をまともに操れない人が

物質憑依なんか出来るはずないでしょ

「そんなもんやってみなきゃわからないだろ、それにさっきとは違って敵がないからゆっくりできる」

そうだけど・・・

「心配すんな、俺はプレッシャーに強い男だ」

そんなの初めて聞いたよ

「そりゃそうだ俺も初めて言ったことだし」

あははは、分かったよとりあえずやれるだけやってみようか

秀の冗談でこの場の空気とシルフィーの気が緩んだのかシルフィーも秀の意見に同意した。

まず物質憑依の注意点を説明するね、物質憑依の注意点は憑依で  
きる物質は一つだけに限られるってことかな

「できればもう少し噛み砕いていただきたい・・・」

うーん、例えばある人が物質憑依で盾に憑依させたとするでしょ、  
そうしたら今後一切その人の物質憑依は盾以外に憑依させることが  
出来なくなるの

「じゃあ、その憑依させた盾が無くなったら物質憑依は出来なくな  
るってこと」

一回成功させれば、その人が盾だと認識する物質に憑依させるこ  
とが出来るから大丈夫だよ

「なるほど、成功してしまえば鍋の蓋でも憑依可能になるのか」

鍋の蓋を盾として使う人なんて見たことないけどね

「よっし、じゃあ始めるから細かい説明はたのんだよシルフィー」

了解



三十四話 物質憑依（前書き）

最近の話が説明文が多く感じてきました f ^ | ^ ;

三十四話 物質憑依

二人以外には誰もいない少し不気味な夜の森の中で物質憑依の準備に入る。

秀が持つてる木刀に憑依するけどいいかな

「ああ俺は木刀を物質憑依を対象物とするよ」

了解、じゃあ私はその木刀に憑依するから、魔力を木刀に集中させてねイメージでいいから

シルフィーの指示通りに心を落ち着かせて、魔力を木刀に集中させるイメージをする。

凄い・・・

秀にシルフィーが憑依してない状態の秀に驚いていた。

憑依を通してからしか魔力を使ったことがない秀だが、今集中している秀の魔力は木刀に集中していた。

(いくよ・・・秀)

(いつでも良いぜシルフィー)

シルフィーは持つてる木刀に吸収されるように入っていた。

木刀を持つてる秀は目を瞑っていたが、今自分が持っている木刀に何らかの変化があるのかが分かった。

その変化が気になって目を開けると、秀が持っていたのは木刀とは似ても似つかない物だった。

その形はまさに木刀ではなく刀のような形をしていた。

「これが俺の物質・・・憑依なのか？」

そつだよ、これが秀と私の力だよ

（何だろう？握ってるだけなのに力が湧くようなこの感じは）

凄いでしょ、握ってるだけで力が分かるんだから、

「確かに凄いな、こんな感じ生きてきて一度もないし」

でも秀、あんま長いこと憑依させてると危ないよ

「ん、どうして？」

理由を聞こうとしたが、聞くより前に勝手に物質憑依が解け、体の自由がきかなくなり、その場で片膝をついていた。

(な、いきなり物質憑依が解けた、しかも何だこの体のダルさは)

ごめん説明するの忘れてたけど、物質憑依は魔力が常に供給状態に置かれてないとダメなんだ、ちなみに体のダルさは魔力の使いすぎだけだね

「あのなー、そういうことの説明は忘れないでくれよ」

体にダルさは残ってはいたが、自分に物質憑依ができることは何よりの収穫だったかもしれない。

ゆっくりと立ち上がった秀はシルフィーを腕輪に戻してから、レーガルへと戻って行った。

レーガルに戻るとすでに夜遅くで部屋の明かりは消えていた。

「結局こんな時間かよ」

時間帯に嘆きつつも宿屋の扉を開けて宿屋に入ると、ラニアと何故か西脇がいた。

「あ、お帰りなさい秀さん」

「浅村君、こんな時間までどこで何してたんですか？」

（お前は俺の母親かよ）

「ああ外の空気が吸いたくなってからさ」

「ホントですか、最近危なっかしことばっかしますし、先程おかしかったですし」

「おいおい、おかしかったって何だよ、いたって普通だよ」

「今日の晩ご飯の後テラスで誰もいないに喋ってましたよね」

(んな、居たのかよ)

どうにかして誤魔化そうとしたが、改めて考えれば結局は話すつもりだったのでその場でシルフィーを出して西脇にすべてを話した。

「ええええええ」

「だから俺がテラスで話したのはシルフィーってわけ」

これからよろしくね

どンドン話が進んでいく為に西脇はただおどおどしていた。

「疑いは晴れたか、晴れたなら俺もつしんどいから部屋に戻るけど」

「あ、じゃあおやすみなさい」

「おやすみなさい」



三十五話 平常と異常（前書き）

最近タイトルに困り果てています（；´；´）

三十五話 平常と異常

今日の目覚めは最悪で目覚めた時に昨日の物質憑依の疲れだろうと感じていた。

「おお、朝からダレてんな秀」

「悪いけど、本当に疲れてるから話しかけないでくれ少しでもエネルギー消費を抑えたい」

「浅うちそれはさすがに疲れすぎでしょ」

疲れていたこともあってか朝の食事の準備の時に誰とも会話をしなかった。

今の自分には残念なことに今日の当番は西脇と買い出しに当たっていた。

「あと何を買えばいいんだっけ？」

「えーと、野菜と果物類ですね」

「マジかよ、今日の買い出しの種類多くない」

「そうかな浅村君が疲れすぎてるだけだと思っけど」

「しょうがないだろ、昨日の憑依の疲れが取れてないんだから」

「精霊契約ってそんなに疲れるんですね」

心配そうな顔している西脇を見て、申し訳なく思った秀は自分はまだ大丈夫だと思わせるために

「そっだ西脇精霊契約の力を見せてやるよ」

「いいですよ、浅村君疲れてますし」

顔を横にふって

持っていた荷物を置いてシルフィーと憑依した。

「買ってくる物のリストを貸してくれ、5分で全部買って来る」

「えー、5分じゃ絶対に無理だよ」

秀の言ってることが初めは信じていなかった。

5分後

「な、言った通り全部買ってきたろ」

「はー、ほんとすごいんですね精霊契約って」

宣言通りの5分で帰ってきたことで西脇は精霊契約のすごさを改めて知った。

宿屋の前に帰ると宿屋の裏からシリルの声がしたため、西脇と一緒に裏回るとシリルが連に特訓をつけていた。

連はマナマ草原の時のように籠手を装着して、シリルと戦っていた。

「へー、なかなか上達してるな」

「本当ですね、シリルさんの攻撃をちゃんと防いでますよ」

シリルの畳み掛けてくる攻撃も一つ一つ落ち着き、しっかりと籠手でガードしている。

それを見ていた秀は軽く微笑んで、横にいた西脇の肩を軽く叩いた。

「ちゃんとアイツのこと見てやれよ」

それだけ言ってその場を後にした。

宿屋に戻ると珍しく受付にラニアが居らず、部屋に戻る途中、テラスにラニアが居た。

話そうと近づくとラニアはまったく秀に気付かず、ラニアはゆっくりと柵の方に歩いていった。

「おいラニア、そっちに行ったら危ないよ」

秀の忠告も聞かず、ラニアはゆっくりと柵に行き着いたが、ラニアは歩みを止めなかった。

柵に手を掛けて、身を乗り出そうとしたラニアを急いで止める。

「ラニア、危ない!!」

ラニアの腰に手を回して、柵から引き離す。

「何やってんだラニア危ないだろ！」

両肩に手を置いて怒鳴ったが、ラニアの目は焦点が合ってなく、つぶつと眩いていた。

「行かなくちゃ・・・呼ばれてるから行かなくちゃ・・・」

「ラニア！！！」

外にいる人達が全員秀の方向を向くほどの声を出していた。

「・・・っ、あれ？秀さん、あれどうして私はこのテラスに」

「こつちが聞きたいよテラスに居ると思って近づいたら柵を乗り越えようとするし、ぶつぶつ呟いてるわ」

「そんな・・・私そんなことをしてたんですか」

「最近働き過ぎだからじゃないか、最近受付でよくアクビしてるな」

「そうですね・・・少し休んでみますね・・・」

自分が意味の分からない行動したため、ラニア自身がショックを受けていたようで、おぼつかない足取りで宿屋に戻っていった。



三十六話 消えない過去

その日の夜、一人テラスでラニアの行動について考えていた。

「ラニアは何であんな行動をしたんだろう？」

「ラニアがどうかしたのか？」

「ぬおっ、ラウル」

久しぶりに会ったラウルに少しびっくりしてしまった。

それと同時に今日のラニアの不思議な行動のことを話すか迷ったが、ラニアの親が知っておくべきかと思った秀は今日のラニアのことを話した。

「そうか・・・またか」

「えっ、またってことは前にもあったんですか？」

「ああ希にあるんだよ、昔のことがフラッシュバックしちゃってな」

「昔のことですか？」

「もうかれこれ15年ほど前のことだな」

柵を背にして物思いにふけるようにラウルは15年前のことを話し始めた。

15年前

「じゃあ俺は行ってくるからママと一緒にいい子にしてください」

「うん、行ってらっしゃいパパ」

「じゃあ行ってくるから後はよろしくなサラ」

サラは俺の妻で赤髪のロングヘヤーで、ラニアの髪もサラ譲りだろう。

「ええ、行ってらっしゃいあなた」

いつものような朝、いつものような見送り、幸せで平和な日々が壊れてしまつとは俺はまだ知るよしもなかった。

俺の仕事はレーガルの兵隊で、主にカースを倒す仕事をしているが、精霊契約をしていない俺達兵隊がカーズと戦う場合は複数で戦わなければいけない。

《緊急指令、緊急指令！レーガル近くの森にカーズが複数出現しました、直ちに出撃してください》

「出撃命令だ3分後に城門に集合だ！」

一人の声でそこいらにいる兵隊は準備をする者、すでに準備を終えて城門に行くもので城内は忙しかった。

3分後に城門にきっちり整列した中にラウルも入っていた。

「これよりカーズの討伐に向かう、カーズと戦う時は俺以外の者は絶対一人で戦うな」

整列している兵隊に説明しているのは隊長のグレンは精霊契約をしている。

多くの部下からも慕われている、何を隠そう俺自身もグレン隊長を尊敬している。

「隊員進め！悪の根源であるカーズを殲滅するぞ！」

グレンの掛け声で士気を高めた隊員達はカーズが出現した森へと移動して行った。

森に着くとそれぞれ複数に分かれて散っていく

報告通り複数カーズが出現していて、兵隊達、無論ラウルもそれぞれ戦闘体制にはいる。

ラウア達の散った先にもカーズが出現した。

数的には3対1で有利な状態で勝負をすることができる。

槍を構えたラニアと長めの長剣を構える二人、ギリギリと距離をちじめて3人で一斉にカーズに襲い掛かった。

レーガルの兵隊が森のカーズ退治に出払っている頃、レーガルに不穏な影が迫っていた。

レーガル城の中の一際大きな部屋、中心に大きなテーブルが置かれていて、その上にはレーダーのような物があり、レーダー上には複数の黒い点がある。

「カーズ退治は着々すすんでいますね」

「そうだな、このままいけば後10分程で終わるだろ」

無精髭をはやした大柄の男ジード・シュバルツ、このカーズ退治の指揮官である。

黒い点が消えていくなかで青色のレーダーが赤く点滅し始め、部屋

の空気が一気に凍りついた。

「これは・・・まずい、カーズ退治に向かわしているグレンと何人かの兵隊を呼び戻せ！」

部屋にいるもう一人が部屋を急いで飛びだして行った。

森にカーズの数に確実に数を減らしていて、もう少しで終わるといふ時に、空に赤い信号弾が上がった。

「っ!!!!」

「信号弾?こんな時にかよ」

「残りのカースは君達に任せる、ラウルとそこにいる四人は俺に付いてこい」

「了解！」

グレンとラウルを含む五人は森から出てレーガルに向かって行った。

「くそつ、何故いきなり人型のカースが出現したんだしかも二体も」

レーダーに表示された赤い点は人型のカースの印でやたらめったには現れないが、その赤い点二点出現していて、出現した場所はレーガルの市場付近だった。

レーガルの状態は混乱状態に陥っていた。

人型のカースが最初にターゲットにするのは負の根源を消そうとするが、最終的には無差別で襲うことになるため、人々は我先にと力



「スから離れて行く」

その頃のレーガルはまだシエルターが完成されてなく、人々はカー  
スから離れるしか出来なかった。

「ひつく・・・お母さんどこにいるの、うわーん」

逃げ惑う人々の中で親と離ればなれになってしまった子供が一人市  
場で泣きじゃくっていた。

ゆっくりとその子供に近づくカーズ、負の根源を消したのどうかは  
知らないが、そのカーズはその子供をターゲットにしている。

手には滴り落ちるほどついている血、道しるべのように血の雫を落  
としながらゆっくり子供に近づいて、その手を振り下ろしたがその  
攻撃は当たらず空振りに終わった

「大丈夫？もう大丈夫よ私がいるからね」

子供をカーズからの攻撃を避けさせたのはサラだった。

三十七話 嫌な日

カースの攻撃はかわしたが、カースは攻撃の手を休めることなくすでに拳を握り腕を振り上げていた。

子供を抱え込んでいるせいか、少し動きが鈍いサラは横に飛んてかわそうとしたが先をよんでいたカースにわき腹にパンチをもらってしまつ。

「くう………」

カースのパンチを受けたサラは吹っ飛ばされて、市場の商品棚にぶつけられたのが更にダメージをデカくした。

しかし吹っ飛ばされたのがこうをせいしたのかカースと距離がとることができたサラは抱き抱えていた少年に逃げるように促した。

少年はその場から逃げることが出来たが、カースはすでにターゲットをサラに切り替えていた。

「くう………」

痛みのせいで体が思うように動かなかった。

目の前にはすでにカースが腕を振り上げていた。

“やられる”と思って目を瞑ろうとしたが、聞き覚えのある声があった。

「てめえ！サラから離れやがれ」

カースの頭の横から跳び蹴りをかまして飛ばし、サラからカースを離す。

すぐにサラの元に駆け寄ると、サラはラウルに抱きついた。

「大丈夫かサラ、もう安心だからな」

後ろではゆっくりとカースが立ち上がりサラの方向に向かって走り出したがその前にグレンが立ちはだかる。

「よくやったなラウル、後は俺に任せておけ、お前はサラさんを安全な場所へ連れていけ」

サラをゆっくりと立たせたラウルはサラを安全な場所へと連れて行った。

「ずいぶん派手にやってくれたな、ちゃんと落とし前はつけてもらうぜ……行くぞルー！」

グレンが呼んだ精霊はラウルの精霊のルーだった。

ルーと物質憑依をして炎神槍・爆炎を出した。

「我が炎の塵になれ！」

グレンは槍の先を向けてカースの方に走り出した。

「よし、ここまで来れば大丈夫だな」

サラを安全な場所へと連れて行ったラウルはサラを下ろしてグレンの所へ戻ろうとしたが、もと来た道にはカースがいた。カースを見た瞬間“ヤバイ”と感じたラウルはサラを抱き抱えてまた走り出した。

しかし悪いことは続くものとはよく言ったもの、ラウルの逃げた方向には二体しかレーダーに反応しなかったカースが三体も居たのだ。

「マジかよ……」

動植物のカーブには対抗できるが人型のカーブには対抗できないとは知っているいるが、ラウルは槍を構えて一体のカーブの方に戦いを挑みに行った。

大切な人を守るために……………

「ぐう……………」

瀕死の状態なのはグレンと対峙していたカーブ

「案外呆気なかったな」

トドメの一撃でカーズに槍を突き刺し発火させて、カーズを滅した。

「はぁー何だか嫌な予感がしてしょうがないな……」

自分の勘はよく当たる方だが今回ばかりは当たって欲しくなかったが、グレンの勘は当たってしまった。

「隊長！西の広場に新たなカーズが現れました」

「了解だ連絡感謝する」

(まったく、今日は本当に嫌な日だな)



「くっ、くそ……」

カースと戦っていたラウルだが、こちらは一転カースが圧倒していた。

戦っている内にすでに反対側にいたカースが集まり四対一で状況は最悪だった。

(くっ、まさかこんなにも力が違うとはな)

「おいおいこんなにカースが現れるなんておかしいだろ」

「……グ、グレン隊長」

「この場面、本日二度目だなー本当にやな日だな今日は」

「我が炎の塵となれ！」

一斉に襲いかかるカーズを槍で振り払い、グレンは手のひらに複数の火の玉を出した。

「紅蓮玉！」

グレンが放った複数の火の玉はカーズ達のに直撃しカーズ達のいた場所は爆発に包まれる。

「や、やったのか？」

「……いや、まだだ」

爆発の煙の中から三体のカー스가ピンピンしていた。

「まったく今日は本当に仕事が多いな」

「グレン隊長！来ますよ」

三体のカースの内に一体は襲いかかるがグレンに簡単にぶっ飛ばす。

ぶっ飛ばしたカースにすぐさま火の玉を飛ばしカースに直撃した。

「残るは二体だ」

槍を残りのカースに向けて一気に圧力をかける。

残りのカース二体の中心に槍を投げて突き刺し、秀達が森で見た技を出した。

「業火旋風槍！」

火柱を立てて燃え上がり、カーズは塵となって消えた。

「ちっ、一体逃したか」

ゆっくりと地面に落ちている槍を取りに行くときだった。

自分の腹から腕が出ていて、その出どころを見ようと振り返ると、そこには吹き飛ばして紅蓮玉をぶつけたカーズが居た。

「まったく……本当に今日は……ついて……ない……ぜ……」

「グレン隊長おお!!」

ゆっくりと崩れ落ちる前にカースに紅蓮玉を複雑ぶつけて、今度こそトドメをさした。

すぐさまグレンのもとに駆け寄った。グレンの状態を確かめたが、グレンの傷は深すぎた。

(これは……ヤバイ)

「おい！何をやってる後ろだ!!」

逃したか一体のカースがラウルの後ろに回っていた。

「しまっ……」

鋭く尖った手でラウルを突き刺そうとしたが、それは届かなかった。

なぜなら一人の女性がそれを体をはって止めたからだった。

「な、何で……」

「サッあぁあぁ……！」



三十八話 犠牲（前書き）

最近投稿しなかったから、ストックがめっちゃくちやたまりましたf  
^ | ^ ;



三十八話 犠牲

「サラ、何でこんなことをしたんだ」

「何でだろうね・・・あなたが危ないって思ったら体が勝手に動いちゃって」

サラが受けたキズもグレン同様酷いものだった。

「待ってる、こんな奴すぐに倒して病院に連れて行ってやるから」

「ありがとう・・・でもちょっと疲れちゃった・・・少し寝かしてもらうねあなた・・・」

「サラ！・・・サラあああああ！！！！」

立ち上がったラウルは持つてる槍でカースを突き飛ばした。

「てめえだけは・・・てめえだけは許さねえ!!」

怒れる獅子のようにカースに突進して行ったが、人型のカースの力の差大きく、腕を捕まれ投げ飛ばされてしまった。

「くそっ、俺ごときじゃ何も出来ないのかよ!!」

「ら、ラウルちよつといいか・・・」

「グレン隊長、待っててください、すぐに倒してサラと一緒に病院に行きましよう」

平気な顔をするが、カースとの力の差は歴然で、グレンもそれを分かっっていて、驚ききのことを口にした。

「ラウル……俺のルーと精霊契約しろ……」

「ど、どついう意味ですか？」

「この危機を乗りきるにはもうこれしかない」

「でも精霊契約はちゃんとした手順をふまなきゃいけない」

「それに関しては大丈夫だ……っ、ラウル退け！！」

瀕死の状態のグレンはラウルの後ろにいたカースを紅蓮玉でぶつ飛ばしたが、直撃を受けても、カースには効いてなかった。

「分かったか、今の俺にはカースを倒すことが出来ないんだよ……」

だからお前はルーを契約してカーズを倒せ！」

「……………分かりました、俺やります」

「よく言った……………行くぞラウル！」

震える手をラウルの肩に置き、グレンは炎神槍からルーを出して、ぶつぶつと何かを唱えた。

そしてグレンは唱え終わると、ゆっくりとその場で倒れた。

「……………ありがとうございました……………グレン隊長」

その時は何で正式な手段を踏んでいないのに、自分が精霊契約をし

た状態になっていたかは分からなかった。

しかしあの時そんなこと考えてはいなかった、ただ槍を持ち、目の前にいるカーズを倒すことだけを考えていたからだ。

「俺の炎の・・・塵になれ」

その戦いに有する時間はそんなにいらなかった、体が自然と動き、カーズを圧倒している自分がいて、気付けば戦いが終わっていた。

三日後

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目の前にある二つの墓前、一つには尊敬していた隊長の名前が刻まれていて、もう一つには自分の最愛の人の名前が刻まれていた。

「……ママ……ママああ」

「……悪かったラニア、もう帰ろうラニア」

あの事件から3日が過ぎ、レーガルの街も正常を取り戻していた。

街の人々も事件から立ち直り始めていて、子供たちには笑顔も戻っていた。

しかしラウルとラニアの時は止まったままでいた。

尊敬していた人と最愛の人を同時に失ってなかなか立ち直れないでいた。

立ち直れないのはラウルだけではなく、ラニアも立ち直れないでいたが、彼女の場合はラウルよりもひどく、その日からラニアはあまり笑わなくなった。

「とまあ、こんな感じのことが昔あってな、時々ラニアは死んだサ  
ラのことを思い出して、意味不明な行動に出るんだ」

ラウルの過去を聞いた秀は黙るしかなかった。

「……………」

「何黙ってるんだよ、お前らしくねえな」

「……………今の話を聞かされたら、そら黙りますって、ていうかよ  
く過去のことを話せますね」

「過去を振り返ってもどうしようもねえだろ」

「過去のことを振り返らないことに関しては僕も賛成ですけど……  
それはなかなか出来ないんですけどね」

過去を振りきることがどれだけ難しいかを秀は知っていた、知って

いたからこそラニアの気持ちが今は少しだけ分かった気がした。

「だから俺はラニアが過去に打ち勝つまで、ラニアを全てから守ってやるって決めたんだ」

「ラウル……………」

「さて、暗い話もここまでで、話題を変えるか」

「話題を？」

「お前が物質憑依出来るようになった話とか」

「っ!!」

何故ラウルが知っているのかと思って聞いてみると、西脇からラニアへいきそしてラウルにいきわたったということらしい



「できるけど、物質憑依できる時間が短いんだ、ていうかあの時間ではできるとはとうてい言えねえ」

「時間なんかは関係ない、とりあえずやってみるよ」

「俺に疲労困憊になれというのですか・・・」

いちよ抵抗の意思はみせるものの、ラウルのドスの効いたまなざしに、秀は仕方なく物質憑依をする準備に入った。

ゆっくり息をはく作業を何度も繰り返し、自分の集中力を高めていく。

「ふー、いくぞシルフィー」

<あいあいあさー>

物質憑依は初めてやった時のように木刀は刀に変化していた。

「それがお前の物質憑依か」

「まあ、この状態が維持できればいいんですけどね」

「まあ今耐えられるかぎり、その状態を維持してみる」

「悪魔か!！」

「何言ってるんだ、せつかく人が鍛えてやろうと思ったのに」

「えっ……」

「おい、気抜くなよ」

「……はい!」

今日からまた特訓が始まった日だった。



三十九話 平凡

「ああー体が動かない、てか動かしたくない」

「動かないわけじゃないんだったら動かしてよ浅っち」

昨夜から始まったラウルの特訓、その内容が物質憑依がおもに占めるため、次の日の疲労が今までとはかなり違っていた。

「はあー、今日はもうダメだ・・・」

「秀、とりあえず生きろ」

「酷え！」

（なんか、こんな会話が最近多いな・・・）

## レーガル城

「ほれ、ガードが下がってるぞ」

「くっ……」

秀が今いるのはレーガル城内の訓練場で、一通りの仕事が終わって  
からウルに呼ばれていたことに気がつき今にいたる。

「ほらほらどうした、物質憑依は形だけかよっ」

刃でラウルの攻撃を受けるが、壁に飛ばされてしまう。

さらに壁にぶつかると同時に物質憑依が解けてしまう。

「っ痛たたたた」

「おいおい、そんなもんかよ」

「物質憑依するだけで、かなり疲れるんだよ、その上でラウルと勝負なんてキツいって」

「文句を言うな、もし敵と戦ってるなら死んでるぞお前、ほら次行くぞ」

「ふー、しゃあ来い」

よっこらせと言わんばかりな立ち上がり、木刀を刀に変える。

(普通に物質憑依が出来るようになったか・・・相変わらず物質憑依の時間は短いかな)

「よし、ラスト一本だ気合い入れろよ」

ラウルもルーに物質憑依させて、秀の特訓が始まった。

秀が特訓をしているころ、宿屋では何やら蒼士が一人で深く溜め息を吐いていた。

蒼士の視線の先には洗濯物を干す石月がいた。

そんな蒼士に気が付き、声を掛けたのが、新藤だった。

「どうしたの蒼士君溜め息何か吐いちゃって」

「ん？ああ新藤か、まあいろいろとな・・・」

「ああ分かった、石月さんのことでしょ」

「っ！...！」

両肩をビクッとさせたところを見ると、新藤の言ったことは当たり前と見て間違いないだろう。

「うわー、分かりやす」

「う、うるさいな誰だって恋の悩み事はあるだろ」

「じゃあそんな蒼土君にいくつか質問します」

Q 石月さんと一緒に仕事をしてる時に積極的に話しかたりした

A、まあいちよ・・・

Q 元の世界では一緒に出かけたりしたのは

A、二人つきりではないけど

Q 何か石月さんから相談事とか持ちかけられたことは

A、まあ何回かは

Q それはプライベートのこと

A、・・・陸上のこと



「うーん、微妙だな」

「そんなこと言わずに何かアドバイスのなこと無いのかよ」

「そんなこと自分で何とかしてみよって気は無いの？」

「無いから聞いてんの」

少し考えた新道は蒼土に向かって言ったアドバイスは

「うーん、連君の西脇さんに対するアプローチを見習ったら」

「あれをですか・・・」

「あれをそっくりそのまましたら石月さんに引かれるよ」

「わかった参考程度にさしてもらおうわ」

片手を振り蒼土はその場を後にした。

その日の夜

「あの一浅村君」

「ん、どうした石月？」

「さっきからなんだか新山君から結構な頻度で話しかけられるんだけど」

「いやいや、俺にどうしろと」

「いや別にどうにかしてほしいわけじゃないんですけど」

「じゃあ別にいいじゃないか」

（いったい新山君はどうしたんでしょうか？）

どつちやら蒼士の恋はまだ叶いそうにないようだった……

## 四十話 成果

レーガル城の訓練場では今日も激しく何かがぶつかり合う音

「やるようにはなったじゃねえか、物質憑依の時間も最初とは比べものにならないくらい長くなったしな」

「おかげさまでね、でも甘く見てると足元すくわれるぜ」

そう言う秀は手のひらを平らにした。

するとそこに風が集まるように吹き込んできた。

「風刃！」

手のひらの上にある三日月のような形のような物をラウルに向かって飛ばした。

しかしそれを簡単にかわすラウルだが、秀の狙いはかわすことでできた隙で、そのできた隙の間に2メートル程あったラウルとの距離を一気に詰め刀を振るが、それもラウルは読んでいたようで炎神槍で防がれてしまう。

「ちっ」

「風刃でできた隙を風の力で一気に詰める戦術か・・・悪くないな」  
ラウルの特訓が始まって早くも1週間が経とうとして、その特訓の成果としていろいろなものを修得できた。

ルーが操るのが火なら、シルフィーが操るのが風だということや、その応用編で素早く動けることなどいろいろなことをこの特訓で学んでいる。

「簡単に防いでるくせによく言っぜ・・・だけど新技はまだ続くぜ」  
刀の切っ先を前に向けると、刀を中心として渦巻くように風が吹いていた。

(何をする気だ・・・)

一息を深く吐くと秀はラウルに向かって走って、少し手前で止まると風を纏った刀をアッパースイングのように振り切った。

「旋風刃！」

振り切った剣先からミニマムな竜巻がラウルを襲う。

(ヤバい！)

必死に横に飛んでかわすが体勢は完全に崩していた。

(どうせ、距離を詰めてるんだ……な！)

ラウルが見た先には無数の風刃が飛んできていた。

(何度も同じ手は引つかかんねえだろ)

「まだ甘いぜ」

体勢を崩されたラウルだが、その場でラウルは自分を中心にして球

体の炎を出して全ての風刃を消した。

「くっそー、あれが一撃も入らないのかよ」

一撃も入らなかったことがショックでその場にへたりこ込み物質憑依を解除した。

「まあ攻撃自体はかなり良かったぞ、まあ俺がすごすぎただけだ」

その言葉にかなりイラつきを覚えたが、今の体力では怒る気になれなかった。

《緊急指令、緊急指令マナマ草原にカーズが出現しました直ちに向かってください》

「さてとお仕事の時間だな、どうだ付いてくるか？」

「えーと、今何で俺がへたり込んでいるか分かりますか」

「じゃあこれを飲め」

へたり込んでいる秀にラウルが出したのは、少し青みがある液体だった。

「なんだろう、全然飲みたく無いんだけど」

「いいから飲め！」

秀は強引に液体を飲ませられたが、その液体を飲んだ秀は体の変化に気が付いた。

「あれ、体に魔力が戻ってくる」

「魔力が多少回復する薬だ、その程度回復したらカーズごときいけるだろ」



「いやいや、何故俺だ！他に兵隊がいるだろ」

「今ここにいるのは俺とお前だけだけど」

「う、まあ、そうだけどさ・・・」

「あーあ、あの薬結構高いんだけどなー」

ラウルのその一言で秀がカーズ討伐に行くことが決定した。

「いたいた、一、二・・・五匹で、熊型のカーズか」

「うわー、なんかメツチャ強そうだけど」

「図体だけだ行くぞ、俺は左側にいる三匹の方に行ってやるから、お前は右側の二匹を頼むな」

「了解、シルフィー物質憑依だ」

木刀を刀に変えたところでラウルはいきなり秀に質問をした。

「ふと思ったんだけど、お前のその武器って名前ないのか」

「確かに、まあ刀、刀ってずっと呼ぶわけにはいかないしな」

「・・・・・・決めた!」

「早え!」

普通は何かの命名するときには、多少の時間はかかって当たり前だが、秀の命名の時間は5秒ほどだっただろう。

「今からこの刀の名前は……天つ風だ、どうだシルフィー」

（うん、いい名前だと思っよ）

そう言った秀は右側にいる熊型のカースに向かって走り出した。

## 四十一話 天つ風

熊型のカーズの前に瞬時に移動した秀は天つ風で片方のカーズの腹部の横を切り裂いた。

「確かに図体だけだな、スピードに関しちゃ狼型より遅いな」

今の秀のスピードにカーズは全くついていけてなかった。

「ぐおおおおー!!」

二匹が同時に秀に襲いかかるが、やはり今の秀は簡単にかわし、カーズの後ろを取っていた。

「終いだ、風刃!!」

飛ばした風刃が見事にカーズを真っ二つに切った。  
真っ二つに切られたカーズは下半身と上半身が地面に落ちたてから霧になるように消えていった。

「ふー、ラウルそっちは」

苦戦しているとは塵一つとして思っていないが、どうなったかをラウルに聞きながらラウルの方向を見ると、ラウルはカーズを串刺しにして燃やしていた。

「ん、何だ？」

「いや、なにも・・・無いです」

そこから何匹かのカーズが現れたが、ラウルと秀が全て退治した。

退治してからレーガルに戻る頃にはすでに日が暮れていて、ラウルは城に戻り秀は宿屋に戻ろうとしていた。

「そこのお兄ちゃん、良い商品入ってるけど見ていかない？」

話しかけられたのは出店の店員で、いろいろな道具を売っていた。

その売っている商品の中で秀の目を引いたのはレーガル城でラウルにもらった薬だったが、問題はその値段

「ん、兄ちゃんその薬が気になるのかい」

「ん、まあこれってこんなに安いのか？」

出店で売っていた薬の値段はもとの世界での自動販売機の5000m  
m1ペットボルの値段だった。

「……あんのクソ隊長が!!」

結局とぼとぼ宿屋に帰るしかなかった。

「ただいまあ」

「お帰りなさい、何だか機嫌が悪そうですね秀さん」

「そうかな、まあ機嫌が悪いのは当たり前だよ」

普通にただいまと言ったはずなのに、その一言で人の機嫌が分かるなんて何気に凄いなと思ってしまう。

「ところで秀さん、明日は特訓はありますか？」

「ん、ああそっぴや明日から3日間休みだったような、でも何でなんだい？」

別れ際にラウルは今日のカーズの討伐が上手くいったため、明日から3日間を休みにすると言ってきたことを思い出したのだった。

「よければ、明日の1日を私に付いてきてくれませんか？」

「ラニアと俺二人だけってこと」

「あ、いや別に二人だけってことじゃないんですよ、べつに他の方々を呼んでいただいても構いませんが」

何故か二人だけという言葉に過剰に反応するラニア

「別に俺は構わないよ、明日は当番にも当たってないから、朝の準備さえ終わったら、明日1日はラニアにとことん付き合わせてもらうよ」

それを聞いたラニアはいつもの明るい笑顔で、はいつと答えた。



四十二話 過去の取り戻しに…（前書き）

更新がめちゃくちゃ遅れましたf（^| ^）；

次の四十三話を書いていると随分長くなりました。

だから次の四十三話は普段より長いです。

四十二話 過去の取り戻しに…

「はあーいつまで経っても、この朝の早さには馴れないな」

「ほんとそれだわ、朝早いのは秀と俺にとってはテストの次に苦手だわ」

朝早くから文句を呟く赤点コンビ

「こらこらテストの次につてどんだけ何だよ、てか赤点回避だったら少し頑張れば大丈夫だろ」

「あのな、お前達四人は俺達がどれだけ高校を抜け殻のように過してきたか分からないだろ」

「少なくとも、抜け殻のようには過ごす方法は知らないな」

六人で駄弁りながらの今日、連と文句をぶつぶつと言いつつ今日、蒼土に注意される今日、そんな何気ない今日があんな1日になるなんて知らなかった。

「秀さん、昨日言いましたよね、二人だけの方が好ましいって」

「うーん、何か付いていくって聞かなくてさ」

そう言う秀の横にいるのは西脇と連であった。

「まあ別に私はいいですけど」

「ていうかラニア、一体どこに行くつもり何だ」

その質問すると、少し口ごもりながらラニアは答えた。

「……………過去を取り戻しに行くんです」

レーガルから歩くこと一時間、着いた場所はただの山の頂上

「ここで過去を取り戻すっていうのか」

こんな普通の山の頂上で過去取り戻すだのなんだのと言われても何が何だか意味が分からなかった。

「ここは私が小さい頃に、よく母と遊びに来た場所なんです」

「・・・・・・・・」

「母が恋しくなったときいつもここに来るんですが、ここに来る度に意識が飛んじゃうんです」

「それは分かったけど、なんでそれが過去取り戻すのとう繋がるんだ、それに俺達が来た意味も分からないし」

「……………それは」

今のラニアの口ごもり方は宿屋を出る前とは違った口ごもり方だった、触れて欲しくないという気持ちが一心に出た感じだった。

「話したくなかったら話さなくていいさ、話せるようになったら話せばいいからさ」

「過去を取り戻す意味はまだ教えられないんですが、秀さん達に付いて来てもらった意味は分かると思いますよ」

分かると言われた秀はただでさえ少ない脳みそをフル回転させて、やっと思い付いたことがあった。

「なるほど、暴走状態に入ったらラニアを止めればいいんだな」

「その通りです、どうかよろしくお願いします」

どこことなく不安げなラニアを見ると、秀はラニアの前まで近づいて行った。

そして、ラニアを優しく抱きしめた。

「っ／＼／」

「大丈夫、君のどこに行こうと、俺が絶対呼び戻すから」

「○ ？ × (西脇)」

「うおーやりおったなー」

「………あ、悪いごめん」

すぐにラニアを離し、ラニアから離れた。

秀が離れた頃に、連が咳払いをして秀とラニアは少し顔を赤らめお互い距離をとった。

「さてと、じゃあラニア頼むぜ」

「はい、分かりました」

そう言っただニアはゆっくりと目を閉じて黙りに入った。

「さてと、これが言と出るか凶と出るか・・・」

それから待つてみることに10分、ニアにはなんの変化も見られない。

「うーん、何も起こらないな・・・ちょっと散歩に行ってくるわ、茜ちゃんもどう？」

「・・・そうですね、私も付いていきます」

二人は森の中に入って、秀の視界から消えていった。

その場で、じっとラニアを見て待つ秀

「頑張れよラニア、過去ってのはえげついもんだぜ」



四十二話 過去の取り戻しに…（後書き）

次の四十三話の更新は明日の六時半頃にする予定です（＾－＾）／

四十三話 過去との決着（前書き）

読み返してみましたが、  
やはりクオリティが低いなあ f (^| ^) ;

四十三話 過去との決着

「・・・ア、起・て・・・ニア・・・起きてラニア」

「・・・お母さん？」

「また会えて嬉しいわラニア」

「私も嬉しいよ」

ラニアが見てる姿は十五年前に命を落とした母親だった。

「私に会いに来たってことは今日も過去のことであつたのかしら」

母親の言葉に頷くラニア

「私の小さい頃の過去を思い出したいんです」

「・・・」

実はラニアには昔の記憶が思い出せないでいた。

ラニアがここに来た理由は自分の中に欠けている過去を取り戻す為だった。

ラウルには余計な心配を掛けたくないラニアは自分には記憶があると言っていた。

「止めておきなさい、あんな過去はないほうがマシよ」

「でも、過去があつてこそその人間だと思ふの」

「私はずっと見ていたわ、私が死んでからなかなかあなたは外に出ようとしなかった、さらには今日まで心の底から笑ったことがない」

「・・・・・・・・」

「そんな状態で過去を思い出すなんて無茶よ」

「たとえそれでも!」

サラの言葉を遮るようにラニアが叫んだ、いつもの冷静なラニアとは違って

「たとえ私にとって、どんなに辛い過去でも背を向けちゃいけない・  
・そう言われたんだ」

《過去に背を向けちゃいけない》

それは秀に言われたこと言葉だった。

時間は昨夜に遡る

テラス

体は疲れているが、なぜかなかなか寝つけない秀はベンチに腰掛け  
夜空を見ていた。

「あつ、秀さん」

「おつ、ラニア」

テラスに来たラニアは、秀に何も聞くことなく秀の横に腰掛けた。

「どうしたんですか、寝つけないんですか？」

「ラニアこそ寝つけないんじゃないのか」

「私は・・・ちよつと考え事を」

どことなく歯切れの悪い言い方のラニアだったが、秀はあまり深く聞くことなかった。

「悩むなら好きだけ悩めばいいさ、悩んで悩んで決めたらいいと思っ」

「だから考え事で、悩んでないですよ」

「そうかね、俺にとっては一緒に思えるけどね」

「あはは、そうなんですね……ところで秀さん質問していいですか？」

「藪から棒だな……」

「秀さん、もしも自分に辛い過去があったとして、それを背負わなくてもいいって言われたらどうしますか？」

「……」

真剣な顔で聞いてきたラニアに秀も真剣に答えた。

「過去は背負うものじゃないと思う」

「……じゃあ何ですか」

慎重に尋ねるラニアにゆっくり答える秀

「過去は向き合つものなんだと思う」

「向き合つもの……」

「過去には楽しかったことや辛かったことの二つで過去だと思うんだ」

「それはつまり」



「つまり、たとえどんなに辛い過去があったとしても、その先にはきっと楽しいことがあると思うんだ」

「楽しいこと……」

「辛い過去を背負わないことはこれからの楽しいことがあったとしても、その人はこれから心の底から笑えないと思う」

「っ!?!」

秀の言ったことにラニアは驚いていた。

今の自分に当てはまることがあるからだった。

「だから、たとえどんな辛い過去だろうとしても俺だったら立ち向かうぜ……その先にある何かを信じてな」

「ありがとうございます秀さん、何だか元気がでてきました」

「でもその元気は明日にとっておきなよ」

二人はそこで話を打ちきり、それぞれ戻る所に戻っていった。

(背負うものじゃないか・・・)

「でもラニア、あなたは何でここに来たら過去を取り戻せると思うの」

「それは私の過去を知っているのはお母さんだから」

「それなら私じゃなくて、お父さんもいっしょよ」

「でもお父さんは教えてくれないの」

「それほど今のあなたにとって過去を思い出すにはしんどいって」とよ、それでも過去を思い出したい?」

その問いにラニアは力強くはいつと答えた。

「ラニア目を閉じて、じっとしててね」

サラの言葉に従い、目を閉じて心を落ち着かせる。

それを確認したサラは、精霊が憑依するように、ラニアと重なった。

「……………さてと行くわよ」

連 Side

「ラニアが過去を思い出せるといいよな」

「・・・・・・・・・・」

「茜ちゃん？」

名前を呼んでも、反応しないため、連は西脇の肩を掴み再び名前を呼んだ。

「・・・・・・・・ふえ、ああ連さんどうかしましたか？」

「どうしたもこうしたもないよ茜ちゃん、さっきからずっとその調子じゃないか」

連の言う通り先ほどから西脇は話かけられても、反応がない状態が続いていた。

「すみません、ちょっと考え事してたんで」

「考え事……秀がラニアを抱きしめたことか」

「べ、べべべ別に、き、気にしてなんかないよ」

「そうか、ならいいんだけどさ」

「それより連さん、あれってもしかして洞窟ですかね」

西脇が指を指した方向を見ると、確かに洞窟らしきような入口があった。

「どうしますか連さん……ってあれ連さん？」

洞窟に入るかどうかを連に聞くが、連はすでに洞窟の入口にいた。

「おーい茜ちゃん早く行こつぜ」

「あ、はい今行きます」

秀 Side

「おいラニア、大丈夫か！」

秀がラニアを必死に呼んでいる理由、それはラニアがいきなり倒れたからだ。

「ラニア！ラニア！」

「……………」

「よかったー心配したよ」

「……………」

上体を起こしたラニアだがその視線は秀をまっすぐ見ていた。

「ふーん、この子がね」

「・・・ラニア？」

秀がそう言い終わった時には秀は後ろの木に激突していた。

状況が全く理解できず、ただわかるのは腹部走る激痛だった。

「はあ、はあ、はあ」

「あら、なかなか頑丈じゃない」

目の前にはあきらかに口調が違うラニア

「てめえ、ラニアじゃないな誰だ！」

「なかなか鋭い子ね、私の名前はサラよ」

「サラって確か・・・ラニアの母親じゃないか！」

「いろいろ知ってるのね」

「・・・一体何するつもりなんだよ」

「そんなの決まってるわ・・・あなたには死んでもらうわ」

そう言うとサラは秀に向かって走って来て、全体重をのせた右ストリート

それを両腕でガードするがその時の衝撃はすさまじくその場で怯んでしまう。

「ぐっ・・・」

サラは怯んだ隙を見逃さず、一回転してハイキックを繰り返す。

「ぐあー!」



パンチの倍以上の威力を持つキック、それをガードしていたがガードごと吹き飛ばされる。

「はあ、はあ、魔力で強化してるのに・・・なんて威力なんだ」

> 秀、ラニアさんをよく見てみてく

ラニアに注意され、ラニアの注意深く見ると、若干だがラニアが黒い霧のようなものが出ているのに気がついた。

「シルフィー、もしかしてあれって・・・」

> そうだよあれは多分、負だと思っく

「何はともあれ気をつけない・・・なっ！」

先ほどまでであった距離を一気に詰め、またもや右ストレートを繰り出すサラ

（くっ、くそ）

必死に攻撃をかわす秀

>何してるの秀、反撃しなくちゃ<

「んなこと言っただって、反撃するってことはラニアに攻撃するってことだぞ」

「ふふふ、なかなか頭が切れる子ね」

>なら気絶させるしかないね<

「くそっ！」

次々と繰り出してくる攻撃を必死にかわしチャンスをつかがう

（早く出せ、右ストレート）

右ストレート一本だけを狙いを絞っていると、サラは右ストレートを撃ってくる。

（来た！）

左手で払い、その間に懐に入り込みボディブローを撃ち込もうとしたが、

「秀さん・・・」

「くっ！」

直撃すれすれのところで秀の拳が止まる。

「あまちゃんね」

「しまっ・・・」

さっきの顔がすべて畏だとわかった時には遅かった。

サラの拳は秀の完璧に撃ち抜いていた。

「あ、ああ」

後ろによろめいて倒れ込むほどの衝撃だった。

「案外呆気ないわね」

秀の目の前まで来たサラは正義のヒーローのように言った。

「何か言い残すことはない」

「・・・一つ聞きたいことがある」

「何かしら？」

「俺を攻撃した理由を教えてください」

「ああ、理由はただひとつ・・・あなたがラニアに過去と向き合え  
なんか言うからよ」

「何だと・・・」

「あの子が昔のことを憶えてなくて思い出したいのはわかるけど、  
あの子の欠けている記憶のほとんどが辛い過去よ、それを今一気に  
思い出したら、あの子はきつと外にすら出られなくなるわ」

「・・・」

「私はあの子にとっての過去を絶対思い出させやしない……  
そろそろお別れの時間ね」

足をゆっくり上げて狙いを顔に定めた。

「つまらないことさえ言わなければね……さようなら」

サラはそう言って上げた足をおもいきり踏みつけるように足をふりおろした。

「……なっ！」

サラが驚いている理由、それは秀がふりおろした足を軽く手を添える感じで止めていたからだった。

「つまらないことだと……ふざけんなー！」

秀はそう言つと掴んでいた押し上げると、逆の手と魔力を使い体勢を立て直した。

「自分の子が辛い過去を取り戻したいと決意したんだぞ！」

「だから？」

「ラニアはずつと悩んでたんだぞ、悩んで悩んでやっと決意したんだ、なぜそれを拒むんだ」

「それはさっき言った通りよ、あの子には過去は重すぎる」

「そんなことやってみなきゃわかんないだろ」

「もしかって失敗したらどうするのあなたにその責任がとれるの？」

表情一つ変えずにサラはしゃべる、サラが優先することはラニアの安全ただ一つだった。

「……とるよ、もしラニアがそんなことになったら、俺が

すべて責任を取るよ」

「そんな戯言を信じるとでも？」

「信じるも信じないのもあなたの自由だよ、でもな俺はラニアが過去を取り戻すことに協力するって決めたんだ、それを邪魔するやつがいるならたとえ母親でも俺は許さない」

「……………」

「……………次は本気でいくわよ」

強く地を蹴ったサラは、秀との距離を一気に詰め、渾身の一撃を撃ってくるが、秀はそれを片手で受け止める。

サラはすぐに対角線の足で蹴ろうとするがそれも秀が逆の手で止められ、秀はそのまま押し倒した。



「くっ、抱きなさいよ」

秀に下で暴れるサラを見ていた秀は一か八かにかけてサラを抱きしめながら叫んだのだった。

「ラニア戻ってこい!」

「なっ、体が動かない……まさかリンクが解けて………きやああああ」

???

「くっ、まさか憑きが解けるなんて思いもしなかったわ・・・でも憑きが解けるってことはラニアに何らかのことが起こったということになる、けどここには私とラニアしかいないはず・・・」

「何長い独り言つぶやいてんだよ」

「そ、そんな何故あなたがここにいるのよ！ここには私とラニアしか入れないところなのよ」

「いるんだから仕方ねえだろ」

「う、ううん・・・あれ何で秀さんがここに？」

秀は目を覚ましたラニアに言った。

「言ったる、君は俺が絶対に呼び戻すって」

「（照）／＼／＼あ、そつだお母さん何であんなひどいことしたんですか」

「あれはラニア、あなたを思ってたことなのよ」

「私はただ過去を取り戻したいだけなんだよ・・・」

ラニアがそこまで言ったところで秀はラニアの前まで手を上げ静止を呼び掛ける。

「俺、今回の全貌が見えたかもしれねえ」

「えっ、全貌ですか？」

「ああ、言っつていいかラニア」

何故そこで自分に許可を求めたのかが分からなかったが、ラニアは首を縦に降った。

そしてそれを確認した秀は腕を上げ人差し指でサラを指し、ゆっくりと口を開いた。

「あんたサラさんなんかじゃない・・・あんた正体は・・・ラ  
ニア自身だよな」

連Side

洞窟の中を歩くこと10分、二人は洞窟の行き止まり地点まで着いた。

「行き止まりみたいだな」

「みたいですね」

行き着いた場所が結局行き止まりだったため、連は帰ろうとした時、西脇は行き止まり地点のあるところに気がついた。

「連さん、向こう側から音がしませんか？」

西脇に言われ耳をすます連

「確かに、微かにだけど音がするな……機械音かな」

行き止まりの向こう側から微かに聞こえる機械音

「しっ、誰か来る……！」

西脇の手を取り、少しへこんでいる場所に身を潜めた。

行き止まりのところに現れたのはガリア帝国の兵士だった。

「なっ、何であいつらがここにいるんだ」

「さあ、何ででしょうか」

行き止まりに着いた兵士は岩の壁の一部をスライドさせ0～9がある板が出てきて、兵士はそれを入力していった。

兵士が番号を入力し終わると、行き止まりだった岩壁が二つに割れて、道が出てきていた。

「………すげえ」

兵士が中に入り終わると岩の扉は閉まり、元の岩の壁になった。

「本当に凄かったですね……でもこの中には何があるんでしょうか」

「気になるなら調べてみよっぜー!」

そう言うと連は番号の入力版を出した。

「・・・・・・・・」

「どうしました連さん？」

「番号が分からない」

兵士が番号を入力するところを見たのは見たが距離をと番号の数があつたため、入力するのは困難に思えたのだつたが・・・

「えーと175331539842つと」

その番号を入力すると兵士の時と同じように、岩壁が二つに割れて道が出てきていた。

「凄えええよ茜ちゃんあんなデタラメな番号よく憶えてるな」

「記憶は得意なほうなので」

「よっしゃ、じゃあ入りますか」

「ですね」

入ると中は外国の映画で見るとような研究基地のような感じだった。

「ふあー広いなー」

「凄いですねー本当に広いですね」

二人が秘密基地のような場所の広大さに驚いていた時だった。

「おい、そこの二人何者だ!!」

「げっ、しまった!」



「何だお前達、ガリアの者じゃないな……拘束させてもらう」

兵士がそう言って、二人に近づいて来て身の危険を感じた連は瞬時にリストをはめて相手の懐に入り込んだ。

「悪い！」

その位置から全身の伸びを使った拳を相手の顎に打ち込み相手を見事にノックアウトした。

「危ない危ない」

なんとかピンチを乗り越えたように思えたが、相手が倒れた際に響いた音がかなり大きく、まわり聞こえてしまった。

「おい！あそこに誰がいるぞ、捕らえる」

「ヤバイ、逃げるぞ茜ちゃん」

何処に行けば逃げればいいのか分からない状況だが二人に必死に走り逃げた。

### 指令室

「申し訳ありません隊長、ネズミが二匹ほど侵入してしまいました」

「……お前ら侵入者は追うな」

「えっ、ならどうしたらいいのでしょうか」

「君は鬼ごっこは得意かな」

「えっ、走るの得意ですけど」

兵士が呼んだ隊長の質問の意図が読めなかった兵士だがいちよ真剣に答えてみた。

「そうか、実は俺も走るの得意だったんだが、この前鬼ごっこに負けてしまったんだ、だからリベンジとしてもう一度俺にやらせていただくがいいかな？」

「はっ、ではお願いしますぜファ隊長」

ゼファは椅子から立ち上がり指令室から出ていった。

逃げてから10分ほど経った頃にはゼファの指示が行き渡ったのか、追っ手はいなくなっていた。

「はあ、はあ、よかった追っ手は来なくなったな」

「そ、そうですね、にしてもここはどこなんでしょうか？」

「うーん、分からな・・・」

連が分からないと言い切ろうとしたが、それはできなかった、言い切る前にどこからか聞こえて轟音によって遮られたからだった。

「「っ!!」」

「何なんだ今の音は」

「何だか不気味になってきました私」

「大丈夫だ、茜ちゃんは俺が守るから安心して」

「連さん…」

自分のなかではかなりカツコイイ感じに決めたところで、なぜか後ろから拍手が聞こえてきた。

「俺が守るからってなかなかいいんじゃないの」

「誰だお前？」

「ん？前追いかけ合いました秀って奴とは違うみたいだな・・・まあいい始めようか」

（無視かよ…）

「始めるって何をですか？」

「ん？死の鬼ごっこさ」

(そこは答えんのかよ！)

「・・・ん？秀って言わなかったあんだ」

「知り合いかね、あの子とも鬼ごっこをしたんだが逃げられてしまったからな、さあて始めるかタトウナス！」

手にはめている手袋に物質憑依させてなにやら中世ヨーロッパの兵士の手装着する防具に変身した。

「「精霊契約！」」

「逃げるぞ茜ちゃん！」

「カウントダウンだ、10、9、8・・・」

「はあ、はあ、はあ、こんだけ逃げれば大丈夫だろ」

「そ、そうですね、人生で一番早く走った気がします」

「安心するにはまだ早いぜ」

手から緑色の球体を出して連達の方向に投げつけた。  
地面で何回かバウンドしてから緑色の球体は爆発した。

「のわっ！」

「今のはほんの威嚇だ、さてもう一度カウントダウンを始めるから逃げてみな」

「くそっ！なめやがって」

手にリストをはめようとした連だが西脇に腕を捕まれる。

「ダメだよ、精霊契約してる相手に勝てるわけないよ」

「だけど、あれだけなめられたら」

「止めておいたほうがいい、秀という子も戦おうとせず逃げた」

（くそっ！）

一言一言が連の感情を逆撫ですが、歯をくいしばり西脇とゼファから離れていった。

「今度は30秒にしてやるか」

必死に走り続ける二人だが先ほどからの疲れがたまっていたせいか二人速度はかなり落ちていた。

さらに運動神経はいい連はいいが、あまり運動が得意ではない西脇は体力が限界に近づいていた。



「はあ、はあ、はあ」

「茜ちゃん大丈夫か」

「は、はい大丈夫です」

「大丈夫じゃないだろ、アイツもまだ来そうにないから走らず歩」  
「う」

「はい、ありがとうつづいませ…」

グオオオオオオ！！

「」「つ！」「」

「おいおい、さっき聞いた時よりデカイ音になってんじゃねえか」

「な、何なんですかあの音は」

「どつやらあの部屋から聞こえるみたいだな」

「えーと、立ち入り禁止って書いてますよ」

(どうする、道は一本だ、どうすればいい……)

「よし入るぞ茜ちゃん！」

「はい、行きましょう」

緊張するなか扉に鍵が掛かっているため、ぶち破り入ると、そこは一本の通路だった。

その通路を歩く、一歩、一歩と進んでいく、一歩進めば体力が奪われるような感覚に襲われる。

そのような圧力が扉の向こうから伝わってくる。

「ん？ここは鍵が掛かってないのか」

「……行くっ」

扉の横にある【開】【閉】のボタンがあり、連は【開】のボタンを押した。

何重にも重ねて閉じられた扉が開き、連と西脇は歩いた……轟音の下へ

「……………」

「……………」

その時俺達は声が出なかった。

目の前には見たことがない巨大な生物、大型トラックのサイズで、猛々しい四足、この世の物とは思えない牙、まるで王者の風格の白銀の毛

そのような生物が何重にも張り巡らせた鉄格子の中にいる。

誰だおまえたちは？

「なっ、喋った!？」

我を誰だと思ってる!!

「っ!!」

鼓膜が破れそうなほどの声

「俺達ここから脱出したいと思ってるんだけど、なんか出口的な所知らないか」

その口振りだとお前達はガリアの者じゃないみたいだな

「ご名答、俺達はそのガリアの爆弾野郎から逃げてるんだ、だから出口を知ってるなら教えてくれないか」

残念だが出口は一つしかない、お前達がガリアの者じゃないなら多分お前達入ってきた道だろうな

「・・・万事休すか」

「おいおい、何休んでんだ秀って奴はもう少し逃げていたぞ」

「ちっ、爆弾野郎・・・」

ゼファ・・・か

「おお、氷獣王久しぶりだな」

「氷獣王？」

「こいつの呼び名さ、呼び名の通り氷を操る獣の王だ」

「そんな奴が何で捕まってるんだよ」

「捕まえるの苦労したもんだぜ、こっちの兵士がどれだけ犠牲になつたことか」

きさまらが我の土地に入らなかつたら、兵士達も犠牲にはならな

かったるうが

「何言つてんだ、あんたみたいな奴を捕まえるには犠牲は仕方ないさ」

きさま、なら兵士達はただの駒だと言うのか

「そうは言わない・・・だがガリアの繁栄にはあんたが必要なんだ  
そして繁栄には犠牲が付き物だ」

ぐっ・・・おおおお

雄叫びを上げた氷獣王は何重にも張り巡らせた鉄格子に体当たりをした。

激しい衝撃と震度3ほどの揺れが襲うが鉄格子はびくともしなかった。

「おいおい、よしたほうがいいぜ」

氷獣王の体当たり反応したのか鉄格子内に電流が流れ、氷獣王に

その電流が流れる。

ぐああああ！！

「前も説明したろ、あんたがあんたが鉄格子に衝撃を与えるとその衝撃分の電流が流れる仕掛けになってるって」

かなり威力の電流にやられたのか、氷獣王はその場で力なく倒れた。

「・・・やりすぎだろ」

「やりすぎか・・・しかし俺達の兵士も氷獣王に大分やられたんだぜ」

「その死んだ兵士を繁栄のための犠牲で片付けたくせによく言っぜ」

「ふ、まあいい・・・そろそろ鬼ごっこも終わりにしようか」

手のひらに緑、青、赤色の爆弾を一つづつ出し、緑と赤を連に投げ、同時に青色の爆弾を上空投げた。

「せいぜい避けるよ！」

連に向かって飛んでくる緑爆弾は距離があつたため連は横に移動して避けて西脇に向かって

「茜ちゃん、安全な所なんてないと思うけど、できるだけ安全な所  
にいてくれ」

「は、はい」

「人の心配してるつもりか、爆弾はあれだけじゃないんだぜ」

もうすでに新しい爆弾を用意していてどんどん連に対して投げてる。

「くそー、多いんだっつーの」

飛んでくる爆弾を必死にかわす連

「ふーん、なかなかうまいことかわすじゃんか」



「余裕こいてると痛い目見るぜ」

連は避けながらも爆弾の位置を一つ一つ確かめていた。

そしてゼファが爆弾を投げるモーションの一瞬の間をついてゼファとの距離を一気に詰めた。

「へへっ」

「しまっ・・・なーんてな」

ゼファの顔面めがけて繰り出したが、ゼファは片手で簡単に受け止めた。

「精霊契約していない奴相手に負けるんでも思ったか」

「くっ・・・」

捕まれた腕は簡単に離してはくれず、逆にゼファの拳を浴びてしま

う。

「かはっ……」

予想外の威力に顔を歪めながら肩膝をついた。

（なんて威力だ……）

「おいおい、まだ爆弾は残ってるぜ」

そう言って上を指指すゼファ

上空投げていた青色の爆弾が連に向かって落ちてくる。

「何!？」

次の瞬間に響き渡るのは轟音だった。

「連さああん!!!」

「まずは一人か・・・っ!!」

ゼファが言葉を詰まらせたのは、煙の中から連が飛び出してきたからだ。

「まだ俺はくたばってないぜ!」

そして出てきた勢いそのままゼファの顔面を殴り飛ばした。

「よし!体勢は崩した・・・もらった!」

「甘いぜ!」

指をパチンと鳴らすと連とゼファ直線上で爆発が起こり、連は鉄格子の方向に吹っ飛ばされてしまった。

「くう・・・何でいきなり地面が爆発したんだ?」

「冥土の土産に教えてやるよ、緑爆弾は普通に時限爆弾で、青色が

滞空爆弾で俺の合図で空から降ってくる爆弾だ、そして赤色の爆弾が地雷型の爆弾で俺の合図と俺以外の誰かが半径一メートル内に近づくと爆発するん仕掛けになっている」

「くっ、」

立ち上がりたい連だが、体が言うことを聞かず立ち上がるのができなかつた。

だ、大丈夫か少年？

「大丈夫なわけないだろ・・・でもまだ戦える」

なぜお前は勝ち目がないような相手にわざわざ戦いを挑むんだ、攻撃しなかつたら地雷型爆弾を踏まずにすんでもしかしたら逃げる隙ができたかもしれん

「それは逃げてるばっかじゃしょうに合わないし、爆弾野郎がムカつくこともせうなんだけど、一番の理由は約束したからな」

ふん、なかなか熱いんだな、おいまた爆弾がくるぞ！

正面には多くの緑爆弾が飛んできていた。

「ちっ」

またもや横に飛んでかわす連だが、その行動は完璧に詠まれていた。

「っ！！」

下には赤爆弾が地雷型に変わり地面に吸い込まれていて、上には青爆弾が連を囲むように浮いていた。

「チエツクメイトだな」

「くそ……」

「連さん！！」

少年！！

「うるさいぞ、その女黙ってる！！」

緑爆弾を取り出したゼファは西脇の方を向いて、爆弾を投げこもうとした。

「っ!!」

投げる寸前でモーションを止めて爆弾を急ぐように誰もいない方向に投げた。

「まあいい、お前はそこでじっとしてろ」

(何で今投げるのを止めたんだ?)

ゼファの意図が分からない行動に疑問に思う連はふと西脇のほうを見た。

怪我はなさそだが、先ほどのゼファが怖かったのか怯えていて、その西脇を氷獣王が慰めていた。

(・・・っ!!まさか!!)

「さて、今度こそ終わりにするか」

(うまくいけば逆転できるけど、この爆弾包囲網がやっかいだ・・・  
・ああもうちまちま考えるのめんどくせえ)

「終わりだああ!!」

ゼファ青、赤の爆弾を爆発させた。

「うおおおお!!」

あの爆発の中を抜け出したのか!?

全身が傷だらけで至るところから血を流しながらも連はゼファに向  
かって走っていた。

「ふ、お前ならやると思ったぜ・・・だがあまかったな」

ゼファの手にはすでに緑爆弾を持っていた。

「今度こそ終わりだあ！」

自分に向かって投げられた緑爆弾を確認した連は今より早いスピードを出して緑の爆弾を掴みとった。

「な、何！」

爆弾を掴みとった連はすぐさま後ろを向いて叫びながら緑爆弾を投げた。

「氷獣王！！茜ちゃん！！下がれええええ！！！！！！」

「はっ、しまったあ！！！！」



連の投げた爆発は見事鉄格子破壊した。

「はあ、はあ、はあ、後は任せませ」

巻き起こる煙の中から出てきたのは氷獣王だった。

任せておけ

「ちっ、二二二で氷獣王かよ」

覚悟しろ、貴様の全てを凍らせてやる

「面白い、やってやる」

連の時より遙かに数多くの爆弾を取り出したゼファは地面、上空、正面へと投げた。

「これだけの量をおかわせるかな？」

ふん、かわすだけが全てをじゃないんだ

息を深く吸い込んだ氷獣王は一気に息を吐き出して、ゼファが投げた爆発を全てを凍らせた。

もはや決着はついた、無駄な抵抗はせずに精霊契約を解除するんだ

「くくく、随分あまく見られたもんだな」

抵抗するつもりか？

「あたり前だ、行くぜ」

またもやゼファは指で音を鳴らした

どうした？なんも変化も起きないがな

何も変化しないことをいいことに氷獣王は一步、一步とゼファに近づいていた時に後ろから声が聞こえてきた。

「動くな氷獣王、前方には爆弾があるぞ」

「ちっ、目が覚めたか」

少年、悪いが爆弾なんかまったく見当たらないがな

自分の前には爆弾など一つも見当たらない氷獣王だったが、次の一歩を踏み出した時だった。

《ドカン！！》

自分の頭で爆発がして氷獣王はその場で倒れてしまった。

な、何が起こったんだ

「くくく、はははははははは、どうだ氷獣王見えない爆弾は怖い  
だろ、実は俺にはもうひとつ爆弾があるんだ、それがこの白い爆弾  
だ、まあお前には見えていないと思うがな」

なぜだ、なぜ我には見えないんだ

「実はこの白い爆弾は対非人間ようだな、人間以外には見えないん  
だよ」

ぐっ・・・

先ほどのダメージがでかかったのか氷獣王は立ち上がることにすま  
まならなかった。

「さてと鉄格子も壊れちゃったことだし、殺るか」

「させるかあ！！」

横から来た連がゼファを殴ろうとしたが、ゼファは簡単にかわして連を氷獣王のところに投げ飛ばした。

「氷獣王大丈夫じゃなさそうだな」

それは自分も一緒であろう

「はああ、結局あの爆弾野郎を倒すことも、約束を守ることでもできそうにないな」

いやたった一つだけあるぞ奴を倒すことも約束守ることもできる方法が

「な、なんでそんな大事なことを言わないんだよ」

この方法は少年が死んでしまうからだ

「俺が・・・死ぬ？」

それにこの方法を使えば多くの人が犠牲になるだろう、だからや

りたくはないんだ、しかしこんな状況だ、少年がやりたいと言っ  
たらやろう

「ちょ、ちょっと待てよちゃんと事情を話してくれなきゃ分かん  
ないだろ」

時間がないんだ、今ゼファ特大の爆発を起こすために三色の爆弾  
で構成しようとしているが、もうじき終わり自分達に最大に爆発を  
おみまいするつもりだ」

「……わかった、俺やるよ」

了解した、少年最後に注意点をいうぞ、自分の意識のあるうちに  
あの子を逃がせ、しかし自分も逃げようとするなよ、もし逃げたな  
らゼファを倒せず、あの子は死ぬことになるからな

「……ああ、わかった」

少年・・・すまない

ゼファの特大の爆発がそろそろ完成しそうだった時に氷獣王は自分の牙で連を後ろから刺した。

「ぐはあああ  
」

「な、何をしてるんだ？」

「おおおおおお！！」

「何だこの凄まじい魔力は」

「はあ、はあ、はあ」

氷獣王の牙から抜けた連はとてつもないスピードで西脇の所に行き、西脇の背後にある壁をパンチでぶち壊した。

「茜ちゃん、おそらくこの道をまっすぐ行けば外に出られるはずだから早くここから出るんだ」

「えっ？でも連さんはどうするんですか」

「俺はまだやることがあるから一緒には行けそうにないんだ」

「そんなこと言わずに一緒に行きましょう」

「聞き分けのないこと言わないでくれ、そうだここを出たら秀の所に行つてこつ伝えてくれ」

“俺を止めてくれ”

そう言つて連は西脇を壁より外に軽く投げ出して出入口とその道を氷で塞いだ。

そしてその瞬間に連の意識は遠退いていった。

「その魔力一体何をやつたつて言つんだ？」

「.....」

「ふ、だんまりかよ、じゃあ死にな!!」



氷獣王の時と同様の数の爆弾を出したゼファはすぐさまその爆弾を投げるが、その全ての爆弾を凍りつけてしまった。

「な、何だと!？」

そしてゼファに一瞬で近づいた連はゼファを壁まで殴り飛ばした。

「くそつ、なかなか早えじゃないか」

「アイスニードル」

連から放たれる無数の氷の針がゼファを襲う。

「しゃらくせー」

氷の針にゼファの手が触れると、氷の針が爆発を起こし、他の氷の針も吹っ飛ばした。

「っ!!!」

「驚いたか？実は秀に負けてから肉体強化を特訓したんだ、そこで編み出したのがこの爆弾近距離戦だ、触れたものを爆発させる戦いかただ」

「アイスニードル」

「その技は無駄な筈だ」

先ほどまったく同じように氷の針を吹っ飛ばしたゼファは吹っ飛ばしたことでできた隙間から連に詰めたゼファは連の顔面に拳をぶちこんだ。

「手応え有り・・・っ！！」

「残念だったな、貴様が殴るより俺のガードの方が早かったな」

連はゼファの拳をしっかりと手のひらでガードしていた。

「爆発したはずだぞ、何で無事なんだ！！」

「さあそれはあの世で考えな」

連がそう言つとゼファの拳が凍り始めていた。

「な、何だと!？」

「言つたはずだが、貴様の全てを凍らせてやると」

「うおおおお!…」

先ほどまであれほどのさかつた部屋は静寂に包まれていた、凍り  
づけにされたゼファとともに

「もっとだ、もっと全てを凍らせてやる」

秀 Side

「どういうことなんですか秀さん」

「結論を話す前に、俺が疑問に思ったことを話すよ」

「疑問に思ったこと？」

「まず一つ目だけど、俺が聞いたサラさんと、今会ったサラさんが同一人物だとは考えにくい」

「そりゃ確かに母親にしてはやりすぎのところもありましたけど」

「そして二つ目だけど、ラニアが意識を完全に乗っ取られた時、ラニアの体の周りは負につかれてたぜ」

「えっ、私ですか」

「ああ完全に負につかれてたんだ、そのところを考えてみたら一つの答えが見つかったんだ」

「一つの答え・・・」

生唾をぐくりと飲み込むラニア

「ラニアが会ったサラさんはラニアが思い出したかった過去が変化したものじゃないかなって思ったんだ」

「・・・」

秀の言葉に黙りこむサラ

「あのーすいません、もっと平たく説明してくれませんか？」

「結論を言えばラニアが思い出したかった過去をラニアは心の中で辛いか忘れたいとか思っていたんだと思うんだ、それでそんなネガティブな考え方のせいで過去という記憶に負がついた」

「でも過去に負がついたなんて話し聞いたことありませんよ」

「確かに聞いたことのない話だけど、それじゃなきゃラニアと戦った時についていた負が説明がつかないんだよ」

「それはそうですけど」

「まあ本人に聞いてみりゃあいいじゃないか、なあサラの偽物……いやラニアの過去の記憶よ」

「ふふふ、はははははははは、よくわかったわね」

サラの偽物がそう言い終わると戦いの際に見た負がサラを包み、サラの姿から負につかれたラニアの姿に変わっていた。

「どつやらベングゴみたいだぜラニア」

「私が・・・二人？」

「さあてラニアの過去を返してもらおうか」

「ふふふふ、それは無理よ」

「・・・それはもしかしてラニアが過去を思い出すには重すぎるとか言っんじゃないとか」

「その通りだけど」

「はあー頭かってーな、俺と戦った時に言っただろ、やってみなきゃ分からないだろうし、たとえ失敗したとしても俺が責任を取るってな」

「どつやってもお前は過去をラニアに戻す気はないんだな」

「ええまあね」

「だったら力づくでも戻してやる」

「あらそんなしたら一生過去を思い出すことすら出来なくなるわよ」

「どういう意味だ？」

「私はラニアの過去に強い負がプラスされることによって具現化されたようなもの、そんな私を倒しラニアに戻して負に吞まれちゃうよ」

「くっ！」

過去のサラの言葉のせいで一つの策が潰されてしまった。

過去のラニアが言ってることは本当のことで、ラニアと戦った時に感じた負の濃さはかなりの濃さであった。

（さてとどうしたもんかね、何かシルフィー手はないか？）



何を悩んでの秀、負の濃さが問題なら負を薄めればいいのさ

「負を薄めるなんて出来るのか？」

大丈夫私がちゃんと手伝うからさ

「了解した行くぞ、天つ風!！」

「へー、ラニアが負に吞まれていいの」

「違うさ、俺はラニアを助けるんだ」

「出来ると思ってるの?」

「風をなめんなよ」

天つ風を鞘から取り出した。

「行くぜ」

秀が過去のラニアに向かって走り出すと、過去のラニアも秀に向かって走り出す。

お互いの間合いに入ると過去のラニアがすぐに攻撃してくるが、今の秀にはかすりもしていなかった。

逆に秀が過去のラニアに腹を天つ風で殴った。

「ぐっ・・・」

今だよ秀、動きを止めるよ

「旋風束縛陣！！」

過去のラニアに風が集まり、ラニアは身動きがとれなくなった。

「くっ！」

秀ありつたけの魔力を天つ風に注いで

「了解」

シルフィーに言われた通りに天つ風に魔力を注ぐと、天つ風の中から溢れるように風が出てくる。

（この風は何なんだ、どれだけ出てきても全く髪や服がなびかないぞ？）

魔力っていうのは、精霊契約してから初めて使えるもの、そして精霊契約は負に負けない強い正の器があることで契約ができる

「・・・もっと平たく説明してくれ」

つまり、負は魔力で打ち消すことができるの

「はあ？それだったらカースの負も打ち消せるってことじゃいか」

その質問についてはまた今度答えてあげる、今はラニアの負を取り除くよ、行くよ秀

旋風束縛にまだ苦しむ過去のラニアに近づいた秀は天つ風から吹く風の風向きを全て過去のラニアに変えて、自分は現在のラニアの方を向いた。

「ラニアこっちに来るんだ!!」

秀の元に走ってくるラニアに天つ風を持つように促し、二人で天つ風を持つような形になった。

「ラニア、俺はラニアが今からどれだけ辛い思いをするのかなんて分からない・・・けど、俺は俺が出来る限りの手伝いはするから、絶対に過去に負けんなよ!」

「はい!!」

覚悟を決めたラニアの返事を聞いた秀とシルフィーは自分自信も気合いを入れて過去のラニアに叫んだ。

「負なんて吹き飛びやがれ！！」

「浄化の風！」

「ぎゃああああー」

風がやむ頃には過去のラニアの姿はきれいさっぱりいなくなった。そこに残っていたのは宙に浮いている淡い光を放つ塊だった。

「あれが私の・・・過去」

「後はラニア君次第だ」

「っ！！秀さんどうしたんですか？」

ラニアが驚いたように自分を見てきたものだから、ふと自分の体を向けると、自分の体が少しずつだが薄くなっているのに気がついた。

それを見て考えて思い浮かぶ答えのは一つ

「元の世界で待ってるゼラニア」

そう言い終わった秀が意識が一瞬途切れ、次に意識が戻った時には山の山頂で自分がラニアを押し倒してのっかていた。

「勘違い起こされちゃたまんねえな」

それから3人の帰りを待つこと10分、最初に帰って来たのは目の前にいた少女だった。

「うう・・・はっ！！」

「ラニア！！大丈夫だったか」

「秀さん・・・」

もうすでに泣きそうな顔しているラニアを見た秀はラニアを優しく抱き締めた。

触れれば簡単に壊れてしまいそうだったから今の自分出来る限りの強さで

「秀さん・・・私、頑張りましたよね」

「ああ、本当によく頑張ったなラニア、よく辛い過去に負けなかったな」

「確かに秀さんがいなくなってから自分の過去を思い出し始めた時は辛かったです・・・けど辛い過去以上の大切な思い出を思い出すことができたんです」

「なるほど、その大切な思い出の存在のおかげで乗り越えれたんだな、んでその大切な思い出は何だったんだ？」

「お母さんと遊んだ思い出です」

「そっか・・・」

「この場所で、たくさん・・・たくさん・・・遊んだんです」

ラニアはそこで何かが切れたかのように、秀の胸で泣き始めた。

「づうう・・・うわああん」

「頑張ったな、本当に頑張ったな」



ラニアの背中をポンポンと叩いた秀はそれからラニアが、落ち着くまで秀は続けていた。

「どうだ落ち着いたかラニア」

「はい、何とか落ち着きましたよ」

「そうかそりゃ良かった」

ニコツと微笑む秀を見たラニアは顔を赤らめていた。

「今日はありがとうございました秀さん、よければ今日の……」

今日のの次の部分が気になるどころだが、見事にその部分を必死に

走ってきた少女の悲痛な助けによってかきけされた。

「はあ、はあ、秀さん助けてください!!!」

「西脇どうした、そんなに息を切らして」

「連さんが、連さんが」

「落ち着け西脇、落ち着いて説明するんだ」

やっと落ち着いた西脇が説明した。

「そうか、ありがとな西脇」

「この方向をまっすぐ行つた所に洞窟がありますから、あ、秀さん連さんから言われていたことがあります」

「俺を止めてくれ・・・だろ、大丈夫連は俺が止めてやる」

天つ風を出した秀は西脇が言つた方向に向かつて走つた。

四十四話 風 vs 氷 (前書き)

暑すぎて体が動かない(、 - 、)

## 四十四話 風vs氷

その時秀は全力で走った、親友を止めるために・・・

「ここが西脇言ってた洞窟だけど・・・番号がわからねえ」

番号とひたすらにらめっこしていた時に、研究所につながる岩壁が轟音とともに吹き飛ばされた。

「うおっ！..!」

岩壁が吹っ飛ばされたことにより巻き上がる砂煙中からはっきりと秀は気配を感じた。

その砂煙から出てきたのは白銀の髪の毛をした連だった。

「連なのか？」

顔や身長は連なのだが、髪は銀髪で手にはメリケンサックがついたグローブのような物を装備していた。

「また獲物か、まあいいお前の全てを凍らしてやる」

(凄まじい魔力だな…)

秀、来るよ!!

連さんはすでにアイスニードルを放っていて、あまりの数に回避に徹底させられる。

「へえーなかなかやるじゃん、でもこれをかわせるかな」

片手に徐々に魔力を溜めていき、溜め込んだ魔力を野球の球サイズ

にまで圧縮した。

そしてその球を秀に向かって投げると、その球は巨体な氷の竜となつて秀に襲いかかつてくる。

「頑張つて避けてみな・・・アイスドラゴン!!」

「マジかよ……」

かなりのスピードで襲いかかつて来る竜を風力で秀の体をスピードアップさせ噛みつきはかわしたが、体をひねって繰り出してくる攻撃をかわすことができず吹っ飛ばされてしまった。

「くっ、あの長い体、やっかいすぎるな」

だね、あの竜さえ避けれたらいいんだけど……どうする、避ける？それとも切る？

「んじゃ、切るの方で!!」

そうこなくっちゃ

再び向かって来る竜に向かって無数風刃を飛ばすと、風刃が当たった箇所は見事に切れていた。

「よしこれなら行ける!!」

竜に向かって走った秀は噛みつきごとくと竜の頭を切り裂き、続いては竜の体を切り裂いていく。

「何!!」

「うおりゃああ!!」

自分自身に気合いを入れ、最後の尾を切った。

「お前…アイスドラゴンを切ったというのか」

「まあな、実は俺やればできる子だしな」



「ふっ、そうか…突然だがここで問題だ」

「問題？」

「お前が切り裂いたアイスドラゴンは、はたして切り裂いてよかったのでしょうか？」

意味が分からないタイミング、質問の内容に首を傾げる秀

秀、危ない後ろ！！

シルフィーの声のおかげで反応した秀は何とかギリギリ風を纏った。その瞬間に後ろで何か弾かれる感じがした秀が後ろを見ると、後ろにはアイスニードルのひとつかけらが落ちていた。

「何で…ここにこれが…」

秀…何なのあれ…

シルフィーが驚愕していたのは先程までは一つも無かった無数のアイスニードル

「あ…ああ…」

「驚いたか、でもそのアイスニードルはお前が作ったようなもんだけ」

「どづいづことだ？」

「あれー、お前が倒したアイスドラゴンはどこに行ったのかな？」

連の言葉に、はっとした秀は後ろを向くが、もうそこには切り裂いたアイスドラゴンの姿は無かった。

「まさかこのアイスニードルって…」

「お前が切り裂いたアイスドラゴンだ」

「……………」

もはや声すら出ないほどの圧倒的な数、今の秀には防ぎきれないと感じさせられるほど圧倒的な手数だった。

「もう一度言わせてもらおうか、この攻撃かわせるかな？」

手をぐつと握ると、宙に浮いていたアイスニードルが全て秀に向かって飛んで来た。

秀！！

（くっ、しかたねえ！！）

アイスニードルが秀のいた場所に全て突き刺さり、土煙がまっていた。

土煙が完全に消えた頃には傷だらけになった秀は立っていた。

「はあ、はあ、はあ」

「ほお、致命傷になるところは防いでそれ以外の箇所は捨てたか」

さきほどの攻撃を喰らったせいも、秀は立っているのがやっとの状態だった為、自動的に物質憑依が解かれた。

しっかりして秀！！

「・・・・・・・・」

(くそつ、視界が霞んできたし、体も思うように動かない……すまない連、どうやら約束をはたせそうにない)

立った状態からぐったりするようになり倒れた秀は自分の意識が遠のいて行くのが分かったが、完全に意識が遠のくのは一人の少女が防い

だ。

「浅村君、浅村君!!」

「ん、に、西脇!？」

「大丈夫ですか、立ってますか？」

秀の腕を自身の肩に回して支えようとしていた。

しかし秀はそれを振り払った。

「浅村君？」

「何で来たんだ!!」

「す、すみません二人が心配になってつい」

「お、獲物がまた増えたようだな」

「あれが・・・連さんなんですか!？」

変わり果てた連の姿に西脇はただただ驚いていた。

「お前もその男と同じようになれ、アイスドラゴン!！」

「ひっ!！」

「くっ、退け西脇!！」

体に残っている力を振り絞り、風で西脇を吹っ飛ばした。

「あまい、アイスドラゴンの追尾性をなめるな!！」

秀に目もくれずにターゲットの西脇を同じ追うアイスドラゴン

「きゃあああ!！」

「止める連、西脇を傷つけるつもりかぁ！！」

「……あれっ？」

恐怖のあまり目を閉じていた西脇だが、恐る恐る目を開けると、ア  
イスドラゴンの姿は、何故かもうそこには無かった。

「何故だ、何故勝手にアイスドラゴンが砕けたんだ！？」

「簡単なことだよ、いくら今のお前が連じゃなくても、体は連だ、

頭も連だ、思い出も連なんだよ!!」

「そんなバカな、俺は完全にコイツの意識を乗っ取ったんだぞ」

「けど実際、アイスドラゴンは砕け散ったぜ、つまりまだ連の意識は生きてるってことだ」

「たとえそうだとしてもお前にはもはやどつすることもできんだろ」

状況 血だらけの秀、無傷の西脇のみ

「状況だけ見ればそら悲惨なもんだけど、俺はまだギブアップしちやいないぜ」

息を整えた秀は、再び物質憑依して天つ風を構えなおす。

「あ、浅村君、立ち上がったちゃ駄目ですよ」

「大丈夫さ、西脇のおかげでだいぶ休めたからさ」



「休めたって言ってもそんな体で言われても説得力の欠片もないですよ!!」

「大丈夫、大丈夫、俺はやればできる子だからな」

そう言って秀は、西脇の制止を振りほどいた。

「悪いな随分待たせたようで」

「ふん、どうせ死に行く運命なのだからな、時間なんぞくれてやる」

「どうかなくこうなった時の俺はしぶといぜ」

「さっきまで倒れかけた奴がよく言っぜ、行くぞ!!」

連はアイスニードルもアイスドラゴンも使わず接近戦に持ち込む

攻撃速読、スピードも申し分なく今の秀では防ぐことで精一杯だっ

た。

(くそっ、一瞬でも動きを止められれば)

それなら旋風束縛陣を使えばいいじゃない

使えばいいとは簡単に言うものの、旋風束縛陣はそう簡単にほいほいと出せるものではない。

四方八方から風により相手の動きを封じる技であるため、使うにはそれ相応の魔力が必要だった。

しかし今の秀はラニアの時の浄化の風や連と戦ったことで消費した魔力はかなりの量であり、旋風束縛陣をうつどころか、物質憑依を保てるかどうかも分からないぐらいだった。

「どうした、さっきから防いでばかりじゃないか、魔力の使いすぎか？」

嘲笑うように言う連、正直怒る体力すら残っていない。

防ぎきれない攻撃

どんどん傷が増える体

増える度に走る痛覚

痛覚と引き換えに失っていく意識

(あゝあ、少しは骨があると思ったんだがな…そろそろ終わらせてやるか)

殺傷能力充分であるかぎ爪を立て、秀の心臓めがけて突き出したかぎ爪は秀の腕や天つ風に防がれることはなかった。

防がれることなく心臓に刺さらず脇腹に刺さっていた。

「なっ！！」

「やっと捕まえたぜ！！」

秀が攻撃を防ぎきれなくなってきたのは必然だったとしても、秀が一方的にもやられていたのは、連に速くトドメの一撃を出させるためだった。

接近戦なら連がトドメをさすなら刺してくるにちがいないと踏んだ秀の一か八かの賭けだった。

そしてその賭けに秀はまさしく今勝った。

「くっ、手が抜けない!？」

「へへ、だてに毎日鍛えてないからな」

「だが甘いぞまだ片手があるんだぞ」

振り上げる左手だが、連はすでに二つの誤算があることに気づかなかった。

「バカか、俺は両手あるんだぞ」

右手でしっかりと連の左手を掴んだ。

「この距離は俺の距離だ!！」

(腕がピクリとも動かねえ!?)

秀を貫いてる右手は鍛え上げた腹筋(ラウルのスパルタ式によって)で締め上げるようにして動きを止め、左手はがっちりと離さないよ

うに右手で握りしめていた。

「俺はお前の氷を受けたんだから、お前もすっかり俺の風を受けてもらっぜー!!」

「何でお前みたいな奴にこの俺が…」

「空破撃!!」

今ある全ての魔力を風に変え、その風を天つ風を振る力にプラスさせた。

そして全てのプラスの力を天つ風の柄に伝わるようにして連の鳩尾にクリーンヒットさせた。

「ぐあっ…」

ずり落ちるように倒れた連の腕を抜いた秀は、気絶させたことで元の姿に戻った連を見た。

「約束は果たしたぜ連」

全てが終わった安堵感、全ての魔力を使いきったことによる疲労感、そして今までのダメージによる脱力感、これら全てが自分を襲った。

それにより全身の力が抜けるように崩れ落ち、視界が狭まり、ついには意識が遠くなっていた……

四十四話 風vs氷（後書き）

ストックがどんどんたまってきたので明日辺りから、1日ごとに投稿していきたいと思います。

四十五話 医務室にて（前書き）

この話は短いですf (^| ^ ;



## 四十五話 医務室にて

目が覚めた時、視界に入ったのは白い天井と天井にぶら下がっている電灯だった。

「あれ？ここは…」

「レーガルの医務室です」

起きた秀に答えたのは、レーガルの医療班の人だった。

その人の説明によれば意識がなくなった後に、ラニアが呼んだラウルと医療班が駆けつけて今に至るといふ

「あ、あの連は大丈夫ですか？」

「安心して、あの子なら無事よ、むしろあの子よりあなたが大丈夫って感じだったんだからね」

それを聞いてホッとした秀だった。

「他人を心配するのもいいけど、さっさと自分の体を治した方がいいよ」

「そうですね、みんなには迷惑かけますでしょうしね」

「さあ、そうと分かったら怪我人は寝た寝たと」

医療班の人が部屋を出たあと静寂に包まれた。

「……寝るか」

【コンコン！…！】

（タイミング悪いすぎだろ…）

動ける状態ではないので、どうぞとやって入るよう促した。

「……」

「おお、連じゃねえか」

いつもの明るい顔は消えていて、沈痛な顔していた。

「あのさ、秀…」

「連、先に言っとくけど謝んなよ」

「っ!!な、何でだよ!?!」

「あれはただ約束を守っただけなんだ」

「でも、お前をこんなにボロボロにしたのは俺なんだぞ」

「傷なんてあくまでもオマケみたいなもんさ」

「……はあ、そんな風に言えるのも秀らしいっていうか、バカなのか」

「おい、けなしてんなら今すぐ謝れ」

重い空気が一気に晴れるように二人は同時に笑った。  
こうして笑えるのも秀と連なのかもしれない。

「それだけ元気なら大丈夫そうだな」

「ああ、体が丈夫なのは取り柄の一つなんでね」

「じゃあ、俺は帰るは来た目的を潰されちゃあ意味ないしな」

「ははは、そりゃそうだな」

部屋から出る時にドアノブに手をかけ、少し立ち止まった連は謝罪の言葉ではない言葉を秀に言っつて部屋を後にした。  
謝罪とは似ても似つかない言葉

“ ありがとうな…秀 ”

「う……あつたあつた」

四十六話 氷獣王？（前書き）

夏バテしんどくてたまらないです、 - -、（

## 四十六話 氷獣王？

激動の1日から2週間が経ち、秀も体を動かせるようになっていた。しかし動かせるようになったと言ったって、病み上がりなのには変わりなく、仕事のほとんどが軽いものにわりあてられていた。

しかしその分、みんなにその分が割当てられることに感謝の気持ちでいっぱいだった。

そんな日の1日のなか、食堂で飯を食べようと向かっている時になやらにぎやかな声が聞こえてきた。

「どうしたんだ？そんなにワイワイと声を出して」

「あ、秀さん見て下さい、この子」

5人が囲んでいた正体は猫ほどの大きさのになった氷獣王だった。

「あらま、結局こんなサイズになっちまったんだな」

<はい、なんだか自分がとても悪いことしていらしたので、これからはみなさんの役にたてるように頑張ります>

サイズだけではなく、口調までもがえらく小さくなった氷獣王、なぜこんな感じになってしまったのかは1週間に遡る

#### 一週間前

まだ傷の手当のために、レーガル城にいた時に連がラウルに呼ばれているという情報を聞いた秀は興味半分でその呼ばれている部屋に入った（潜入）

部屋に入るとラウルと連の二人ともが秀に気づいた。

「おいおい、怪我人は寝てろって」

「大丈夫さ、傷自体は治ってるから問題はないさ、それよりラウル、いったいどうしたんだ？」

「それはこいつが持っていたこれが原因だ」





「いや、それぐらいは分かりますよ……」

「簡単に言えば氷獣王の魂だと思ってくれていい」

「その牙のことは分かりましたけど、俺を呼んだ理由が分からないんですけど……」

部屋の空気が重くなる、連もどこかしら暇なのだろう

「なーに、お前さんの意志を確認したかっただけさ」

「俺の意志……?」

「お前、氷獣王と精霊契約してみないか」

「……」

「……」

「今すぐには言わないが、できるだけ早く答えを出してくれ  
ありがとう」

宿屋・テラス

「はあ――――――」

「ず、ずいぶん長いため息だな……」

テラスには秀と連の二人、連が話したいということでテラスに  
来たのだった。

「なあ、俺はどうすればいいんだろ」

「それを決めるのはお前自信だ、他の誰でもないお前なんだ」

「なあ秀、お前が精霊契約した意図は何なんだ」

仲間のみんなには精霊契約をした意図を話していなかった。

話していないというか、話したくなかった、逃げるためにだけに精霊契約したなどとは言いたくなかった。

「ま、まあほとんど成り行きさ、意図なんてもんはなかったさ……  
けど、俺は精霊契約してよかったと思うよ」

「その理由は？」

「誰かを守れるようになったからさ、俺はやっぱり誰かが傷つくのは嫌だから」

「はははは、秀らしい理由だな……でも、それって凄いやと思うよ」

「凄いか？」

「凄いや、精霊契約をゼファのように悪用する奴もいるくせに、お

前は一切そんな風にっかつたりはしない」

「それはラウルだっぺ一緒さ」

「じゃあ、言うよラウルにも言えることだし、秀お前にも言えたことなんだぜ」

「そりゃどうも」

「はあー、俺にもできるだろうか」

不安がる連、やはり精霊契約という未知のことにやるかどうかの選択を迫られれば当たり前前の反応ではある。

「なあ連、俺と戦った時のこと覚えてるか？」

「え、まあ乗っ取られていたとはいえ結局ベースは俺だからな」

「なら俺と戦った時のことをもう一度思い出してみな、そうすれば答えが見つかるかもしれないな」

「あの戦いを思い……出す」

「おっと、決めるのはお前自信だったな、じゃあ先に戻るわおやすみ」

片手を軽く上げながら部屋に戻っていく秀。

そしてその秀に言われたことをリピートしている連

夜明けにはまだまだだった。



四十七話 契約者きたる（前書き）

ストックしてたのを投稿しようと思ったら、いろいろと不幸が重なり投稿できませんでした f ( ^ ^ ;



四十七話 契約者きたる

次の日の朝の天気は快晴で雲一つなかった。

「ああ、何だか今日はいいことがありそうだな」

窓から身を乗り出して空を見て笑顔になる秀。

「やっぱり天気は快晴にかぎる」

レーガル城

「さて、昨日の今日で悪いが、答えは決まったか」

ラウルの問いに首を縦に振る連

「答えは……YESです」

「そうか、まあお前ならやってくれろと思ってたたぜ、付いてこい二人とも」

「……………」

連れてこられた場所は床、壁に不可思議な模様が描かれている場所だった。

「何なんだこの部屋は？」

「精霊契約用に作られた部屋だ」

ラウルの説明によれば正式に精霊契約をするときに使う部屋だと言  
う。

考えてみればシルフィーもそのようなことを言っていた気がする。

その部屋の中央に移動する連に牙を持たせた。

「さて、俺達は外に出るぞ」

「えっ、見守らなくてもいいの!?!」

「そっとうやり方なんだよ、俺とお前は違っけどな」

「いいか、俺達が部屋を出たあと、気を落ち着かせるんだ、そして  
牙に向かって出てこいと念じる」

それだけ言っとラウルは自分の腕を引っ張って部屋を後にした。

「にしても初めてだったな、精霊契約を正式にする部屋を見たのは」

「まああの部屋を使うのは久しぶりなんだけどな」

「へ？今なんと…」

「しょうがないだろう、ああいうタイプは珍しいんだからよ」

（ああいうタイプ？）

「物体に入ってる精霊だよ、精霊本体が消えたくないと思うことで、自分の存在を物体に移動するんだ、そしてそういう場合は「ういう部屋に持ってきてきて精霊契約するんだ」

「精霊が消えること何てあんの？」

「精霊契約してない状態で憑依し、その状態で戦いそして敗れると、精霊は存在事態が消えてしまうんだ」

「ちなみに過去ここを使用した人って何人いんの？」

「俺が知ってるかぎりでは5人だ、まあ作られたのは俺が産まれるもつと前のことだし詳しいことはわかんねえよ」

初耳だった。

「えっ、じゃあラウル以外にも精霊契約してる人がいんの!？」

「あのな、よく考えてみるよ、精霊契約してんのが俺一人だったらレーガルはとっくの昔に侵略されてるっての」

「ってか、ほかの奴は何してんだよ」

「ほかの奴だつてちゃんと仕事はしてるんだ、責めないでくれ、しかも今日にはその一人が帰ってくるしな」

「へえー、そりやぜひともお目にかかりたいね」

少し皮肉った口調で言った。

仕事はしてるとは聞いたが、前回ガリアが侵略してきた時に、誰一人として来なかったレーガルの精霊契約者、果たしてどんな奴なのだろうか。そんなことを考えているとラウルは時計を見ながら、秀に話しかける。

「悪いんだけど、あと任せていいか？」

「俺がYESと言つても思ってるなら考え直したほうがいい」

「頼む、アイツが来る前にラニアを…」

必死に頼むラウルには何も感じなかったが、ラニアと聞いた秀は考

えを変えた。

「おお、サンキューな」

「はあ、前言撤回だ、いいことなんて何もねえわ」

連Side

ラニアに言われたことを忠実にこなしていた。

(心を落ち着かせた後は、氷獣王を呼ぶか……よし！！)

(出てこい氷獣王!!)

ボン!!

「何だ？今何かが爆発音がしたぞ!？」

ラウルには入るなどは言われてもが、爆発音が聞こえて入らない方がおかしい。

「大丈夫か連!!」

「……………ほお、またもや獲物があるな」



ドカー!!

「悪ふざけすんな!!」

「いてて、やっぱりバレちまったか」

「当たり前だ、髪が黒のまんまだし、殺気がまったく伝わってこない、まあとりあえずお疲れ様かな」

「ああ何とか無事終わることができたぜ」

「とりあえず、今憑依してんなら早く解除しといたらどうだ」

「そうだな、んじゃ解除しときますか」

連がそう言つと、連から氷獣王とは思えないサイズ精霊が出てきていた。

「んーと……何それ？」

あまりにもあたふためいているため、こうなつた経緯を話した。

「なるほど、俺との戦いで魔力を使いすぎたと、そして戦いに敗れた時に全魔力と引き換えにそんな可愛らしい姿になつたってことか」

「まあ、そんなところだよなレオ」

「レオ？」

「ん？氷獣王の名前だよ、氷獣王ってのは個人的に嫌いだし、氷獣王も気に入ってくれたんだ」

「まあとりあえずは無事終了だな」

「これからどうする？やっぱ宿屋に戻るか」

「そうだな、精霊契約は無事終わったことだし、ラウルが言ったことが気になるし」

「ん？ラウルが言ったこと」

「ああ、気にしなくていい、宿屋に戻れば分かることだし」

## 宿屋

宿屋に着いた時、宿屋の前には異常な人ばかりができていた。

「何なんだ、この人だから？」

とりあえず人混みを掻き分けて宿屋に入るとそこにはラウルと金髪  
のかなり美形な顔立ちをした男

なにやらもめているようで、そこに来た新藤に二人が来るまでのこ  
とを聞いた。

20分前

「仕事中すまないが、ラニアは今どこにいる？」

「えっ、今は部屋にいますけど何か？」

「そうかありがとう、すまないが上がりさせてもらおう」

ラニアの居場所を知ったラウルは足早に部屋に向かった。

### ラニアの部屋

「ラニアいるか？」

「どつしたんですかお父さん？」

「まずいぞ、今日シグマが帰ってくるらしい」

「ええええええええええ！！」

悲鳴のような声が宿屋中に響き渡った時、一人の来客が訪れた。

「はっ！！もう来やがったのか、ラニア俺が時間を稼ぐからお前はそれまでに上手い言い訳を考えておけ」

部屋を出たラウルはすぐさま入り口向かった。

「やあラウル久しぶりだね」

「お前と会うのはいつぶりだろうか」

「おそらく1ヶ月近くは会ってなかっただろうな」

「ちゃんと任務は成功したんだろうな」

「成功したさ、なんせ私がいったのだからな」

「まあそうだな、さてつもる話もあるだろうし、食堂にでも行  
こうぜ」

「そうしたいのは山々なんだがなラウル、私が何故城に行かずここに来た意味はわかるだろう?」

シグマの言葉に急に黙るラウル

「ああ、そのラニアなんだがな……」

「部屋にいるのだから?さきほど受付の子に聞いたよ」

視線を新藤に向けるラウル新藤はぺこぺここと頭を下げていた。

「さてラウル、君とは後でじっくりと話すとして、私はラニアさんに会いに行くよ」

「ああそうだ、確か今日急に仕事のシフトが変わってな、今ラニアはここにいないんだよな」

語尾をわざとらしく強めて、新藤を睨むラウル

そのラウルに冷や汗を出しながら頷き続ける新藤

「おいおい、明らかに頷き方が不自然だぞ、もしかしてラニアさんはここに居るのか？」

「いや、いないって」

「お前を疑うわけではないが確かめさせてもらおう」

「おいおい女性の部屋にズカズカと入るのはどうかと思うぜ」

「聞き捨てならんな、ちゃんとノックはするぞ」

「いや、そういう問題じゃなくてだな…」

それからシグマを引き止めている時に、二人が来たということだった。



「なるほど、簡単に言えばシグマはラニアに惚れてるってわけね」

「いい加減にしてほしいなラウル、確かに自分の娘を大切にしたいという気持ちはわかるが、少し会うつぐらいいいじゃないか」

「だから今ラニアはいないんだよ」

「だから、それを確かめさせてもらおうと言ってるんだ……せやあ！  
！」

素早くラウルの足を払い、ラニアの部屋に向かうシグマを見たラウルは秀に動作で指示を出した。

“ラニアを連れ出せ”と

「シルフィー！！」

はい

宿屋を出た秀は急いでラニアの部屋の窓に行き、二階に飛び、窓をノックする。

「秀さん！！どうしたんですか」

ラニアの問いに答えずに秀はラニアをお姫様抱っこをして、シグマが来る前に部屋を出た。

「えっ、ちよつと秀さん」

「とりあえず、宿屋から離れよう、それでいいかな？」

「はい／＼／」

「よし、じゃあしっかりつかまってて、少しとばすから」

秀が宿屋を離れる寸前にシグマはノックし終わっていた。

シグマとラニアを会うことは防ぐことができた。

「ふう、ここまで来れば大丈夫だろ」

「ありがとうございます、わざわざ運んでくれて」

「いやいやどういたしまして、でも恥ずかしくなかったか、ずっとお姫様抱っこしてたし」

「いえ／＼あの…その…お姫様抱っこもそんなに悪くないなって思いましたし、まあ人によりますけど…」

どうも最期の部分が聞き取りづらかったため、とりあえず肯定すると、ラニアのかなり赤くなっていた。

「さてと、どいつするっ？じかんは時間はあるけど」

「あっ、じゃあどこかに行きませんか？」

「おっいいね、時間があることだしどこ行く？」

「あ、それならマナマ草原に行きませんか？」

「マナマ草原？まあ別に構わないけど、何かあったっけな」

「それは行ってからの楽しみですよ」

「ラニアの笑みが気になったが、行けば分かるとのことなら気にすることはないか」

マナマ草原

「さてと着いたはいいけど、ここで何をするんだ？」

「すみません、正確にはここから歩いたところにある泉に行きたいんですけど」

「ああ、それってもしかして森の中にあるやつかな？」

「えっ、知ってるんですか秀さん!？」

「知ってるもなにも、俺とシルフィーが出会った場所なんだ」

「そうだったんですか」

「んじゃ、行きますか」

二人は並んで歩いた、秀とシルフィーが初めて出会った場所へと…

一方その頃宿屋では

「遅い…遅すぎるぞラニア！一体どこに行ったんだあいつと」

「かなりイライラしてるねラウルさん」

「そりゃ、ラニアを連れ出すとこまではよかったけど、帰ってこないとなるとな」

「しかも男女で二人つきりときたもんだ、浅うちもとうとうか……」

「な、何言ってるの不埒な発言はやめてよね」

「あまいな新藤さん、男はみんな獣だぜ、それにもうじき日が暮れる」

いろいろな発言で盛り上がっている宿屋勢

ラニア&秀Side

泉に到着した二人はただ泉を眺めていた。

「いいですよねこの泉は見ているだけで落ち着きますね」

「うん、俺もそう思うよ」

「秀さんもそう思いますか」

「ところでラニア、この泉を眺めるために来たのかな？」

「それなんですけど…あまりに早く着いてしまいました、できれば夜まで待ちたいんですけど…」

「夜まで？別に俺は構わないけど…」

「ありがとうございます、では夜まで待ちましょうかと言いたいですか、少し時間がありますね」

ラニアの言う通りまだ日が暮れたばかりで、夜というにはまだ早かった。

「ふああ〜」

「何だか眠そうですね」

「最近いろんなことがありすぎてちょっと疲れてんだ」



それを聞いたラニアは頬を赤らめながら

「じゃあ予定の時間まで寝ませんか？あの……さっきのお返しで……ひひ、膝枕でもどうかかなと思うんですけど」

それを聞いた瞬間、秀の頭では変換作業が行われていた。

? 眠い 寝る 枕が欲しい

? 横に女の子がいる 枕をしてあげると言っている その女の子が  
ラニアである

? + ? || 男を瞬殺する兵器

「……………」

「どうしました秀さん？もしかして私の発言が気に入らなかったんですか」

「いやいや、そういうことじゃないさ、むしろラニアが膝枕してくれるなんてこの上ないことだよ」

（やべ、今俺スゲー変態発言しちゃった…）

「じゃあ、どうして黙ってたんですか？」

「そりゃまあ、俺の壁が果たしてもつかどうかと思ってる」

「壁？」

「気にしないでいい、てか聞き逃してくれたほうが嬉しい」

「あの最終的にどうしますか？するか、しないかで言っと」

さきほど黙ったのがよくなかったのか、ラニアはどことなく寂しそうな顔をしていた。

「まあやってくれるのなら、是非ともやってほしいかな」

「ほ、本当ですか／＼」

さきほどの寂しそうな顔が一転して明るい笑顔に変わった。

（あーあ、ラニアのああいう顔には本当に弱いな）

「秀さん…どうぞ／＼」

「えーと…失礼します」

スタンバっているラニアの膝にできるだけ衝撃を与えないようにゆつくりとラニアの膝に頭を乗せた。

正面には顔を赤らめているラニア

（こんな状態で寝れるか！！）

「秀さん、顔が赤いですよ」

「それはラニアだつてそうだろ」

「しゅ、秀さんの方が赤いですよ」

「いや、ラニアの方が赤いね……………ははははは」

「あはは、たまにはこういうのもいいですね」

「そうだな、最近ずっと忙しかったから」

ここ最近ラウルの特訓やらラニア&連との戦いなどでオフという日があまりなかった。

だからこそ、この一瞬、この一時がとても貴重な時間に感じられた。

「秀さん、一つお願いしていいですか？」

「膝枕をしてもらってるんだ、どんと来いって」

「秀さんがいた世界の話をしてほしいんです」

「そんなことでいいいの？」

「はい、秀さんのことあまり知らないなって思ったんです、だから知りたいんです」

「ラニア……わかった、あまり面白くない話だと思っけど我慢してね」

その日俺はラニアに自分の生い立ちを話した。

全てってわけではないけど、十七年間のことを大雑把にできるだけ分かりやすく話した。

自分のことを知りたいというラニアの気持ちにこたえられるように……

「とまあ、こんなところかな、ごめんな説明ばかりで」

「いえ、今の話で秀さんのことがわかった気がします」

「そりゃよかったよかった」

「あ、そろそろ時間ですよ秀さん、上を見ていてくださいね」

上を見上げれば、見えるのは木々だけで葉がかすかに重なっていいところから微かに空が見える光景だった。

「今の光景を覚えましたか？覚えたら目を閉じてください」

言われた通りに目を閉じた。

10分後

「目を開けてください秀さん」

「……………」

その時俺は黙っていた、いや、言葉が出なかった…

今まで見たことがない光景だった。

「青い星……………」



「星が青いんじゃないやなくて空が青いんですよ」

「えっ、空が青いのか……そうか、葉と葉の小さな隙間から青い星に見えるのか」

青い宝石がちりばめたような幻想的な夜空、今まで生きてきた中で一番綺麗な夜空だった。

「残念なことに後5分ほどしかこの夜空が続きません、ちなみに空が青い理由はまだ説明されていないんですよ」

後5分……こんなに綺麗な夜空がたった5分しか続かないなんて…

「じゃあ、その5分間でしっかり目に焼き付けときますか」

「ふふふ、そうですね」

その後俺とラニアは5分と限られた時間をずっと夜空を見上げていた。そして5分後、その幻想的な夜空は終わった。

「今日はありがとうラニア、あんなに綺麗な夜空を見せてくれて」

「い、いえ別にそんなたいしたことじゃないですよ、ただ一緒に来ただけですし」

「とにかく今日はありがとうラニア、さてそろそろ帰りますか」

起き上がろうと膝から頭を起こそうとした時、秀の頭をラニアが押さえた。

「ラニア？」

「お願いします秀さん……もう少しだけ……もう少しだけ……このまま  
でいさせて下さい……」

「別に構わないよ、ラニアが満足するまで俺はこのままでいるよ」

「秀さん……」

一時間後

「ふうー、ずいぶん遅くなっちゃったな」

「す、すいません」

「何でラニアが謝るんだよ、まだこの時間じゃ皆も起きてる時間だし、気にすることはないさ」

「あ、ありがとうございます、宿屋に戻りましょうか」

宿屋の前に着き、ドアの前でドアを開けようとした時だった。

「ただい…くほお…！」

「秀さん…！」

秀がドアを開けた瞬間にぶっ飛んだ理由はドアの前に立っているラウルを見ればわかるだろう。

「大丈夫かラニア、何か変なことされなかったか？」

「あ、いやそのお父さん……」

「そうかそうか、待ってるラニア、今すぐアイツを消してやるからな」

「お父さん！！私まだ何も言っていないですし、何もされなかったですよ……って聞いてない！！」

「ちょ、ちょっと待てラウル、まず落ち着いて俺の話聞いてくれ」

「ほかに言い残すことはないな……俺の炎の塵になれ！！」

「ら、ラウル……何で炎神爆炎槍があるんだ？」

「死ね！！」

「だああー、シルフィー物質憑依だ！！」

物質憑依をした秀はすぐさまラウルから全力で逃げる。

「くっ、待ちやがれ!!」

結局秀が命の危険を感じなくなるには、次の日朝までかかった。

## 四十八話 レーガル攻防戦

秀とラウルの一騒動から2週間

とある一室、暗闇の中にあるのは円卓と一本の蠟燭、さらに四つ椅子のみ。

そして蠟燭の微かな明かりでぼんやりと浮かぶ3人の顔が円卓を三角形で囲んでいた。

「例の件だが、着々と進んでいるようだな」

「ああ計画事態は問題ないのだが、一つ別の問題が出てきている」

「問題だと?」

「精霊契約者が二人確認できた」

「ほお、風の剣士の他にいたのか」

「一人は帰って来たと言っべきだろうな」

「なるほどシグマか…」

「もう一人は風の剣士の友人だそうだが、ちなみにそいつは氷獣王と契約してるそうだ」

「面白いじゃないか…よしそいつの相手は俺にやらしてもらおうか」

「ならば私はシグマとでもするが、お前はどいつするディア」

「ZZZZ……」

「おい！！大事な会議で寝るとは何事だディア」

円卓を両手で強く叩きディアを起す。



「うるさいわね、昨日レイラちゃんと遊んで疲れてんのよ、それに会議始めるのはいいけど一人足りないんじゃないの」

「心配ない奴ならもうすぐ来る」

一人の男の予想は正しく、それから一分も経たないうちに部屋のドアが開けられ一人の少年が入ってきた。

「はあ、はあ、すみません寝坊しちゃって遅れました」

「寝坊したことは確かにいかんが今日ぐらいは許してやろっ、さあお前も早く相手を選べ」

「相手ですか？」

少年が空いている残りの席に座ると、円卓の上に二枚の写真が置かれた。

「これは……一枚はラウルってのは分かるんですが、もう一枚の

「この少年は誰ですか？」

「この前の会議で言った風の剣士だ、おそらくコイツとの戦闘は避けられんだろう」

「じゃあ僕がコイツとやりますからディアさんはラウルで我慢してくださいね」

「私は別に誰でもいいけど」

「さて、では一時間後に作戦を実行だ」

パンパンと手を叩くと、四人全員が立ち、一人づつ部屋から出ていった。

レーガル侵略作戦まで後一時間

## レーガル城

「行くぜ秀!!」

ちやっかり物質憑依に慣れている連、魔力操作に関しては秀を圧倒的に上にいった。

「おいおい、ブンブン振り回してたって俺にはあたんねーぞ連」

「そうか…ならこれでどうだ」

一旦距離を置いた連はアイスニードルとアイスドラゴンを同時に放った。

「ぬおっ、マジかよ!?!」

(ちあどつする)

「んなもんにいちいち付き合ってられるか!?!」

アイスニードルとアイスドラゴンの猛攻をかわす秀、前に戦った時とはスピードアップしていた。

「もらったあ!?!」

一瞬の隙と隙間で一気に距離をつめるが、そこで終了の鐘が鳴った。

「よし終わりだ、物質憑依を解くんだ」

ラウルに言われた通りに二人は物質憑依を解く。

「さて今日これぐらいにしてささと宿屋に帰れ、俺だってお前達にずっとはかまってるられないからな、ガリアのスパイもみつか



に報告していたらしい。

その場で兵士を捕らえたはいいが、捕まる際に薬を飲んで自殺してしまっただけらしい。

つまり結局のところ詳しいことはわからずじまいになってしまったとのことらしい。

「何だか不気味だな、あれだけチェックが厳しいレーガルの兵士に成り済ますなんて」

「そうなんだよ、だからこれから今後のことについて話し合いなんだよ、ああめんどくせー」

「ホントにコイツが隊長でいいのかな？」

「ん？そんなに燃やされたいのか？」

「いえいえ、滅相もございません」

「さて、お前らと話してたらもう会議の時間になっちまったな」

「へいへい分かりやしたよ、んじゃ邪魔者達は帰りますよ」

ラウル嫌み口調で言われながらも連と秀は部屋から出ていった。

レーガル侵略作戦まで後30分

レーガル城を出て歩いている時、ふと空をみると雲行き怪しくなっていた。

(はぁー、降りやなきやいいんだけどな)

しかし秀願いも虚しく上空からは小雨が降りだしてきた。

「ありゃりゃ降ってきたやがったぜ、早く帰ろうぜ秀」

「そうだな、こりゃいつ本降りになるかわかんねえし、早く宿屋に帰るか」

雨が降りだしたためか、人々は各自の目的地へと向かい走り出している。

東西南北へ人が動く中で、二人も宿屋に向かい走り出していた時、秀はなぜかピタリと止まり来た方向の方角を見ていた。

「どうしたんだよ秀、早く帰ろうぜ」

「ん？ああ悪い今行く」

（何でだろう？確かあの人今……）

もう一度すれ違った方向を向き直したが、すでにさっき見た姿はなかった。



宿屋

「……………」

「どうしたんだよ秀、さっきから黙ってばかりだよ」

「さっきのことなんだけどね」

「さっきで、道端で急に立ち止まったことか？」

「ああ、さっき小雨が降ってたろ」

首を縦に降る連。

「小雨が降ってる中、一人歩いてる奴がいたんだ」

「はあ、そんな奴いくらでもいるだろ」

「傘もささずにだぞ」

「しかも奴は、レーガル城の方角に向かっていたぞ」

「おいおい、そんなのただの考えすぎだろ」

「……………そうだといんだけどね」

レীগアル侵略作戦まで後……………10分

レীগアル城を歩いていたラウルはどうやら会議が終わったらしく。  
ただただ城を歩いていた。

「結局決まらずじまいになっちまったな」

「へー、そう変わらずじまいだったのね」

「っは、誰だ……………お前は！！」

「どうもラウル、会うのはえーと……………まあそんなことどうつでもいい

わね」

「何しにきたんだ？わざわざ燃やされに来たわけじゃないんだろ」

「ええ、あなたを殺しに来たの」

「やってみるか？結果は逆になつてると思つぜ」

「試してみる？」

「ああ、行くぜルー、物質憑依だ」

臨戦体制に入つてる、物質憑依をして、いつものセリフを言う。

「俺の炎の塵となれ」

## 宿屋

「やっぱり気になる……俺ちょっと行ってくるよ」

「はあ？正気かよ秀、外見ろよ雨降ってんだぜ」

「いやでも、嫌な予感がしてしかたないんだよ、それじゃ」

「おい秀、ちょっと待てよ」

片手で軽く手を振ると、秀が出ていき、そのあとを連が追っていた。

宿屋を出て、レーガル城に向かっていた途中、なんとレーガルの兵士が倒れていた。

「お、おい大丈夫か!？」

「う、うう、気を……付ける」

「おい、しっかりしろ……一体何が……」

「お、何だここにいたのかよ俺の相手さんは」

「誰だてめえ？」

相手を睨む連

「ガリア帝国一番隊隊長クリフだ」

「ガリア帝国……」

「ああ！！お前はあの時、歩いていた奴だな」

「コイツが秀の言ってた奴か」

「ほう、気づいてたんだな」

「一体何しにきたんだよ」

「お前らに教えるつもりはない、じゃあな」

レীগアル城の方向に走って行くクリフだが、秀がすぐさま正面に回り込む。

「行かせると思っのかよ」

「残念だが君の相手は俺じゃない」

「?????」

「秀、上だ!!」

見上げると、上空から自分目掛けて降りてくる少年をとっさに後ろにさがりかわした。

「お、かわした、かわした、まあこれぐらいかわしてもらわないと面白くないけどね」

(ここで新手かよ…)

「クリフさん、僕は目当ての敵を見つけましたから、さっさとレーガル城に行ってください」

秀と連には目もくれずにレーガル城に向かうクリフ

「連、クリフを追え!!」

「言われなくてもそうさせてもらおう」

クリフを追うこと10分、レーガル城の噴水のある広場に着いた。

「どうしたんだよ、こんなところで立ち止まってよ、レーガル城に行くんじゃないのかよ」

「ん？ありゃ嘘だよ、言ったら俺の敵ってな」

「……………」

「まあそんな呆れた顔するな、せつかく二人っきりになれたのだから楽しもう」

「あんたって、こっち系の人……」

手を逆方向の頬にあてる

「違っわー!!」



全力で否定するクリフ

「まあいい、始めようかレーガルをかけた勝負を」

「レオ行くぜ!!!」

「こちらもいこうかナース」

クリフが呼ぶと、現れたのは石像のような精霊だった。

そしてナースはクリフに吸い込まれていった。

（ん、ただの憑依か？）

「モードスタンダード」

クリフがそう言うと、クリフが着ていた鎧が頭部までガードされた。

「それがあなたの物質憑依か……いくぜ!」

### シグマの部屋

任務から帰って来たばかりのため、任務中に届けられた書類と戦っていた。

「くっそー、ラニアさんと今日会おうとしたのに、書類とは誤算だ」

ラニアに会えないことをぼやいていた。

「すみませーん、新しい書類届けに来たんですが……」

「どうぞ入って」

「では……遠慮なく」

がちやりとドアを開けて、入って来た人物を見てシグマは驚いていた。

「お、お前は……」

「久しぶりだなシグマ」

「どうしたんだ任務が終わったのか？」

「いや、任務は終わってないな」

「はあ！？お前何言ってるかさっぱりだぞ？」

「簡単なことさ、任務は終わってない……今から任務を開始するんだからな」

背中に付けていた鎖を取り出す。

「な!？」

「まあ、楽しませてくれよ」

ドオオオオン!!

秀Side

「ははは、やっぱりラウルに信頼されてるだけあるよ、なかなかやるじゃないか」

「誉めていいのか、俺は誉められると伸びるタイプだから、誉めると痛い目見るぜ」

「何だそりゃ、つべこべ言うな…いくぜ」

持っていた巨大な鎌を振り回しながら、秀に向かって走って来る。

（見えない……あれだけのバカでかい鎌をぶん回しているのに今鎌がどちらの手にあるかがわかんねえ）

（右か…いや左だ！！）

左側から襲いかかる鎌を天つ風で防ぐが、相手は巨大な鎌に遠心力がプラスされているため、勝負はみえていた。

「ぐあ…」

「勝機」

体制を崩している秀に、とどめをさそうとしていた。

「なめんなこのやろう!!」

完璧に体制が崩れていたが、無理矢理体を捻って風刃を放つ。

「くっ!!」

相手がひるんでいる間に体制を立て直す。

「やるじゃん、今のはちょっと危なかったかな……でも二度も同じ手はくわない」

確かに今のは体制を崩したということだけで突っ込んで来たっという話であって、二度も同じ手はくわないだろう。

「ならこれでどうだ」

複数の風刃を相手に向かって飛ばす

「こんなもんだっての」

飛んできた風刃をかわそうとするが、風刃は手前で曲がり秀の元に戻ってくる。

「あれ？」

「あたんねー技を出すかよ、この風刃は風を量を増やすためだ」

風刃を放った直前に風をすでに発生させておき、さらに戻ってきた風刃をプラスし風を大量に発生させた。

「旋風束縛陣！！」

「な、動きがとれねえ」

「いくぜ」

天つ風を引つ提げ相手に向かって走る

「喰らえ空破激!!」

「なめるなあ!!」

バチィ!!

「ちっ、まさか旋風束縛陣が解かれるなんてな」

相手の大鎌とつばぜり合いになるが、遠心力がないため弾かれることはない。

「聞いたいてやる、目的は何なんだ」

「目的?そんなの殺人兵器を破壊するためだ」



「殺人兵器……断罪の雷のことか！」

「そうだ、知ってるだろレーガルのスパイ事件」

敵の言葉を聞いた秀の顔からは冷や汗が出ていた。

…まさか、スパイの狙いつて……

「分かったようだな、今回の作戦が」

「断罪の雷を破壊するつもりか」

今回の作戦が分かった秀にたいしてニヤリと笑う

「覚悟はいいか………そついや名前知らないな」



ラウルSide

「どうだまだやるか？」

ニヤニヤと笑うラウル、戦況はいうまでなくラウルがディアとレイラを圧倒していた。

「くっ、まだやれるわよ」

「止めとけよ、いくら屍契約だからといっても、永遠に爆発的なパワーが使えるわけじゃないんだ、それにそれ以上その子を傷つけるつもりか？」

「な、レイラは戦いたいから戦っているだけよ」

「嘘つけ、あんたが屍契約だつてことぐらい分かる、レイラだったっけ？その子は……」

「うるさい、黙りなさい！..」

ラウルが何を言おうとしているのかわったのか、ディアは必死にラウルの言葉が聞こえないようにする。しかしラウルはそんなディアにかまわず続けた、現実をディアにつきつけるために…

「その子はもう……死んでるんだよ……」

「ば、バカね、あなたには見えないの？ほらちゃんとここにレイラはいるじゃない」

「それはあなたの思いとあなたの負が生み出した偽者だ、本体はレイラだが本当レイラじゃない」

「嘘よ…ちゃんといるじゃない、レイラは生きてるのよ」

「いい加減にしろよ、レイラは死んでるんだよ、早くレイラを成仏させやれよ」

「いや…嘘よ…レイラは死んでなんか……いやあああ……！」

ラウルの言葉にディアは膝をつき、そのままディアは泣き出してしまった。

「さてと泣いてる女に手は出したくないが…敵だし、屍契約してるし…仕方ねえ気絶してもらっか」

槍を構えてゆっくりと歩き出した。

「……………わよ」

「ん？」

「死んでなんかないわよおおお！…」

「な！？ディアに負が…」

その場で叫び出したディアに負が集まり、ディアにどんどん吸収されていった。

「一体…何が」

「おおおおおー!!」

地を強く蹴ったディアはラウルの視界から消えていた。

「な!?! 一体どこに?」

辺りをキョロキョロと見渡したラウルだが、ディアの姿は見当たらない。

(くそっ、見当たらねえ、右?左?後?どこにいる?)

「どこを見てるのかしら?」

「上かよー!」

槍でガードしたものの、レイラの攻撃とは比べ物にならない。

「ぐっ…何て威力だ、本当に人間かよ」

「あはははは、あらラウル、この程度の攻撃で顔を歪めてたらダメ  
よ」

「なめんなあ!!」

走りながら槍に炎をまとわりつかせる。

そして一気ディアに向かって振り抜いた。

「火竜砕破!!」

槍から勢いよく出た炎は姿を竜に変えてディアに襲いかかる。

焦げた壁、焦げた床、熱によって溶けた窓、炎の竜が通った路には  
そのような箇所が多く残っていた。

「はあ、はあ、はあ」

「何だこの程度なのね大したことないじゃないのね」

「な、あの業火の中を通ったのか……」

「さようなら、ラウル隊長」

それは瞬間的なことだった、視界に入ったと思ったら視界から消え、その瞬間ラウル体はディアの腕が貫いていた。

「マジかよ……」



連Side

金属と金属がぶつかり合う音が広場にこだまする。

こちらの戦況は一言で言えばどっち付かずであり、まさに状況は均衡していた。

「アイスニードル!!」

「モードディフェンス」

放ったアイスニードルはクリフのいたる箇所に当たるものの、すべて弾かれ、ノーダメージという感じだ。

「どうせ無駄とは思ったけど、ここまでノーダメージだと、こっちの心が折れちまうぜ」

「仕方がないないだろ、こっちは防御重視のモードだぞ、範囲重視の攻撃でやられたら心が折れてしまう」

「ならこれでどうだ！…ツインアイスドラゴンズ！」

「な、何！？」

両左右から襲いかかるアイスドラゴンを見てもクリフはその場から動かなかった。

「モードフルディフェンス」

クリフの鎧が銀色に光輝いた直前アイスドラゴンが直撃したが、クリフに直撃したとたんにアイスドラゴンが砕け散っていった。

「ふん、大したことないな、氷獣王と契約してるといっても口だけだな」

「んだとてめえ！！」

「期待を裏切られたな……んじゃあなモードアクセル！！」

ハイスピードで動き始めるクリフ

「くそつたれ、速すぎ……があー!!」

「おいおい、どこを見ている」

(くそつ、マジでヤバイ……)

「まあ俺のスピードについてくるなんて10年早いかな」

(あれこの言葉どこかで………思い出した!この言葉は確か秀………)

レーガル城

「アイズドラゴン……!」

「こんなもんだたるか」

風力でスピードアップした秀はすでにアイスドラゴンの不規則な動きにたいしても対応ができていた。

さらに一気に距離を詰め、刃先を喉元にやった。

「くっそー、また負けた」

「当たり前だ、精霊契約したての奴に負けてたまるかってんだ」

「にしても秀のスピード反則だろ」

「まあ俺のスピードについてこようとしてるなら10年早いぜ、ついてこようとしてるならの話だけだな」

「え？」

「いいか、スピードなら明らかに俺の方が有利だ、だけど考えてみる……………」

(ふうー、脱力、脱力だけを考える…)

ハイスピードで移動している、クリフに目もくれずに両腕を下げた。

(ふ、とうとう覚悟を決めたか……なら)

「死ね!!」

完全に後を取ったが、クリフの攻撃は連にはとどかなかつた。

「捕まえたぜ!!」

「な、何!？」

「喰らっつけ、アイスドラゴン!!」

(ヤバイ、モードチェンジが間に合わ……)

「ぐお!!」

アイスドラゴンが直撃したクリフは地面に叩きつけられた。

「口だけのやつにやられる気分はどうだ」

「なめるな……アクセル!!」

再びハイスピードで動クリフだがさっきの攻撃を防がれたことではなかなか攻撃ができないでいた。

(くそ、何で奴は攻撃を防ぐことができたんだ……迷っただけでも仕方がない一気に行かせてもらう)

今出る最大のスピードで連をかき回そうとするが、連の目はクリフ

を追いかけてよとせよ、その瞳はただまっすぐを向いている。

(奴に惑わされるな、脱力するんだ俺)

脱力しながらも思い出すのは秀の言葉

(たとえばスピードが上がったとしても、お前のスピードが落ちたわけじゃないから、お前の行動の体感スピードが落ちるはずがないんだ)

だから

《自分のテイトリーだけを考えろ、今のお前なら相手がどこから来

るなんて手にとるように分かるはずだ《

「喰らええ！！」

「へへへ、秀の言う通りだったな凍りつけ！！」

「しまった、足を！」

攻撃場所を読み、その攻撃を紙一重でかわし、足を凍らせていた。

「お前の目的を話してもらおうか」

「そんなことを俺が話すとても」

「なら気絶しとけ！！」

「俺に時間を与えたことを後悔しなフルディフェンス！！」

「そうそれでいい」



「何だと!?!」

「お前のその硬え防御を打ち破ってやるぜ、レオいくぜ!?!」

はい、絶対にやってやりましょう!?!

身体中の魔力を両腕に集め、次の一撃に全てをかける

「獅子十字撃!?!」

クリフ目の前まで軸足を踏み出し、バックブローを腹部に直撃させる。

(ぐっ!!何て威力だ)

「まだ縦軸が残ってるぜ!?!」

相手に方向に全体重をかけるように倒れ込みながらバックブローをかました箇所を腕を叩きつけ、攻撃を入れた箇所は十字に凹んでいた。

「バカな…この俺のフルディフェンスを…破るとは……皇…帝申し訳ありません」

「皇帝？おい皇帝って誰何だよ、お前の目的は何なんだよ」

クリフを揺さぶるが反応は全くない

「一体どうなってんだよ…」

「待て、待つんだフォン」

シグマが静止をかけるもののフォンと呼ばれた人物は止めることなく無言で鎖ぶん回す

「仕方ないか…ネクス物質憑依だ」

ネクスと呼ばれた天使のような精霊は壁に立て掛けてあつた盾に憑依した。

「イージスの盾、防御力ならクリフのフルディフェンスを越える盾か」

低いトーンでシグマの物質憑依を確認するように呟く。

「一体どうしたんだフォン、何でこんなことをするんだ」

「生物が生きている限り争いなど一生なくならないだろう」

「私が言ってることはそんなことじゃない」

「じゃあどついついことだ？」

「レーガルの隊長であるお前がなぜこんなことをするんだ」

「レーガル？そんなこと知るか、今の私はガリア帝国六番隊隊長だ」

「それは本気で言っているのか？」

「本気だから今お前と戦っているのだろ！！」

鎖をぶん回し、シグマに攻撃するが、イージスの盾により簡単に防がれてしまう。

「そうか、なら仕方がない……………私自ら貴様にお灸を据えてやろう」

「やってみるよ、もう昔の私ではない」

秀Side

ラウル、シグマ、連が激闘を繰り広げている頃、秀は敵と座り込みながら雑談をしていた。

「ってなことがあってよ俺からしてみればたまったもんじゃねーよ」

「分かるよそれ、学校あるあるだよな……………って何してんの俺達!？」

「いいじゃないか、日本人会ったのが久し振りなんだ少しぐらい話をしてもいいじゃないか」

「ダメだ、ラウルもシグマも連も戦ってるんだ、俺だけ敵とおしゃ

べりなんかしてられない」

「さっきまでのってたくせに」

「うっ！！それを言うなよ……………まあ仕切りなおしといきますか」

立ち上がり両者はそれぞれの武器を構える

「疾風」

クリフのアクセルモード以上のスピードで動く

「速いねえ、クリフさんより全然速え……………でも対応出来ないスピードじゃない！！」

「な、何！？」

「影縫い」

鎌の柄の部分で天つ風を受け止め、なぎはらい秀と距離を空けるとすぐ鎌を上にはり投げた。

放り投げた鎌は秀の影に刺さった。

「どこに投げてんだよ」

「お前の影に対して投げたに決まってるだろ」

「はあ？お前何言ってる………あ、あれ、体が動かない！！」

「残念だったな、これが影縫いの能力でな、生物の影に鎌を刺すことで影の持ち主は動けなくなることにプラス、魔力を強制的にオフの状態にする」

「マジかよ、そんな反則的な能力があるなんて……」

「さて、これで決まったもんだぜ」

ゆっくりと秀の方に歩み寄る真也

「くっ…っ、動かねえ」

「ここからは一方的な暴力だぜ」

右フック

「痛っっっっ」

左ストレート

「っっっっ」

鳩尾をえぐるボディブロー

「ぐっ！！」



そこからは一方的な暴力だった。

真也の言う通り魔力をオフ状態にされ、風を出すことも魔力で身体強化さえ出来ない

そんな状態で行われる一方的な暴力

「はあ、はあ、はあ、」

「お前凄いな、あれだけの攻撃を受けてんのにまだ意識があるなんてな」

「うっせ、丈夫なのは取り柄なんだ」

口ではそういうものの秀の意識は朦朧としていた。

「なあ秀……………ガリアに来ないか」

「何だと…」

「お前だけとは言わないさ、お前の仲間だって来ればいい、俺の権限ならそれぐらいできるんだぜ」

だから来いと言つ真也

「……………それはできない」

「それは何故？」

「俺達がこの世界に来たとき、いきなりカースに教われたんだ、その時ラウルに助けてもらったんだ」

「それだけか？」

「んなわけねえだろ、助けてもらったのはラウルだけじゃない、特訓をつけてくれたシリルにこの世界に来て右も左も分からない俺達に優しく教えてくれたラニアに違う世界から来た俺達に分け隔てなく接してくれたレーガルの人達」

口によれば出てくる人達、その全ての人達が支えてくれた。

いろんな人達が支えてくれたから今の自分達がいる

だから

「その人達のためにも負けられないんだ!!」

「なるほどな、だから答えはN oということか」

「ああ、だから俺は戦う」

「ならしかたがない影縫い解除」

秀の影から大鎌を自分の手に戻し、大鎌を振り回し始める。

(はあ、はあ、はあ、動けるようになったはいいがどうすりゃいいんだ)

アイツ強すぎでしょ

大鎌をぶん回してくる真也の攻撃を天つ風で防ぐが今の秀の状態ではもはやぶっ飛ぶという域までいった。

(くそっ、どうすれば奴に勝てるんだ……俺にはもう真也の鎌を防ぐ術がない)

「どうした？負けられないんじゃないのか」

「……………」

(俺にできるのは無いのか……………俺にはアイツに勝てないのかよ)

大丈夫、秀なら絶対勝てるよ

「シルフィー……………だなやってもないのに諦めんのはダメだな」

そうだ、そうだーその意気だよ秀

「何ボソボソしゃべってやがる」

「疾風！！」

「ちっ、逃げられたか」

「にしてもアイツに勝つにはどうすりゃいいんだろっな」

秀が一番得意な戦術でいけばいいじゃん

(俺の一番得意な戦い方か……………)

「よっしゃ、行くぜシルフィー!!」

あ、何か思いついた顔だね

「ああ、考えたら初めっから簡単なことだったんだ」

鎌を振り回しながら走ってくる真也に対して秀も走っていく。

「わざわざ死にに来たのかよ!!」

「違ーよ、疾風!!」

紙一重で鎌をかわし、真也に一撃を当てる

「ぐっ、俺の鎌を避けたのか？」

（違う、こんなスピードじゃダメだ、もっとだ、もっと、もっと速くだ…）

「何だ、いきなり秀の魔力が膨れ上がっていったやがる」

（もっと速く、もっと速くだ、全身の力を抜くんだ……風と一体になるんだ）

「な、秀の向かって風が吹いてやがる!？」

（風を感じる…五感全てで感じる）

(何だ……足がすくむ、震える、間違いない、今殺らなきゃ、殺られる)

風を再びを構え、秀に向かって走る、秀の息の根を完全に止めるために

「うおおおおお!!」

「行くぜシルフィー……」

うん!!

足を踏み出した時、秀は新たなスピードを得た……



「韋駄天」

(あ、あれ？秀が消えた！？)

真也がそう認識した瞬間、全身に激痛が走り、視界が揺らぎながら真也は倒れていった。

「何だ？一体何が起こったんだ…」

揺らぐ視界のなか秀を見つけ、秀を問いただす

「簡単なことだ、お前が反応できないスピードを出した、それだけだ」

「そ、そんなことが人間にできるわけが…」

「できたんだからしょうがないだろ」

その場へたりこみながら真也に答える

「そうか、そうだな、できるんだからしょうがないよな……あ  
ーあ負けちまったか」

地面に大の字になる真也を見つつ、秀は立ち上がり走り出す

「おいどこに行くつもりだ？」

「決まってるだろ、お前らの作戦を止めに行くんだよ」

「いいのが、止めをささなくて」

「えー、めんどくせーからいいや」

「んな！敵に情けをかけるてもりか」

「それで止めをささなくていいなら何でもかけてやらー、俺には時間がないからもう行くわ」

物質憑依を解いてレーガル城へ走り出す秀は一旦足を止め、真也に向けて言った。

「あ、この戦いが終わったらお前がレーガルに来いよ、何を思ってるかは知らないけど、ガリアが正しいか、レーガルが正しいかを話し合おうぜ俺達の仲間六人を合わせてな」

「はははは、秀って変な奴だな、まあそうだな、終わったらそうしてもいいかな」

「だろ、じゃあな」

「浅村 秀か……アイツならほんとに作戦を止めそうだな」

シグマSide

「どつしたフォン、昔とは違うんじゃないのか」

「うるさい……」

鎖をぶん回すが、イージスの盾に簡単に弾かれる。

「まさか、この技を出すはめになるとはな」

「どんな技だろうがイージスの盾には通じない」

「エターナルチェーン!!」

外見上変化が見られない鎖をまたもや振り回してくる

「こんなもんイージスで防ぐ」

鎖が飛んでくる方向を考え、イージスの盾を構えるが、鎖は盾に当たらず当たる前に方向を変えシグマの背後から襲いかかった。

「な、何？ちっ、」

ギリギリで鎖を防ぐが鎖の威力も間違いなく上がっていた。

「一体何が起こったんだ？」

「このエターナルチェーンは伸縮自在で、鎖を自由に操作できるんだよ」

「くっ、厄介な能力つけたな」

「おいおい、エターナルチェーンの能力はそれだけじゃない」

鎖を垂らした鎖が床に着いた瞬間鎖は床をすり抜けていった。

「んな!？」

「これがエターナルチェーンの能力だ」

「物質をすり抜ける能力か!！」

「」名答、さあせいぜいあげよ」

鎖を横にぶん投げる、鎖は壁をすり抜け、鎖はシグマの足元から出てきた。

「くっ」

イージスの盾で何とか防ぐが、予想外のところから出てくる鎖はかなり厄介だった。

(ここは一旦退くか…)

部屋から脱出したものの、鎖は休む暇をあたえず襲いかかってくる。

「逃げられると思ってるのか!！」

シグマが走っている廊下の床に穴が空けられ、シグマはその穴に落ちてしまった。

「ああ、ちなみにその下の廊下も穴を空けてるから気をつけてな」

「うおおあああああ~~~~~」

ラウルSide

ディアに刺されたラウルは急所はそれたものの、ダメージは大きかった。

「くう、はあ、はあ、」

「あら、まだ生きてるのね」

「悪いな…俺はまだ死ねないんだ」

「あなたの娘ラニアのことかしら」

「そつだ俺は誓ったんだ、もうあいつを泣かせないってな」

立ってるのがやっとなのにもかかわらずラウルは槍を構える。

それを見たディアも身構える。



「うおおおおお」

ディアに向かって走って行くラウルにおもわぬ攻撃が降ってくる。

「うあああああ」

「!?!?シグむあああ」

上から降ってきた(落ちてきた)シグマはみごと<sup>ごと</sup>にラウルに落ちた。

「く、やるようになったなフォン」

「おい、シグマ……………退け……」

「ん、おおラウル私をキャッチしてくれたのか」

「んなわけあるか!?!」

上から退くシグマに怒り心頭のラウル

「しょうがないだろ、フォンの攻撃から逃げた結果だ許せ」

「フォ、フォンだと……あいつが敵なのか……」

「！！ラウル危ない」

横の壁から出てきたエターナルチェーンをラウルを引っ張り、鎖の攻撃をかわした。

「ああ、おしい、もうすぐで当たりそうだったのにな」

上から鎖をつたい下りてくるフォン

「本当にフォンが……何で……」

「ラウル、今のアイツには何を言っても無駄だ」

「おおラウル、久しぶりだな、んん？随分な大げがだな、どこでで  
転んだか」

「うつせーよ、そんなことより勝負の邪魔なんだよお前ら」

「あら、そんな状態で戦っても無駄だと思っけど」

「うるせえ、やってみなきゃ分かんねえだろ」

「何をごちゃごちゃ喋ってるんだ」

鎖を背後から出し、ラウルを襲う。

「しまっ……」

「お前の相手は私だ」

しっかりとイージスの盾で防ぐ

「サンキュー、助かったぜシグマ」

「しかし、厄介な敵とあたったものだな」

「お前こそ、厄介な奴とあたったもんだな」

「ははははははは」

「何がおかしい」

「いや、こうしてシグマと戦うのも久しぶりだなと思ってな」

槍と盾を構えラウルが後ろにシグマが前にいく。

「さてとタッグマッチといこうかラウル」

「傷がけっこう深いからさっさと決めるぞ」



## 四十九話 レーガル攻防戦2

シグマが前を走り、ラウルが続くという形をとっている。

「バカめ正面から突っ込んで来るとは」

「二人まとめて終わらせてあげるわ」

そう言ってフォンは鎖を床に忍ばせ、ディアは地を強く蹴りだした。

「ラウル！突っ込むぞ！！」

「わかってら！！」

猪のように突っ込んで行くシグマとラウル

しかしすでに後ろに回りこんだディアはラウルの後ろを完全にとつた。

（もらったわ！！）

今度は心臓を外さないよう狙いを定め、攻撃を繰り返した。  
しかしその攻撃は意外な物によってラウルに届かなかった。

「!?!……………く、鎖!?!」

ディアが攻撃範囲に入った瞬間、床から出てきたフォンの鎖と激突してしまった

「くっ、邪魔しないでフォン」

「何だと、貴様がじっとしていればよかったんだ」

「内輪揉めしてる場合かよ」

ひと悶着の間に間を詰めていたラウルが前に出て、シグマが後ろに  
回る。

「いけラウル、後ろは俺に任せてフォンを倒せ!」

「任せとけ、お灸をそえるには火が必要だろ」

槍を構え火竜砕破を放つ。

「く、鎖よー!!」

鎖を自分の前に持ってきて盾に変える。

しかしフォンがそうするのは読んでいた。

鎖の隙間から槍を投げ、投げた槍はフォンの足下に刺さった。

(これは…炎陣爆炎槍か)

レーガルにいた頃よく見た技だったため、対処方法も知っていた。

「槍さえ抜いてしまえばこの技は発動しない!!」



そう言って、フォンは鎖で槍を抜いた。

「これでお前は丸腰だ!!」

「丸腰だが、想定内だ」

「!?!?...何でお前がそこにか.....ぐおっ!?!」

フォンの喉元を掴み宙に上げる。

「火竜碎破はもとよりお前の視界を限定させるため、そこから槍を投げて、すぐに移動したってわけだ、お前なら間違いなく槍を警戒しすぎて俺には気づかないと思ってな」

「くっ、何故俺が貴様なんかに!!」

「レーガルを敵にしたことを後悔しな」

「くっそおおおお」

「紅蓮霸王拳！！」

魔力を込めた拳でフォンの腹部に殴ると爆発を起こし、フォンはその場で崩れ落ちた。

「おい、後任せていいかシグマ」

大の字になって倒れ込むラウル

「ふ、任せておけ」

「あらかの相手はあなたなのね」

「ふむふむ、屍契約か」

屍契約というのが気に入らなかったのか、ディアは眉間にシワをよせ、シグマを睨み付けた。

「おいおいそんなに睨まないでくれ」

「うるさいわね、さっさと勝負するわよ」

また地を強く蹴りハイスピードで動く。

「早いな……………だが」

かなりのハイスピードで動き、シグマを攪乱する

「反応できないスピードではない!?!」

ディアの方を向き、攻撃を防ぐ。

「やるわね、でも守ってばかりじゃ私には勝てないんわよ」

「そうだな、では攻めさせてもらおうか」

そう言ってシグマが盾をディアに向けた、すると…

ぼっっ！！

「床がへこんだ!？」

ディアの足下がへこみディアは足をとられてしまう。

バランスを崩したディアを見逃さず、イージスの盾から魔力を撃ち出す。

そして動けないディアはかわせず直撃する。

「きゃあ…!」

吹き飛んだディアは空中で体をうまくひねり足で着地するが、着地した床もすでにへこんでまたもや足をとられる

「な、何なのよ一体？」

「神通力さ」

「じ、神通力ですって!？」

「イージスの盾は防御ももちろんだが、盾を持つことによって神通力を発生させることができるんだ」

「そ、そんな!？」

ゆっくりとディアに近づくとシグマ

「くっ、卑怯よ正々堂々戦いなさいよ」

「死んだ娘を屍契約した奴に言われたくないな」

「あなたまで死んだと言うの……………」

「私は屍契約を許せないんだ、死んだ人をこの世にしばらくつける禁術」

「……………」

「ん、だんまりかな？」

「……………はい……………」

下を向いたディアは微かに聞き取れるほどのボリュームだった。

「聞こえないな……………」

ディアが何を言ってるかを聞くためにさらに近づいた時だった。

「な！？ディアに負が集まっている！？」



「あはははははは、消えろおおおおお！！」

突っ込んで来たディアに向けて盾を構え攻撃に備えるが、ディアの拳はイージスの盾を貫き、シグマの腹部を貫いた。

「くっ！」

吐血したシグマから拳を引き抜きトドメをしようとする

「くっ、出力最大！！」

神通力の出力を最大にし、ディアの足場どころか、床、天上、壁、壁にかかっている灯りを灯す蝋燭や絵画など全てが歪んだ。



「へえー、すごいじゃないこんなことができるんだ」

歪んでいるのにもかかわらずディアは平然としていた

床、天上、壁などが歪みディアの感覚を狂わす技だが、ディアは笑いながら立っている。

「これがあなたの限界かしらね………いくわよー!!」

強く地を蹴りハイスピードで動くが、さきほどとは比べものにならないほどのスピードになっていた。

「何てスピードだ、まったく反応できない」

次の瞬間、後方からの攻撃を受け、振り向いた瞬間また後方からの攻撃を受ける

それをリフレインし続けること5分、シグマは片膝つくほどのダメージをおっていた。

「こんなところで負けるわけには……」

「終わりよー!」

(くっ、ここまでか…)

死を覚悟したシグマは目を閉じたが、その時のディアの攻撃はとどかなかつた。

一人の少年によってディアの攻撃は阻まれた。

「お前は……」

「あんたは……」

「レーガルの隊長がへばるなよ」

「ラニアさんをたぶらかしている諸悪の根源!!」

「長ーし、違うわ!!」

しっかりとつくほどツツコミは入れる秀

「一人増えたところで変わらないわよ」

「前の俺とは違つぜ」

「浅村、相手は桁違いのスピードで動くぞ、動き出したら最後だ、早く行け!!」

「残念ながら、もう動いちゃうからね」

またもや桁違いのスピードで動くディア

「こりゃ速えわ……………けどな……………」

「スピード勝負じゃ負けねえよ、韋駄天!!」

「な!?!浅村が消えた……………」

シグマがそう認識した時には秀はディアの首根っこを掴み、床に全身を叩きつけていた。

「私のスピードに対応したの!?!」

信じられない顔をするディア

自分のスピードについてきたことに信じられなかったのだろう

「何が起こったんだ!?!」

「言ったら、前の俺とは違っつて」

「う、うぐっ、離しなさいよ!?!」

「おいおい、暴れんなよ……………旋風束縛陣！！」

「くっ、動けない！？」

「ふー、そこでじっとしてな」

旋風束縛陣でディアの動きを封じると、シグマに手を差し伸べる。

「立てるか？」

「ああ、すまないなか……………！？浅村、後ろ！！」

完全に油断していたためか後ろから襲ってくるのには気付けなかった。

しかし、シグマの声が聞こえたにも関わらず、秀は後ろにすら向か  
なかつた。

「ママを離せええ!!」

「ガキは凍つとけ!!」

「あああああああ」

秀が後ろを向かなかった理由、それは連を信頼していたからだった。連なら絶対にやってくれる、そう思える仲だった。

「さて、これでガリア側の敵は全員潰したぜ」

風による束縛で身動きがとれないディア

首より下が氷づけにされているレイラ

「でもどうするよこの二人」

「それなら任せとけ、私がやるっ」

立ち上がってディアの所に行き、イージスの盾をディアに向けた。

「お、おい殺すことないじゃないか」

「安心したまえ、殺したりはしない、逆に救ってやる」

シグマの言っている意味がわからない二人

「シグマのイージスの盾はほんと特別なんだよ」

「ラウル！？大丈夫なのか？」

「ああ、傷口は氷で止血してくれてるからな」

「そっか……………んで、特別って何なんだ？」

「お前確か負を打ち消したことあるよな」

コクリと頷く秀

「基本的に精霊契約してる奴は負を打ち消せるのは知ってるよな」

「ああ、だけどカースのような負が深くまで入りこんでいる場合には適応できないんだろ」

「ああ、しかもあれは魔力をかなり使うし、今回はディアのように屍契約だ、普通はこちらの魔力が足りなくて負を打ち消すことなんて無理だ」

「じゃあ…」

「まあ見てれば分かるさ」

再びシグマに目をやると、完全に集中していた。

やがて構えている盾に魔力が集まっていく。

「何するつもりよ」



「お前を助けてやる」

シグマがそう言うと、イージスの盾から一本のチューブが放たれ、ディアに刺さった。

「うっ!？」

「おいおい!？大丈夫なのかあんなことして」

「まあ始まるから見てな」

ディアに刺さったチューブからイージスの盾へと黒い物が流れていく

「もしかしてあの黒いのって……………」

「ああ、負だ」

「大丈夫かよ、負を自分の方に流して？」

「大丈夫さ、シグマは負を変えるだけさ……………魔力にな」

「んな！？そ、そんなことが出来るのかよ!!！」

シグマの方に目をやると確かに流れていく負は、イージスの盾で魔力へと変えていた。

「イージスの盾は負を魔力へと変えることができるんだよ」

「でも屍契約だぜ？」

「屍契約ってのは誰かが死んだときに、その死を受け入れられないという負の感情が引き起こすもんだ、だから負を消すことで強制的に受け入れられないから受け入れるへと変えればいいんだ」

「変えればいいって……………」

「まあんなことが出来るのはシグマしかいねえけどな」

ひたすら負を魔力へと変えていくシグマ

ディアの方もディアを包んでいた負が薄まっていき、  
やがてディアを包む負はすべてシグマの魔力となり、

ディアはその場で倒れ、レイラは煙のように消えていった。

「これで…終わったんだな」

「いやまだだ、まだ終わってねえ」

「どづいづことだ？」

「今回のガリアの目的は断罪の雷にある」

「説明してくれ浅村」

首を縦に振り、真也が言ったことを説明した。

「お前そういつことは早く言えよ」

「でもガリア側の敵は全員倒したから問題ないんじゃないの」

「しかし何でガリア帝国は兵士を使わなかったんだ？」

「そうだなそれは確かに気になるが、いないもんはしゃーねーだろ」

「まあそうだな、ではこれからどうする？」

「街の復旧作業だろ、どこの誰かさん達が派手にやらかしてそうだしな」

ギクツ!! x 2

ラウルの言葉に縮こまるどこの誰かさん達

「まあ復旧作業には人手が必要だから、今日は復旧作業の費用の算出と街の人達の説明だな」

ピーピーピーピー！！

「ん！？何だこのバカでかい音は？」

「城内の緊急ベルだ！！」

《こちら放送部屋、増員を求めます、レーガルの……がぁ……  
……やぁレーガルの皆さんこんにちは》

「おい、嘘だろ……」

「い、この声はまさか……」

《ずいぶんとよくやってくれたなラウル、シグマ、浅村君に夜坂君》

「ジータ……シュバルツ……」

「司令……官……」

《まさか君達が四人全員倒したことに驚いたな………しかしそのおかげで作業がスムーズにできたよ感謝する》

「作業？」

《真実を知りたければ私の部屋で待っている》

通信が途切れ、俺達四人に静寂が包む。

「一体何がどうなってんだ？」

「行くぞシグマ………それとお前達は宿屋に戻れ」

「断る!!」

「んな!?わがまま言ってる場合か!!」

「別にわがまま言ってるわけじゃない」

「俺達は真実を知りたいだけだ!!」

「それがわがままだと言ってるんだ!!」

「戦力は少しでも多いほうがいいと思うけど」

秀の言葉に言葉を詰まらせるラウル

「ラウル、この子達もガリアと戦ったんだ、知る権利はある」

「……足引つ張んなよ」

「へ、怪我人に言われたくねえよ」





五十話 ジーダ・シュバルツ(前書き)

今回話しから短くなります)。(。)

五十話 ジーダ・シュバルツ

ジーダの部屋

「司令官!!司令官!!」

部屋の扉をノックするシグマ

「どござい自由」

扉をぶち破るラウル

「言う通り来てやったぜジーダ」

「ずいぶんお粗末な入り方だな」

「さあ真実とやらを来てやったぜ聞きに来てやったぜ」

「いいだろう、話してやるっ」

椅子から立ち上がり、四人の前へ進む。

「改めて自己紹介をしよう、ガリア帝国皇帝ジータ・シュバルツだ」

「し、司令官、何を言ってるんですか？」

「少し黙れシグマ……………話を続けるジータ……………」

「そもそも今回のガリア帝国の作戦は私が計画したものだ」

「……………!!!!!!……………」

「作戦事態はガリア側の四人をそちらの四人と戦わせ勝利したのちレーガルをパニックに陥れるつもりだったんだが、おもわぬ誤算が重なったものだ」

「俺達四人全員が勝利しちまったことか」

「ああまさか君達が勝利するとは思わなかったけどね、まあしかしなんとか私の作業がスムーズにできてよかったよ感謝する」

「ジータ……アンタの作業って断罪の雷を破壊するためか？」

「破壊？違うなそれは真也を計画に参加させるための口実さ目的はほかにある」

「お前、部下を騙してたのか？」

「騙すとは聞き捨てならないな、何かを得るためには部下に嘘を吐くことだってある」

「下衆野郎が!!」

拳を強く握りしめる秀

「ジータ、アンタの本当の目的は何なんだ？」

ラウルの問いにジータは少し間を開けてから答えた。

「俺は断罪の雷を手に入れる」

着ていた服のボタンをゆっくりと外していくジータ

「な、何だつて!？」

「何をバカなことを……」

「バカなことじゃないさ、おかしいと思わなかったのか断罪の雷が発動しないことが」

「あれはレーガルに浸入したスパイが故障させたのではないんですか？」

「はははははは、ガリア帝国の技術をなめないでほしいな、スパイがやったのは断罪の雷の奪取だ」

「どついつ意味だ!!」

「スパイが断罪の雷の魔法陣を一度容器に入れ、偽の魔法陣を置いたのさ」

ジータがそう言い終わるとボタンをすべてを外し、服を左右に開いた。

そしてそのジータの姿を見た四人は驚愕した。

「う、嘘だろ……」

「そんなバカな……」

四人が見た姿は……腹部に断罪の雷の魔法陣が描かれていた。

五十一話 手にした断罪

あまりにも信じられない光景に四人は言葉がでなかった。  
悪ふだけの場面ではないのはあきらかである。

「一体何がどうなってんだよ……」

「俺は今……断罪の力を手にした!!」

そう言って右手を上げ、その右手に光を集まった。

(これはヤバイ!!)

身の危険を感じた秀は風で四人が乗っている分の床を切り、下の階に降りた。

「うおおあああ!!」

「君達はそこで消滅するんだな……断罪の雷!!」



「韋駄天!!!」

全員を風で吹き飛ばし、断罪の雷の範囲から仲間を出したあと、韋駄天で秀も脱出した。

「ちっ、逃げたか、まあいいレーガルが崩壊していくのを見るんだな」

「はあ、はあ、はあ、サンキュー秀、マジで死にかけたぜ」

「まったく、断罪の雷が使えるなんて反則だろ!!!」

「「……………」」

黙り込むラウルとシグマ

「どっするつもりだ二人とも？」

「「……………」」

言葉がいまだに出ない二人

「連、いけるか？」

「もちー！」

「……………どこに行くつもりだ？」

「んなもん決まってるんだろ、あの下衆野郎を倒しに行くんだよ」

「無茶だ！相手は断罪の雷を使うんだぞ！！勝てるはずがない」

「だからって、レーガルが崩壊していくのを指をくわえたまま見てるなんて俺には耐えらんねえ」

「レーガルには俺達の仲間がいるんだよ」

ジータが力をふるえば、間違いなくレーガルは崩壊する

そして間違いなく多くの人達が傷つく

そして何より、大切な仲間が傷ついてしまう。

秀にとって、連にとって、耐えられなかった……………だからこそジータを倒しに行った

屋上

「この景色ともお別れだな」

景色を見ながら呟く

「んなこと言わずにゆっくりしてけよオッサン」

「何だ君達か……」

深いため息を吐くジューダ、あきらかにがっかりしている様だった。

「そんながっかりすんなよ、俺達もけつこつやるぜ」

「いいだろう、二人ともかかってこい！」

秀と連は物質憑依をして構える。

緊張感が漂うなか、その空気を二人の隊長が破った。

「おいおい、俺達を忘れんじやないぜ」

「そうだな、レーガルの危機には私達が立ち上がらなければなら  
ない」

「へっ、これで役者はそろったな」

「ああ行くぜ皆!!」

四人全員が物質憑依をして、全員が戦う準備は完了した。

この世界を救う戦いの準備を……………



五十二話 断罪vs四人(前書き)

そろそろ第二章が終わります

五十二話 断罪vs四人

一斉に違う方向に散らばり、それぞれの攻撃にうつる

「アイスドラゴン!!」

「ふん、くだらん技を」

光を放ち、アイスドラゴンにぶつけるとアイスドラゴンは消えてなくなっていた。

「離れる夜坂!!……………火竜碎破!!」

「ラウルよ、こんな技きかんよ」

火竜碎破もアイスドラゴンと同様、同じように消滅した

「シグマ、浅村、やれ!!」



「任せとけ、出力最大!!」

「風刃!!」

ジータの足場をへこませ、動きを封じ、秀が風刃を飛ばした……  
がしかし、ジータはその場で消えていなくなった

「んな!? 一体どこに?」

「ここだよ」

後ろで手を軽く振っていた。

「マジかよ……」

「俺達四人の攻撃を簡単にかわしやがった……」

「まだまだ、今度は四人同時攻撃だ!!」

ラウルの言う通り四人はそれぞれの技を構える

「火竜……」

「神の……」

「ツイン……」

「風よ……」

「無駄だ、何をやっても俺には勝てんぞ……」

「碎破……」

「砲撃……」

「ドラゴンズ!!」

「旋風刃!!」

四方向から繰り出される、炎、魔力のビーム、氷の竜、竜巻、全てが同時に入った。

「さすがのジータもこれでは……」

「はあ、最後にお前達四人の力がどんなものか確かめてやろうと思っただが、たいしたことないな」

四人の同時攻撃を受けても無傷のジータ

「ば、化物かよ……」

「くっそ、何で効かねんだよ……」

「お前達の力はもう十分分かった……もう消えな……審判の雷……」

（何だ！？空に無数の魔法陣が……）

「まずい！！断罪の雷が降り注いで来るぞ……」

ラウルの言った通り、空に展開された魔法陣からランダムに断罪の雷が降り注いで来る。

「おわわわわわ……」

降り注ぐ断罪の雷が確実にダメージを与えていく

時間が経つにつれ四人の動きが鈍っていった。

「ほー、審判の雷を発動しても一人も死なないとはな……………まあ  
気絶してる奴はいるみたいだけどな」

倒れているのはシグマと連で、それぞれそれ相応のダメージをおっ  
ていた。

「連……！」

「シグマ……！……………ジータてめえ……！」

仲間がやられたことに逆上したラウルはジータに突っ込んでいき、  
槍をジータの足元に投げ込んだ

「やめろラウル……！」

「業火……！」

「愚かなり」

ジューダの指から放たれたレーザーのようなものに貫かれ、技を出すことも、技名を言えないまま倒れた。

「ラウル！！！！」

「さて残りは君一人だ」

「くっ、韋駄……」

「遅い！！」

秀が動く前に、ラウル同様レーザーのようなもので足を貫かれてしまった。

「がああああ！！！！」

「これでちょこまかとは動けまい」

「くそ……」

屋上の端に移動するジータ

「今からレーガルを崩壊へと導いてやる」

レーガル上空に魔法陣があらわれた

「終わりだ、断罪の雷!!」

「させるかあああ!!」

断罪の雷の発生を防ぐのは秀だった。

足をはじめ、身体中がボロボロになりながらも断罪の雷を止めた。

「何故だ、何故レーガルを攻撃するんだ!?!」

「理由?そんなの簡単さ試したいのだよ」

「試したいだと?」

「君だって契約者だったら力を試したたる、自分の力がどれだけのものか」

「てめえはただ断罪の雷を試してるだけだというのか……」

自然に言葉に力がこもる

ジータのやっつてることが許せないからであろう

「何を怒ってるんだ」

「てめえのゲスイ行為にキレてんだよ」



「試す力が巨大であれば、試すのも巨大である必要があるだろ？」

その時、秀の中で何かが切れた

キレた原因は間違いなくジータの言葉

「的だと……………」

「……………」

「人が生きてんだぞ！！多くの人々が、その人達には何の罪もないんだぞ！！何で命を道具みたいに扱えるんだ！！」

「君にもいつか分かる日が来るさ」

「来ねえよ…………俺は少なくとも力をそんな風に使わねえ」

「それは残念だ……ふん!」

手を軽く振るうと、雷のように光が秀を襲う

「ぐああ!」

全身の力が抜けるように倒れる秀をジータは首もとを掴み屋上の端まで行った。

「この高さから人を落としたらどうなると思う?」

「……………」

一言もしゃべらず、ピクリとも動かない秀

「じゃあな少年……………」

ジータはゆっくりと手を離し、秀は地面に向かって落下していった。

( ..... あれ ..... 俺は一体 ..... そうか ..... 俺 .....  
..... 負けたんだ ..... )

( 俺は ..... 死ぬのか ..... まあいい ..... どうでもい  
いか ..... )

《諦めちゃダメだよ...》

( 誰 ..... だ？ )

《諦めちゃダメ、生きれる人が生を投げ出しちゃダメだよ秀……》

閉じていた目をゆっくりと開け、話しかけていた相手を見た。

《久しぶり……秀》

「……………凜！な、何で……………」

自然と目に涙がたまる

《感動するのは奴を倒してからだよ》

「でも凜……………アイツには……………勝てねえよ」

《大丈夫、秀は一人で戦ってるじゃないでしょ》

「ああ…そうだったな」

《秀はもう少し肩の力抜いて》

「一緒に戦おうか…凜」

落ちていく秀に凜が重なっていった……

地を強く蹴り、風の力を使い一気にレーガル城の屋上まで上った

「な、お前……………落ちたはずじゃ……………」

「……………」

「黙るかよ……………じゃあ消えな」

秀の上空に魔法陣を発生させる

「消える!!」

落ちた所から煙が出ていて、そこには秀はいなかった  
落ちた場所ではなく、ジータの真後ろにいた

「旋風刃……………」

「ぐあっ!!」

吹っ飛ばされながらも、ディアのように空中で回転して見事に着地してすぐさま攻撃に転じる。

「くっ、審判の雷!!」

「……………韋駄天」

あまたもの断罪の雷が落ちるなかで秀はその攻撃をかわしていた  
消えてまた現れるような速度で……………

「ば、バカな……………人間の動ける速度じゃないのに……………」

「遅いよ……………」

「しまっ……………」

一瞬で距離を詰めていた

「絶空剣・嵐……」

目にもとまらぬ速さで繰り出す斬撃でジューダを切りつけた。

「がはっ！……」

「……」

「……審判の雷！……」

「無駄だ……俺にはあたらな……」



「君にはあたらないが、他の人にはあたるよな」

ジータの言葉を聞いた秀は自分の方に魔法陣が出現していないのに気がついた

そして魔法陣が仲間の方の上空に出現していた

「下衆……………」

仲間のところ落ちてくる断罪の雷を全員を無理矢理担ぎ上げかわし続ける

だが三人を担ぎ上げることでプラスされる重量はスピードに支障をきたす

「そんなスピードじゃ、ダメだな……………それ」

指先から放たれるレーザー型の断罪の雷で腹部を貫かれる。

「ぐっ……………」

「こんなものじゃすませない」

腕、肩、足など一箇所ずつ貫いていった

まるでゲームを楽しむように……

「ふう〜、一時はどうなるかと思ったがなんとかなったな」

「……………」

「まあもつ答えることもできないだろうがな」

「……………」

「さて、これで邪魔者はいなくなった」

手を上空にかざし、レーガル全体をおおう魔法陣を出現させた。

「…………や…やめ…ろ」

「そつだ、最後に一つ教えてやる」

「……………」

「俺とお前の勝負を分けたのは、やはり人を道具として扱えるかどうかだな」

「な…………何だと…………？」

「実際そつだろ？あそこで仲間を見捨てていれば私を倒せたかもしれないのにな」

「ふざ…………けんな」

両拳で拳立てをするようにゆっくりと立ち上がろうとしていた。

「な、何故、立ち上がる……………」

「んなもん……決まってるだろうが……」

ゆっくりと、そして確実に足をつっぱり、体全身を起こした。

「てめえの計画は絶対に止める………なあラウル、シグマ、連  
……」

「ああ、お前の計画は………」

「私たちが………」

「絶対に………」

「止めてやる………」

「ば、バカな、私の計画を止めるといっただけで立ち上がったというのか……」

自然に足が後退ってしまうジューダ、その体は微かに震えていた。

「くっ、断……」

「撃たせるな！！寄れ！！」

レーガルを覆っていた魔法陣を解除し、秀達に断罪の雷をあびせようとするが、魔法陣を出現させる前に秀が詰めより、三人に指示をだす。

「アイスニードル！！」

「風刃!!」

「ぐっ……」

四人同様、ジータも手負いのため、十分に二人の魔法を消滅させきれなかった

「ラウル、シグマ!!」

「地よ沈め!!」

今度は沈んだ床に足をとられたジータを確認したラウル

全魔力を腕に込めるラウル、この一撃に全てをかけた……

「これで………終わりだー紅蓮霸王拳!」

「ぐああああ!」

フォンと同じようにその場に崩れ落ちていった…

五十三話 勝利の一時

「やった……のか」

「勝ったのか……俺達……」

自然と体中に震えがきた、だがこの震えは恐怖によるものではない、きつと喜びによるものによるものだろう

「……よっしゃーやったな、連、ラウル、シグマ」

「だな……」

「断罪の雷に……」

「俺達、人が勝ったんだ」

四人が一言ずつ言ったとたん四人は何かがきれたように四人同時に



意識が遠くなり倒れていった……

白い天井、ぶら下がる電灯、目が覚めた時には自分が居る場所がどこなのかは分かっていた

「なんか俺……何かが終わったらベット上ってパターンが多いな……  
……そうだ他の人は!？」

ベッドから身体を起こそうとした時、自分の足に重みを感じ、足に目をやると……

「……すうー……すうー……」

すやすやと寝息を立てているラニアがいた

「……………」

思考中……………

(なんだこの漫画みたいなシチュエーションは？神様が頑張った俺にくれたスイートタイムですか？)

軽く心臓をたたいて耐える俺と自分に言い聞かせた秀はラニアの肩を軽くゆさつた

「ラニア起きろ、起きるんだラニア!!」

「…ん……………ん？しゅ、秀さん？」

「おはよラニア」

軽い笑みでこたえる秀

「じゅじゅじゅじゅ」

（ええええええええ、ヤ、ヤバいこんなところラウルに見られたら今度こそ殺される……………）

泣き出すラニアをなだめようとした秀

「秀さん!!」

「..!!」

ラニアが……………抱きついてきた

「よかった、無事で……無事でよかった」

「ラニア……」

「びっくりしたんですよ、四人が重傷で運ばれてきたときには」

「ごめん、ごめん、今回ばかりはちょっとヤバい敵だったから」

「心配……したんですよ、秀さんがいなくなってしまいそうで……」

腕に込める力が強まるラニア

「誓っよ」

「えっ？」

「もう君を泣かせたりはしないと」

「……秀さん／＼／」

「だからそろそろはなしてくれないかな……………傷口が痛い……………」

「きゃああ、すいません、すいません」

ひたすら頭を下げ続けるラニア

「あ、そつだほかの皆の容体は？」

「安心して下さい、みなさん無事ですよ」

「そつか……………よかった」

「安心しましたか？」

「ああ……………いててて」

起こした身体を再びベッドに沈めた

「ゆっくりしてて下さいね、じゃあ私は帰りますね」

ラニアが部屋から出て行ったあと、あの時のことを思い出していた……レーガルから落ちていく中で凜に会った時のことを……

（あの時、俺は確かに凜に会ったんだよな……でも気づいた時には凜はいなくなっていた……どうしてだ、どうしてなんだ凜……）

< ねえ秀、聞こえてる >

「ん？何だシルフィー」

< 聞こえてなかったんだね >

「悪い、悪い、考えてごととしてな」

< 考え事？さっきまでラニアと乳練り合ってたくせに >

「んな？バカなこというんじゃないか！」

> あははは、冗談だって、言いたいことはほかにあるんだ<

「それを早く言え」

> 秀がレーガル城から落ちる時、秀に必死に声をかけたのにまるで聞こえてないようだけど何かあったの？<

「あれ、そうだったんだ、全然気づかなかったよ」

> おかしいな、私たち精霊は契約者の意識に直接語りかけてるんだから気づかないはずないんだけどな<

「まあいいじゃねえか終わったことだし、今こうしてシルフィーと喋れてるじゃないかそれでいいだろ」

> そうだね……それでいいかもね……<

(シルフィー?)

> さあ、怪我人はさっさと寝て怪我を治すことを優先しようか<

「寝ようとしてる俺に話しかけてきたのはお前だからな」

> いちいちあげ足をとらないの、じゃあお休み <

身体中が痛いけど、おもいのほか疲労がたまってるせいかすぐに眠りに就いた。

「……………君……………浅村君……………」

(ん？誰だ、俺の名前を呼ぶのは?)

「浅村君、さあ目を開けるのです」



「んん？……お前は！！」

「お久しぶりですね浅村君、夢集めです」

「ほんと久しぶりだね夢集めさん」

「へー驚かないんですね」

「まあね、何かいろいろありすぎて、もう何がきても驚かないよ」

「ふ、そうですね……まあ前置きはこれくらいにして本題に入りますしょうか」

「本題というと？」

「じつじつことですよ」

夢集めが指パツチンをすると秀がつけている腕輪が光り始め、腕輪に赤く24という数字が浮かび上がった。

「何だこの数字？」

「カウントダウンですよ、元の世界に戻る……………ね」

「えっ!？」

「あなた達は見事に世界を救ったんですよ、だからこの元の世界に戻るのですよ」

「……………」

「まあいきなり言われて驚いているでしょうから残された時間でこの世界を堪能してください……………では」

再び指パッチンをすると、辺りが一瞬で暗くなり、次に目が覚めると、レーガルのベッドの上だった。

腕時計を見るように右腕を上げて腕輪を見ると、23時間57分とアナログで表示されていた。

「この世界にいられるのもあと一日か……………」

軽く息を吐き、ベッドから起き、部屋から出ていった。

宿屋

「ただいま」

「……………」宿屋一同

「ん？俺の顔に何か付いてる？」

「何やっとなじや……………」

「ぐぼっ……………」

蒼土のドロップキックが見事に決まり、後ろにぶっ飛び、おまけに玄関の扉に後頭部を強打して、うずくまっていた。

「おい浅っち怪我人なのに何してんだよ!!」

「そんな怪我人に何でドロップキックかましてんだよ……」

「あ、ほんとだ、すまないつい」

「ついつて何だよ、ついつて!!」

「まあまあ、どうせ魔力で身体強化してんだろう、さて浅っち、突然で悪いけどこの腕輪の数字のことだけど」

「ああ、夢集めが現れて説明してくれたよ」

「うん、俺達も夢集めが説明に現れたよ」

「へーそうなんだ、じゃあもう分かってるよな」

首を縦に振って言った。

「この世界にいられるのも後一日しかないんだな」

ドサツ!!

「ん?」

宿屋の外で何かを落とす音がして、何気なく扉を開けると、そこには  
買った物袋を落としたラニアがいた

五十四話 乙女の恋心

ラニアの目は明らかに動揺していて、焦点が定まっていなかった

「秀さん達が……後一日かしかいない……」

「ラニア、聞いてたのか!？」

「嘘……ですよね……秀さん!？」

視線を背けた秀を見たラニアは悟った……

秀達が後一日かしかここにいれないと……

そう悟ったラニアは落とした買い物袋を拾い上げることなく、宿屋に入ることなくどこかへ走って行った。

「ラニア!！」

立ち上がってラニアを追いかけようとして、走ろうとした瞬間  
全身に走る激しい痛みに襲われ、そのままえのめりに倒れた

「浅っち、大丈夫か!？」

「ああ………大丈夫だ」

「いいから、早くベッドに戻ろう」

「俺なら………大丈夫だから………」

また立ち上がり蒼土の手を振り払った。

「無茶だ秀、そんな体で動いちゃダメだ」

「みんなには言うなよ」

肩にポンと手をおいて軽く笑った。

「行くぞシルフィー!!」

>うん、いくよ <

「あ、おい秀!？」

ラニアが走った方に走って行った……

## マナマ草原

目的地も決まっていなまま走るラニアが行き着いた先は秀と一緒に見たあの場所だった。



「……………」

《この世界にいられるのも後一日かしかないんだな》

秀と蒼士の会話を聞いてしまった

聞きたくない文を聞いてしまった

胸の奥が熱くなる、あの言葉を思い出すだけで

目に涙たまる、一人の少年がいなくなるということ

「うづうづう、秀さん」

とどまることを知らない涙はラニアの目にたまりにたまっていて、  
いつこぼれても不思議ではなかった

「秀さん……………」

「俺がどうしたんだラニア」

「ふえっ！？しゅ、秀さん？」

「何で疑問系何だよ、今ラニアの目の前にいるのは、正真正銘の浅村 秀だ」

「う、う、う…」

また目に涙がたまる

「もう誓い何てやめだ」

「へっ！？」

「だから、泣いていいんだラニア」

秀の言葉がスイッチとなった。

「秀さん!!」

飛びついてきたラニアをしっかりと抱き止めた

ラニアの目から大粒の涙があふれる

「秀さん、秀さん、秀さん」

幾度となく自分の名前を呼ぶラニアの髪を優しく撫でる

今の秀にはそれぐらいしかできなかった

「お願いです秀さん……………いなくならないで下さい、ずっとこの世界にいてください」

「それは……………」

答えることができない秀

「自分でも分かってわいるんです、どんなことをしたって秀さんは元の世界に帰ってしまうってことは分かっているんです……でも、心のどこかでそれを拒んでるんです」

ますます涙まじりの声になるラニア

そのラニアにやっと秀は口を開いた

「大丈夫さ」

「えっ!？」

「俺達は世界を回る者達だ、だからこれでお別れなんかじゃない、いつかきつとまた会える」

その言葉の保証はどこにもないが、何故か今のラニアはその言葉に  
“安心”を感じていた。

「本当……ですか？」

「ああ、約束だ」

そう言ってラニアを引き剥がして小指を立ててラニアの前に手をやる

「へ？何ですかこれ？」

「俺の世界では約束をするときにすることで、指切りってんだ」

「指切り？」

「まあ儀式や契約と思ってくれたらいいよ、まあラニアも俺と同じ  
よじらして」

秀に言われた通りにするラニアの小指に自分の小指を絡ませた。

## 宿屋

「ただいま」

「あ、お帰りなさい浅村君、ラニアさんは？」

「」迷惑おかけしました」

「お帰りなさいラニアさん」

「みんなただいま」

翌朝

起きて腕輪の数字を見ると残りは9時間をきっていた。

「残り時間短けーな…」

「いいじゃないか、ラニアの一件も落ち着いたことだし、焦るひつようないじゃないか」

長いようで短い時間、この世界からお別れするにはあまりにも短過ぎた

「そんなことより連、動いて大丈夫なのか？」

「大丈夫、大丈夫、どこの誰かさんみたいにずっと戦ってた訳じゃない分、傷は浅いさ」

どこか引っ掛かる言葉だな

「んで、結局今日はどうすんの」

「俺に聞くなよ、各自自由行動だろ」

「ま、そうだな、んじゃあ俺は、茜ちゃんとのスイートタイムを満喫してくるぜ」

ひゃっほーいと言いながら部屋を出ていく連見つつ、秀も結局外に出た。

(軽くぶらぶらするか…)

歩き慣れた道、見慣れた店、見慣れた人達、見慣れた街

この街との別れは少し寂しいものを感じる



今思えば長いものだった

来てそうそうカースに襲われたこと

ラウルに助けられレーガルに来たこと

レーガル城に呼ばれるもののディアに殺されかけたこと

強くなりたいと心の底から思いシリルの特訓をのりこえたこと

断罪の雷という強大な兵器をみたこと

シルフィーと出会ったこと

ゼファと命懸けの鬼ごっこしたこと

シルフィーと聖霊契約したこと

ラニアの過去を取り戻したこと

そして死闘を繰り広げたこと……

などなど回想しながら歩いていた秀はレーガル城まで来てしまっていた

「あ、やっべ、ぼーっとしてたらこんな所まで来ちゃったか」

せつかなのでレーガル城に入り、ラウルやシグマに挨拶でもして

いこうと思いつつレーガル城内を歩き回る

すれ違う人は秀がいることに違和感一つ感じないほど馴染んでいた。

「ラウルとシグマはどこにいたんだ？」

## 訓練場

「おお、やってる、やってる」

「む、浅村じゃないか、どうしたこんな所で」

「シグマこそ書類に追われてんじゃないかなかったのか？」

「あの戦いでほとんど吹き飛んだ……………」

「……ど、ドンマイ……」

「まあ、ちょっと訓練場を見に來ただけさ、ではギリギリ残った書類を処理してくる」

そのまま訓練場をあとにした

訓練場では未来の兵隊さんどもがラウルにしごかれていたが、皆全員が戦意を喪失していた。

「おいてめえらー!! そんなことじゃ戦場で死んじまうぞ」

「ぐっ……」

立ち上がろうとするが、体にはまったく力が入っていなかった。

「おいおいラウル、そこら辺にしといたらどうだ？このまま続けてたら、戦意どころか命まで失いそうだけ」

「あのな、俺だってそんなこと分かってるっての………よしてめえら今日の実践は終わりだ、各自体を休めるよ」

終わりという言葉を聞いた兵隊達は幸せそうな顔をしながら訓練場から出ていった。

「今日、帰るんだってな」

「ああ、あと5時間ちよいだ」

軽く手首を回して腕輪の数字を見せる

「ほー、良くできてんなこの腕輪…」

「やらねえぞ」

「いらねえよ!…」

秀の軽いボケに見事に軽くあしらったラウルだった。

「にしても大変なんだな隊長つてのは、兵隊達の訓練しなきゃならねえし出勤命令が出たら行かなきゃなんねえしで、てんやわんやじゃないか」

「いいんだよ、それが俺の選んだ道だからな」

「ふーん、かつこいいじゃん」

「だろ、ていうかこんな所まで何しに来たんだよ」  
「ん」と、まあ挨拶でもしていかناと思つてさ」

「帰るからって、そんな改まることないんだぜ」

「いろいろとありがとなラウル」

「どういたしまして」

「さて、んじゃあ俺はそろそろ帰るわ」

後ろ向きで軽く手を振りながら訓練場をあとにしよつとする秀をラウルは引き止めた

「ん？何だラウル」

「これから行かなきゃいけない所あるか？」

「いや、別にそんな所はないけど、何か？」

「そっか、ならちよぶどいに」

「ちよぶどいって？」

槍を構えて物質憑依して、炎神・爆炎槍を秀に突きつけた。

「どっせ最後なんだ……………勝負しようぜ」

「ら、ラウル!？」

「ほらどうした？すんのかしないのかはつきりしな」



「シルフィー……」

>はい  
<

「手を抜くようなことすんなよ」

「んな失礼なことしねえよ、いくぜ……」

男の意地と意地とのぶつかり合いの戦いがどっちが勝ったのかはその場の二人にしか分からない

そして

炎の槍を持つ男vs風の剣士の戦いは、レীগールの歴史に残る一戦になった。

五十五話 旅の終わり（前書き）

これで第二章の終わりです。・ ・ ・

## 五十五話 旅の終わり

### 宿屋

「ったく、おっせーな秀の奴何してんだ？」

「そうですね、もう残り一時間きってますしね」

宿屋に集まったのは秀を除く五人＋ラニアとシリルの計七人だった。

「ただいま、悪い遅くなった」

パチンと両手を合わせて謝り、傷だらけの秀が帰ってきた。

(。°。 ;)

七人全員一致の顔

「えーと……………ガリアにケンカ売りに行ったの？」

「あのな、新藤、俺はそんなに血の気は多くない」

「でもどうしたんだよその傷？」

「ラウルと一戦交えたただけだけど？」

「……………なる、そういうことなら納得だわ」

「だな、浅っちらしいな」

「まったく理解できないですよ」

「そつだよ、もうすぐ帰るっていつの」

「また戦うだなんて信じられない」

理屈ではない男の戦い、どっちが上だの下だのは関係ない、ただコイツと戦わなければ後悔する、だから戦うのだ

「まあ、いいじゃねえか帰って来たことだし」

「そうですね、ささ、みなさん食道に行ってください」

## 食道

テーブルに置かれた数々品々に六人は言葉が出なかった…

「どづぞいっぱい食べてくださいね」

「帰る前に腹いっぱいにしとんじゃぞ」

「いただきます」

数々の品々に舌鼓をうちながらも、残り時間を笑顔で過ごす

「秀さん、どうですか料理の方は？」

「美味しいの一言につきるよ」

「よかった」

ほっと胸を撫で下ろすラニア

「あ、そうだラニア…」

ズボンのポケットを探る秀

「どうしました？」

「あ、あったこれだ」

取り出したのは携帯電話だった

「それって秀さんの世界では使えた機械ですよね」

「ああ、こつちの世界ではまるっきり役立たずに変わっちゃったが、注目するのはこれじゃなくて、これだ」

携帯についていた赤いガラス玉を指で揺らす

「これが何か？」

困惑するラニアに秀は携帯からストラップを外しラニアに渡した

「それ…あげるよ」

「えっ！？でも…」

「それいろんな色があってさ、色によって違うんだけどさ、その色は願いが叶う色なんだってさ」



「願いが……叶う」

「だからまた会いたいって思ったらそのストラップに願ってみなよ、すぐには会えないかもしれないけど、いつか絶対会えるよ」

「こんな物貰ったら、明日から願っちゃいますよ」

「光荣だ」

なかなかの空気をかもし出している二人を見ている連と蒼士が呟く

「あれで本人はフラグが立ってるってことすら分かってないから怖いんだよな」

「この先、一体何人のフラグを無視することやら」

深いため息を吐きながら二人はハモった

「「やれやれ (ー) (ー) (ー) (ー)」

その後全員が集まったのは宿屋の裏で、シリルと特訓した場所だった

「懐かしいな」

「よくここでボコボコにされてたな」

思出話に花を咲かせるが、残りは時間は10分をきっている

ねえ秀、一つ聞いていい

「何だ？」

ラニアにあげたストラップのことなんだけど、あれ嘘でしょ

「はははは、分かっちゃまったか」

願いが叶うみたいなのあるわけないしね

「まあな、でもあの色にも意味はあるんだけどな」

へえー、どんな？

「いわゆる恋愛運上昇ってやつだ、まあ待ち人来たるっていつのかな」

えっ！？秀まさかラニアのこと……………

「ん？ラニアがどうかしたのか？」

……………

「おい、何だよ急に黙ってさ」

期待した私がバカだった

刻々と時間は過ぎていき

「そろそろ時間だな」

「30秒前!!」

「体に気をつけるんじゃないぞ」

「シリルこそ体に気をつけてな」

「15秒前!!」

「1  
!」

「2  
!」

「3  
!」

「4  
!」

「5  
!」

「6」

「7」

「8」

「9」

「1  
0」

数字が0になったとたん六人は姿が消えていった……

**第三章一話 リスタートは続きから(前書き)**

第三章スタートです

### 第三章一話 リスタートは続きから

「ん……………んん……………」

まだ意識がはつきりとはしていないようだが、視界ははつきりとしていた

秀の視界に映ったのは夕暮れの公園だった。

「ここは確か……………俺が異世界に飛ばされる前にいた場所だ」

すぐさま携帯電話を取り出すが電池切れのためまたポケットに入れて、家に向かって走り出した。

自宅



「はあ、はあ、た、ただいま」

「あんた何でそんなに息切れしてんの？」

たまたま玄関にいた姉の肩を掴んだ

「はあ、はあ、姉さん、今日何月何日だ？」

「え？6月7日だけど」

（異世界に飛ばされた日と一緒だ！！）

姉に軽くありがとうと行って、階段をかけたのぼり自分の部屋に入る  
急いで携帯を充電器と繋ぎ携帯の電源を入れ、六人の中で一番名前  
が早い石月に電話かけた。

（繋がれ…繋がってくれ）

「もしもし、私だけど、浅村君だよね？」

「よかった石月、何か気付いただろ」

「うん、異世界に飛ばされる前にいた場所にもどってた、日付も変わってないよ」

「そつだ、あんなに異世界にいたのに、日付が変わらないなんて」

「この分だと他の人も同じこと言いそつだね」

「一体何がどうなってんだよ!!」

「あ、浅村君、まず落ち着いてよ」

知らず知らずに熱くなっていた秀を石月に諭された。

「し、ごめん、つい熱くなっちゃった」

「謝ることないよ、とりあえず明日学校で集まるつよ」

「そうだな、電話がかかってきたらそう伝えておくよ、じゃあ明日学校で」

「うん、また明日」

電源ボタンを軽く押した後、ふと気付いたことがあり、右手を上げた。

「腕輪が……………無くなってる……………」

ポケットから財布を取り出すと、そこには透明のカードが入っていた。

「そうか、腕輪がカードに戻ったのか……………」

制服のままベットにダイブして携帯を見るとちょうど連から掛かってきていて、疑問点と明日のことを伝え終わると、睡魔に負けてそのまま眠りについてしまった。

……きて秀………起きて秀!!

「はっ、誰だ!!」

部屋を見渡すが、人らしい姿は見当たらない

「おかしいな、気のせいかな？」

「ここだよ秀、ここ!!」

「し、シルフィー!!」

「やっほ、やっと起きたか寝坊助さんは」

「な、何でシルフィーがここにいるんだ？」

何でってそりゃ腕輪をこっちの世界に持ってきたんだから私も来てるに決まってるでしょ

「だったらカードを見ようとした時点で声をかけてくれよ」

「ごめん、ごめん、新しい世界だったからつい

「まあべつに構わねえけど……………まてよシルフィーがいるってことは……………」

「ちょ、ちょっと秀どどこ行くの？」

## 咲恵の部屋

「姉さん、ちょっといいかな？」

「な、何よ部屋に来て」

「木刀貸して!!」

「……………はあ!？」

「だから木刀貸してよ」

「分かったわよ、廊下で待ってなさい」

姉から木刀を貸りて秀は部屋に入った

何するつもり……………まあ何となく分かるけど

「物質憑依するんだよ」

はあ、了解

姉から拝借した木刀にシルフィーをいつものように憑依させるといつものように天つ風に変身した。

その時だった…

「秀、この前貸した電子辞書貸し……………」

ノックもせず姉が入って来た

「……………か、刀!？」

ゆっくりと部屋を出て、ドアを閉められた

あーあ、やっちゃった

「誤魔化しに行つて来るからカードの中に入ってるよ」

かんば

物質憑依を解き、部屋を出た瞬間、とぼとぼと部屋に戻る姉がいた

「ね、姉さん、ほら電子辞書だよ」

「あ、ありがとう秀」

「どうしたんだよ姉さん、部屋に入ったとたん出ていくし」

「だ、だってあんた刀持ってたじゃん」

「はあ！？だ、大丈夫か」

あくまでもしらをきる秀

「嘘じゃないもん、私見たんだもん！！」

（出た、口調変換）



口調がいつもと変わる秀、姉がムキになるといつもこうなるが、何故か秀の時だけの現象だった。

「じゃあ、俺の部屋に行こ？好きなだけ確かめていいから」

「……うん、分かった」

(あ、やべ、可愛い…)

秀の部屋に入り、くまなく搜索する

クローゼットの中

物置と物置の隙間

ズット下

引き出しの中

(おいおい、そんな所にあるわけないだろ)

「むー、刀が無い……………」

「な？刀なんて無いだろ」

「無い……………Hな本」

「刀探しはどこいったー!!」

「あるの？Hな本」

「無い！？んなもん断じて無い」

（嘘だけど……）

「ささ、無いとわかったらもういいだろ」

「うー、本当に見たのに……」

頬膨らませる姉、おそらく大体の男はこれで落とせるであろう。

「咲恵、秀、ご飯できてるわよ」

「ほら、ご飯だつてさ、降りよ」

姉をなんとか誤魔化した秀は、明日に備えていつもり早く床に就いた。

## 二話 疑問だらけのスタート

いつもなら7時起きが当たり前だが、レーガルの時の癖でとんでもない時間に起きてしまった

「くっ、五時かよ……」

起きちゃったもんはしょうがないでしょ、ほらレーガルの時みたいに走り込みに行こ

「……………了解」

動きやすいようにジャージに着替え家を出て、レーガルの時のように走り込みを開始したのだが……

いつもの癖で身体強化した状態で走ったため、とてつもないスピードが出てしまった。

（あ、やっべ……誰かに見られて……………ますよねー）

健康に気をつかっているおじさんやおばさんが信じられないという  
目でこっちを見ていた

魔力offだね

「了解……………」

魔力に気を使いながら走ること10分、聞き慣れた声の上から聞こ  
えてきた

「おーい浅村君」

あ、紫音だ

(そっぴや石月の家ってここら辺だったな)

「待っててね、今行くから」

五分後

「お待たせ」

何故かジャージ姿の石月が出てきた

「何するつもり？」

「もう、走るに決まってるでしょ」

「……………あ、長距離のトレーニングか！」

「そういふことじゃあ一緒に行っか」

「…!」

「うん、今日もいい汗かいた」

「だな」

ゴールの川辺についた石月は斜面で座っていた

「ほい、受け取って」

渡したのは自動販売機で買ったパックの プトンのミルクティー

「石月ってそのミルクティー好きだろ」

「えっ！？何で知ってるんですか」

「いつも飲んでたじゃん俺の後ろで、プリント配るときいつも机の角に置いてたしな」

「あつじゅう」



顔を赤らめながらも、ストローを入れる

「それおごりだから気にしないで」

「あ、ありがとう／＼／」

時刻は六時で、早めの出勤のサラリーマンや大学生がちらほらと出てき始めた

「もうこんな時間か……そろそろ戻るか……歩きで」

「ふふふ、そうですね」

来た道を平行に並んで歩く二人

そんな二人の話の種はもちろんこっちに帰って来た話

「こっちに帰って気づいたのは、まず魔力が使えることやシルフィ

ーがいることに傷が治ってることかな」

「へー、至れり尽くせりですね」

「親切なこった」

「でもやっぱり気になるのは時間が一切進んでないことですよね」

「ああ、異世界に行く前の携帯電話の電池は三つあったはずなのに、帰ってきたら0か……………」

「まあみなさんと相談すればきっといい答えが出てきますよ」

「だといけど……………」

そうこうしている内に石月の家に着いていた

「じゃあ学校でな」

「ま、待って浅村君」

「どうかしたか？」

「よければ今日一緒に行きませんか、通学路に浅村君の家がありますし」

「そうだな、やっぱり気になることだらけだし、そうしようか」

石月と別れたあと家に戻ると、浅村家全員が起きていた

「おはよう、どこか行ってたの」

「うん、ちょっと走り込みにね」

「朝から運動なんてして汗かいてるじゃない、まったく暑苦しいっただらありゃしない」

「分かってるよ、シャワー浴びてくるよ」

シャワーで汗を流し、制服に着替えて朝食にありつく

「二人とも、今日の帰りはいつ頃になるの？」

「私は今日は五限だから遅いかな」

「俺も多分遅くなるかな、部活があるし」

「へえー、まだあの部活生きてるんだ」

「まあな、首の皮一枚ってところだけだな」

「遅くなって晩ご飯がいらなかったら連絡ちょうだいね」

「了解」

ピンポン

「あら、こんなに朝早くから誰かしら？」

椅子から立ち上がり、インターホンの受話器を取る

「あ、はい、中に入って待っててね」

「お母さん誰よ朝早くから?」

「秀のお客よ」

「お邪魔しまーす」

「ああ、なるほど石月か」

残りの朝ご飯を一気にかきこみ玄関に向かった

「悪い石月、かばん取ってくるからちょっと待ってて」

「あ、はい」

朝からお熱いね

「ん？何が？」

……一度死ねばいいのに

「おまたせ、じゃあ行くかうか」

「はい」

食卓

「何なのあの子こんなに朝早くから来て秀を連れ出すなんて」

「あら咲恵ったら、妬いてるの」

「ち、違うよ、私はただ一緒に行くなら、秀の時間に合わせるべきだって言ってるの、いつももっと遅くに出てるのに」

「そうね、いつも咲恵と一緒に出てるもんね」

「っ!」

味噌汁が気管に入ったようだ

「ケホっ、ケホっ、べ、別にそういう意味で言ってるわけじゃないの……ごちそうさま」

顔を赤らめながら自分の部屋に戻った。

「にしても……傷が治ってるのには驚いたな」

「そうですね、あれだけ傷だらけだったのに治っているなんてびっくりしますね」

「そうだな……ところで石月、話し合いをするには集まらないといけないんだけどさ」

「学校でみんなが集まれる時間っていったらいつ頃かな？」

「そうですね……昼休みは新藤さんがダメだし、放課後は私たちが部活だしね」

「休み時間は短すぎるしなー」

「しょうがない……私がなんとかするしかないね」

「はあ？」

学校



席につくなり、携帯を取り出してメールを打ち出す石月

そして送信ボタンを押すと、携帯をおりたたんだ

「よし、終わりっつと」

「何が終わりなんだ？」

「えーと、部長さんに今日の部活を休むことと、新山君に休もうよつてメールしたんだ」

「何だか悪いな、部活を休ませて」

「いいのいいの、練習ができるのは学校だけじゃないからね」

とてつもなく嫌な予感がしていた

「夜の練習付き合っつてね」

「仰せのままに」

「棒読みが気になるけどまあいいか」

「んじゃあ場所はKK部でいいか」

「そうだね、じゃあ女性陣には私が送っとくね」

「んじゃあ男性陣は俺が送っとくよ」

大体が決まったところで担任が入って来たため、連絡は一時間目以降となった。

### 三話 異世界組会議

一時間目が終わると、石月の携帯に蒼士からメールが届いていて、蒼士も休むとのことだった

「よかったね、これで話し合いができるね」

「よし、後は寝るだけだお休み」

「ちょ、ちょっと浅村君」

「……………」

「早……！」

「なんかKK部にこんなに人がいるのなんて珍しいな」

「そうですね、とても新鮮な気がします」

「じゃあ話し合いを始めるとしようか」

六人が集まった割には出てきた疑問点などは秀と石月が話していたことと重なっていて、話し合っても明確な答えは出てこなかったが、一つだけ夢集めが言っていたことに矛盾していたことがわかった

夢集めが言っていたカードに浮かびあがるはずの数字（時間）が浮かび上がっていないかった

「これじゃ、いつ異世界に行くか分からないな」

「まあ、今気にしてもしょうがないことだな」

話し合いも終盤にさしかかったところで完全下校の10分前のチャイムがなり、今日はここで解散となった。

六人がげた箱から靴をから取り出し、校門で西脇と進藤と別れた

自宅がある駅で降り、連と別れ、三人で帰った

自宅

「ただいま」

「お帰りなさい、ちょうどいいわ、咲恵も帰ってきてるし、ご飯にしましょ」

「いめん母さん、今から石月と走りに行くことになってるから、飯は帰ってからでいいや」

「わかったわ、気を付けて行ってらっしゃい」

部屋に行って、朝とは違うジャージに着替えて石月の家に向かった。

石月宅

「悪い待ったか」

「いえ、私も今出たばかりです」

「じゃあ行くつか」

「100?べらい行くけど付いてくねる?」

「なめんなよ」

「よし、行くよ!!」

暗闇の中、外灯が光る道を走って行った…

浅村家

「咲恵、何かイライラしてない？」

「してない!!」

「もしかして秀が石月さんと仲良く走りに行ったこと」

「っ!?!な、そんなわけないでしょ、何で私がアイツでイライラしなきゃならないの」

「ふふふ、そりゃそつだよね」

明らかに自分の娘で楽しむ母親だった

秀 & 石月 Side

「ねえ浅村君……」

「ああ、分かっている……下手な尾行がついている、2?ごに人が入れ変わってる」

「だよね」



「いつもなのか？」

「うん、夜走る時はいつも誰かが見てるんです」

「しょうがない、行けるか石月」

「私の方こそなめないでよ」

親指を立てた石月を見た秀はスピードを上げて曲がり角を曲がった

「こっちのコースは走ったことないから浅村君に任せるよ」

「こちらD地点、エンジェルはC地点中間で曲がったためB地点の者、C2地点に向かえ」

「こちらB地点の者だがその地点に行ったが、見当たりません……  
…ぐあじ！？」

「おいB地点、B地点……！」

C2地点

「石月、コイツに見覚えは？」

「あの……………その……………」

「何だよ、えらく歯切れが悪いじゃねえかよ」

「いや、あの……………その人……………」

「俺は石月 紫音ファンクラブ会員 鈴木 五郎だ」

「……………」

「すみません」

謝る石月に謝る必要はないと言って、鈴木に続ける

「彼女が怖がってるじゃないか」

「何を言うか！！夜道にランニング何て恐怖じゃないか」

違う方向から新たな男が現れた

「バカか、見守っている奴が怖がられたら本末転倒じゃねえか」

「ぐっ、それはそうだが……」

「あの浅村君、ちょっといいですか？」

言いたいことがまだあるものの、石月とバトンタッチをした。

「あのーファンクラブのみなさん、夜道の見守り本当にありがとう

「じやいます」

「おお、もったいなきお言葉です」

（お前らいつ時代のやつだよ……………）

「でも、もう私の見守りは止めて下さい……………」

「そ、そんな……………」

絶望が顔に広がる……………

「勘違いしないで下さい、私はあなた方の見守りが嫌というわけじゃないんですよ」

「えっ!？」

「私が夜走りに行くだけであなた方の行動を決まってしまうなんて、私は嫌です」

「いやしかし、俺達は好きでやっているわけで……」

「ダメです!!これからいろいろと勉強しなきゃいけないのに、私のことで時間をさいちゃダメです、いいですか?」

「……………はい」

「かなわないねえ」

「何か言いました?」

「いや、何もなし」

ゆっくりと背伸びと欠伸をしたあと

「ちまひ、そんそん、あはれ」

「あはれ」

#### 四話 実行委員会

学校

「石月、あれからましにはなったか？」

「あれからまだ一日しか経ってないから分かりませんよ」

「そっか、アイツらも少しは勉強に励めばいいのにな」

「それは浅村君にも言えたことですよ」

「ZZZZ……………」

「こら現実逃避しない」

石月の件が解決したのは嬉しいことだが、それから自分の学力を上げようとしているのがめんどくさかった。

「それより浅村君、今日の放課後付き合ってくれませんか？」

「ああ構わねえよ、どうせ暇だろうし」

石月との会話が終わると同時に担任が入ってきて、重要なプリントだと言って、プリントを配った

「校外学習？」

「みんなに行ってるが二週間後に校外学習のプリントだ、持ち物や日程が書かれてるから無くさないようにするんだぞ」

「へー校外学習なんてあつたんだな」

「浅村君、知らなかったんですか？」

「おそらく睡魔に負けたと思うんだが、わざわざ朝のSTに話すことでもないと思うけどな」

「浅村君……後ろ……」



ゆっくりと後ろを振り向くと、そこには黒いオーラをまとった担任が立っていた。

「俺のお喋りタイムに私語とはいいい度胸じゃねえか浅村」

「あの……先……生？」

「お前、今回の校外学習の実行委員会に入れといてやろう」

「ちょ、ちよつと先生、実行委員会って何なの？あれ先生？何処へ  
――」

午前8月40分、浅村 秀、実行委員会に加入

その日の休み時間

「浅村君、ちよつといいですか？」

「ん、君は？」

「同じクラスの泉紗耶香いずみさやかですよ!!」

泉 紗耶香 秀と石月と同じクラスで黒髪の長髪をポニーテールに  
していて、顔立ちもなかなかのものが秀の見解だ

「ああ、んで泉さん、何か用？」

「私はこのクラスの実行委員なんです!!」

「ああ、なら適当にやっといってくれよ、今日の担任の暴虐見たろ」

「あなたって人は!!」

拳を開き、平手で右から左へとおもつきり振り抜いた。

秀の顔をめがけて…

パチン！！

乾いた音が教室に響き、クラスの視線が秀に集まった。

「もういいです！..!」

教室から出ていく泉を二、三人の生徒が後を追って行った

「痛っえな、あの女いきなり何すんだよ!..!」

「今のは浅村君の言葉.....最低だよ」

「ど、どっとういう意味だよ?」

石月は秀の言葉に耳を傾けることなく席から立ち上がって泉同様教室から出ていった。

(何なんだよ一体)

それからの授業も、泉も石月の機嫌はなおることなく昼休みをむかえた。

教室で食べる者や、食堂に向かう者で教室が騒がしくなるなか、自分の机の横を通りすぎ時に自分の机に付箋を張って教室を出ていった。

付箋には力強い文字でこう書かれていた。

“今日の放課後の件はいいです”

「はあく俺が何したってんだよ」

今の感情が怒りなのかよくわからない、ただ胸のどこかに引っ掛かるようないやな感じがしていた。

「おい秀、飯行こうぜ飯」

「悪い連、少し用事があるから今日はパスだ」

「おい、何処行くんだよ秀？」

「原因解明だ！！」

秀が向かったのは泉の所でも石月の所でもなかった。

生徒会室

「来てみたはいいもののやっぱ入りづらいな」

生徒会室の前で右往左往していた

「何してるの浅村君？」

「おお新藤助かった、お前を探してたんだよ」

「KK部の予算アップの話なら会長にしてよ」

「予算の話じゃねえよ」

「じゃあ、学力アップの方法でも聞きに来たの？」

このままではラチがあかないと思った秀は今までのことを全て話した。

「ふーん、なるほどね、浅村君……あなたバカ？」

「最低よりバカの方がいいや」

「何言ってるの？」

「いやこっちの話だ」

「つまり浅村君は何で泉さんにぶたれたことと石月さんに軽蔑されたことが知りたいんだよね」

「ああ、さっぱりなんだ」

それを聞いた新藤はしょうがないと言わんばかりのため息を吐いて話し始める

「実行委員っていうのは各クラスから二人ずつ出されるものなんだけど、浅村君のクラスだけまだ決まっていなかったの」

「つまり俺はもう一人の実行委員っていうことか」

「うん、だけど他のクラスの実行委員は、もう二週間前から決まっていたんだよ」

「二週間前からって……」

「何でだよ！？何で俺達のクラスは決まっていなんだよ！？」

「浅村君、自分のクラスのこと知らないの？」

ドン引きされてしまったが知らないものは知らない

「はあ、これじゃあ石月も怒るはずだわ、いい浅村君、あなたのクラスが決まってるのはクラス中の男子が嫌がったからよ、泉さんが実行委員になった直前ね」

「ど、どついう意味だよ？」

声が自然に震えた、新藤の言ったことはあまりにも重かった

「泉さんはねいつもテストで学年トップだし、全国模試だっていつも上位に入ってる、つい気が高ぶっちゃって男子とかについ尖った口調になったりしちゃってね」

「なるほど、それが積み重なってってわけか……」



「でも本当はとっても優しい人なんだよ、男子からの評判は悪いけど、女子からの評判はすごくいいんだからね」

「なるほど、通りでクラスの女子から白い目で見られたわけだ」

「でも泉さんは男子に嫌われてるのは自分のせいだからって、多い仕事をたった一人でやってるんだよ、わざと多く振り当てられた仕事を遅くまで学校に残ってね」

「わざと？」

「……………実行委員をしきってるのが男でね、その男が泉さんを嫌っていてわざと多くの仕事を割り当てたせいで、遅くまで学校に残ってるんだ」

その言葉を聞いた秀は自分がやった過ちにやっと気づいた

自分がどれだけ最低の言葉を泉にぶつけたかを

誰にも助けを求めず、孤独を作り上げたその孤独はとても辛いものであるにもかかわらず、ずっと一人で我慢していた

その泉を孤独から救えたのは自分だったというのに、泉をさらなる孤独へと追いやってしまった。

「新藤、今日は実行委員会あるか？」

「あれ？今から謝りにいかないの？」

「いや俺はもう憎まれたままでもかまわない」

「ふーん、何か考えがあるみたいだね」

「まあな、でもちょっと手伝ってくれないか」

「まあのってあげる」

「よし、俺がやりたいってのは……………」



## 五話 作戦開始

その日の放課後まで石月とさえも一言も喋らなかった秀は放課後すぐに携帯をひらいてとある人物にメールを送って、その人物が来るのを待った

来るのかどうかは分からないがその人物が来るのを待ち続けた

そして待ち望んだ時が来た

「……………メール通り来ましたよ浅村君」

「来てくれて助かったよ石月」

不穏の空気が流れるなかで先に口を開いたのはもちろん秀だった。

「石月、俺の言葉に別に耳を傾けなくていいから聞いてくれ」

「……………」

「いいか……………」

## 会議室

ハキハキとした声で、どンドン指示を与え、あたえられた者は各自もち場所に散っていく

「二組の作業はこれらのプリントをまとめてこの背表紙を貼っていただきたいのですがいいですか？」

「……………分かりました」

「では私達は行きますのでよろしくお願いします」

鍵を壁に立て掛けて役員は全員持ち場に移動していった。

「しょうがない、やるか!！」

長机に置いてあるプリントを集めて背表紙を貼っていく

しかし一人でこのプリントをまとめて背表紙を貼るには多すぎた。

「ふーやっぱり多いな…この量は」

少し疲れたため椅子に座ろうとした時

「泉さん、手伝いに来たよ」

「石月さん!?!……………でも大丈夫だよ、私一人でできるから」

「うーん頑固だな、じゃあジュースでも飲みに行こ」

「え!?!いや私はここで仕事をしなきゃいけないから……」

「いいでしょ、たかが3分ぐらい大丈夫だって」

強引に泉を会議室から連れ出して、自動販売機の所まで連れ出した。

硬貨を入れてボタンを押す時だった

「泉さん、こんな所で何をしてるんだ？」

声をかけてきたのは会議室で指示を出していた男であり、泉にわざと多く仕事を出している張本人である。

「こんな所で油売ってる暇はあるのかい？」

「……………それは」

「できてるからこんな所にいるんじゃないの」

「石月さん!？」

「絶対大丈夫だよ、私を信じて」

「へえ、そこまでいうのなら見してもらおうか」

嫌味な口調と、嫌味な笑顔を浮かべた後、3人は会議室に向かった

「さあ、部屋の鍵を開けてくれよ、まあ開けにくいとは思っけどな」

男の吐き気をする言葉に泉は部屋の鍵を閉めることに気づいてしまった。

スカートのポケットに鍵が入っていなかったからで、スカートのポケットを少し焦りながら探しているの泉を見た男子はニヤリと笑った

「おい、もしかして鍵を無くしたんじゃないんだろうな」

「泉さん、ジューズ買うときに私に鍵を渡したじゃない、財布をとるとき邪魔だからって」



ポケットから鍵を取り出して泉に渡した。

「えっ、えっ!?!?.....ああ、そうだったね」

驚きながらも、会議室の鍵を開けてその扉を開けた。

「なっ!?!?そんなバカな」

「えっ!?!?」

3人が見た光景は、長机に置いてあるプリントが全て、まとめられ背表紙が貼られていた。

「ね、だから言ったでしょ」

「ぐっ.....」

そしてぐっの音も出ない男にトドメの一言

「こんな所で油売ってる暇はあるのかい」

皮肉たつぷりに込めた言葉に男はすたころと会議室を出ていった。

「これは……一体？」

あり得ない光景に目を白黒させる泉、確かにあの量をこんな短時間で仕上げるのは普通の高校生では無理だ

普通の高校生では……

857

勿論これを仕上げたのは精霊と契約しているちよつと変わった高校生

その高校生は先ほどまで石月と泉がいた自動販売機の所で男がイライラしながら帰ってくるのを新藤と楽しんでいた

「くうー、こついうのもたまにはいいね」

「ああ、これで奴が泉の仕事を減らせばいいんだけどな」

「浅村君……」

意外な所まで考えていたことに新藤は少し感心していた。

缶コーヒーを飲んでる途中で、ブー、ブー、ブーと太ももで携帯が唸っていた。

（メールかな？）

携帯をスライドさせ受信したメールを開いた

「誰から？」

「携帯を覗くな！」

軽めにデコぴんで新藤から携帯を守る

「まあ、そんなんだったら覗き見防止のフィルムをつけときなさいよ」

「それは金がかかるから嫌だ、それにデコピンはただだからな、それじゃ」

「ごらー、私はやらねぞんかい！」

新藤のヤジに耳を傾けつつその場を後にした。

KK部

「おーい、石月待たせちまったか」

「別に大丈夫だよ、ゴメンね急に呼びだしちゃったりして」

「いって、俺も同じようなことをしたんだ、お互い様だろ、それ

で用件は何？」

秀の言葉に少し笑みを浮かべながら後ろにやっていた手に持っていた紙を広げて見せた。

“入部届”と書いてあり、入部する部活がKK部で書いてあった。

「じゃーん」

「……………」

「あれ、私何かやっちゃったかな？」

間違いなくやらかしてしまった石月に秀の第一声

「いい病院知ってるぞ」

「こ、これはちゃんと自分で決めたことなの……！」

「あのな、陸上部始まって以来の長距離の星が何してんるだよ！」

「もう陸上部じゃないもーん」

頬をぶつと膨らませる石月の頬を片手で膨らました頬を潰した。

「あのな、お前が陸上部を辞めて陸上部がはい、そうですかって言ったのか」

「そんな訳ないよ、今だってKK部に隠れてたんだよ」

「ん！？隠れてたって？」

「あ、また来た！」

指を指した方向を見ると、北合の陸上部がこちらに走って来ていた。

「な、なんじゃありゃー……!!!!!!」

「んーと、私を陸上部に戻そうとする人達だよ」

「冷静になつてゐる場合か逃げろよ!!!!」

「足が疲れた……」

小動物がすぐるような目をしているのを秀が無視できるはずもなく

「しっかり捕まってるよ」

「了解」

「韋駄天!!」

「な、誰だ、あのとてつもないスピードを出す奴は!?!」

もちろん普通の高校生が韋駄天に追いつけるはずがなくあつという

間に二人の姿は見えなくなった。

結局学校中を走り回って着いたのはKK部だった。

「はあ、はあ、はあ、疲れたー」

「お疲れ様です」

「あ、お帰りなさい石月さん」

「お帰りなさいって西脇、石月が何したか知ってるのかよ」

「はい 新しい部員ですよ、これで部員は後二人ですね」

「部員二人って何が？」

それを聞いた西脇は持っていた携帯をすりと落としていた。

「浅村君、廃部通告されてから二日経ってるんですよ」



ああそんなこともありましたねなどと思いにふける秀

「でも、本当によかったのか石月は」

「私はただ走ることが大好きなだけで陸上部に入ったようなものだからいいの、夜走れるようになったしね」

軽く秀のウイंकをする石月に、同じくウイंकでこたえた。

「これで部員は後二人と顧問と副顧問の合計四人だね」

「じゃあ俺は顧問と副顧問を担当するわ、職員室に一番通いなれてるしな」

「悪い意味ですけどね」

「うっ！？まあとりあえず顧問情報を新藤からもらうか」

椅子に座ってゆったりとメールを打ち、新藤に送信した。

「んじゃあ、今日は帰りますわ」

「あ、はいお疲れ様」

カバンを手に取り、部員から出ていった。

昇降口

自分のロッカーから靴を取り出し、校門から出ようとした時、一人の生徒が校門に立っていた

「い、泉さん!？」

「こ、こんばんは浅村君」



## 六話 仲直り

夕暮れの帰り道、秀と泉の二人の間には沈黙の二文字だった

「……………」

「……………」

(じじじじじ、気まずい)

非常に気まずい空気を破ったのは泉だった。

「あの……………」

「ひゃ、ひゃい!?!」

「あ、驚かせてすいません」

「ああ、大丈夫だよ、それで用件は何かな?」

「あの………今日はぶったりしてすいませんでした」

「あれは俺が悪かったんだ、俺の方こそごめんね」

「でも、私全力でぶっちゃったしごめんね」

秀の頬に手を当て確認した

「っ!？」

触れた瞬間、秀の頬が赤くなったが、夕日のおかげで泉に気づかれずにすんだ

「大丈夫だよ俺は頑丈な部類に入ってるから」

「あはははは、部類って何よ、おかしいな」

「おかしいかな？」

「うん、言い方がおかしいよ、はははは」

夕焼けの帰り道の二人の影は平行していた

校門で会ったときは自然と会話が弾むようになっていたためか、泉は今回の本題に踏み込んだ。

「あの一、浅村君……」

「ん、何かな？」

「今日のこと……本当にありがとうね」

「っ！？きよ、今日のことって何？」

瞬時にしらをきるモードに切り替えた秀

「ありがとう、私が絶対に無理な量の仕事をやってくれて」

「いやー、何のことが俺にはさっぱりだよ」

「嘘……吐かないで、石月さんから聞いたんだから」

( また石月か…………… )

「だから言わせてください……………ありがとうございました」

「あ、いや……………ぶっいたしまして」

「でも、本当にすごいんだね、あれだけの量をやってのけちゃうんだから」

「ああ、まあ……………ね」

言えるわけがない、精霊と契約してるなど

見せるわけがない、もうスピードで仕事をこなす姿など

そうこうしている内に二人は自然と公園のブランコに乗っていた。  
何故かは分からないが、自然と足を運んで、知らぬ間に乗っていた

「泉さんってさ、男子生徒のこと嫌いでしょ」

「うん、でもあちら側も嫌ってるから」

「ああ、風の噂で聞いたよ」

「男子ってみんな同じような奴ばっかでしょ、頭の中はいやらしい  
ことばっかりだし、さらに一部にいたっては女子生徒をいやらし  
い目でみたりする」

「でも、全員がそうじゃないと思っつよ」



「そつだね……浅村君は違つよね」

「えっ!?!」

意表をつかれ、ブランコのスピードが遅くなる

「浅村君っていつもぼっーとしてるし、クラスの男子がHな話しても空をずっと見てたりしてるし、クラスに関して無関心って感じだし……」

「泉さん、それ以上言っちゃうと俺泣いちゃうよ」

「あつ!?!ご、ごめんなさい、でも本当に浅村君が他の男子とは違つのは本当だよ」

「うん、分かったよ、俺がクラスにとってどれだけいらぬ存在なのかがよく分かったよ」

ネガティブモードに切り替え泉をいじめる

「うづうづう、うづうめんなさい……」

「ははは冗談だって、でも俺がクラスに無関心だっていうのはあつてるよ、実際クラスの名字を15人言えるかどうかだしね」

「それは酷い……」

「でも、そのせいで泉さんのことを知らなかった、知らなかったせいで泉さんに苦しい思いをさせてしまった」

「そんなの気にしてないよ、浅村君は最終的に私を救ってくれたんだし」

「救うなんて……そんなだいそれたことしてないさ」

自分がやったことはただ、プリントを集めて背表紙を貼っただけ

しかし、その秀の行動はまちがいでなく泉を助けた

「なあ泉さん、これからの実行委員だけ……」

「えっ！？実行委員ですか？」

ブランコから飛び外の柵を飛び越えて着地し、後ろ向きのまま泉に言った

「よかつたら……手伝ってもいいかな？」

「そ、そんな頼むのは私の方だよ」

秀につづいてブランコを降りる

「そうか、じゃあこれからよろしくお願いします」

右手を出して握手を求め、泉はそれにこたえた

「こちらこそよろしくお願いします」

「よし、じゃあどっかで飯食いに行かない」

「えっ！？今からですか？」

「うん、何いろいろと決まったら腹減っちゃてさ、ちょうど駅前だしと思つてさ、あ、嫌なら別にいいからさ」

「あ、別に嫌とかじゃないよ、ただ男の人に誘ってもらったのが初めてだったから」

「じゃあ行こうか」

「はい」

夕暮れの道を二人並んで歩いて行った。



七話 Sドにて

二人が選んだ店は某ファーストフード店のSドナルド

「うん、Sドセットのアイスコーヒーで」

「私はハンバーガーだけでいいです」

商品を受け取った二人は向かい合わせに座ったり

「泉さん、それだけで足りるの？」

「うん、私は少食だから」

他愛もない会話をしている時に秀はKK部のことについて話していた

「へー、大変なんだねKK部って」

「そうなんだよ、部員は何かなるかもしれないけど、顧問と副顧

問がキツイかな」

「ふーん、部員にこころあたりでもあるの？」

「うん、男子全員」

「……………」

「黙らないいでよ、KK部に石月が入ったのは言ったよね」

「うん、まあそれだけでもびっくりだけどね」

「だからほつとしても誰か入ってくると思っ」

「まあ、それはあると思うけど……………」

どこか不安げな表情を浮かべる泉、石月で引き込む作戦が嫌なのだと  
ろっ

しかしそんなことはちゃんと分かっていた

「冗談だよ、石月をそんな風には絶対に使わない、大事な部員だからな」

それを聞いた泉は少し考えながら秀に爆弾を落とした

「浅村君と石月さんって付き合ってるの？」

アイスコーヒーが気管に入る

「ケホっ、ケホっ、そ、そんなわけないだろ、石月とはただ仲がいだけさ」

「へー、そうなんだ」

「そうなんです、てか食ったら出よつか」



一気にアイスコーヒーを飲みほして二人は店を出た

「泉さんは俺とは逆方向なんだね」

「そうみたいですね、ではここで」

改札口で別れてお互いホームで軽く会釈したあと電車に乗って帰宅した

自宅

「ただいま」

「お帰りなさい、ご飯は食べて来たのよね」

「ああ、だから部屋に戻ってるよ」

自分の部屋に戻る途中に石月からの走り込みメールがきたため

部屋に入ってジャージに着替えて母親に一声かけてから家を出て石月の家に行った。

石月家

石月の家手前5メートルほどの所で石月以外に見慣れた姿がもう一人あった

「だから、私はもう陸上部に戻るつもりはないよ」

「頼むから考えなおしてくれ、陸上部にはお前が必要なんだよ」

「ごめん……私は夜走ることで満足してるし、記録とかにも興味ないんだ」

そう言って蒼士の横を通って秀の方に向かう

「秀も分かるだろ石月が陸上部にどれだけ重要か分かるだろ」

「そりゃ分かるけど、石月が決めたことに俺が口出す権利がないし、誰にもない」

「ぐっ……それはそうだけど」

「分かったら、今日のところは帰るんだな」

深いため息を吐くところを見たところ、石月を陸上部に連れ戻そうとしたのだろう

「また出直して来る…」

とぼとぼと帰る蒼土を見つつも、軽く体を動かさずいつも通りのコー  
スを走り出すが、いつもの足取りよりはまちががなく遅かった

八話 活動開始（前書き）

ストックがめちゃくちゃたまってるので、一日に数話更新していきます  
たいと思います

## 八話 活動開始

翌朝の学校で携帯とにらめっこをする石月

「何朝からにらめっこしてんだ」

「見てくれたら分かりますよ」

深いため息を吐き、秀に携帯を見せた

「受信メール画面がどうかしたのか？」

「見てほしいのはこのメールからの日付と時間です」

カーソルをあわせたメールは昨日の8時頃と表記されていた

「この時間帯は走り込みが終わった時間だよな」

「問題はここからですよ」

そこから方向キーの上を押した時におもわず絶句してしまった

「何だよ……これ」

1分間位の等間隔に送られたメールの数は30を越えていて

送信者もほぼバラバラと言ってもいいだろう

「メールで説得するつもりだろうけど、ここまできたら嫌がらせレベルだな」

「確かにこの量は以上だけど、陸上部の人も悪気があったわけじゃないと思うんだけど」

「返信したのか」

「できるわけないよ、この量はだよ」

確かにこのメールの量を返すのはしんどいではすまない話だ

「部長あたりにガツンと言ったらいいんじゃないかな」

「そんなこと……」

「言わなきゃ続くと思っよ、このメール」

「……………考えとくよ」

少しづつむきかげんの石月を見て、この話を打ちきった

「そっぴや石月、泉さんに言っただろ」

「いっ、いっ、いっ、いっ、いっめんなさい、泉さんがしつこく聞いてくるからっ  
い」

「まあそのおかげで、実行委員会を手伝えることになったからいい  
んだけど」



「ケガの巧妙だね」

「調子にのるな」

頭に手を乗せて石月の頭を前後に揺さぶった

「うあぁ〜ぐらぐらする」

石月の言葉にドS魂に火がついた秀はさらに力を強めようとしたのが

「浅村君!! 女の子にそんなことしたらダメだよ」

「い、泉さん……」

「うわ〜ん泉さん、浅村君が私を襲いかかって……」

「話を膨らませるな!!」

「浅村君も浅村君だけど、石月さんもふざけないで」

「は〜い」

秀と石月のおふざけも終わったところで泉はかばんから一枚の紙を取り出した

「今後の実行委員会の日程をまとめたやつだよ、浅村君日程知らないと思ったから」

「ありがとう、助かったよ、お互い頑張ろうね」

「い、いえ、私は当然のことをしたまでだから」

「お〜、お二人さんお熱いねー」

「だから調子にのるな!!」

「あ〜、泉さん助けてー」

「からかう人は助けてあげない」

結局石月は頭がぐらぐらしながら朝のSTをむかえることになった。

そして時は経ち昼休み、KK部に今後の話し合いについてのため四人が集まっていた

「つーことで、放課後は時間をさけそうにないな」

「秀が実行委員会に入るなんてどうい風かふきまわしだ？」

「細かいこと気にするな、だから部員と顧問集めは任せていいかな」

「はい、浅村君は実行委員会に集中してください」

「ありがとうみんな」

- 放課後 -

二人がいたのは教室で、校外学習で使う備品のチェックだった

「備品のチェックついてもこんなにあるのかね」

「ほらほら、口を動かさずに手を動かす」

「はいよ、でも今日のあいつの顔は面白かったな」

秀が言ってるのは点呼の時、二組に秀がいたときの顔が傑作という話だ

「泉さん、あの顔忘れたりするんじゃないぜ」

「悪い気はしますが……そうします」

「よし、じゃあ、ちやっちやと終わらせませるか」

1時間後

すべての備品チェックが終わり、備品を段ボールに戻した

「泉さん全部終わっ……」

「……すう……すう……」

机に突っ伏してすやすやと眠っていた

おそらく連日の疲れがたまっていたのだろう

それとも

二人でいることの安心感を感じたからか

「備品を返しておくか…」

## 会議室

会議室には例の男がいて、なるべく目を合わせないようにして、持ってきた備品を長机に置いて戻ろうとした時だった

「浅村君だったかな？」

呼ばれても、言葉を発つさずキツと相手を睨む

「何故君は泉　沙耶香がいるのに実行委員入ったんだ」

場の空気が凍りつく

「質問の意味が分からねえな」

「では平たく言おうか……男子全員が嫌ってるあんな女がいるのに  
実行委員に入ったんだと聞いているんだ」

男がそう言った時には俺は男の胸ぐらを掴んで壁に叩き付けていた

「な、何をする!?!」

「男子全員だと……んなわけねえだろ!!少なくとも俺は泉 沙耶  
香を嫌ってなんかいいえよ」

「は、離せ……」

男の言葉に従うはずもなく、締め上げるように力を強める

「かつ……………」

首元を必死に搔く男を見てから地面に叩きつけてから会議室を出ようとする

「あ、一つ言い忘れた、そんな苦しみな、泉に比べたら楽な方だぜ、これでも泉に理不尽な仕事を割り当てるってなら、もっとキツイ苦しみを教えてやるよ……………んじゃ、失礼しました」

「くっ、浅村 秀…」

教室に戻ると、まだ泉はすやすやと眠っていて、とても気持ちよさそうだったが、下校のことを考えて泉を起こした



「あれ、もしかして私……………」

「気にするな泉さん、備品のチェックなんて簡単なことだしさ」

「でも私、浅村君に全部仕事を任せてしまっ……………」

どどん罪悪感に苛まれていく泉を見た秀は、自分のかばんを持った

「帰ろっぜ泉さん、帰りにSDおっ……………ってくれるよな」

「は、はい」

九話 Sドにてその2

「じゃあギガントバーガーとアイスコーヒーで」

「私はハンバーガーだけでいいです」

商品を受け取り、座れる席を探していると

「おい秀、こっち空いてるぜ」

「泉さん、こっちこっち」

「みんな！Sドに来てたんだな」

秀は連の横に、泉は石月の横に座った

「部員と顧問集めの方はどうよ」

「残念ながら変化なし」

「まだ時間はありますからめげずに頑張りましょう」

再び気合いを入れ直した三人は話題を実行委員会に移した

「実行委員会の方はどうなりましたか泉さん」

「今日も相変わらず仕事は多かったけど、浅村君がいたから時間内に終わりました」

「相変わらずって、ほんといい加減にしてほしいですね」

「次からは大丈夫だと思うよ」

「どうしてだ秀？」

あまり気がの話ではないが、興味津々の四人を見て話すことにした

「っとうことだけど」

「……………」

しばしの沈黙……

そしてSドに響き渡る声

「おい！他の人がこっち見てるだろ！！」

「驚かれずにいられるか！！よくそんなことできたな」

「うーん、気づいたら勝手に手が出て暴言をぶちまけてたんだよな」

「お、男の中の男ですね浅村君」

「浅村君……………」

頬赤らめる泉、それほど嬉しかったのだろう

それから10分ほどしていい時間になったので、Sドで西脇と護衛という名のアプローチをする連と別れ、駅では泉と別れ、石月と二人っきりになっていた

「それにしても浅村君、凄いですね今日のこと」

「自分でもビックリだよ、あそこまでするとはね」

「あの男にはそれくらいしなきゃダメですよ」

「それは俺も思ってるさ、にしても名前も知らない奴にあんなことするなんて……………」

恋してんじゃないの？

久しぶりの登場のシルフィー

「恋……………か……………」

意味深な顔をして考える秀だったが

「こ、こ、恋なんかじゃないですよ」

「な、何そんなに焦ってるんだ？」

「絶対に恋なんかじゃありません絶対にです！！」

ブイツと顔をそらし秀から視線を外した

「おい石月、何か怒ってないか？」

「何で私が怒るんですか？ふん！！」

(怒ってるじゃん…)

これは……面白い

自宅

自宅に帰った秀はシルフィーに言われたことを考えていた

《恋してんじゃないの》

他人に言われて初めて考える恋という文字、自分と他人では認識が

違うものだと考えさせられる

「恋って……何だろう」

異性を好きになることじゃないの？

シルフィーの言うことは分かる、異性を好きになることが恋、だが好きというのはどうということなのかが分からない

石月や新藤や西脇のことは好きか嫌いかと言えば好きだ、しかしその好きが恋なのかが分からないのだ

「咲恵、秀、ご飯よー!!」

「はい」

椅子に座ってテーブルの上の料理を食べている時にも恋の疑問が脳



裏によぎる

「あのさー二人に質問していい？」

「何よ？」

質問すれば間違いなく何かが起こるのは确实（100%姉）だが覚悟をきめた

「恋って何かな？」

「……………」

「あら秀つたら、ふふふ、そついつ年頃だもんね、で、誰なの？」

「か、母さん？そういう意味じゃ……………」

「秀！！」

「は、はい！？」

「だーれ？」

声は柔らかい感じがするが、目が間違いなく笑っていない

「あ、いや、今のを忘れてくれ」

一気に飯をかきこんで、部屋に戻ろうと椅子から立ち上がろうとした時、腕がとてつもない力で引つ張られ床で顔面を強打した。

「くっ……………痛っっっ」

「ねえ秀、部屋でじっくりと話しようか」

「あ、ちよ、姉さん？わ、服引っ張るな〜」

そのまま秀は姉の部屋までテイクアウトされて行き、姉と母の誤解を解くのは明日の朝までかかった

十話 遅刻

「……………眠い」

昨日の一件があったため、あまり睡眠時間がとれていない結果だった  
まだ完全に開けていない目を冷たい水でこじ開け、現在の時刻を確  
認した

8時20分……

「はぁ……………」

「遅刻だぁー！！！！！！！！！！」

勢いよく家を出たものの間違いなく間に合わないのを確信した秀は最後の手段に出た。

「い、韋駄天!!」

結果……

「間に合わなかった…」

目の前にはすでにしまっている校門

そしてその前で自分と同じくがっかりしている人がもう一人

「ああ、やっぱりしまちゃてる、遅刻なんかするもんじゃないな」

その女の人の服装は高校の制服ではなかった

（制服をきてないとする………先生かよ!?!）

「あ、その君、遅刻しちやダメだぞ」

「どの口で言うか……」

「私はべ、別に遅刻したわけじゃないよ」

（さっき、もろ遅刻したって言ってたろ）

「そうですよね、まさか先生!?!とあるう人が遅刻!?!なんかする  
わけではないですよね」

先生と遅刻をわざと強調すると……

「う、う、う、う、う」

「わー泣かないで！！頼むから泣かないで！！先生はほんと立派な先生ですから」

「ほ、ホント？じゃあ私の立派な所を三つ言って」

（彼女か！！）

心の中でそう突っ込むものの、実際この先生がなんとという名前なのか、何の科目を教えているのかすら分からない

「ううううう、やっぱり私なんて立派な」

（ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ何か気のきいた言葉をかけなければっていうか、早く学校に入れるよ！！）

自分のボキャブラリーをひっかきまわしてでた言葉は

「めちやくちや美人で可愛いし、包容力がありそうだし、小動物タイプで俺好みですよ」

「う、嬉しい…」

顔を赤らめるところを見ると、おそらく成功と見ていいだろう

「先生、とりあえず学校に入りましょう」

「はっ！！そうだね」

遠回りをして学校に入り、遅刻届を書くために職員室に向かっている途中、くしくもバーバリアンに出会ってしまった

「や、山本先生…」

「保坂先生、また遅刻ですか？困るんですよ。先生とあるう人が遅刻しちゃあ、職員会議には出てもらわないとね。給料もらってんだったら、教師をちゃんとまっとうしてもらわなきゃね」

バーバリアンお得意の嫌味口撃に泣きそうな顔をする保坂Tを見て  
秀は



「違うんですよ先生、実は俺が学校の門を乗り越えたところを保坂先生に見つかって説教喰らってたんですよ」

「ふん、では保坂先生は職員会議を軽いものと考えていると思っ  
ていいんだな」

「じゃあ先生は生徒なんかより会議が大事なんですね、腐った教師  
魂ですね」

「何だと、浅村あ！！もうーぺん言ってみろ！！」

「何度でも言いますよ、先生の教師魂は腐ってるんですよ」

「貴様……………来い！！」

ものすごい力で引つ張られ、生徒指導室まで連れていかれた秀は口  
元を人差し指を当て保坂Tに見せ、生徒指導室に入っ  
ていった

「浅村君……………」

結局バーバリアンから解放されたのは10分後のことだった

結局一時間目は受けれず二時間目から受けるハメになった

「一時間目に間に合わないってどうしたんですか？」

「バーバリアンに捕まってた」

「……………なるほど」

休み時間はまだ終わってないが二時間目の教師が入ってきた

「……………」

「……………」

教壇で目が合って固まる秀と保坂T

「こ、こんにちわ」

「え、ええこんにちわ」

席から立ち上がり、教壇にいた保坂Tに囁いた

「大丈夫でした？」

「はい、おかげさまで何とかなりました」

「ああ、そりゃよかった」

席に着き、久々に授業をまじめに受けた、保坂Tが教える化学を

そして時間は過ぎ昼休み

「浅村君、昼休みはKK部に行きますか？」

「ごめん、残念ながらバーバリアンに昼休み呼ばれてるんだ」

「う、ご武運を……」

ため息を吐きながらも生徒指導室に行く途中、職員室前で保坂Tとばったりと遭遇した

「あら、浅村君、どこかに行くの？」

「バーバリアンの説教を受けにね」

「うう、ごめんなさい」

必死に謝る保坂Tは秀にひとつ提案をした

「浅村君、ひとつだけあなたのお願いを聞いてあげます」

「へー、何でもですか」

わざと恐怖を与えるような笑みを浮かべる秀

「ま、まさか先生を……………」

両手を肩にあて、身震いする仕草を見せる

(浅村君はまさか先生の……………)

妄想の世界に入る保坂T

「ちよ、ちよっと浅村君こんなところで」

「なんでも聞いてくれるんだろ、ぐへへへ」  
あくまでも妄想上です

「浅村君、どこ触ってるのよ」

「大丈夫だよ、ここには誰も来やしないさ」

「あ、ダメ……………」

これ以上は悲惨な妄想のため削除させていただきました

10分後

「先生……………病院いきますか？」

「ししし、ううう、しし、しめんなとら」

「まあ先生の妄想は置いて、俺の願いはただひとつ……  
KK部の顧問になってください」

「こ、顧問？」

「確か保坂先生はどの部活動の顧問になっていなかったですよね？」

「うん、だけどKK部って廃部したって聞いたけど」

「してねえよ！！まだ四日あるよ今日合わせて」

「えーと、後何人入れればいいの？」

「んーと、先生が入ってくれるなら部員が二人だけですな」

「四日で二人か……まあ何とかかなりそうでならなさそうな人数だね、  
まあ私も顧問になってあげるよ」

「マジですか？ありがとうございます先生、じゃあ俺はバーバアンと  
戦ってきます」

それからバーバリアンに朝のことをみっちり怒られた秀は、5、6  
時間目を屍のように過ごした



十一話 嵐の予感（前書き）

東京観光に行つてまして投稿が遅れましたf (^| ^) ;

## 十一話 嵐の予感

時は放課後で今日も実行委員会に出る秀と泉、いつもは男の泉に対する嫌悪感がただよっているのだが、今日はそれが皆無と言っているほどなかった。

おそらく昨日のことが効いたのだろうか、今日の仕事の量も明らかに減っていた。

「仕事も少なえから、ちゃっちゃと終わらせますか」

「はい 今日はずくに帰れそうですね」

二人に任された仕事をてきぱきとこなし、予想をより20分近く早く終わらせることができた

「俺はKK部に行くけど、泉さんはどうする？」

「私は帰ります、こんなに学校が早く終わるのは久しぶりですから」

「ははは、それもそうだな、じゃあまた明日ね」

泉と別れたあと足早に部室に行くと、なにやら一悶着を起こしていた

「新山君、前も言った通りだけど、私は陸上部にもどるつもりはな  
いよ」

「俺も言ったはずだが、出直して来るってな」

「おい蒼、石月さんが陸上部に戻るも戻らないも石月さんが決める  
ことだぜ」

「それは浅っちにも言われたよ、でも石月は陸上部に必要なんだよ  
！！」

廊下まで響き渡る蒼士の声は隣の教室には軽く聞こえる音量だろう

そしてその音量に驚いてかKK部内いた者は全員黙ってしまった…  
……KK部内にいた者は

「蒼士……ちょっと来い」

「……分かった」

場所は人気の少ない屋上につながる踊り場、ここで石月の件に決着をつける

「蒼士、一つだけ質問するぞ」

無言で首を縦に振る

「蒼士が今やっていることは陸上部の為か、それとも……自分の為か？」

「ちょっと浅っち、いきなり……」

「蒼士……真剣に聞いているんだ」

揺るぎなくまっすぐな眼差しで蒼士を見つめる

「どつちもだ……」

「そつだ、それが聞きたかった」

「どついつ意味だ？」

「それは自分自身で考えるんだな、でも蒼士これだけは言っとくよ……」

“お前は石月を苦しめたいのか？”

それだけを言ってからその場をあとした

残された蒼土には秀が階段を降りる音だけが響いていた

KK部

「どうでした？」

「どうだろうな？結果は後日ってところかな」

「そうですか……」

少しうつむき加減になった石月を見るところ、陸上部からな呼び戻しが心身ともにきていると思わせる

「そついや顧問の件だけど、化学の保坂Tがなってくれることにな

「つたよ」

「本当ですか！！よかったです！これで後は部員二人ですね」

「だな、明日は実行委員会が無いみたいだし、全員で部員を探そうか」

全員がそれで了承し、解散の雰囲気の流れたところで、KK部のドアが開く

「保坂先生！どうしたんですかそんなに息きらして？」

「KK部はメンバーは全員いる？」

数えるまでもなく、首を縦に振る

「落ち着いて聞いてね……………今さっきの情報なんだけど、駅前公園で北合の男子生徒6人が倒れてるんだって」

「っ！！！！！！！」

「幸いみんな軽い傷で済んだんだけど、6人とも気絶してたみたいなんだけど」

「もしかしてその事件の犯人って……………」

「通り魔……………」

全員の血の気がひいていくのがわかる

「警察官達が見回りに出でるから安心だけど、できるだけ複数で帰るようになしてね」

KK部のメンバーで一人で帰るのは駅で別れる連と西脇だが、おそらく西脇には連がつくから大丈夫だろう

連が通り魔に襲われたとしても返り討ちにするからである

「まあ警察官がつろついているなら大丈夫そうだな」



それから解散した後、予想通り校門で西脇と連が別れ、石月と秀も帰路につく

保坂Tの言う通り、下校中に何度も警察官を見て、会ったびに家はどこだの、一人で帰るのは避けるだのの注意のラッシュだった。

「しかし通り魔とは驚いたな」

「しかも狙われたのが私達の高校の生徒ですからね」

「まあ気にすることないんじゃないかな、どんな奴だろうと負ける気はしないし、石月を傷付けさせやしないしな」

「浅村君／＼／＼」

石月が顔を赤らめているいる間も時は進み、石月の家まで着いていた。

「ではまた明日」

「おう、また明日な」

石月が家に入るのを確認した秀は、そこから家には向かわず公園のベンチに深く腰掛け、誰もいないはずの公園で

「いるんだろ？隠れてないで出てこいよ!」

もちろん秀の言葉を返してくるものはいなかったが、秀の言葉に反応した者はいた……………公園の木々の裏から

「一体どこのどなたさんだ？男をつけ回す気色悪い奴は」

「何時から気づいてた？」

「駅前かな、ていうかつけてきたのはそこからだろ」

「正解だ、しかし理由は分からんだろう」

「聞いてほしいなら聞いてやるよ」

「礼を言おうと来ただけだ」

「……………」

どうにもつかみどころのない奴だ

つかみどころというか、コイツとは話がなかなか合わなさそうだ

「感謝する、以上ではまた会おう」

「お、おい、ちょ、ちょっと待てよ!!」

秀の呼び掛けもむなしく男は去っていった…

(感謝って何だよ?)



## 十二話 動き出す物語（前書き）

地元と東京を比べた感想なんですが、やっぱり人の多さにビックリしました f (^| ^ ;

十二話 動き出す物語

「……はい、了解です」

「次の決行日は明日だ」

「えっ、明日ですか……」

どうにも都合が悪そうな口ぶりである

「……なるほど、明日は実行委員会があつたな」

「大丈夫です、なんとかして見せますから」

「ふむ、気にすることはない、浅村には借りがあるからな、まあ時間には余裕があれば連絡を頼む」

「あ、はい了解です」

そう言って電話を切った

浅村家

朝からどのニュース番組も通り魔を報じている、やはりデカイ記事なのだろう

「物騒な話ね、二人とも気を付けてね」

「了解」

朝食を食い終わった後、いつも通り秀と咲恵は一緒に出て駅まで行って別れ、いつも通りの駅で降りた瞬間、いつもの雰囲気が変わっていた

「どひゃー多すぎだろ記者」

このまま行けば、事件についてどう思われますか？てきなことになりかねないと思った秀は、いつも通ってる道ではない道を通って学校に行くことにした

学校にさえ着けば記者がいるはずもないのでこっちのものだった

「おはよう浅村君、すごかったね記者の人達」

「まあこんな特ダネを報道機関がほっとくわけないことを考えたら記者の数はだとうだろな」

「でも学校側も大変ですよね、ここの生徒が通り魔の被害なんて叩かれるのが目に見えますよ」

「まあ学校側もいろいろと対策うつてくるだろうな、どうせ俺達に對しても集会を開くだろうし」

「めんどくさいですね」



「ああ、ということでは俺は睡眠をとらせてもらう」

集会所が開かれるのは確実なことであってさげられない、だからこそ今は睡眠をするのだ

ふと窓の外を見る

雲との比率は6:4、変幻自在に変化する雲がまた空を際立たせるというものだ

見てるだけで心が安らいできた秀は体を壁に頭を窓にあずける形で眠りについた

「……村君……浅村君」

寝ぼけ眼をこすりながら起きた秀の前には泉が立っていた

「ああ泉さん、ごめん、ごめん、すっかり寝てたみたいだ」

「起こしてごめんね、実は今日用事で私実行委員会に参加出来そうにないことを言いに来たの」

「そうか、別に気にすることはないよ」

ほんとに申し訳なさそう顔をするところから謝罪の念が伝わってくる

「俺のことは気にしないで、その用事とやらに支障が出たら大変だしね」

深々と一礼した泉は、珍しく携帯を開きながら自分の席に座った

「珍しいね泉さんが携帯をいじくるなんて」

「そうだな、泉さんが携帯をいじくるとこなんて見たことないな」

「まあそれより今日の実行委員会、私が代わりに出てあげようか？」

「ん？ああそうだな、石月の前なら韋駄天が使えることだしお願いするよ」

力強く頷きいたところを見ると、泉の役にたちたいのと感じる  
なにはともあれ今日の実行委員会の仕事は楽になりそうだ

???Side

着信音が鳴った携帯を開き受信したメールを確認して

「くくく、今日が楽しみだ」

了解という文面を打ち、メールを返信した

## 放課後

予想はしていたが泉が実行委員会の野郎は泉に対する愚痴から始めたため目で黙らせた

939

いつも通りの仕事が任せ、それぞれが仕事に移り、秀と石月の二人も仕事に移った

「今日は最終調整でこまごましたもののチェックと整理か」

ダンボールにはマジックやらカッターやらガチでこまこましている物でいっぱいだった

「この量をチェックするの？」

ダンボールにみっちり入っている物に驚きを隠せない石月

どうやら目で黙らせたのが逆に働いたようだ

「じゃあ俺がこのスクラブのように積み上げられた物を種類別に分けるから、石月は数とチェックよろしく」

「了解、じゃあマジックはここでカッターは……………」

石月の指示を聞いてから韋駄天で山積みのを種類別に分け、石月が実行委員会でもらった紙に記入していく

「よし、種類別に分けたから俺は逆方向から数える」

「うん、よろしく」

韋駄天のおかげもあってからか予想以上の早さで終わらせることができた

「んじゃあ、これを運んでくるわ」

きつちりと整理した物が入ったダンボールを抱え込んだ時だった

ドオオオン！

爆音と共に発生する揺れが二人がいた教室までが揺れが生じる

「おわあ！！」

「きゃあ！！」

突発的なものであるため近くにあった机にしがみついていたのぐ

揺れが終わったのは数秒後であり、揺れが終わった後も石月は驚いて動けなくなっていた

「大丈夫か石月!!」

「あ、はい大丈夫です」

「石月はここにいろよ」

教室を出て左右を見渡すと、土煙が舞っている所を見つけその場所に走る

数人の人達が倒れていた

「おい大丈夫か!! 一体何があつた!!」

「うつうつう……急に上から変な物が降ってきたんだ……」

そう言つと、ぐったりするように気絶してしまつた

「一体何がどうなつてんだよ？」

秀、上！！

シルフィーに声に反応した秀は上を見ると、無数の球体の物が降つてきていた

「韋駄天！！」

超スピードで球体の攻撃をかわす

秀、向こうに誰かいるよ！！

「でかした！！正体見せな！！」

さらに舞つた土煙を風で吹き飛ばす

が



吹き飛ばした先にはひとつこ一人いなかった

「ちっ、逃げられたか」

あ、先生達が来るよ

この状況を見られては不味いと思った秀はすぐさま石月がいる教室にもどることにした

「ど、どうでしたか？」

「認めたくない事実がただけだった」

「認めたくない事実？」

後ですとだけ言って、そのまま帰っていった

「の、能力者!？」

「おそらくね、能力者じゃなくても、普通の奴じゃないことは確かだよ、そして、今回の事件の犯人だよ」

「は、犯人……」

「しかも……犯人はこの学校の奴だ」

ポケットから取り出したのは北合の校章だった

「その場に倒れてた人のじゃないの？」

「その可能性は低いな、その場でのびていた奴らとは離れた場所だったし、風で吹き飛ばした時に校章が壁か窓に当たる音がしたんだ」

「そうなんだ……」

どことなく沈んだ顔をする石月、通り魔が自分の学校の生徒だとい  
うのがシヨックなのだろう

それから二人の間にも口数が減っていた

ただ夕暮れの道を歩く二人、それからすぐに秀の家に着いた秀は家  
に近くにいた人物を見た

「やあ、やっと来たかい浅村君と……石月さんかな」

石月を自分の後ろにやり、男を睨み付ける

「ちょうどよかったぜ、お前には聞きたいことがあったんだ」

「何かな？」

「昨日言った感謝って一体何だ」

「場所を変えようか……」

「石月、お前は……」

後ろを見ながら言うが、石月は制服の端をつかんで離さない

「わかった、一緒に行こっか」

男に付いていくこと10分、とあるマンションの一室だった

「さあ入って」

警戒しながら入るものの、警戒するようなものは一切感じない

畏なのかそれとも単に自分達と話をするためなのか

やはり掴み所がない奴だ

奥の部屋に入るように指示された二人はドアを開けた

「な……………」

「え……………」

ドアを開けた先にいたのは泉だった



十三話 チーム

「あ、浅村君？」

「い、泉さん？」

「さてと役者は揃ったことだし適当に座ってくれ」

ただただ驚いている二人を差し置いて話を進める

「自己紹介をしよう、俺の名前は泉 裕、泉 沙耶香の兄だ、  
ヒロと呼んでくれ」

「い、泉 沙耶香です」

「あ、えーと、浅村 秀です」

「石月 紫音です」

その場にいる四人の自己紹介が終わったところでヒロが本格的な話を始める

「浅村君、僕達のチームに入らないか？」

「チームだと？」

「最近起こった通り魔事件、君も分かっている通りこの事件の犯人は能力者だ」

「……………」

顔から冷や汗が流れる、嫌な予感がして仕方がなかった

そして嫌な予感は的中した……



「能力者に対抗できるのは能力者だと思わないか浅村君」

「……何で俺が能力者ってことを知ってるんだ？」

「簡単なことさそこにいる彼から聞いたんだ」

ヒロが示した方向にはずいぶん懐かしい男が立っていた

「し、真也！！戻ってきてたのか！！」

「久しぶりだな秀」

「彼から君が能力者だと聞かせてもらったよ、ちなみに彼も僕達のチームの一員だ」

「そういうことだったのか…」

「どうだい？チームに入ってくれるかい？」

深く考え込む、無理もない話だった、いきなりチームに入ってくれなどと言って、YESと答える人はなかなかいないだろう

「できれば早めに答えを出してほしいんだ、被害は最小限におさえたい」

「ていうか真也がいるなら俺はいらないだろ」

「俺でことが足りるならお前を呼んだりしないさ」

「そんなにヤバイ相手なのか？」

「一度やりあったけど、負けちまったよ」

「真也が負けたのか」

「完敗だったな、おそらく泉と組んでも微妙だな」

「おいおい泉ってことは……………」

「沙耶香も能力者だ」

「なんてこつた……」

「すみません、まさか浅村君が能力者だとは知らなくて……」

「ああ、泉さんが謝ることないよ」

うろたえる泉を手でただす

「てか、一度やりあったら相手は分かってんだろ」

「分かっているが誰なのかは分からん」

首を傾げる秀、ヒロが言っている意味が分からなかった

「相手は仮面を被っていてな、体格からして男だけど誰かまでは分からないんだ」

「なるほど、そういうことだったのか」

「とまあ、現状はこんな感じだな、このままほおっておけば、被害は増える一方だ、だから頼む浅村君、今だけで構わないからチームに入ってくれ」

「……………考える時間をくれ」

「分かった……………では明日の同じ時間にな」

そう説明し終わると、俺は石月と出る際に石月を先に出るようにつづいた後、ヒロに一番聞きたかったことを聞いた

「ヒロ……………感謝って一体何だ？」

「ふむ、そう言えばいい忘れていたな」

片手を口元にそえ、秀の耳元にあて、感謝について囁くように言った

「っ！……！……おいおい、そんなことありえんのかよ」

「ああ、だからこそその感謝だよ」

「うーん、そういうことではあまり感謝されたくないな」

そこでマンシヨンを後にした秀に石月はどうしてもきになっていた

「ねえ浅村君……チームに入るの？」

「わかんねえよ……」

つい口がキツくなる秀

「し、ごめんなさい、やっぱりそんな簡単に決められないよね」

「何だかいろいろありすぎてわかんないや」

「そうだね、私もなにがなんだか分かんないよ」

「……………」

「……………」

どうも会話が続かない二人は秀が初めて異世界にとばされた公園いた  
微妙な距離をあけて座る二人の間に会話はな

「……………」

「あ、あの浅村君」

「……………何？」

「あ、いや私、飲み物でも買って来ますね」

ベンチから立ち上がった石月は公園にある自動販売機に歩き出した時、秀は顔を伏せたままに異変に気づいたのはシルフィーだけだった

あぶない紫音!!

シルフィーの声に反応した秀はすぐに石月の方を向くと、石月の上空には学校にいたときに上から降ってきた球体だった

「きゃあー!!!!!!」

「韋駄天!!!!」

ギリギリのところまで石月を抱え込んで降ってきたところで距離をとる

「姿見せやがれ!!!!」

秀、あの木の裏！！

「でかした、ウインドエッジ！！」

風をドリル状にするイメージでとばす

発動と速度上では秀の技の中ではNo.1である

ウインドエッジに気づいたのか木の裏から仮面の男が現れた

「本日二度目とはなかなかサービスしてくれるじゃん」

「……………」

仮面の男は無言のまま手をかざすと、その手の中に大剣が現れた

「ヤバい！！逃げるぞ石月、韋駄天！！」



すぐに石月を抱え込み公園から脱出し、石月を家まで連れていった

「浅村君、そんなに強い敵だったんですか？」

「分からない、ただ公園であんな大剣を振り回す奴と戦ってたら、間違いなく被害が出てたに違いない」

「なるほど、でも何で私達を狙ってきたんでしょうか？」

「さあ、まあこの件は俺から泉に連絡を入れておくよ、じゃあまた明日な」

十四話 戦いののろし(前書き)

あれ(・・・)ストックが……

## 十四話 戦いのろし

石月を家まで送りどけたあとの日の夜、部屋でくつろいでいると、母親が呼んでいた

どうやら自分に電話で、その内容らある程度予想がつく内容だった

「秀、どんな内容だったの？」

「明日学校が休みだってさ、あんな事件があつたらそりやなりませんわな」

「よかったわね、今日はゆっくり眠れるじゃないの」

「おいおい、教育者とあるう人が不謹慎だな」

「あらこれは一本取られたわね」

部屋に戻って机に置いた携帯を見ると、ヒロからの不在着信があった

「もしもし、俺だけど、どうかしたのか？」

「浅村君か、沙耶香から何か連絡はなかったかい？」

「いや、なかったけど何かあったのか？」

「沙耶香が家にいないんだ」

「……………馬鹿か？」

「んな、なんだと!？」

「あの子だって年ごろの女の子だぞ、外に散歩にでも行くさ」

「違うんだ聞いてくれ、沙耶香が俺の部屋の前に置き手紙があったんだ」

「だったらもつと安心したらいいじゃないか」

「話しは最後まで聞いてくれ、置き手紙には能力者に会ってくと書いてあったんだ」

ヒロの言葉に戦慄がはしる

「ま、まさか」

「俺も信じるのが嫌で君に電話したのだが、どうやらいやな予感があたってしまったそうだな」

「冷静になってる場合かよ！…とりあえず俺は探しに行くけどヒロはそこにいろよ！…」

「すまない、霧崎君にはもう連絡しているから、君も沙耶香を見つけたら連絡してくれ」

それで電話をきいたあと秀はすぐさま家を出て、泉がいそうな場所に向かった

???

「どうした、俺を倒すんじゃないのか」

「くっ……………」

「見るかぎりでは、君はさっきから能力を出していないところを見ると、君の能力はサポート系のような」

(この男、戦闘能力だけじゃなくて、洞察力も長けてる)

「さあて、終わりにしようか」

手をかざし泉の上から球体を落下させる

「きゃあー!!」

無数に降り注ぐ球体をすべてをかかわすことはできずにかんりのダメージを負う

「まだ生きてるか、しづといな君は」

「あなたを倒すまで私は死ねないのよ……」

「仕方ない……なら今度は確実な方法で君を倒してやる」

地面に突き刺していた剣を抜き泉まで歩いて行く男

泉はダメージのせいで歩くこともままならない

「今度こそ終わりだ!!」

振り上げた剣を泉に突き刺そうとした時

仮面の男の横から巨大な何かが飛んできて、ギリギリのところをかすめた

「よお、助けに来てやったぜ」

「霧崎君……」

「君は確か前にやりあったな」

「まあ、前やった時は惨敗だったけどな」

「じゃありベンジって訳か」

「ああ、お前には悪いが二対一でいかしてもらおう」

「一人増えたところで変わらんよ」

「ちっ……なめやがって、行くぞ泉!!」

「来い、圧倒的な力で倒してやる」

大鎌を振り回しながら男に迫るが、秀とは違い男が持っているのは大剣で、簡単に防いでいる

「こんなものか………ふんっ」



真也をなぎ払うと同時に球体を落下させるが、真也も真也で鎌で全てを弾き飛ばす

「防いだか、ならば少し数を増やそうかな」

またもや上空から球体を落下させるが、今度の数は洒落にならない数だった

「何が少し数を増やそうかなだ、めっちゃめっちゃ増えてんじゃねえか  
! ! !」

鎌で全てを弾き飛ばそうとするが、今度の場合はそうもいかない

「くっ……………」

「霧崎君! ! !」

攻撃を全てを防ぎきれない真也に泉が駆け寄る

「泉……頼む」

「分かってる、怪我してる腕を出して」

言われた通り怪我した腕を出すと、泉はその手に両手をかざした  
すると、球体をもろに受けた腕の腫れがみるみるうちにひいていった

「ほお、治療術か……」

「そうよ、私の能力は治療術よ」

「さあて、怪我也治ったことだし第二Rといきますか」

再び鎌を構えた真也は仮面の男に向かって走り出す

その真也を見た仮面の男はとても小さな声で呟くように言った

「第二R?.....ファイナルRの間違いだろ」

男は球体を落下させた.....真也ではなく泉にたいして

「しまっ.....」

「きゃあー!!」

「まず一人.....」

完全に隙をつかれたことになったが、男が放った球体は泉には一球も当たることにはなかった少年が放った風によって

「なんとか間に合ったな」

「つたく、遅えんだよ」

「悪い、悪い、意外に時間がかつちまってさ」

「あ、浅村君……」

「浅村 秀……」

「さあてここからがファイナルRだぜ」

## 十五話 ファイナルR

「君じゃあ俺には敵わないよ」

「やってみなきゃわからないって言葉知ってるか？」

「君と俺のレベルの差ではその言葉は不適切だ」

「言ってる、さあいつでもいいぜ来な！！」

秀の言葉が合図となり仮面の男は球体を落とし、秀は韋駄天でかわしウインドエッジを放つ

「おっとっと、早いねえ」

「残念だが、お前の能力と俺の能力は相性最悪だぜ、観念するんだな」

「俺もなめられたもんだな」

持っていた大剣を中段に構えた

「如月!!」

男が唱えるように言うと、持っていた大剣は二回りほど小さくなり普通のサイズの剣になった

そして地を強く蹴った男は秀の背後をとっていた

「なっ!?! 韋駄天!!」

間一髪で韋駄天を発動して斬劇をかわす

「はあ、はあ、はあ…」

「どうした、あまりの速さに驚いたか？」

ふざけた笑みを浮かべる男だが、男のスピードは洒落になっていなかった

男のスピードは秀の韋駄天と同じ速度だった……

「くっそ……」

> 韋駄天が追いつかれるなんて……<

「おいおい、ボーツとしないほうが身のためだよ！」  
再び超スピードで動き出す

「ちっ、韋駄天!!」

スピード対スピード、同じスピードの勝負の勝者はやはり手数が多い方だろう

手数が多い方は秀だった

「もらった!!」

「ぐっ……やはり仮面をつけると視界が狭むな」

そう言つて自分の仮面に手を当てゆっくりと仮面を取り、自分の正体を明かした

「……………」

「嘘だろ……………」

仮面を外した男は実行委員会で指示を出していた秋山 和也だった

「まさかアンタだったとはな……………」

「君たち相手に正体を明かすとはな」

「言つてろウインドエッジ!…」



ウインドエッジをかわした秋山は距離をとりまた中段に構えた

「臯月!!」

今度は湾曲した曲刀に変化させ、まるでバッドのように振り抜いた  
振り抜かれた臯月はまるでゴムの用に伸び、鞭のようになる

「んなつ!?!」

とつさに跳んでかわした秀だが、跳んだのが失敗だった

秋山はすでに臯月を変えていて、今度は雷を帯びたレイピアに変えていた

「鳴雷月!!」

「しまっ……」

秋山がレイピアを上突き上げると、秀の上空から雷が落ちた

「がああああ！！」

「秀！！！」

「浅村君！！！」

そのまま体勢を崩して落ち、グラウンドに叩きつけられる形になった

「くっそ……」

>魔力全開でこのダメージは不味い……<

倒れた秀を見た泉は秀のもとに駆け寄り秀を抱きしめた

「ちよ、泉さん／＼／」

「じつとしてください、すぐに終わりますから」

真也の時とは違い、抱きしめた秀の体全身が光り、痛んでいた体が治っていく

「治療術なのか？」

「はい、これが私の能力です」

「ありがとう、泉さんのおかげでまだ戦える」

「まだ戦うんですか…」

「そんな暗い顔しないで、アイツの暴拳を止められるのは俺達しかない、だから行ってくるね」

力強い足取りで動き出した秀は再び天つ風を構えた

「無力な……如月!!」

「韋駄天!!」

本日二度目のスピード対決は、その場にいた真也でさえ反応するの  
がやっとだ

「スゲエ……俺と戦った時より全然早え」

「私には何が起こっているかも分かりません」

今度もまた手数で圧倒しようとした秀だが、今回はそれが思うよう  
にいかない

「くそっ、いきなり手数が多くなりやがって」

「当たり前さ、俺は前まで仮面を被ったまま戦っていたんだ、つま  
り言い換えれば視界が狭めて戦っていたようなもんなんだよ」

(くっ、一旦距離をとったほうがいいな)

バックステップを上手く使い、距離をとって体勢を立て直す

「仮面を外して互角か、なかなかやるじゃないか」

「いつまでも上から目線で話していると痛い目見るぜ!」

天つ風を逆手に持ち直し、天つ風の峰を横つ腹に添えるぐらい腕を後ろに持っていく

そして相手いるにもかかわらず目を閉じて呼吸を整えていく

旋風剣のように天つ風を中心に風が吹くが、その風量はとてつもないものだった

(何をするつもりかは知らないが……)

「戦いの中で目を閉じるとはバカな奴め、臯月!」

伸縮自在の臯月が襲うにもかかわらず秀はギリギリまで何もしない

そしてもうすぐで当たるといふ瞬間に目を見開いた

「鎌鼬!!」

溜めていた力を一気に振り抜いた天つ風は、臯月を弾き飛ばし秋山を襲う

「ちっ、卯月!!」

地面に突き刺した剣は秋山を包むようなバリアを発生させ鎌鼬を防いだ、秋山に傷一つつけることなく…

「これのどこが痛い目なのか教えてほしいなって………何処に行つた浅村!!」

「今から痛い目を教えてやるよ!!」

（鎌鼬は布石か!!）

「絶空剣・嵐!」

完璧に背後をとった秀は秋山を切りつけたはずだった……

しかし、切りつけたはずの秋山は霧のように消えていった

「霜月……」

「しまっ……」

最後の一文を言い終わる前に秋山の剣は秀の腹部を貫いた

「これで終わりだな」

「マジかよ……」

貫かれた剣を引き抜かれた後、地面にぐったりと倒れた……



十六話 大敗の味

「……う、うーん」

「やっと目が覚めたか」

「真也……ここは？」

「学校の保健室さ」

「保健室！？秋山はどうしたんだ？」

「秋山はあの後、帰って行ったよ、理由は分からねえがな」

「そっか、俺負けたんだっただな」

「気にするな、相手が強すぎたんだ」

「強すぎた……か」

「おいおい、そんなしけた面すんな、せつかく傷を治してもらった子が悲しむぜ」

頭で指した方向にはパイプ椅子に座ったまま寝ている泉

恐らく自分の傷を治すために相当な魔力を使ったのだろう

「また迷惑かけちまったな……」

「そう思うなら、泉を家まで運ぶ仕事、秀がやれよ」

「怪我人になんてことさせてんだよ」

「もう怪我人じゃあないだろ」

屁理屈みたいに聞こえるが、真也の言ってることはもつともだ

ベットから起き上がった秀は傷口をあらためて触る、そして触った後泉に対して深々と礼をした

パイプ椅子から背中に泉を乗せて、三人は学校を後にした

浅村家

「ただいまあ」

「おかえり………ってなんて格好してんのよ秀!？」

「ああちよつと雷にうたれちゃってね」

「ちよつと、雷にうたれて頭までおかしくなっちゃったんじゃないの?」

秀が大丈夫かが心配になった咲恵が秀の頭に手をやるうとしたがその手は払いのけられた

「悪い姉さん、ちょっと疲れたからもう寝るわ」

「……………うん」

姉と別れた後、秀は自分の部屋に入った後、自分のベットにダイブした

「……………」

今日の戦いを回想する、大敗したあの戦いを

どれだけ自分が弱いのかを思い知らされた

どれだけ自分が口だけなのかを思い知らされた

どれだけ自分がちっぽけな存在なのかを思い知らされた

たった一回戦っただけで全てをひっくり返された、あの男に、今一番負けたくない男に自分は負けたんだ

込み上げてくるのは間違いなく悔しさと自分の弱さに対する憎しみとそして涙

この涙が具体的にどの涙なのかは分からないが、この涙はとどめなく流れた

「くそつたれ……………」

泉家

朝食をとる二人の間に会話はとても少ない

「ということは浅村君はもう回復できたということだな」

「まだ戦わせるの……………」

「こればかりは仕方ないんだ」

「まだ浅村君は私達のチームには入っていないよ、だから浅村君が戦いに参戦する意味はないよ」

「確かにあれは沙耶香が一人で行ったからこそ起こったこと、しかし逆に浅村君は自ら敵に挑んだ、俺達の敵にな、つまりこれは利害が一致していることになる、あの誘いはYESととっていいだろう、だから怪我したかもしれないがそれは自己責任だ」

無情とも思われる兄の言葉に沙耶香は食べ掛けのままの朝食を残したまま、家を出た

「……………少し言い過ぎたかな」

家を出た泉は目的地に向かってただもくもくと歩いていった

浅村家

「……きて…ください」

誰かが自分の体を揺さぶる、まあ誰かと言つまでもなく母だろう

「今日は休みなんだよ母さん」

反対方向に寝返りうち、二撃目に備えて布団を深々とかぶるが、いつもくるはずの二撃目がこず、不思議に思つて横目で誰かを見た

横目で見た先には顔を赤らめた西脇がいた

「私がお母さんって、そんな浅村君／＼」

「……………」

あれ？なんで西脇いるの？ここは確かに俺の家だったはずだ

うん、一度聞いてみよう、うん

「西脇、ここって俺の家で俺の部屋だよな」

「ええ、そうですよ」

「だったら何でいるのかをレポート二枚にまとめて明日また持ってこい、お休みなさい」

「ちょ、ちょっと待ってよ寝ないで〜」

「何だ何か用か？」

「昨日のことなんだけどね」

「……今度は誰から聞いたんだ」



「聞いたわけじゃないんだ、少し前に泉さんから電話があって浅村君の住所を教えてって言ったから、それを深く突っ込んだの」

「俺の個人情報法で守られてないみたいだな…」

そう言ってまた布団を深々とかぶろうとするがすばやく西脇が布団を取り上げる

「だあーもう何なんだよ！！今日は休日だろ」

「休日だからこそです、寝てばかりいないで起きて有意義にすごしましょう」

「俺の辞書では休日は寝て過ごす日と書かれてる」

「もう、屁理屈こねないでください」

肩をつかんでゆっさゆっさと揺さぶる西脇に観念した秀は嫌々ながらも体を起こした

「起きたわいいけど、どこか行く場所でもあるの？」

「えーと……とりあえず駅まで行きませんか？」

「了解………」

無言のまま西脇見る

「そんなに見つめないでください／＼／」

どうやら西脇は分かってないらしい

「いや、着替えたいだけなんだけど……見たって言うなら別に気にしないけど」

「……………／＼／」

顔がみるみるゆでダコのようになる西脇

「きゃあー!!」

ビンタされた……

駅前

一悶着後にやっと駅に着いた、西脇と頬を抑える秀

「さてどこに行くとしますかね」

「じゃあここにしませんか？」

財布から取り出したのは最近オープンした遊園地のペアチケット

チケットには大きくゆめゆめランドとセンスのかけらすら感じない文字が書かれていた

（何で持ってたんだ？）

西脇の不思議をあらためて認識した秀は、その遊園地がある駅まで西脇と移動した

ゆめゆめランド

「……………」

「……………」

二人が無言の理由、それは目の前にそびえつでかい数多のアトラク  
ション

そしてそれに比例する人の多さである

「なんというか……………流石だな」

「ですね、まあとりあえず行きましよう」

秀の腕を握り引っ張っていき、ゆめゆめランドへと入場していった



十七話 ゆめゆめランド

ゆめゆめランドの中に入ったはいいものの、中は人でごった返して  
いて、アトラクションがどこにあるのかさえ分からなかった

「さてとまずはどこに行く？」

「そうですね、人気のジェットコースターに行きませんか？」

「人気ジェットコースターっていつでも、どこも変わらないと思う  
けどな？」

「はいはい、つべこべ言わずいきましょう」

乗り気はしないものの、西脇に引っ張られては仕方がない

込み合う人を掻き分けて、やっとのおもいでついたジェットコース  
ターは待ち時間に二時間と書かれていた

「まあこんなもんか」

最後列と書かれた紙に向かって歩こうとした秀だが、  
またも西脇に腕を引っ張られていく

「ちょ、西脇、どこに行くんだよ、最後列はこっちだぞ!？」

「私達はこっちです」

引っ張っていく西脇の顔も声もとても明るなものだった

引っ張っていくままに着いた場所は待っていたジェットコースターの入り口に繋がっていた

「いったいここはどこなんだ？」

辺りをキョロキョロと見渡せば、周りにいるのは男女のカップルばかりで、  
家族らしき人影は見当たらない

「ようこそカップルゲートへ、カップルはそちらの方とそちらの方



「でよろしいですね」

「か、カップルだとお…」

「はい」

満面の笑みを浮かべる西脇にすべてを言い終わる前に口をふさがれ、前へと進んでいった

「どづいづことか説明してくれるよなあ」

「えーと、今ゆめゆめランドはカップルキャンペーンっていうのをやっていて、カップルは早くアトラクションに入ったり、特別な物がもらえたりするんですよ」

「なるほど、確かに二時間待つよりは効率があー!」

悲鳴を上げた理由、それは西脇が腕を絡めるようにしてきたからであつた

絡めたことにより、密着する体は秀の腕に、西脇の柔らかいものがあたっていたからで

その柔らかいものに秀の物は刺激されていた

「お客様どうかされました？」

「あ…いや…その／＼／」

「私の彼、意外につぶなんです」

「に、西脇…お前」

まともにしゃべれず顔を真っ赤にしていたただ首を縦にふり、その場をやり過ぎしジェットコースターに乗った

「きゃあー!!」

「うおおおおー!!」

さすが人気ジェットコースターというだけあってか、かなりのクオリティーをほこっていた

「なかなかのもんだったねこのジェットコースター」

「そうですね、私怖くて目を開けられなかったです」

「だな、女の子にはちょっとキツいかもな、それで次のアトラクションといたいところなんだけど、先に昼飯にしないか？」

「それならあそこのテーブル行きましょう椅子もありますし」

向かい合うように座った後西脇はリュックから大きめの箱とマイボトルを取り出した

「これもしかして……」

「はい 作ってきました、こういうところは値段が高いですから」

開けられた蓋の中にはぎっしりと入ったサンドイッチだった

種類もタマゴサンドやハムサンドなど多く入っていて、正直言って早く食いたい

「食べていいかな？」

「どうぞ召し上がってください」

さっそくサンドイッチを一つ取りぱくりとかぶりつく

そしてそれをまじまじと見つける西脇

「ど、どうですか？」

「……………美味しい」

「ほ、ほんとですか?」

「うん、ほんと、ほんと、いやぁー美味しい」

秀の感想に顔がぱあと明るくなる西脇

はたから見れば完全にラブラブなカップルだ、そう思うだけでよかったものの、西脇はわざわざ爆弾を落とした

「何かこうしていると、本当のカップルみたいですね」

「……………何か似たようなことを泉さんに言われた気がする」

「えっ!?!い、泉さん私達のことカップルって思ってるの!?!」

「泉さんに言われた時は俺と石月が付き合ってるかどうかを聞かれたな」

「なるほど、そうなんですか」

ガツカリしたようなため息付く

「でも浅村君と石月さん、確かに仲がとてもいいからはたから見たらそう見えるかもしれないね」

「まあ基本連が来ないかぎり石月と話してるからか、そう見えるかもしれないけど」

「浅村君自身は石月さんのことをどう思ってるんですか？」

「……………分からない、前にシルフィーに俺が恋してるかどうかみたいなお話を話したことがあるけど、俺はどれくらいが異性として好きになっているかが分からないんだ」

「難しいことですねそれは……………」

「ま、悩むだけ無駄だ、さて暗い話しはこれで終わりだ」

サンドイッチをすべて食べ終わり、立ち上がるうとした秀に西脇は最後に質問をした

「浅村君って、誰かを本気で好きになったことはありますか？」

秀は西脇の言葉に少し間をおいてから答えた

「好きにか……なったことはある……でも俺はその子を好きになる資格がないんだ……………」

「えっ！？それってどういう……………」

「さあ、昼食タイム終了だ、さあ次はどのアトラクションに行きたい？」

先に歩いていく秀の後ろ姿が西脇にはとても遠くに見えた



十八話 ゆめゆめランド2

カップルキャンペーンを使えるせいか、どれだけこんでいるアトラクションも最高30分程度待つだけで入ることができた

西脇がチェックしておきたいアトラクションはほとんど乗ることができたが、いろんな店を回っていたせいか、空は夕暮れで、ちらほらと帰る人達が見えてきていた

「もうこんな時間か、西脇そろそろ帰らないか」

「そうですね、でも少しベンチでくつろいだからでいいですか」

待ち時間はさほどなかったものの、歩き回って疲れた体をベンチに預ける

「「ふうー!!」」

「どうだ？今日は楽しめたか？」

「はい 浅村君のおかげでとても楽しかったです」

「そうかそりゃよかった」

「浅村君の方こそどうでしたか？」

「俺も十分楽しめたさ」

「あ、いや……元気出たかなって思って」

「元気？……ははは、そういうことか」

西脇の一言ですべてを悟った

「泉さんだろ？俺をここに連れていってくれて言ったの、しかも俺の住所なんかも聞いちゃいない、よく考えればヒロが知ってるはずだ」

「そうです、泉さんから電話があったのは本当のことなんですけど、ここに連れていってあげてって言われたんです、きつと負けたせいで立ち直れないんじゃないかもしれないから元気だしてやってくださいって言われて」

「なるほど……………でもな西脇、大敗の傷と元気はまた違うもの  
だけ、確かに泉さんと西脇のおかげで元気は出たけど今でも負けた  
時の映像が頭の中ではリフレインで流れてるんだ、だから……………」

「はいストップ!!」

最後まで言い終わることもなく、西脇の人差し指が俺の口へとあて  
られた

「浅村君らしくないですよ」

「俺らしくない？」

「私の知ってる浅村君は今がたとえどんなに風向き悪くても、結局  
は私達にとっての追い風に変えてくれる、そんな存在なんですよ、  
ていうか浅村君自身が一番分かっているはずですよ、体験したのは  
浅村君なんですから」

満面の笑みを浮かべながら俺のことを励ましてくれる西脇はまだ続ける

「今がどんなに風向きが悪いかは私には分からないけど、浅村君ならきつと大丈夫です」

「何か根拠でもあるのか？」

俺の問いに西脇は首を縦に動かして答えた

「浅村君は風の使い手ですからね」

その言葉からは理屈も根拠も感じられなかった

しかし、自分には何かを感じ取っていて気づいた時には俺は笑っていた

「はははははは………そうか、そつだよな、風向きがわるけりや変えりゃいいだけだな」

「これで本調子に戻りましたか？」

「ありがとう、西脇のおかげでもう一度秋山に挑むことができそつだ」

「じゃあ行きましようか」

すたすたと歩いていく西脇の後ろ姿に対して、俺は小さく“ありがとう”と呟いた後、何かを決心したような顔つきになった

(ちるっきゃねえか)



十九話 暗雲

西脇とゆめゆめランドに行った日の後日、学校はもちろんのことで休みとなっていたが、周辺の学校も事件を警戒してか休みとなっていた

そしてそのニュースが流れる度に自分の無力さが身にしみる

「どうしたの秀、さっきから黙っちゃって」

「何でもないから気にしないで、ごちそうさまでした」

朝食を食べ終わると秀は、すぐさま出かける準備をした。

「あれ？どこかに出かけるの？」

「まあちょっとね」

「昨日は遊園地で今日はどこかしら」

「別に西脇はそういう人じゃないから」

「ははは、照れない照れない」

「照れてない！！行ってきます！！」

その場にいるのさえ恥ずかしくなった秀はそさくさと家を出た

「あれだけ外は危険だって言われてるのにバカなのかしら秀のやつ」

「妬かない妬かない」

「わ、私は別に妬いてなんかいないわよ、何で私がアイツに対して妬かないといけないのよ」

こちらはなかなかの場になりそうだ



秀Side

秀が来たのは近くにあるとある森の山頂、そこにはすでに連と真也が来ていた。

「悪い悪い、思いのほか時間くっちゃまってな」

「気にすんなよ、そんなことよりさっさと始めようぜ特訓とやらを」

「悪いな二人とも、んじゃ行くぜ!」

浅村家

秀が帰ってきたのは特訓から6時間ほどのことだった

「アンタどこで何をしたらそんなにボロボロになるのよ」

「ん？まあちょいと秘密のトレーニングにはまってね」

「世界中探してもそんなにボロボロになるトレーニングないわよ」

「まあ見てなよ、じきに姉さんが惚れ惚れするような肉体になるからな」

「ちょ、いきなり何言ってるのよ／＼」

「あははは、冗談だよ、じゃあ疲れたからもつ寝るね」

「あ、こらまだ話しは終わってないわよって……こらー!!」

階段の下で叫んでいる姉には悪いが、今の疲労困憊の秀にはかなり体にひびくため、さっさと部屋に入っていつものようにベッドにダイブした

「……………」

何も言葉がでない、それほど体が疲れている

今日はもう何もしたくないそのような感じだ

手も足も何も動かすこともできない

そしてそのまま疲労困憊の秀は深い深い眠りにつく……………はずだ  
った

枕元の携帯が唸って止まらない

メルマガであることを祈るが、その祈りはすぐに消えた

メールならば三回ほどで消えるバイブレータが消えずに唸っている

「……………くっそお!!」

携帯をふんだくるように取り、その着信元を見てから携帯の通話ボタンを押した

「もしもし」

「もしもし浅村君」

「浅村？はて誰でしょうか？間違い電話だと思います、では……………」

「ああ!!ちよ、ちよっと待ってよ、ちゃんと電話帳ひらいたんだから嘔吐かないで」

「こっちは眠くて死にそうなんだよ石月……………んで用件は？」

「えーと今から私の家に来られないかな？」

「お休みなさい……………」

「切らないでえー!!」

石月の特徴の小動物が泣きつく声に切るに切られなくなってしまい

「ぜ、善処するよ」

「じゃあ待ってるからね」

それで電話を切った後、体に鞭を打ちつつ、石月の家へと進んで行った

石月家

インターホンを鳴らすと、どうぞということだったなで石月の家に入った

「お邪魔します」

家に入ったあとは、石月に言われた通りに二階に進み石月の部屋であるう部屋をノックする

「浅村君入って」

「お邪魔します」

初めて入る石月の部屋、部屋はとても整理整頓がなされており、全体的に可愛らしい感じだった

「浅村君、顔色が悪そうですね、どうかされたんですか？」

「それを本気で言ってたらガチで怒るぞ」

「お、落ち着いてください」

「分かってるよ、んで用件は？」

「ああ、そうですそうです、これを見てください」

机に置いてあるノートパソコンを開いて、とある掲示板のページを見せた

「ネット上の掲示板か」

「そうです、それで見たいのはここです」

石月が見せたスレは北合に関するもので、石月が指差したところにはこう書かれていた

【北合でエスパーが使える人】

「なんじゃこりゃ？」

「初めは私も気にもしてなかったんだけど、続きを見てみて」

石月がいう続きにはこう書かれていた

【ちなみに僕はいくつもの球体を瞬時に出せることができたり、普通の人以上早く移動できたりします】

「……………間違いない、これを書き込んだのは秋山だ、そして奴は馬鹿だな」

「さらになんですけど、この書き込みにのった人が二人いたんです」

ページを下へとスクロールさせて、その二人の書き込みを見る

【僕はあなたみたいに特殊な力を持っています】



【お二人方こんばんわ、僕もお二人みたいに特殊な力を使えます、よければ三人で会いませんか？】

「マジかよ、これが本当なら、能力者がこの町にはいるってことかよ」

「一番最悪なのはその三人が共闘することだよ」

「一番嬉しいのは、その三人で潰し合いをしてくれると嬉しいんだけどな」

「一番なのはこの書き込みがでまであることなんですけどね」

「まあなんにしろ、これが嘘か本当かは分からないってことだな」

「今は待つしかないですね」

秋山が仲間を集めるためなのかは分からない、しかし、新たにでてきた二人が暗雲を呼び込もうとしているのは間違いない

「まあ、用がこれで終わりってんなら俺は帰宅させてもらおうよ」

部屋を出ようとした秀が歩き出した時だった

急に視界がぐらぐらし始め、それにつれて足元がふらつき、石月のベッドへと倒れてしまった

「だ、大丈夫ですか!？」

「……………すう……………すう」

「ね、寝てる……………」

寝息をたて始めた秀を見た石月は、疲労困憊だったという秀を思い出した

「本当に疲れてたんだね浅村君」

罪悪感に苛まれた石月は体勢が中途半端な秀をなんとかベッドに押し込めようとするが、女の子の少しばかりパワーが足りない

必死に押し込む石月が精一杯力を込めた時、たまたま秀が寝返りをうってしまった

結果……………

「きゃあー!」

上半身を押ししていた石月は見事に秀の体にダイブしてしまった

「……………浅村君／＼／」

顔までの距離50?ほどまで近づいていた石月ショート寸前だった  
退けばいいものの、頭がこんがらがっていて何をしたいかがまっ  
たく分からない

落ち着くために一旦目を閉じる

落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせる

やっと落ち着いたところでゆっくりと目を開ける

そこにはさっきと変わらず気持ち良さそうに寝息をたてる秀がいる

(少し甘えてもバチはあたらないよね／／)

自分にそう言い聞かせた石月は、ゆっくりと体を動かしていく彼が  
起きないようにと願いなら

そして秀に添い寝するような形になった

「どうか私より早く目が覚めませんように／／」

そう小さく呟いてから、石月も眠りについた

三時間後

目を覚めた時に視界に入ったのは、白色にピンク色の模様が入った天井

「そうか、俺石月のベッドで寝ちまったのか……………ん？」

右腕にある妙な違和感、何だろうかと思ひ首を右に傾けると…

自分の腕に腕を絡めて寝ていた石月がいた

「……………のわあああ！！」

衝撃的な光景に驚いた秀は体を反射的に動かしてしまった

「う、うん……………あれ？」

「……………お、おはよう」

「……………／／／／」

今の状況を把握したのか、みるみる内に顔が真紅に染まっていく

そして染まった後に石月が大きく息を吸い込んだため、秀は石月の口をふさぐ

「ま、待て石月、勝手にベッドの上で寝たのは謝るが、別に石月には何もしてないから」

「ん、んんん!?!」

「いいか、今から手を離すけど、悲鳴だけは勘弁してくれ」  
そう言ってゆっくりと口から手を離した

「はあ、はあ、はあ、苦しいじゃないですか!?!」

「俺としたら、あそこで叫ばれたら苦しいどころの騒ぎじゃすまない  
と思うけど」

「まあそうですね……………退きまじょう」

ようこらっせと言わんばかりにベッドから立ち上がった

「さてと俺はそろそろおいとまするとしますか」

同じくベッドから移動しようとした秀だが、ポケットで唸る携帯を  
取り電話にでた

「もしもし、ヒロどうかしたのか？」

「浅村君か、今どこにいる？」

「ん？石月の家だけどどこかしたのか？」

「今すぐ駅前の公園に来てくれ……………ぐあー！！」

ヒロのその声がしてから電話が切れた

「どうかしたんですか浅村君？」

「ヒロがあぶねえ……………じゃあな石月」

「あ、ちょっと浅村君ー！！」

家から駆け出した秀は、駅前まで全力で向かった



## 公園

「くっ、こんなにも力の差があるとはな」

「なーに言ってるんだよ、能力者に無能力者がかなうわけないっての、そらー!!」

男が繰り出したミドルキックが見事にヒロの脇腹に直撃し、ヒロは砂場まで吹っ飛ぶ

「……………」

「あら、もう終わりかよ、だらしないねー、んじゃあトドメさせさせてもらっしょ」

貫手の形をとった男が、ヒロを掴み上げ、喉元めがけて突きだす

「死ね!!」

「アイスドラゴン!!」

「っ!!!!!!」

ギリギリでアイスドラゴンをかわした男は瞬時に口と距離をとる

「誰だ!!出てきやがれ!!」

「もっ出てきてるっての」

そう言って出てきた連は男の真後ろにいた

「アイスニードル……」

「くっ……」

地を強く蹴って高く跳んでかわす

跳んだ男を見てから連は両手の五本指をくっ付けボールの形を作った

「氷槍・包!!」

男を氷の槍で360° 囲む

そして、囲んだのを確認してから連は両手をパンと叩くように潰し、  
囲んでた氷の槍が男を一斉に襲う

「くっ!!」

同時に襲った氷の槍は完璧に男に入っただと思わせた

がしかし、後少しというところで氷の槍が全て碎け散ってしまった

「何!?!」

「おいおい、こんな奴相手に何不覚とってるんだよ」

声のした方向にはジャングルジムのてっぺんにすわる帽子を深々と被ったダークブラウンの少年がいた

「別に不覚をとった訳じゃないさ、ただどれくらいかを試したかっただけさ」

「くっ、アイスウルフ!!」

敵が二人に増えたことで危機感を感じたのか、連は氷の狼を複数作り出して両方に向かわせる

「こんなもの……」

「ゆりいんだよ!!」

いとも簡単にアイスウルフを破壊した後すぐに二人は間合いを詰めて攻撃を繰り出す

「ちっ、二対一はちょっとばかりキツいか………真也!!」

「おう任せろ、影縫い!!」

木々に隠れていた真也が出てきて、帽子の男の方の影めがけて鎌を投げた

「その技については報告を受けているわ!!」

影めがけ、とんでくる鎌を手を振るだけで、鎌に触れずとも鎌を弾き飛ばした

「何!？」

「君のゆういつで最大の能力の影縫い、鎌にさえ気を付ければとるにたらない能力だな」

「くっ、なめるなあ!!」

「なめてるのはそっちだぜ」

横から飛んできたもう一人の男に脇腹に膝をかまされ、その場にうずくまる真也

「まったく、弱いたらありやしねーな」

「くそっ、夜坂はどうしているんだ……」

「アイツならあそこで倒れている」

男が指差す方向にはぐったりと倒れている連がいた

「そんじゃ今度こそばーいばーい」

(ここまでか……)

「ぐあー!」

ここまでだと思った真也は目を閉じたが、痛覚より先に男の悲鳴が聞こえた

目を開けるとそこには太ももから血を流している男がいた

「次は一体誰なんだよ!!」

「……………遅刻が多いな」

「死ぬよりましだろ、感謝してくれてもいいんじゃないかねえの、てか連  
そろそろ起きろ!!」

「いててて、結構ダメージでかいんだけどな……………」

「ちっ、三対二では分が悪いな、ここは一旦退くぞ」

「なんでだよ!!このまま押せば勝てそうじゃんか」

「太ももをおさえておきながらよく言えたものだな」

「……………分かったよ、浅村 秀!!この太ももの傷は忘れねえか  
らな」

「太もも傷ってなんかカツコ悪くね」

「うるせえ!! とりあえず今日はここで退いてやるが、次に会った時がお前らの命日にしてやるよ、とくに浅村 秀!! お前にはこの傷を数十倍にして返してやるから首を洗って待ってるんだな」

「はいはい、分かったからさっさと行けよ」

秀の言葉に血管が浮き出ている男を必死に帽子の男が制止てから五分でやっとその場に静かな時間がおとずれた

駅前の公園には大の字で倒れている四人の男達、誰も言葉を発しないほどダメージが蓄積されていた

そんな四人のもとに駆け寄る二人の少女の影

「石月!!」

「沙耶香!!」

四人全員がどおしてここにという顔をしていた

そんな四人に石月は秀のもとへ、沙耶香は兄の治療に走った

「しかしよく倒れてますね浅村君は」



「人を貧血持ちみたいに言うなよ、倒れてる理由の四分の一は石月にあるんだからな」

「……………すみません、でもよかったですね敵が逃げてください」

「まあな、あそこでウインドエッジがはいつてなきや、勝負は分かんかったしな」

「それほどの敵だったんですね」

「秋山ほどじゃねえがな」

一通りのことを話したところで、泉の治療も終わりそれぞれの家へと帰ることにした

「ではまた明日？うーんいつでしょうね次は」

「そつだな……………そつだ石月明日の朝走り込みしないか？」

「え！？いいんですか？大事な特訓があるんですよ」

「いいもなにも、俺がしたいんだから石月の都合がよければいいんだつたらでいいよ、しかも特訓は昼過ぎからだし問題はないよ」

「はい／＼／ぜひとよろしくお願いします」

なぜ石月が顔を赤らめるかは分からないが、今はノータッチでいこう

「それじゃ、また明日の朝ね、時間はまたメールするよ」

「それじゃまた明日」

そう言っつて別れた後に秀が玄関のドアを開けると、怒りマークが浮かぶ姉がいた

「あれ？人間に怒りマークは浮かぶはずがないんだけどな」

そう自分に言いきかせながら目をこする秀

「ねえ秀、こんな時間まで一体何をしてたのかな？」

「いや、ちよつと散歩かな」

「こんな時間まで散歩とはね」

姉が指している現在の時刻は日付が変わっていた

「晩御飯を食べないならちゃんどメールなりなんなりしないよね、  
母さんも心配してたんだから」

「そうか、母さんには明日ちゃんと謝っておくよ、じゃあおやすみ  
姉さん」

「あ、こら秀!！」

そう言っつてその場を後にした秀はそのまま自分の部屋に戻る

そしてその秀の背中を見ながら姉は小さく呟いた

「少しは私のことを気にしてくれてもいいじゃない……………」

二十話 負けなために

おい秀、時間だよ起きてよ秀

「起きてはいるんだが、布団の束縛から抜け出せねえな」

ほらシャキッとしなさい

「領海」

字が違うよ……

「地の文にツッコむな」

のそりのそりとベッドから出た秀は、ジャージに着替えてから洗面所が必要最低限のことをした後、石月の家に向かった

石月家

石月の家に向かうと、すでに石月はすでに家の前にいた

「悪い待たしちゃったかな」

「いえいえ、私も今出たばかりだから」

「よっしゃ、行くか！！飛ばして行くからついてこいよ！！」

秀と石月は朝の清々しい空気の中を走った

「浅村君、なかなかとばしますね」

「魔力無しでこれぐらいのの速さを持続できるようにならないと」

「なるほど、私も気を抜いてたら置いてかれちゃう」

今の二人の速度は軽いランニング程度の速さではない

その速さで5？先まではしるのだから恐ろしい

30分後

「はあ、はあ、はあ」

「お疲れ様、はいオレンジジュースです」

大の字になっている秀に投げて渡す

「ありがとう石月、てか凄いな、お前ぜんぜんへとへとになってないな」

「長距離のEースをなめないでね」

「ははは、そうだな、長距離のEースだもんな」

談笑をしつつ疲れた体に休息をいれる

「さてそろそろ帰るか」

「そうですね」

来た道を折り返し、歩きながら石月と二人で帰る

異世界に行くまでは考えられなかった光景だ

「そういえば特訓って一体何をやっているんですか？」

「うーん、一口には説明できないかな」

「そう言われたら逆に何か知りたくなりますので、今日そこに行ってもいいですか？」



「危ないから止めといたほうがいい、俺も周りに気を配って力を制限したくないしな」

秀が言っていることはもっつもで、昨日の特訓でも遠くの木々も特訓によるきずができるほどだった

「お願いします、私も特訓を見たいんです、浅村君の仲間として」

かなり強めに言ったはずだった秀だったが、石月はすぐに返してくる  
そしてまっすぐな目で秀を見つめる石月を見た秀はしびしびそれを承諾した

「なあ秀、何で石月がいるんだ？」

「まあいいじゃねえか、石月も迷惑をかけるつもりはないみたいだし」

「ちゃんと軽食を持ってきたので、いつでもどうぞ」

「あの子、前に泉の家に集まった時に一緒にいた子だよな」

「ああ、そうだけど……惚れたか？」

「……………可愛いな」

「へっ!?!?」

「前に会ったときも思ったけど、やっぱり可愛いなあ」

頬少し赤らめながら石月を見る真也

「えーと、恋してるとこ悪いけど特訓始めるぞ」

「お、俺はただ一般的な意見わ述べただけだ」

「はいはい、さっさと始めるぞ」

始まった特訓は昨日より激しく行われた。

すべては秋山に勝つため、今からできる怪我などに目にとめることなく

「はわあー凄いなあ…」

三人がいるところからかなり離れた所にいる石月にも特訓がどれだけ激しいものがわかる

そしてわかると同時に秀が言っていたことがわかる

三時間後

切りのよいところで一旦休憩を挟んだ三人は、食べ物からなんから用意していた石月のところ集まる

「ああ、やっぱり能力使った後は腹が減るな」

ひょいっとおにぎりを掴み上げてそのまま口にほりこむ

「うん、美味しい」

「たくさん食べてくださいね……………あ、でも食べ過ぎたら気持ち悪くなっちゃいますね」

「まあそれぐらいはセーブするよ」

「石月さんだったけ、これ全部作ったの」

「はい これぐらいしか力になれないと思って」

「ありがとう、君のおかげで昼からも頑張れそうだ」

ニコツと石月にはにかむが、効果はいまひとつのようだ

「蒼もこれから大変だな」

連の言葉にうんうんと頷きつつ、渴いた喉に水分をとおし喉を潤し、特訓を再開した

- ??? -

「なるほどつまりは逃げて来たってことかな」

「おいおいそりゃないぜ、あのまま続けてたら勝ってたぜ」

「その言葉は怪我をしなくなっただけから言っただけ」

「浅村をあまりなめない方がいい、奴は強いぞ」

「おいおいアッキーまでキツイこと言わないでくれよ、アッキーは浅村に圧勝だったんでしょ」

「二度も言わせるな、奴は強い」

「分かった分かった」

秋山の言葉に男は静かになる

「しかし、どうするのだ秋山、早くしなければ奴らは我々の対策を打ってくるぞ」

「ふん、どんな対策を打とうが負けやしないさ」

「アッキー、何でささっと攻めないの？」

「俺だって戦いに疲れてるんだ」

そう言ってゴロリと眠る体勢にはいる秋山

「まったく、ちまちましてると俺も我慢できないぜ」

それを聞いた秋山は、目を合わせることもなく、ポツリと一言だけ  
呟いた

「一週間後だ……………」

特訓を終えた秀は、山頂から降り、ちょうど帰宅していたところだった

「特訓お疲れ様でした」

「石月も飯ありがとな」

「あれで力になれるならいくらでもしますよ」

「サンキュー、でも毎日してもらったら石月家の米を食い尽くしちゃまいそうだからそれは勘弁な」

食べ盛りの高校生の三人が空腹状態で来るんだから米は三合は軽いものだ

「分かりました、じゃあ作る日を決めますね」

「うん、じゃあまたな」



手を振った後、自分に家に戻る

「……………」

ひたすらてくてくと歩く秀だが、その顔は周りを気にしている

（何だかおかしいな……………何て言うか空気とつか、雰囲気というか、とにかくこの場にいたくない……………）

急に足取りが重くなる……………そして足が止まる

この場にいたくないはずなのに足が動かない

（何でなんだよ！！）

そのままの状態で、動かない秀

>ちよつと秀、どうしたのよ？<

「急に足が動かなくなったんだ」

>ちよつと秀、う、上！！<

シルフィーの言葉で上に視線を上に向けると、視線な先には無数の細い物が降ってくる

「か、風よ！！」

無数の細い物を風で吹き飛ばした

「動けなくても風は使えんだよ……………誰だ姿を出せよ！！」

くっくっくっ……………なるほど風で吹き飛ばしたか

「どっだよ出てこいよ…！」

「出るまでもない、お前に来てもらおうとしようか」

頭に流れ込んでくる声がそう言うと、秀の視界が歪みその歪みに秀は吸い込まれて行く

「うわああああ…！」

二十一話 VS 夢集め

歪みに吸い込まれた秀が行き着いた先は、荒れ果てた荒野だった

「何だここは？」

見渡す限り荒れ果てた土地で平坦な所などどこにもなく、雲行きもどうもあやしい

今の状況を理解することができない秀はただ呆然と立っているだけだった

そんな状況の中、背後から聞いたことのある声がした

「ようこそ俺の領域へ」

「んな！？お前は……」

振り向いたら先には見覚えのある全身黒に統一された服装にフードを深々に被った男がいた

それから連想するのはもちろん自分が力を手にいれることや、異世界に行く理由を作った夢集め

「…………お前、俺が会っていた奴とは違うな」

「ほー、よく分かったな、まあアイツならお前達の担当を外されたよ……………」

(担当?)

「お前達のなんかのためにカードを渡したせいだな!!」

男が手をかざすと、男の前から槍が複数出現し、その全てが秀に襲いかかる

「風よ!!…!」

さっきと同じように風でまた吹き飛ばすが、吹き飛ばした槍は空中でとどまり、矛先がまた秀の方向に向いて再び襲いかかる

「い、韋駄天!!」

「悪いがさっき飛ばした槍とは性質が違っんだ」

「性質だと?」

「さっきの槍は飛ばしたら終わりなんだが、今の槍は一度どこかに刺さらない限り俺の思うがままに動かせるんだよ」

その言葉を聞いた後、槍が飛んだ場所を見ると、そこには無数の槍が刺さっていて、ピクリとも動く気配がなく、その男の言ったこと通りだった

「そんなことを言っつてよかったのか?」

「どうせ死にゆく奴に何を言っても無駄なんだよ!!」

左手に身長の二倍ほどの槍をまた歪みから出現させ、左腕に装着させた

「俺の名はレイン　ブロッサムだ」

「浅村　秀だ」

それが合図となり、お互いが一気に距離を詰め、激しいぶつかり合う

「そんなちっぽけな刀一本じゃ勝てないぞ」

鋭い突きの猛攻にかわすか天つ風で軌道をそらすのが限界だった

「そんなことでもやり過ぎせると思っているのか!?!」

「ぐっ!?!」

レインの突きを天つ風の腹で防ぐが、レインの放つ突きの衝撃によりかなり後ろに後退せざるおえなくなる

「いつまでもお前のペースだと思ふなよ」

大きなバックステップで距離をとり、風を天つ風に集めて一気に振り抜く

「旋風刃!!」

「遅い!!」

旋風刃を放ったと同時に動いたレインはすでに秀の後ろにいた

「槍ノ雨!!」

「ちっ、韋駄天」

降り注ぐ槍の雨をかわすが、槍は地面に刺さらず秀を追い続ける



「今度は外さないぜ」

（くそ、切り返しても切り返してもついてきやがる）

「槍ばかりに気をとられをなよ」

槍ノ雨に気をとられ過ぎてレインが前方に来ているのに気づかなかつた

「くっ、絶空剣・嵐!!」

「吉の攻式・菊花」

目にもとまらない斬撃に目にもとまらない突きで對抗するが、背後からは槍がすぐそこまで来ている

「自分の槍をでも喰らってる!!」

菊花を上手くかわし、レインの頭上をギリギリで越え背後に回り、槍をレインに当てるつもりだったのが、槍はレインの体をかわすようにして、秀に襲いかかる

「くっ、韋駄天!!」

「残念だが俺には槍は当たらないんだ」

「だったら………これでどうだあ!!」

目の前の風向きを下向きに変え、その風力をとてつもない威力にする

「刺されえええ!!」

風向き下に変えたことで槍は全て地面に刺さっていた

「はあ、はあ、はあ」

「ほおー、あれほどの風を吹かすとは、なかなかやるじゃないか、魔力の消費はハンパないがな」

「気にすんなよ、まだまだやれるし、こっからだぜ」

「そうか、なら行くぞ」

体を屈めて槍を構えて走る

「式の攻式・椿!!」

槍を構えた突進攻撃に秀は天つ風を地面に突き刺した

「うおらあああ!!」

「ウインドエッジ!!」

正面から突進してくるレインに対してウインドエッジを放ったが、ウインドエッジは弾かれ、そのまま秀に槍がかすめ、レインはすぐに切り返してまた突進してくる

「無限ループってか」

天つ風を地面から引き抜き、中段に構えて椿に備えるが、直撃したとたん秀は吹っ飛んだ

「だから刀一本じゃ勝てないと言っただろ」

そう言っただけで吹っ飛んだ秀に向かってまた椿で突進する

椿で突進してくるレインに対し、秀はまた中段に構える

「お前もしつこいな、そんなちっぽけな刀じゃ勝てないんだよ!!」

槍が届く範囲になったレインは渾身の突きを繰り出した

「これで終わりだあ!!」

そう叫んだレインに対し秀の口元はニヤリと笑っていた

「刀一本じゃダメなんだろう、アドバイスサンキュ」

レインの椿は止められていた……一本ではなく、二本の天つ風に  
よって

「な、何!？」

さっきまで、止めることすら出来なかった椿を今度は見事に止めて  
いた

「天つ風・重」



二十二話 天つ風・重

「に、二本の天つ風だと!？」

「絶空剣・剣舞!!」

「くっ、菊花!!」

レインはすかさず菊花を繰り出す、手数とスピードでは相手にならない

「くっ……………」

「手数じゃあ勝負にならないぜ」

「驚いたな、二刀流が使えるとはな」

「俺も実際二刀流が使えるとは思ってなかったよ、けど実際に握ってみたら、しっくりくるから驚いたもんだ」

「まあお前の言った通り、勝負はこれからだな」

お互い構えて同時に走り出す

「吉の攻式・菊花・乱」

菊花を出すと同時に槍も出し、手数を増やして攻撃する

「まだ少ないぜ絶空剣・剣舞!!」

絶空剣・嵐とは違い、自らに風を纏いながら舞うように戦う秀は全ての槍を弾き、レインを切りつける

「くう……………」

> 決めるよ秀!!<

「おうともさ!!天破散牙撃!!」



風を纏い、韋駄天の速さで片肘と片膝ともう一方で二本の天つ風による空破撃を同時にレインに打ち込みレインを吹っ飛ばした

「ぐああああ!!」

吹っ飛ばしたレインは後ろにある山にめり込んでからそのまま地面に落下していった

「くっそ、二刀流になったとたん激変しやがって、パワーもスピードも全然違うじゃねえか」

「当たり前だろ、物質憑依をなめるなよ、一本でもかなり力が上がるんだ、二本になるってことはそれ相応の力が手にはいるんだよ、まあ維持するだけでもキツいけどな」

それを聞いたレインはすっと立ち上がり、再び槍を構える

「なるほどな、気に入ったぜ、天つ風・重には俺もそれ相応の技でいかなきゃやられちまうな」

そう言っつて、莫大な魔力を全身に纏う

「ははは、なんつー魔力だ、昔の俺だったらそれだけで気を失っつたな」

「今から放つ一撃に全てを込める」

「おもしれえ、一発勝負つてか、いいねえその勝負乗つたぜ、そのかわりに俺が勝つたらその時は俺に質問に答えてもらっつぜ」

「ふ、いいだろ、真っ向勝負で小細工なしだ、さあ構えろ」

もうすでに構えているレインに対し、秀はレインをさかなでる構えをしていた

「お前ふざけてんのか!!」

「別にふざけてなんかないさ、この構えが今の俺の最大の構えさ」

「ふん、まあいい、後悔してもしらねえからな……………伍の攻式・桜吹雪!」

「……………」

秀とレインのどちらが勝負に勝ったかは実際のところ秀にもわかっていなかった

ただ、桜吹雪と秀の技がぶつかり合った途端、秀の意識はそこで途絶えていたからだった

二十三話 決着

「うわああああ!!」

吸い込まれた歪みから吐き出されるように戻って来ていた。

「いててて………戻ったのか？」

>大丈夫秀？<

「ああ大丈夫だ………てか戻ってきたのか」

ゆっくりと立ち上がろうとする時に、椿がかすめた腹部に痛みを感じる

「くっそ、やっぱりあそこで起こったことは夢じゃなかったのか」

>ていつかレインはどこに行っただらうね<

「ふん、ここにいるわ」

電柱柱に影にいたレインがフードなしの状態に出てきた

隠されていた顔はとても美形で赤紙のツンツンで、まさに美男子といえる顔だった

「ちっ、まだいやがったなか!？」

「落ち着け、もう戦うつもりはない」

「じゃあなんの用だよ」

「お前の質問に答えてやろうと思ってな」

「ん？俺が勝ったのか？」

「ばーか、お前が勝った訳ないだろ、引き分けにしといてやるよ」

「何か引っ掛かるけどまあいいか、質問できることには変わらないし」

質問できることになった秀は、レインに場所を変えようと言って、近くの公園まで場所を移した

「聞きたいことが山ほどあるんだけどいいか？」

「バカタレせめて二、三個にしろ、俺にも時間ってもんがあるんだ」

「はいはい、じゃあ質問1、俺達が持つてるこのカードは何なんだ？」

財布からカードを取りだし、レインに見せる

「そのカードのことだが、お前達はどうせ異世界に行くために必要な物としか思っただが、そのカードつい最近開発された物で嚴重に保管していた六枚なんだよ」

「そんな物が俺達六人に……って俺達しか持ってないのかよ

「!!」

「そうだ、お前達六人だけだ」

まだ頭の整理が追いつかない秀だが、整理を後回しにして質問を続けた

「んじゃあ質問その2、俺達の担当だった人が外されたって言ったけど、つまりこの世界から異世界に行った人がいるってことか？」

「ああ、しかし、その質問の答えは上手く答えられないな」

「何故？」

「異世界に行った人数はお前達を含め、10人程度だからだ」

「な、何だって!!？」

レインが言った10人程度を数える秀

自分達六人に真也、能力が使えるってことを考えて、秋山にその仲間の二人に泉の11人

レインが言ったことが本当のことなら異世界に行った10人程度が、全員北合地方から選ばれたのは偶然なのか？

「……………最後の質問だ、何故俺を襲った、それと襲ったのは俺だけだろうな？」

秀の最後の質問にレインは少し間を開けてからゆっくりとそして咳くように理由を話した

「……………親友だったからかな」

「え？」

「お前達の担当だった奴はな昔っからの親友でな、その親友が託した奴らがどれほどのものかを知りたかつたんだ」



「託したって何だよ」

「カードって言ったろ、まあそのせいであいつは担当を外されたんだかな」

「そんなに担当とやらが大事なのかよ」

「俺が生きる世界で担当を外されるってことは死を表すのと同じだ」

「……………意味わかんねえよ」

「分からなくていいんだよ、俺達の生きる世界なんて分かってもらう方がおかしい」

「レイン……………」

夕暮れのきれいな緋色をした空を見上げるレインはどこか寂しそう

だった。

まるで今から巣立つような鳥のように

孤独だけど誰にも助けをもとめることもできない感じだった

「さて質問タイムは終わりだ」

「ああそうか最後って言ったな」

「ああだから帰れ、俺も忙しいんだよ」

「へいへい帰りますよ」

レインの方も見向きもせず公園を出た

それを確認したレインは秀に聞こえないように呟いた

「じゃあな、親友が託した希望よ」

「ん？……………」

< どうしたの？ >

「今何か、とても大切なもの託されたような気が……………」

公園の方を振り向くがレインのレインの姿はない

> 何言ってるの秀？ <

「聞かなかったことにしてくれ、気のせいだと思うしな」

> 変な秀、あ、いつも変か <

「……………帰る」

> ほらほら拗ねないの <



二十四話 隠し事

家に戻った後、いそいで服を脱いで止血をする

「くうくかすり傷だけど出血してやがるな」

>量は出てないけど、止めるにこしたことはないね<

脇腹の血を止めて救急箱に入ってる包帯を巻いて、上に服を着てから洗面所を出る

「にしても夢集めと戦うとは思ってなかったぜ」

>だね、まあ結局肝心なところを聞き逃しけどね<

「肝心なところ？」

>何で秀達を異世界に飛ばすのかどうか<

「うーん……………ただ単に夢を叶えるためとか？」

> 秀の残念な頭に考え事させた私が悪かったく

「んだと、こらあー!」

> 質問してないのは事実でしょく

「……………」  
「めんなさい」

> わかねばよろしいく

わずから秒で精霊に口でまけた秀だった

その日の夜、いつも通り夕食食べる三人

「ねえ秀、ちょっとピッチャー取ってよ」

秀の右側にある、ピッチャーを取ろうと腕を伸ばした秀だが、かすった傷口が痛み、不自然な間をとる

「どっしたの秀？」

「……いや何でもないよ、それより母さん、ピッチャー取ってあげてよ」

何の問題もなくピッチャーを姉に渡す

ピッチャーを受けとるも疑いの目を秀に向けている

その目を見た秀は、とりあえず何かを言われる前に部屋に戻る

椅子に座って天井を見上げる

(今日もまたいろいろとあったな……………)

ぐるぐるとキャスター付きの椅子を回し続ける

「……………寝よう」

椅子から立ち上がり、ベッドに潜り込もうとした時、部屋がノックされ姉の音がする

「秀、入っていい？」

「どござ」

ガチャリとドアが開かれ姉が入ってきて、秀の前まで移動する

「横……………いい？」

「どござお姫様」

秀の横にちょこんと座る

「んで何用かな？」



「えーと……ねえ秀、やっぱり何か隠してるでしょ」

「一体何を？」

「最近よく怪我して帰ってくるから、何か危ないことをしてない？」

「してないよ」

「でも隠し事はしてるよね」

「人には一つや二つ隠し事があるよ」

「私が言ってるのはそうじゃないの……私が言ってるのはごうい  
うことよ」

秀の左の脇腹の部分の服を巻き上げ、脇腹を軽くはたいた

「ぐっ！…！」

反射的に姉の手を払い、脇腹に手を当てる

「ほら、やっぱり隠してるじゃないの」

「これはただ転んだだけだよ」

「転んだだけじゃこんな包帯を巻いたりしないよ」

「ほんとに大丈夫だから気にしないで……………」

平常な顔を見せようとするが傷口からは再び出血し始めていて、白い包帯をじわりと赤く染める

「ちよつと秀、血が!?!」

「ちっ、また出血し始めたか……………」

そう言っつてベッドから立ち上がり洗面所に急ぐ

「姉さん悪いけど救急箱取ってきてくれないかな？」

「ちよ、ちよつと、病院にいかないの!？」

「この程度の傷口で医者の手を煩わせるわけにはいかないし、この程度の傷口なら大丈夫だから」

部屋を出て洗面所に入ってからすぐに姉が入って来て救急箱を洗濯機の上に置く

救急箱を確認してから秀は服を脱ぎ始める

「ちよ、ちよつと秀待ってよ／＼／」

「何だよ、服着たままじゃやりずらいんだよ」

そう言っつて包帯を取り傷口をあらわにすると、姉はそれを見てあわてふためいて救急箱の中を、床に撒き散らしてしまう

「……姉さんはガーゼで傷口を押さえてて」

「う、うん／＼」

ガーゼを手に取り秀の傷口を押さえる、その顔は少し赤らめていた

「ほ、包帯、包帯はどこかな？」

「はい包帯」

「あ、ありがとう」

適当な長さに切って、姉が押さえているガーゼを取ろうとしたが、  
姉は離そうとせず話かけてくる

「ねえ秀……………」

「ん？なんだ？」

「私はこんなことしかできないけど、少しは私を頼ってよ」

「姉さん……………」

「ねえ秀……………」

トロリとした瞳で秀を見つめながらも、しっかりとガーゼで止血をしてくれている

「……………わかった、今度から姉さんを頼りにするよ」

それを聞いた姉は、沈めていた顔を上げ、にっこりと微笑んだ

二十五話 作られた休日

三日後の朝はからりと晴れた気持ちの良い日だった

「んー……気持ちの良い朝だな」

カーテンのすき間から射し込む神々しい朝日がそういつていた

「そうですねー気持ちの良い天気ですね」

何故か石月がいた

「……………母さんにSE OM頼もつかな」

「もう、何言ってるんですか、浅村君が最近遅刻気味だからこうして迎えに来てるんですよ」

「それはありがたいけど……………ていうかよく母さん入れたな」

「快く入れてくれましたよ」

「鍵でも付けるか……」

ぼやきながらも何を言っても無駄だと感じた秀は、石月を部屋から出してからジャージ姿に着替えた秀は石月を連れて外に出た

「よし、行くか!」

ぐーっと背伸びしてから、秀は石月と一緒に昨日の朝のように同じ道を走って行った。

部屋の窓からどこか寂しげにな顔をした姉に気付かずに……

「秀……」

30分後

「はあ、はあ、はあ、やっぱり疲れるな」

「持久力は続けなきゃつきませんからね」

大の字になる秀の横にちよこんと体操座りしながら微笑む石月に  
少しドキッとなってしまっ

(やっぱり石月って真也の言う通り可愛いな)

ファンクラブの存在に再度認識した朝だった



自宅

「ふー、ただいま」

「あらお帰り、休みだっというのに朝から熱心ね」

「何かもう毎日を動かさなきゃ落ち着かなくてね、シャワー浴びてくるよ」

「まったく休みの日はいつまで続くのかしらね」

母のなにげない言葉に秀は、シャワーに行く足を止めてぼそりと呟いた

「俺が休日終止符をうつてやるぞ……」

そのままシャワーを浴びにいく秀が部屋に戻り着替えを取り、部屋

を出た時、ぱったりと姉に会う

「や、やあ姉さん」

「う、うん、ねえ秀、何で怪我してんのに走ったりするのよ?」

「大丈夫、傷口はもう大丈夫だからね」

その場で軽くピョンピョンと跳ねて見せ、最後にニコツと笑って見せる

「だ、大丈夫ならいいのよ／＼」

「んじゃあ俺はシャワーを浴びてくるよ」

とたたと階段を降りて行った後、洗面所に入り服を脱ぎ捨てて浴室のドアを開け、シャワーを浴びる

「ふー、気持ち良いぜ」

>傷口には染みたりしないの秀？<

「ああ、風で傷口の箇所をカバーしてるから大丈夫さ」

秀の言う通り傷口に周辺に水がかかる瞬間、水は風のに飛ばされるように傷口にはかからなかった

>ふーん、やるじゃん<

浴室を出て服を着て、リビングのテレビをつける

今日も相変わらずどの番組でも北合のことを報道していて、酷いところでは信者まで出てくるしまつ

「何というか、まさか近所でこんなことが起こるなんてね」

「お茶の間にとっては興味深い事件なんじゃないかな？まあ信者はいきすぎだけど」

テレビに映っている信者は、あの北合の事件は私達の指導者がやったことだと言い張っていて、その気になれば、北合を支配できると

などぬかしている

信者に対して、様々な専門家が自分達が考えた矛盾点をぶつけると、信者が意味不明な答えを出すところを見ると、この信者達が残念で仕方がなかった

(くだらねえな……)

「秀、咲恵、朝ご飯できたから食べましょ」

「はいよっ」と

ソファーベッドから立ち上がり、テレビの電源を切るつとしてリモコンを握った時だった……

テレビに映っている信者達の拠点に見覚えのある球体が落ちてきて、拠点にいる信者達を襲つ

さっきまで激論を繰り広げていた信者と専門家も開いた口が塞がらないという感じで、テレビのリポーターも今起きていることを必死に伝えようとしているが、慌てふためいて何を言っているかわからなかった。

「な、何よこれ!？」

さすがの母も驚いており、テレビを食い入るように見ている

その脇で強く拳を握り、歯を食いしばる秀

「秋山の野郎……………」

完全に血が登った秀は、家を飛び出して、新藤に電話をかける

「もしもし、浅村君何？」

「新藤、今テレビ見てるか？」

「もしかして、宗教団体の拠点が襲われてる番組？」

「ああそうだ、その宗教団体の拠点って何処だ？」

「え！？えーと……………」

新藤から聞いた場所は特訓していた山を越えた所にあり、韋駄天を使えばさほど遠くはなかった

「行くぞシルフィー！！」

>うん、秋山に一喝いれてやらなきゃね<

韋駄天で駆け出した秀は、襲われた拠点に向かって全力で走り出した



二十六話 激闘再び？

秀が着いた時にはもう地獄絵図状態で、現場は酷いもので、現場には救急車やパトカーが来ていた

「……………酷い」

>酷すぎるよ……………<

辺りを見渡し秋山を探すが、秋山の姿は見当たらない

「くっそ……………何処いきやがった？」

現場には野次馬がこつた返していて、人を探すには適していなかった

「やっぱりもういないのか」

深いため息を吐く秀



無駄足と思い、帰ろうとした秀がその場を後にしようとした

> 秀! ! <

「気づいてるさ!! 韋駄天!!」

韋駄天で移動する前の場所は無数の球体が落ちてきていた

瞬時の魔力を感知した秀はその場所まで急いだ

死ぬほど急いで、やっと会うことができた

「よお秋山」

「.....」

何故か仮面を被った秋山は黙ったままだ

まるで秀がいることがわかってないように

>何か前に会ったときより不気味だよアイツ<

「不気味だけどやらなきゃいけないんだよ、風刃!!」

「……………卯月」

卯月によるバリアで簡単に弾かれた風刃だが、やはりどこか秋山の様子がおかしい…………

「如月……………」

「韋駄天」

さっきの場所に野次馬が集まっではいるが、いつここに人が来るかは分からない

だからこそ、早めに決着をつけるか、秋山を人気のない場所まで連

れていくかの二択がベストだが、その二択も秋山相手には難しいだろう

「鳴雷月……………」

鳴雷月に変形させた後すぐに雷を落とす

「おおっと、危ねえ…………… たく派手な技使っなよ、関係ない人を傷ついたらどうするんだよ!!」

「如月……………」

「聞く耳持たねえようだな」

すっと腰からもう一本の木刀を取り出した

「天つ風・重」

「っ!？」

「韋駄天!！」

天つ風・重のスピードは秋山の如月のスピードを超えていて、戦局は圧倒的に有利にすすめていた。

「絶空剣・剣舞!！」

「ぬう……………」

圧倒的な手数で攻め込む秀に秋山はあきらかに苦戦していた

「旋風刃!！」

「ぬわああああ!！」

竜巻で吹っ飛ばし、後の柱に体を打ち付ける

>……………ねえ秀？<

「やっぱりシルフィーも気づいたか」

>なんて表現すればいいのかな？手応えといつかなんとといつか……………<

「ああ、弱すぎる、以前の秋山ならもっと強いはずだ、正直相討ち覚悟で倒せるかどうか」

>まるで秋山じゃないみたいだね<

(秋山じゃないみたい……………)

シルフィーの言葉がどうも引つ掛かる

「ぐう……………」

ふらふらになりながらも、立ち上がる秋山は、剣の形状を睦月に変

えて攻め込んでくるが、如月以外の剣では韋駄天には追いつけず剣を振るっても空振りばかり

ブンブンと力任せな大振りを見せるが、秀には当たりもしない

「空破撃!!」

「ぐおおおお」

>よし、これは完璧に決まった!!<

「まだまだ!!」

もろに空破撃をくらってもなお秋山は踏みとどまり、また秀に向かって走り出す

「おい秋山!?!お前どっかおかしいんじゃないのか?」

「……………オオオオオオ」

>秀、何か気持ち悪いよ<

「仕方ない……………二、三日記憶がなくても恨むなよ秋山！！天破散牙撃！！」

天つ風・重で睦月を弾き、素早く天破散牙撃で秋山を吹っ飛ばそうとした瞬間、秀と秋山の間誰かが落ちてきて天破散牙撃を止められる

「何！！天破散牙撃が！？」

「危ない、危ない、やはり使いすぎはよくないか」

秀の前に現れたのは秋山と同じく仮面を被り、黒いマント着ていて、誰だか判断できない

「……………誰だお前？」

「君に言う必要はない」

カチンとくる言葉だ

「なら力ずくでも聞いてやる、ウインドエッジー!」

「ぬるい……」

ウインドエッジを素早く放つが男は虫を払つかのようにウインドエッジを払った

「ではさらばだ!」

秋山に近づき、マントをバサツと広げ二人を隠し、マントが地面に落ちると二人はその場から消えていた

「マジかよ……」



> あ、人が来るよ！<

さすがに騒ぎ散らかしすぎたか遠くから騒ぎ声や足音が聞こえてきたため

落ちているマントを拾い、韋駄天でその場から離れ、家へと戻っていた。

## 二十七話 気がかり

自宅に戻ると、拠点のニュースが取り上げられていて、睦月の球体のことや旋風刃、それに鳴雷月の雷のことなど、多くのことが取り上げられていた

そのニュースに母も姉も釘付けで、秀が出ていたことも知らなかったようだ

「母さんも姉さんも、そんなにテレビにベッタリしてたら目が悪くなるよ」

「でも秀、何も無い場所から球体が降ってきたり竜巻や雷が落ちたらそらびっくりするでしょ」

「そうよ、逆に何でアンタはそんなに冷静なの？一山越えた所で起こってるのに」

二人の言う通りだ、何も無いところで竜巻が起こったり、雷が降ってきたりすることなど、一般人からすれば非日常もいいところで驚くのも無理ない

むしろ常日頃、非日常で過ごして来て、それが非日常から日常に変わってきたという自分の方がどうかしている

いきなり全然知らない世界に飛ばされ、そこで力を手に入れた……  
…それだけではない

風が使えたり、あり得ないスピードで動けたり、他の人にあたっては、氷でいろいろな物や生き物を造形したり、火柱を起こしたりしたのを見てきたし

そこで、命の取り合いをしたりもしたし、一つの街を守るために戦ったてたくさん傷ついた

そういう自分にとっての日常が、今あきらかに非日常へとかしている  
何かがおかしくなっていた……秋山のせいではなく、急に出  
現したあの男のせいで

> ねえ秀<

「ん何だ？」

これからどうなるのかな？

「何だいきなり藪からに」

カードにも何も表示されないし、いきなり秋山がおかしくなるし、  
変な男は現れるわけで、何かてんやわんやでさ

「俺も分からねえ……………けど何かがおかしいのは間違いないな」

ソファから立ち上がり、テレビには目もくれずに自分の部屋に戻っていった。

自分のベッドに寝転がり、天井を見上げる

「……………」

いつも通りの白い天井、いつもと変わらない面積  
変わったのは自分だった

「……………」

何もすることがなくポケットから携帯取り出す。

不在着信が3件で泉と石月と真也からで、メールも同じ人物からで、事件のことだった、おそらくテレビで旋風刃を見てのことだろう

全員に大丈夫と三文字だけ入力して、一斉送信した

「……………」

まだ昼過ぎなのに、何もする気が起きない

間違いなく今日の事件が原因だろう

(一日を寝て過ごすのも悪くないな……………)

布団を被り、目を閉じようとしたところで、部屋の外から母の声がある

「秀、昼御飯できたから降りてきなさい」

「ん〜わかった……」

生気のない返事をしながらも、自己主張が強いお腹なために、食卓に向かった

「……………」

「……………」

「……………」

何故か無言でもくもくと食べる三人

いつもだったらもっと母と姉が喋るはずなのだが、何故か今日は二人はとても静かどころかそわそわしている

そして母は机のしたから何か姉に指示を出しているようだった

「ほらほら……………」

なかなか動かない姉に母はしびれをきらしたのか箸の動きを止め、  
秀の方を向いた

「ねえ秀、明日6月19日何の日だと思うっ？」

6月19日、6月19日と頭の中の記憶を巡らせると、一つの答え  
が出てきた

「ああ、そっぴや俺の誕生日か……………けどそれがどうかしたのか  
」？

「実は咲恵がね……………」

「ちょ、ちょっと母さん!？」

「明日せっかくだから三人で出かけないかだったさ」

「へえ、わざわざ気にかけてくれたんだ」

ニヤニヤしながら、姉を見る秀、姉は顔を真っ赤にしながら顔を伏せていた

「で、どうなの？明日行く行かない？」

「せっかく誘ってくれたし、家族三人で遠出するのも久しぶりだし行こうか」

秀の言葉に姉は小さくガッツポーズをしていた



二十八話 誕生日

次の日の朝、携帯のアラーム通りの時間に起きた秀は顔を洗おうと部屋を出た時、どこからか鼻歌のような音が聞こえてくる。

どうやら音の発生源は姉の部屋らしく、近づいて耳をすませれば、何やら嬉しそうな鼻歌が聞こえてくる

「ふん ふんぐん」

(三人で出かけるのが楽しみなのかな?)

音をたてずに洗面所に向かうと、そこにはすでに母がいた

「あら早いわね」

「まあね、出かける予定がある日に遅刻はできないよ」

洗顔フォームを取り顔にぬり洗い流す

「何気にみんな今日が楽しみなのね」

「本当に久しぶりだもんな三人で遠出は」

「咲恵も嬉しそうだったしね」

「あゝあそついや鼻歌つぽいの歌ってたな……そんなに嬉しいのかな遠出が」

「んもう、秀ったら分かってないわね」

大阪のオバチャンのテンションでどついてくる母

正直いろんな意味で痛い……

「ああそれと秀と私達は待ち合わせまで別行動」

「待ち合わせ？」

「その女の子には準備がかかるものよ、だから先に行って、それに待つのは男の仕事よ」

「どうせ会うなら三人一緒に行ったらいいのに……っってもしかしたら朝飯って……」

「うん、現地調達」

「はあ、了解、んで場所と時間は？」

「11時に改札口前でね」

それを聞いてから洗面所を後にした秀は私服に着替えてから家を後にした

駅前

二人より早く駅前に着いた秀は、どこで朝食を済ませるかを考え、とりあえずはコンビニに入る

おにぎりやサンドイッチを見るが、どうもしっくりこない

(うーん、わざわざ駅前まで来ての朝食がこれはないな……………)

結局コンビニを出て、考ええる秀に聞き覚えのある声がかかる

「おい浅つち」

「お、蒼土久しぶりだな、どうしてこんな所に？」

「浅つちを探してたんだよ、家に行ったらここにいて聞いてさ」

「電話かメールすればいいのに」

「まさかこんな朝早くに外出してるとは思ってたし、直接会って話したいと思ってな」

時間あるかと聞いた蒼土に首を縦に降った秀は、近くにあった喫茶店に入っただけだった

「いらっしやいませ、ご注文はお決まりでしょうか？」

「モーニングセット二つください」

「かしこまりました」

営業スマイルをとった定員は、厨房へ入り、注文をついた紙を貼り付ける

「んで、話は何だ？」

「ああそうだったな、えーと……………」

口ごもる蒼土は、もぞもぞしながらも見覚えのある紙を出した

「俺もKK部に入らせてもらっていたんだけど」

「何だつてー!!!!!!」

「バカ、声がでけえよ」

蒼士の言う通り、他の客が全員こちらを見ていた

「す、すまん……」

顔を伏せて蒼士に謝る

「まあいいや、これは受理させてまじっけ」

「え！？理由とかなんやら聞かないのか」

「別に、むしろ陸上部の方が心配だ」

「ああさいですか……」

「まあ何はともあれ蒼士が入ってくれたおかげで後一人だよ」

「そうか、だんだん希望が見えてきたな」

話に一段落がついたところで、モーニングセットがきた

「んで浅っちはこんな朝早くからどうしたんだ？」

「今日が俺の誕生日でな、家族三人で遠出なんだけど、母さんが先に行って待ってるだったさ」

「はぁーんなるほどな、とりあえず、おめでとう、でも浅っちも自分の誕生日なんだから少しぐらいテンション上げようぜ」

「三人遠出するんだから、三人一緒に出たらいいのにいちい先に  
出させるし、朝飯こうして外で金払って食うはめになるしでテンシ  
ョン低いんだよ」

「まあいいじゃねえか、誕生日を祝ってもらうなんて優しい家族じ  
ゃねえか」

「まあそついつ見解もあるな」

それから雑談をすること一時間、いい頃合いになって喫茶店を出た

「じゃあな浅つち、誕生日を満喫しろよ」

「ああ……………」

蒼土と別れた後時計を確認すると集合時間の15分前になっていた

何か秀、テンション低くない、理由があるにしろ低すぎるよ





「ああ咲恵なら……あそこの柱でナンパされてる」

「……めんどくせー、連れてくるわ」

すたすたと歩いてくるのに気付いたのか、ナンパしている二人組の男は秀を睨み付ける

「何だよガキ」

「姉さん、ささっで行こうぜ、母さんも待ってたからさ」

二人組の男達を無視して、姉の腕をとって連れていこうとしたが、男達が見逃すはずがなく

「ふざけんなよてめえ!!」

秀の胸ぐらを掴み上げようとするが、秀はその腕を掴み、ぐっと力を入れると男は悲痛な声を上げ、たまらず膝をついた

「ああああああ！！」

それを見たもう一人の男は秀に殴りかかるが、秀は膝をついた男を持ち上げ、もう一人の男の拳をもう一人の男の顔面に当てる

そして殴られた男の背後から回り込んでもう一人の男の袖と奥襟を掴み背負い投げを決めた

倒れてる男達に秀はニコツと笑いかけ一言だけ男達に言った。

「まだやる？」

今の男達にはそれだけで十分だった



二十九話 家族で買い物

男達を一蹴してから時は過ぎ、三人は駅から少し歩いた大型のショッピングモールに来ていた

「ねえ秀これなんてどうかな？」

ひらひらと服を自分に服を当てる母

「似合うけど、少し派手かな」

「えー、じゃあこれは？」

「それは地味かな……………こんなもんどうかな？」

「……………うん いいね」

服をあてながら鏡の前でぐるりと一周する

「あ、秀は咲恵の所に行ってきたら」

「今日の主役が何でコキ使わされてんだよ……………」

「昼食後はあなたが主役だからね」

「へいへい」

とぼとぼと歩いて婦人服コーナーを出た秀は、咲恵の所に行った。

三  
F

女性服コーナーで服を選ぶ咲恵に店員に少し押されて気味のようだ

「えっと少し派手かと思えます……………」

「最近は少し派手が流行りなんですよ」

「えーと……………」

押され気味の咲恵に見かねた秀は

「やっぱ派手かな？、これくらいのがいいんじゃないのかな？」

パツと服を見せる秀に店員は手を口にあてながら微笑む

「うふふ、彼氏さん待ちでしたか、これはこれは失礼しました」

「か、か、彼氏／＼／」

顔を真っ赤にした姉は、服選びどころじゃなくなっていた

そしてそれにももちろん悪ノリする秀

「咲恵、こんな服なんてどうかかな」

秀の悪ノリに人間ではできないほどの色をしていた姉を見て止めることにし、耳元でごめんっ囁くと、姉の腕を引っ張り店の外に出ると同時に姉に腕を思いつきしつねられた

「っ！……！！！」

「ったく、いきなり何てこと言うのよ！！！」

「何だよ、なくもねえ顔してたくせに」

「……………／／／」

姉が再び黙った所で、ポケットに入った携帯が震え、取り出すと、4Fに集合と母からメールが届いていた



4 F

「よし、全員集まったわね」

「全員集まったつつつたつて三人だろ」

「まあ気にしない気にしない、さあ秀、昼食は何がいい？」

「フランス料理のフルコース……」

「チエストオオ!!」

母は掛け声と同時に腹部を殴ると、顔をひねり顔をファミレスの方向に向け

「どこがいい？」

「ファミレスがいいです……」

「もう秀ったら、謙虚ね」

結局その日の後半も秀が主役となることはなかった

そして時は過ぎ夕方、一通りの買い物が終わった後、家に前まで着いたところで母と姉が秀の前に行き、秀を止める

「どっしたんだよ？」

「秀は10秒数えてから入って」

「は？」

意味が分からず呆然と立ち尽くす秀は仕方なく10秒数えてやることにした

「1、2、3、……………10!!」

10秒数えた秀は一度深呼吸した秀は家の扉に手をかけ扉を開けた。

「誕生日おめでとう!!」

玄関に入ると同時に祝い言葉とクラッカーの糸屑が飛ぶ

「浅村くん、誕生日おめでとう」

「泉さん、石月、新藤、西脇!？」

「誕生日おめでとう秀(浅うち)」

「連に真也に蒼士!!」

「……………なるほど、そういうことだったのか」

何故わざわざ朝早くから出されたのか、ずっと疑問に思ってたことが解決された

初めっから自分を外に出し、自分の知人を家に呼んで誕生日パーティーを開こうというわけか

まったく……………

最高の家族だよ

「ありがとう皆、最高の誕生日だよ」

それから出てきたケーキにはご丁寧にロウソクが17本刺さっていた

そして一気に息で吹き消した

消すと同時に、拍手が起きると同時に、プレゼントを渡されるが、さすがに今来ている人数分をもらうのはキツイのでとりあえず適当な所に置く

「ありがとう皆、皆も俺ばかり気にしないでケーキを食べよ」

その場で人数分に切り分けたケーキと、買って来ていたお菓子を広げる

「「いただきまーす」」

ケーキやお菓子をなどを食べながら談笑をする、久しぶりの大人数での食事のせいか、あっという間に時間が過ぎていった

そして時は夜

「お邪魔しました、それじゃあ浅村くん」

「じゃあな秀」

「おう、またな皆」

玄関で別れた後、家に入り、片付けを手伝おうとするが、もう大分終わっていた

「何か手伝うことある？」

「気にしないでいいわよ、今日はあなたが主役なんだから」

「あれ？どうしてだろう、主役になった気がしないな」

「まあ気にしないで、それより咲恵がさっき探してたわよ？」

「ん？それなら会いに行くわ」

階段を上り姉の部屋に行こうとしたが、偶然姉から部屋から出てきた

「あ、秀よかった、探していたんだから」

「どうしたの？」

「久しぶりに秀の誕生日を祝おうとしてね、はい、誕生日プレゼント」  
「ト」

姉が出したのは手作りのミサंगाで、姉は秀の腕にミサंगाを結ぶ

「ありがとう姉さん」

「あ、うん／＼そのミサंगाにはいちよ健康運上昇の願いが入ってるの」

「ん？ミサंगाってそういう物だったっけ」

「編み方や使う色で色々と変わってくるのよ」

「なるほど、まあなにしろありがとう」

「ねえ秀、少し外に出ない？」

「いいよ、行こうか」

二人が来たの近くの公園で、この時間帯には二人しかいなかった

夜の冷たい空気が頬につたようで、とても心地よい

そして何より、今日の夜空はとてもきれいだった。

「あいかわらず空を見上げるのが好きなのね」

「きれいだと思うし、気持ちが落ち着くんだ……………昔から」

「そうね、初めて秀と出会った時も秀は空を見上げてたもんね」

「もう12年も前の話だろ」

「だね、12年前、私達が出会ったんだね」

「懐かしいな……………懐かしすぎてあんまり覚えてないや」

「……………私は覚えてるよ」



「へえ、どんな？」

「あの時の秀のふてくされた顔や、私達に対するとてつもない警戒心の強い眼」

「最悪の第一印象だな……」

「でも空を見上げる秀の顔はとても優しい顔で、希望に満ち溢れてたよ」

「希望ね……」

「ははは、ちょっとくさかったかな」

「いいんじゃないのか、誕生日の日……いや俺が初めて家族になった日だしね」

「そうだね………秀、あのさ」

「何だよ、いきなり暗い顔して」

顔を下に伏せたままの咲恵はゆっくりと口を開いた

「……………これからも私達は家族だよね」

「はぁ？当たり前だろ」

「それが聞いて良かったよ」

「何か姉さん変だよ」

「いいの、いいの、じゃあ帰る」

夜風が吹く公園を姉に続いて秀も出て、二人揃って家に帰って行った



三十話 果たし状

今日の朝から石月とランニングをする二人、だいぶ距離とペース配分に慣れてきたのか二人の足取りは軽く感じられた

「だいぶ慣れてきたなこのコース」

「そうですね、明日から少し距離を増やしてみますか？」

「そうだな、ちょっとばかしふやしてみるのもいいかもな」

「じゃあ明日から距離を増やしますか」

そのままら？走りきり、いつも通り草むらに寝転がる

「ふうー」

「お疲れ様でした」

「石月もお疲れ」

お互いを労いつつ、秀は携帯を開く

「ん、ヒロから不在着信が入ってる」

すぐさま折り返し電話をする

「もしもし、ヒロか」

「浅村君か、今家か」

「いや外にいるけど、どうかしたのか？」

「そうか、なら昼頃に家に来てくれないか」

「わかった、じゃあ昼頃に向かうよ」

電話を切って、ポケットにしまう

「何かトラブルですか？」

心配そうにこちらを見る石月

「分からない、ヒロが昼頃に家に来てくれだってさ」

「何かあったんでしょうかね？」

「焦ってた様子もなさそうだし大丈夫だと思うよ」

電話の内容を石月に言った後、二人は自分の家へと戻って行った

そして時は過ぎ昼過ぎ

泉家

泉家に入ると、すでに連と真也も来ていた

「おお浅村君、これで全員そろったな」

適当なところに席かける秀

「さてとでは始めるとするか」

ポケットから一枚の紙を取り出し、前の机に出した

“今日の12時に校庭で待っている”と書かれていた

「「マジで……!」」

「いやいや、早すぎだろ!?!」

連と真也が驚く中、秀はいたって落ち着いていた

「いいじゃねえか、重要なのは秋山と戦うってことだろ」

「……………そうだな、今度は勝たなきゃな」

打倒秋山に燃える三人、そんな中、秀はひょんなことに気付いた

「ヒロ、そっぴや妹さんは?」

「ん、ああ、まあちよつとな……………」

「もるヒロ、調子でも悪いのか」



咳払いをして、話題を妹からそらし、ヒロはしめた

「総力戦になるだろう、だから今はゆっくりしてくれ」

「んじゃあ、俺は帰るわ」

秀に続くように連と真也も立ち上がり、泉家をあとにした

泉家から出て連と真也と別れ、秀は自分の家に戻り、玄関のドアを開けた時、家の中はごたついていた

「あ、秀！？良かった早く部屋に行って！！」

訳が分からず部屋に戻り、扉を開けると、そこには姉の咲恵とベッドに横たわる泉がいた

「泉さん！！」

すぐさま泉の元に駆け寄る

「今やっと寝たんだから静かにしなさい」

姉にどつかれ静かにする秀

「何で泉さんが……………」

「それは私が説明するわ、とりあえず下に降りましょ」

眠る泉を見つつ部屋から出た三人は、リビングのソファに座っていた

「母さん、何で泉がいるんだよ」

「今日秀が外出した後インターホンがなったのよ、それで誰と  
思っ  
て電話ごしに話している途中に急に倒れたのよ」

「だったら何で救急車を呼ばないんだよ!」

「私も呼ばづとしたわよ……………でも、彼女がはっきりとこう言ったのよ」

“やめてください、呼んだら殺られちゃう”

「確かに泉がそう言ったのか母さん」

「ええ、かなり弱ってたから部屋に入れたの、それで今寝たつてこ  
とよ」

「そうか……………ありがとう母さん、姉さん」

「どういたしまして、さて秀はあの子の所にも行ってやりなさい」

母の言葉に首を縦に降り、リビングを出て階段を駆け上がり自分の  
部屋に入る

部屋にはまだ寝ている泉がいた。

「一体誰がこんなことを………そうだヒロに連絡しておくか」

一旦部屋から出て、ヒロに電話をいれるが、まったくつながらない

「寝てるのかな？」

後でまた連絡することにした秀は部屋に戻り今日のことを考える

自分が能力を手に入れて以来、初めて何もできなかった相手

一撃すらいれることもできず苦汁を飲んだ

正直秋山と戦うのは怖い

でも、もうこれ以上被害者を増やすわけにはいかない  
だからこそ今日で

すべてを終わらせる……！

そして時は過ぎ、時刻は8時になっていた

早めに用意されていた晩飯にありつき、しっかりとエネルギーを補給する

「母さん、飯食った後連の家に行くよ、もしかしたら今日は帰れないかもしれない」

「あらそう、夜坂君の家に迷惑かけないようにね」

「わかってる、母さんと姉さん、泉さんをよろしく」

晩飯を食べ終わった秀は、自分の部屋に戻り、泉が寝てることを確認する

「俺達が今日全て終わらせてやるからな」

泉にそう呟くと秀は家を出て連の家に向かった

夜坂家

「そろそろだな」

「だな」

時刻は11時過ぎで、今までは作戦会議をひらいていたが、結局まともな案が何一つ浮かばず時刻が11時をまわっていた

「んじゃ、行きますか」

立ち上がった二人は、家を出て足早に学校へと向かった

## 三十一話 戦いの始まり

決戦の地に向かう二人

いつもの登校の道を歩く二人だが、いつもの道が全然違う道に感じている

足取りは確実に重苦しい

それから学校に着いたのは12時10分前で真也はすでに着いていた

「待たせちまったかな三人さん」

「気にするな今来たところだ」

「デートの時の受け方だな」

軽い冗談をとばすのは余裕からくるものなのだろうか

「さておっ始めようか」



天つ風を出し戦闘準備は完了したが、秋山は一つ提案を出した

「ここで三人で戦うのは得策ではない、どうだろうかここ一対一で別々の場所で戦うってというのは、場所はそちらが指定してもらって構わない」

三人が秋山の提案に相談した結果

「いいぜ、さすがに学校をこれ以上荒らしたくないからな」

「ふ、いい答えだ、では相手を決めようか」

「アッキー、俺は浅村とやりたいな」

「待て、私も浅村と戦いたい」

「モテモテじゃん秀」

「全然嬉しくねえよ、てか俺は秋山とやりたいんだけどな」

「だな、あの変幻自在のバトルスタイルは秀が戦うのがベストだろうな」

「フーことだ、お二人さんには悪いけど、俺は秋山と戦わせてもらう」

「んじゃ俺はチャラチャラしたほうで」

連がチャラチャラした方と言ったことで三人のそれぞれの相手が決まった

浅村 秀VS秋山

夜坂 連VSチャラ男

霧崎 真也VS和男

「さて、俺はここで戦うけど、連と真也はどうするんだ？」

「心配するな場所ならあてがある、ここから東北へ行った所に廃工

場がある、あそこなら二人程度邪魔にならない」

真也の言う通り、あそこには3年前に潰れた廃工場があった

動いてた頃は活力があつてよかつたものの、今では地元の人でも近づこうともしない場所だ

あそこなら一般人が巻き込まれることはないだろう

「ここから東北へ行った所にある廃工場で俺達が戦う、あそこなら広いから俺達が戦つても問題ないだろう」

秋山達にそう伝えると、秋山以外の二人はその場から指定した場所へと向かつて行った

「さて俺達はここで一旦お別れだな、じゃあ」

二人に続くように連と真也も廃工場に向かおうとしたが、秀はそれを呼び止めて、二人の前に右手の拳を突き出した。

「二人に限つてはないと思うけど……死ぬなよ」

秀の言葉に二人は顔を見合せ、秀と同じように拳を突き出し、三人で三角形を作った

「お前もな」

二人が廃工場に行ったのを見送った後、校庭には秀と秋山の二人だけだ

「やっと二人きりになれたな秋山」

「気持ち悪いことを言つな、男と男だぜ」

「だな、んじゃあ始めますか」

「どっちが勝つかは見えてるかな」

「は、言つてな、行くぜシルフィーー!!」

「来い!! 今日をお前の命日にしてやる」

秀が韋駄天で動き出すと秋山は剣を如月に変え、秋山も動き出す

「「「おおおおお！」「」」



三十二話 三つ巴の攻防

廃工場では連と真也が戦っているせい、廃工場内からは激しい物音がとどめなく流れている

廃工場内で戦っているのは連で、真也は廃工場外で戦っているようだ

「アイスウルフ！！」

「効かねえよ」

連が放つアイスウルフを全て拳と蹴りで粉碎し、地面を強く蹴り、連との距離を一気に詰める

距離を詰められた連は、素早くフックを繰り出す、相手は身を屈めフックをかわす

そして懐に入り込みラッシュを打ち込み、最後に前蹴りで連との距離をとる

(ちっ、速い………秀の韋駄天と張り合えるぞあれ)

「おいおい、つまんねーぞ氷男」

「へんなアダ名付けんな、俺は夜坂　連ってんだよ」

「俺だって奥山　文って名前があるんだよ」

お互いに名前を知ったところで一旦動きを止めた二人だが、互いに  
にらみ合い戦闘が再開する

「ああそつかい、じゃあ行くぜ!!」

「来な!!アイスウルフ、アイスドラゴン!!」

数多の狼と一匹の龍が襲うが、アイスドラゴンをかわし、アイスウ  
ルフを全て破壊した。

そして破壊したと同時にまたもや同じような攻撃で連を攻撃する



「くっ、なら………これでどうだ」

連が造り出したのは巨大な鎌で、それをなぎはらうように振る

「当たらねえよ!」

ジャンプで鎌をかわすが連の狙いはジャンプさせることだった

「飛んだな、氷槍・包」

「げっ、まずった!」

公園の時のように両手を合わせるようにして閉じ、奥村に氷の槍が襲いかかる

「ちっ、仕方ねえな………スパーク!」

「な、電気だと!」

体から放出した電気が氷の槍を全て破壊した

「それがお前の能力か」

「ああそつだ、俺の能力は魔力を電気に変える、それが俺の能力さ」

「氷槍・包は破られたけど、お前の能力が分かっただけでもよしとするか」

「能力が分かってても、無駄なんだよ、疾風迅雷!!」

奥村の足に電気が流れ、流れると同時にさっきのスピードで動きだす

（ちっ、さっきのスピードはこれかよ!!）

飛んできた奥村は素早くハイキックを繰り返す

それをガードするが、奥村の休みなく繰り返される攻撃に防戦一方になる

「おらおら、守ってるばっかじゃ勝てねえぞ」

「くっ……………なめんなあ!!」

「っ!!!!」

奥山が驚いたのも無理もない、なぜなら連の体から氷の槍が飛び出したからだ

「氷槍・鎧……………これならお前の攻撃は通じない」

「氷の槍の鎧が着たくらいで調子に乗るなよ、しかも俺の攻撃が肉弾戦だと思つな」

疾風迅雷で動き出す奥山だが、連は動こうとせず、じつくりと息を整える

奥山はぐるぐると連の周りを回り、攻め込むタイミングをうかがい、そして飛び出す

「雷電掌波!!」

掌手から打ち出された雷電が連を襲う

「これならお前の氷の鎧など関係ない!!」

「さあ、それはどうかな」

笑みを浮かべた連は奥山の雷を全身に浴びたが、連は倒れることなく、当然のように立っていた

威風堂々に氷の鎧を着たまま、奥山を見ていた

「バカな、雷電掌波を受けて無事だと……」

「驚いている暇はないぜ、アイス……ウルフ、ドラゴン、タイガー、ホーク」

地上からは狼と虎、空中からは数多の鷹と龍が奥山向かって襲いかかる

「おいおい、ここは動物園かよ、雷電爪刃」

手を熊手に構え目の前の空気を切り裂くように手を振ると、秀の風刃の雷バージョンがアイスウルフを破壊するがまだ鷹、虎、龍が残っていて、奥山は疾風迅雷で大きく距離をとるが、連が造形した氷は追尾性を持っていた

「ちっ、しつげえなあ…仕方ねえ」

ある程度の距離をとった奥山は目を閉じて何やら呪文のようにぶつぶつと呟いている

そして連の攻撃が当たるところで、奥山は目を開た

「麒麟!?!」

奥山の前に現れたのは、鹿のような姿をしていて、尻尾は猛猛しさを感ずる牛の尻尾で、蹄は荒々しさを感ずる馬の蹄

そして何よりも竜のように生えた角が印象的だった

麒麟がまるで首の柔軟のように首を振ると、アイスドラゴン、タイガー、ホークに的確に雷落ち、全てが粉々に砕けた

「ははは、洒落になってねーぞ、それ」

「はあ、はあ、はあ、当たり前だ、これはかなりの魔力をつぎ込まなきゃならない技だからな、行け麒麟！！」

猛スピードで走ってくる麒麟の体は帯電しているようで、あの様子では技を出しても砕けるのがオチだ

「アイスフロア！！」

廃工場の床全面を凍らせ、その上を滑るようにして麒麟の猛追をかわず

「なるほど、スケートか」

すいすいと滑って行くものの、麒麟の猛追に追いつかれつつあった

一歩一歩が力強く、麒麟が走った後の氷は砕けていた  
これでは麒麟に捕まるのは時間の問題だと思った連は逃げつつも、  
奥山に向かって滑る

「アイスニードル」

「動く力ぐらいは残ってんだよ、疾風迅雷!!」

簡単にアイスニードルをかわし、連との距離をとる

どうやら自分は戦うつもりはなく麒麟に任せるつもりらしい

その麒麟は止まることなく、相変わらず連を追っている

(逃げてばかりじゃダメか……………)

そう思った連は高く跳び両手を上に上げた

そして上げた両手には巨大なハンマーを造形し、麒麟に向かって振り下ろした

「アイスメイス!!」

アイスメイスは連の技の中ではインパクトNo.1の技だ

がしかし

アイスメイスは麒麟に当たったとたん麒麟の体に帯電している電気で碎け散ったしまった。

「アイスメイスが……」

「おいおい、驚いてる暇あんのかよ」

「っ!?!」

連は気付いた……自分が今空中いることを

空中で動ける筈もなく、麒麟の突進は連に直撃した。





三十三話 三つ巴の攻防2

連が麒麟と戦っている時から少し巻き戻すころの真也は

「はあ、はあ、はあ、くそ、こんなにも力の差があるのか」

真也の体には何かで切られたような傷があり、それにかえ相手は無傷といってもよかった

「さて、行くぞ霧崎」

男が両手を上向きに振ると、真也はすぐに横に飛び退く

男は真也の飛び退いた方向にまた両手を上向きに振る

真也が飛び退き、男が両手を上向きに振る作業のリフレインだが、体に傷を負っている真也の方が次第に動きに遅れてきていた

そしてついに、真也が横に飛び退く前に男が両手を上向きに振った

するこ

「がああ！！！」

真也が両肩に傷を負っていた

「休んでる暇はないぞ」

苦痛に顔を歪ませる真也に、また両手を上向きに振り抜く

(くそっ！！何も見えねえ！！！)

「ぐああ！！！」

今度は右脇腹と左腕の二の腕がやられる

「さて、これはもう詰んだと見ていいな」

「くっ、ふざけんな！！俺はまだ倒れてねえぞ、てかお前を倒すま

で倒れねえからな!!」

「倒す?能力すら分からないのに!??」

そう言っただけでまた両手を振り抜き、真也の傷を増やしていく

そしてついに真也は動けなくなっていた

「くっ……………」

「だから私は浅村と戦いたかったんだ」

「何だと……………」

真也が細々い出した声に、相手の男はこう言った

浅村 秀…能力は風を操ることと木刀を天つ風という刀に変え、  
風を合わせたすばやい剣術を使うが、もっとも厄介なのが韋駄天と

いう技で、超スピードで動くこと

「なっ!？」

夜坂 連…能力は氷を操ることで、動の造形が得意である、そしてリストをメリケンサックがついたようなものに変えることができ、接近戦が得意と見られ、魔力の扱いは浅村を優に越えている

「何で……………」

勝ち誇った顔をする相手に真也はただただ驚いていた

それも無理もない、相手がこちらのことを知っていたからだといつか、知りすぎだった

「何で知ってるんだよ」

「おっと、そっぴや浅村は二刀流を使うようになっていたな」

「っ……………」

(バカな、天つ風・重は俺と夜坂と石月さんしか知らないはず……)

「それに比べてお前の能力は取るに足らん、遠心力と大鎌の重量を使った戦いはなかなかだが、かわされやすい攻撃だ、さらに相手の影に刺すことで相手の動きと魔力をストップさせる影縫い、これは一見反則じみてるが、影に鎌を刺させなければ何の問題ない技だ」

「……………」

相手が放った言葉に、真也は黙り込んでしまう

「さてそろそろ幕を下ろそうか」

まだ動いてない真也に向けてゆっくりと腕を挙げた

「さらばだ……………」

「……………えよ」

「うん？」

かすかに聞こえた真也の声に、男は動きを止め、真也の声を聞き取るうとしていた

「俺はまだ死ぬわけにはいかねえんだよ!!」

「ぬおっと!?!」

大鎌を振り切り、相手に猛攻を開始する

「バカな!?!何故そんな傷で動けるんだ!!」

「でりゃああああ!!」

大鎌を振り切る真也は無我夢中で攻撃していた

ただ相手に向かって大鎌を振り切り続けた

男に言われたことを思いながら

(確かに俺には、俺には秀や夜坂のように風や氷を造り出したり操ったりはできないし、秀のように超スピードで動いたりも出来ない………けどー！)

俺がそれを認めてしまったら……

「お前にだけは負けるわけにはいかねえんだよー!!」

(くっ、何だコイツいきなり攻撃のスピードが劇的に上がりやがった………だが)

「真正面から突っ込んで来る馬鹿め!!」



突っ込んで来る真也に対して、男は両腕を振り抜いた

(来る!! 奴の見えない攻撃が、だが……………)

「お前の能力はもう分かってんだよ!!」

相手を振り抜いたと同時に大鎌の刃の部分を心臓部分に当てた

そして、当てたと同時に何かが当たり、そして弾かれた

「何!?!」

「もうお前の見えない飛び道具は効かない!!」

(コイツ、能力がわかったのか!?)

「さあ、反撃開始だ!!」



三十四話 三つ巴の攻防3

場面は変わって廃工場内

「……………」

「終わったな」

ぐったりする連に背を向け廃工場から出ようとした

「……………てよ」

「ん？」

奥山は声のした方を向くと、そこにはふらふらでボロボロになりながらも立っている連がいた

「バカな麒麟を受けて立っているだど!？」

「はあ、はあ、はあ、危ねえ、氷槍・鎧してなきや殺られてたな」

連を覆っていた氷槍・鎧が碎け散っていた

「どういうことだ？」

「氷槍・鎧は魔力によるダメージを体中に生えている氷が変わりに受けるんだ、まあお前の麒麟が与えるダメージがデカすぎてかなりダメージもらっちゃまったけどな」

（ちっ、だから雷電掌波もきかなかったのかよ）

「さあて、現在の状況はどちらが有利かな？」

ニヤリと笑った連と対照的に、奥山は絶望的な顔をしていた

「くっ、疾風迅……」

「逃がすか、氷槍・困！！」

連が両手を地面に着くと連と奥山を囲んで、氷の槍が飛び出し、廃工場の天井に突き刺さった

「これで逃げられないぜ」

「くっ、雷電掌波！！」

仕方なしに撃ってきた雷電も簡単にかわされている

「俺の勝ちだな奥山」

「は、その程度で勝った気になるなよ、お前は俺の疾風迅雷にはついていけないんだからな」

「どうかな？ともかぎらないぜ」

「今証明してやるよ、疾風迅雷！！」

一気に連との距離を詰めた奥山が電気を帯びた拳を連の顔面に叩き込んだのだが、その拳を綺麗に止め、氷づけにしていた

「な、何！？」

「ほらな」

ぱっと相手を振り払い、一旦、連との距離を開ける

（そんなバカな、僕の疾風迅雷に反応出来るなんて……くっそ！）

腰を低く落として、もう一度疾風迅雷で動き出す

「アイスニードル、落下バージョン！」

「くっ！！！」

落ちてくる無数の氷の針が奥山の動きを制限させるが、一定の距離を走り抜けると瞬時に連の完璧に背後をとった

「今度こそもらった、雷電掌波！！！！！」

「遅いぜ！！！」

完璧に背後をとったはずの奥山だったが、撃ち込むと同時に連は奥山の腕を掴み、空中に投げ飛ばした。

そして全ての魔力を右腕に集中させると右手はデカくなり丸つきり虎をモチーフにしたようであった

「空中じゃ避けられねえだろ」

ニヤリと笑った連は奥山に向かって走り出し、魔力を込めた右を奥山の土手っ腹に叩き込んだ

「うおりゃあああ!!」

「くっそおおお!!」

そのまま奥山をぶっ飛ばし、氷槍・罫に叩きつけられた奥山はぐったりとして、そのまま気絶した。

奥山の気絶と同時に連の魔力は切れ、自動的に物質憑依は解け、氷も解けていった

「たはあー、後は任せたぜ秀」

大の字になって地面に寝転んだ連はゆっくりと目を閉じ、寝息をたてて寝始めていた



三十五話 三つ巴の攻防4

また場面は変わり廃工場外

「どおした、さっきまでの攻めの姿勢はどこにいった」

「や、やかましい」

何かを投げる仕草を普通に見せるといふことは、見えない飛び道具が能力ということだろう

投げ飛ばした何かも、真也は鎌で簡単に防ぐ

「見えない筈なのに…」

「残念だったな、見えなくても投げるときの二つ二つのモーションでどこに投げるかが分かるんだよ」

「くっ……………」

「今度はこっちの番だ」

大鎌を振り回しながら走り、相手を近づき大鎌を振りかざすが、大鎌が大振りなため簡単にかわされる

大振りで相手が離れたところで真也は大鎌を投げつける

「くそっ、いきなり動きがよくなりやがって」

「ほら、もういっちょ!」

投げつけた鎌を消し、再び手元に戻して投げつける

「くそっ……こうなったら仕方がない!!」

一気に真也の方に切り返し、真也に近いて接近戦に持ち込む

「はっ、接近戦かよ、おもしろえじゃん」

「見えない武器での接近戦だ」

「うおりゃあああ」

ぶんぶんと振り回し、真也には当たらないと腕を振り抜き飛び道具をとばす、そしてすぐに接近戦に戻す、二つのスタイルを切り替える

「ははは、何だよ、そっちのスタイルの方があってるじゃないのか」

「このスタイルが霧崎に戦いに相性抜群なのさ」

大振りの鎌をかわし、その隙をつくように素早く切り裂こうとするが、それを鎌を防ぎ、一旦離れて飛び道具に切り替える

かわしては攻撃しては相手がかわすことの繰り返しで、どちらも退かない一進一退の攻防、そしてその攻防は30分続き、双方の体力も限界だった

「はあ、はあ、はあ」

「なかなかやるじゃん、なんやかんや言っておきながらも実はこっち向きじゃないのか」

「かもしれんな……………」

お互い、一旦攻撃の手を休め息を整える

「そろそろ体力の限界だ、悪いが次で決めさせてもらおう」

「それはこっちの台詞だ、行くぞ霧崎!!」

同時に走り出した二人、相手は真也をどう仕留めるかを考えていた

(あの鎌をかわし、霧崎が鎌を構え直すまでに初撃をあたえれば、しかしそうするにはもっとスピードが……ま、いまさら考えてもスピードが速くなるわけないか)

「うおおおお!!」

「でりややや!!」

自分の鎌の間合いに入った真也は鎌を振り抜いた

「くっくっく……」

体を捻り真也が振り抜いた鎌を鼻先が当たるか当たらないかのギリギリでかわした

（もらった!!）

振り抜いてしまった真也の懐に潜り込み、真也めがけて腕を突き出した

（私の勝ちだ!!）

誰が見ても完全に真也の負けに見えた

しかし、相手はギリギリのところで動きがピタリと止まってしまった  
時が止まったかのように……

「どうやら俺の方が早かったみたいだな」

「バカな……あの角度で振り抜いても影には刺さらない筈なのに」

「確かに、でも忘れたのか？ 鎌は俺の意思で戻すことが出来るんだ」

つまりは相手の体力が限界に達すれば、相手は必ず最後の一撃にかけてくる

だからそこに狙いを絞ったというわけだ

鎌を一気に振り抜けば、それをかわし攻撃してくる、そこで鎌を一旦消して、再び鎌を右手に出す、あらかじめ下にやっていたから、影に刺す距離はたかがしれている、鎌を股のしたを通して影に刺し込んだというわけだ

「さあて悪いけど気絶してもらおうぜ」

ぐっと拳を握りしめる

「くっそおおおおー！」

廃工場に相手の叫び秋山や奥山に届いたかどうかはわからないが、  
とてつもない音量だったのは間違いないだろう

そして叫び声の後、叫び声の主は倒れた

「はあはあ、あれ？そう言えば……………」

いまさら自分が倒した相手を見ながら真也はとあることに気付いた  
流しても全然問題なく、今の状況で気にしてる場合じゃない程のも  
んだ

「コイツの名前何だったんだろ……………」





三十六話 三つ巴の攻防5

二人の戦いが終わった時からだいぶ時間は遡り場所は校庭

「こっつしてお前とやりあうのは三度目だな」

「三度目？二度目じゃないのか？」

真剣な顔で言うところを見ると本気で言ってるのだろう

(コイツ本当に言ってるのか……………)

「行くぜ秋山」

「来いよ浅村」

剣を如月に変えて動きだした秋山に対し、俺は動じずにその場に立

っている

瞬時に後ろをとった秋山は切りかかるが、そんな簡単にやられるはずもなく、俺は韋駄天でかわす

「ウインドエッジ!!」

「効かねえよ」

卯月で弾き、皐月で攻撃するが、それを韋駄天でかわす

「ちっ、ちよこまかと………鳴雷月!!」

前回よりも明らかにスピードアップしている韋駄天で秋山の攻撃は殆ど当たっていない

「絶空剣・嵐!!」

「ぐあああ!!」

「どおした秋山！！手応えねえぞ！！」

「くっ、葉月！！」

炎を帯びた刀で切りかかるが、炎の刀を出したのが失敗だった。

秀！！チャンスだよ！！

「分かってる！！」

天つ風に風を帯びさせた俺は秋山に向かって走る

「真紅紅蓮剣！！」

「炎が風に勝てると思うなよ、旋風刃！！」

巻き起こした竜巻にそのまま切りかかったが、当たる直前に炎が消え、旋風刃が秋山に直撃した

「ぐああああ！！」

「決めるぜシルフィー！！！」

了解

腰にさしていた木刀を取り出し、もう一本天つ風に変えた

「天つ風・重」

「なっ！！？二刀流だと」

あらま、あの様子だと本当に知らないようだね

あれだけ目の前で二刀流を見せたはずなのに記憶にないというのは  
おかしい

(あの時の秋山は秋山じゃなかったってのか)

「一気に決めさせてもらうぜ、韋駄天!!」

「くっ、卯月!!」

スピード勝負では勝てないと思ったのか、秋山は卯月を構え防御に徹底する

「耐えられるもんなら耐えてみやがれ、天破散牙撃!!」

卯月を構える秋山に対して走り、間合いに入ったとたん軽く飛び、伝えられるエネルギーを右側に移す

そしてがっしりと構える秋山に対してぶつかっていった

「うおおおお!!」

「ぬおおおお!!」

バチィ！！

大きな音とともに吹き飛ばされたのは秋山の方で、卯月で防ぎきれなかった天破散牙撃をもろに受けたらしい

「くうううう」

苦痛に顔を歪める秋山

「諦めるんだな、休み中何してたか知らねえけど、こちとら前とは違うんだよ」

片膝をついた秋山に向かって言った

自分にはどうやったって敵わないというように

「勝負あったな秋山」

「それはどうかな？」

不適な笑みを浮かべた秋山はゆっくりと立ち上がった  
刺していた卯月抜き中段に構える

「神無月!！」

中段に構えた卯月が光り、ゆっくりと形状を変えていく

「っ!?!ば、バカな!?!」

形状を変えた卯月は、秀の二刀流、天つ風・重に形状を変えた

「そんな、バカな!?!何で天つ風・重を……………」

「この神無月は相手の武器をコピーするのさ」

「天つ風・重をコピーするのは驚いたが、天つ風・重はお前が持つ  
ていても無駄だと思っぜ」

「どっという意味だ?」

両肩をすくめ、やってみれば分かった

「ふん、ならやってやるさ、韋駄天！」

韋駄天と叫んで、秋山は天つ風・重を持って走った………普通のスピードで

「韋駄天つてのはこういうのなんだよ！」

瞬時に超スピードで動き、秋山に空破撃をかます。

「ぐううう、な、何故だ、何故韋駄天が発動しないんだ」

あわてふためく秋山を見た俺はちゃんと分かるように説明してやる

「天つ風はそもそも精霊契約をして初めて使えるんだ、コピーはできるかもしれないが、風までは発動できないらしいな、つまり今お前が持っている剣はただよく切れる二本の刀ってわけ」



俺の説明で秋山の顔に冷や汗が流れる

「さあ決めるぜ、天破散牙撃！！」

秋山に向かって走り、さっきと一緒のように間合いに入ると、軽く  
跳び余すことなくエネルギーを伝える

「天破散牙撃いい！！」

完璧に入ったと思えたが、いつかの時のようにまたもやあの男が間  
を割るように入ってきた。

そして俺の天破散牙撃は見事に止められていた

「んな！？またお前か！！」

「やあ、また会ったね」

「何が、会ったねだ、会うつもりで来たんだろ？」

「うーんそれはあくまでも結果に付いてきたオマケだよ」

「オマケ……だと？」

「ああ、俺の目的は「イツ」」

男はそう言っつて秋山を指差す

「この前もそうだけど、お前と秋山はどういう関係なんだ？」

俺の言葉に少し考えた男はゆっくりと口を開いた

「需要と供給さ」

「????」

男が言っていることの意味が分からず、首を傾げ片手で髪をかく

「俺はバカだからあんま分かんないけどさ」

ゆっくりと天つ風・重を構える

「あんたは間違いなく俺にとっては敵だよな？」

「さすがは浅村君だね」

被っていたマントをふわり浮かせると、マントの中から二人の人物がばったりと出てきた。

「そんな……………バカな」

マントから出てきたのは、連と真也だった……………

三十七話 黒幕

ぐったりと倒れた二人

ピクリと動こうとしない

「てめえ、二人に何をした!!」

「まあそうかつかするな、気絶してるだけだよ」

「気絶させたのは……………お前か?」

自然と声に力が入り、声が震えていた

構えていた天つ風・重を再び強く握る、男の返答次第では今すぐにも斬りかかりそうであった

そういう俺に対して男は何も変わらずにただ黙っていた

「……………」

「答える!!」

「ああ、邪魔だったから気絶してもらったよ」

「っ！！！！！」

男の言葉を聞いた瞬間にその場所から俺はすでに消えていて、瞬時に男の後ろに移動していた

そして男の背後から天破散牙撃を打ち込むが、天破散牙撃が当たったのは男のマントで、男は瞬時にマントを捨てていた。

「くそっ！！どこだどこにいる！！」

肘に被ったマントを払い除けると男の姿はなかった。

「こっちだよ」

声が出た方向をすぐさま振り向くと、そこにはまた黒いマントを着ている男と、その男に首根っこを掴まれ、宙に浮られている秋山がいた

「秋山！…てめえ何してやがる！…」

「おやおや、君の敵である人をどうして心配するんだい？」

「そういうこと言ってんじゃねえよ！…とにかくその手を離せよ」

「ふむ、まあいいだろう離してやるよ……しっかりと料金をもらってからだけだな！…」

（料金！？）

男は掴んでいた手を離し、秋山を一旦おろすが、男は間髪入れず掴んでいた方の手を秋山の頭にかざした

すると秋山は掴まれていた以上に苦しみ出した

顔や手には血管が浮き出ている、もはや尋常じゃないことだった。

「がああああ！…」

「あ、秋山？」

今何が起こっているのかが全くわからなかったが、ただあの男が秋山に何かをしたかはわかる

「一体何が起こるんだ？」

「秀！！今すぐ男を止めるんだ！！」

「真也！！気がついたのか！！」

「俺のことはいいから早く止める！！早くしないと秋山が死ぬぞ！！」

「っ！！！！！！韋駄天！！」

すぐさま韋駄天で男近づき、絶空剣・剣舞を繰り出したが、秀が斬ったのは男のマントで、男と秋山はまた場所を移動していた。

（しゅ、瞬間移動しやがった……）

「うぐああああ!!」

「そろそろだな」

苦しみのピークに達した秋山の口から卵一個分のサイズをしたしわくちゃの種の様な物が出てきた

そしてそれを男が掴むと同時に秋山は力尽きたように地球の重力に逆らわずに倒れた

「くそっ!!間に合わなかったか」

「真也、何があつたのかを手短かに話してくれ」

「ああ、実はな……」

真也が話すことには、戦いが終わってから俺の所に向かおうとした真也の前に現れ、真也の相手を秋山と同じようなことをしていたのだそしてそれを止めようとした真也は逆に気絶させられたて気づいたらここにいたというわけだ



「なるほどな……真也動けるか？」

「ああ、行けるぜ！！」

「そうか、じゃあ連を連れて離れてくれ」

「待てよ、一人で戦うつもりかよ、一人で戦うよりは二人で戦う方が……」

「足手まといだ」

「秀、それどついう意味だ！！」

胸ぐらをつかみ声を荒げる真也、足手まといと言われれば、当たり前  
前の反応だ。

しかしそんな真也に対して俺の目はまっすぐにゆるぎなく真也を見  
つめる

「周りに気を配りながら戦って勝てる相手じゃないのはわかってる  
だろ」

最後に小さく頼むと呟いたが、最後の頼むはとても重みがあった。

「分かった、でも夜坂を運んだ後は好きにさせてもらっからな」

「ありがとう真也」

真也は倒れてる連を担ぎ学校から出ていき、俺は相手の男をまったく見つけていた。

「行くぜ黒マント野郎」

「ふ、いい暇つぶしにはなるかな」

韋駄天だ動き出す俺に対して男はまったく動かない

「シルフィー、天つ風・重を解除するぞ」

<え、わ、分かった>

最大の攻撃力を誇る天つ風・重を解除するのに疑問に思い戸惑いながらも一旦天つ風・重を解除する

スピードは遅くなるものの、超スピードには変わりはない

「行くぜ旋風刃」

(これで出方を見る)

男は竜巻が迫っているが、男はそれでも動かなかった

そして男に竜巻が直撃したが、宙に舞ったのはまたもや男のマントだった。

「ちっ、どこだどこにいる？」

「後ろだよ」

「っ！！！！！」

後ろから後頭部に蹴りをくらってしまい、すこしよろめきながらも、振り返りざまに天つ風で切るが、すかしてしまい、すかした瞬間にまた後頭部に打撃を受ける

「くそっ！！どうなってんだよ！！」

「ふむ、暇潰しにもならんか」

（くそ、何がどうなってるんだよ）

「じゃあそろそろ決めようか」

そう言って男はマントの中に入るとまた消えてしまった。

真也Side

せつせと連を担ぎ上げて真也は近くの場所で、電話をした石月を待

っていた。

「おい霧崎君って、ええ！！夜坂君いたいどうしたの！？」

「ごめん、今は急いであるから訳を話してる時間がないんだ、じゃあ」

「あ、ちょっと待って下さい」

石月の声はむなしくも、真也には届かなかった

「浅村君……………また戦ってるの」

秀Side

石月に会ってからすぐに学校戻った時、状況はあきらかになった。

片膝をついていた秀に対して相手の男はびんびんしていた。

「秀！！大丈夫か？」

「ああ……………ギリでな」

真也に肩を持ってもらい立ち上がったが、後頭部の集中攻撃のダメージでかなりぐらついていた

「お、二人に増えたな、じゃあ楽しませてもらおうかー!!」

消えた相手を見て、あわてふためく真也

「ま、マジか消えやがった」

「気にするな、もう対処はできてるさ」

目を閉じた俺は何度も何度も深呼吸をする

（何するつもりだ？）

消えた男が現れたのは秀の真上からだったのだ

上! !

「ああ! !」

腰にさしていた木刀を上を鋭い突きを繰り返して、男の腹に見事にちよくげきした

物質憑依をしていたと思っていたはずが、秀は物質憑依をせず、シルフィーを上に出していたのだ

「ぐぐう! !」

「よっしゃ、戻れシルフィー! !」

うん! !

すぐさま木刀に物質憑依して、怯んでいる男に絶空剣・嵐を繰り出す

「ぐあああああ！！」

「もらったああ！！」

一気に決めようとした俺は空破撃をだそうとして、男との距離を韋駄天で詰める

それを見た男は、仕方がないと言ったかのように両肩をすくめてから、片手から秋山達からとった種を3つ出し、その内の1つの種を呑み込んだ。

すると、男から爆発的な魔力が溢れだし、あまりにも爆発的な量に秀は吹っ飛ばされてしまう

さらに、立ち上がった瞬間におそう悪寒と吐き気

悪寒と吐き気を引き起こすほどの魔力の差

何かに押さえつけられるような重み、足を一步も動かすことができない

「何だなんだ……この魔力の量は……吐き気がしてきやがった……」



「き、気分が……………悪くなってきたが……………」

真也は最後まで言い終わることなくそのまま意識をなくして倒れてしまった。

とてつもない量の魔力に明らかに自分との差を見せつけられたのだ

「ほおー、これだけの魔力を見せつけても立っていられるか……………  
手先は震えてるようだな」

「くそ、止まれよ、止まれよ!!」

必死にもう一方の手で抑えるが、震えはそちらにまで伝染していく  
始めは手先だったのが、腕全体から肩を震わせ、次に上半身が震え  
始め、ついには体全身が震え始める

「はあはあはあはあ」

ちよつと秀、とりあえず落ち着きなよ

シルフィーの言葉も今の秀には聞こえておらず、秀の呼吸はどんどん荒くなっていく

このままでは真也のように倒れてしまう

こっぴなったら……ごめん秀!!

「ぬおおお!!」

「憑依か、やるなああの精霊」

シルフィー？

「秀、確かにあんな魔力を見せつけられて、落ち着けっという方が難しいと思うよ……けど、今あの男と戦えるのは秀しかないんだよ!!」

っ!!!!!!

「それに秀はいつだって、どんな敵だって戦って、そして勝ってきたでしょ」

「ははは、そっか、そうだったよな」

「うん、じゃあ頑張ってたね秀」

「ああ、選手交代だ」

シルフィーのおかげで落ち着きを取り戻した秀は、再び自分の体に戻り、体の震えは止まっていた。

「あれほどの状況からもちなおすとはな」

「ああ、シルフィーのおかげさ、俺一人じゃ無理だったさ」

「いいコンビだ」

「そりゃどうも、行くぜシルフィー物質憑依だ」

天つ風・重を出し男に向かって韋駄天で走り出した。

「仕方ない……如月!!」

「な、何!？」

あまりにも驚いた秀はぴたっと止まり、秋山の能力だったはずの剣を見てしまう

「な、何でお前がその剣を持ってんだよ……」

「何でって、そりゃ俺が秋山から能力を回収したんだからな」

「回……回収?」

「そっぴゃお前に言ってなかったな、俺の能力はアビリティシードってんだ」

手の平から秋山達からとった種を出して男はさらに説明をする

「アビリティシードは人に植え付けることで植え付けられた能力がいつか開花する、さらにその開花した能力を俺は自在に奪い取り自分の物にすることができるとさ、奪い取られた能力者は命をおとす危険があるがな」

「お前、それを知っていながら何人にその能力を使っただん！！」

レーガルの時のジータにキレたときと同じようなキレていた

ジータと同様、この男のやり方が許せないのだ

「人を人でなしみたいない方をするなよ、俺だって能力を植え付ける前に、ちゃんと能力が欲しいかって聞いたんだからな」

「聞いたからって、命を落としていいわけないだろ！！」

「一時の間能力を味わったんだ、それ相応の料金は回収させてもらうのは当たり前さ」

「神にでもなったつもりかこの下衆野郎が！！」

「ああ、俺は神になる男だ」

完全に頭に血が上ってしまった秀は、何も考えずに突っ走る

「臯月！！」

「ぐっ……」

振り抜いた臯月は秋山の物とは比べ物にならない速さの臯月に、秀はとっさに天つ風でガードするが、かるく吹っ飛ばされてしまう

「戦闘中に冷静になれないのは致命的だな」

「人の命を奪つといて冷静でいられる奴がいるんだな、呆れるぜ」

「めんどくさい奴だな、そろそろ決めるか……」

臯月を中段に構え、深く深呼吸をしてから小さく呟いた

「限月……」

(次はどんな剣になるんだ)

皐月が光り次の剣は、剣とはかけ離れたボール型の形状になった

(何なんだ限月は?)

「行くぜ、如月、葉月!!」

形状が如月に替わり葉月の様に炎を帯びる

そして秀には向かって突進してくる

「紅蓮撃!!」

「旋風刃!!」

炎を纏う突進vs竜巻、完全に自分の方が有利だと思っていたが、  
現実はそのようではなかった。

秀が放った旋風刃を男はど真ん中を突き破り、そのまま秀の脇腹を  
かすめた。

そんな………旋風刃が破れるなんて

「それだけじゃない、アイツの如月のスピードは天つ風・重と同じくらいだ」

「おーい次行くぞ」

「なめやがって……シルフィー……」

「如月、臯月、鳴雷月……」

「天つ風・重……」

上回っていたスピードも今は同じスピード、しかも相手には雷を落とすことができ、伸縮自在の鞭のような剣

圧倒的な手数で秀を圧倒する

避けるには限界があり、ガードをすれば、天つ風を伝って電気が流れる

徐々に追い詰められていく秀



「しつかりしなきゃ死ぬぞ」

秀！！このままじゃ

「分かってる、シルフィーあれやるぞ！！」

ちよつと秀、本気！？あの状態じゃ、重のスピードは出せないし、まだ不完全じゃない

「でもあれならガードすることができる」

けど……

「つべこべ言うな、どうせこのままじゃやられるんだ」

もう！どうなっても知らないからね！！

男の猛攻を何とか掻い潜り、男との距離をとり、天つ風・重を解除し、二本の木刀を地面に捨てる

そして男が限月が出したときのように深く深呼吸をして、心落ち着

かせるが落ち着かせている間も男の猛攻が襲う

「決まったな……」

振り抜かれた皐月が秀の脇腹を切り裂くはずだったのだが、秀はそれを紙一重でかわした

「おお、やるねえ……でもこれならどうだい？」

鳴雷月で雷を落とさせ、伸縮自在の剣で、変幻自在の剣術を繰り出す

「かわせるかな？」

「かわせるさ!!」

落ちる雷、変幻自在の剣術のすべてを紙一重でかわす

今までの動きが嘘であったかのように、すべてをかわしていく

スピード自体は速くないが、男の攻撃を読んでは如くかわしている

「くっ、無駄な動きがなくなりやがった、いきなり何したんだよお前は」

「ふん、知りたいなら教えてやるさ、精霊契約の真の力をな」

「真の力……だと」

「精霊契約には3つの力があるんだ分かるだろ？」

「魔力使用、憑依戦闘、物質憑依だろ」

「正解、だけど本当は4つあるんだ」

「4つだと!？」

「ああ、魔力使用に憑依戦闘に物質憑依」

「一つずつ数えるたびに片手の指を一本づつ折っていく」

そして三本折り曲げた所で一旦止めてから、一旦間を置いてから口を開いた

「同調……言つなればシンクロナイズさ」

三十八話 同調

「シンクロナイズ……」

「憑依戦闘は精霊に100%体の操作を任せるんだが、シンクロナイズは自分の肉体に精霊を同調させ、極限まで感覚を研ぎ澄まさせるのさ、いわば第6感ってやつかな、さらには魔力消費量が今までの四分の一にまでカットされるのさ」

「何故そのような技を出さなかったんだ？」

「切り札はとっておくもんだろ」

ニヤリと笑みを浮かべた秀は男に向かって駆け出す

「戦闘手段は変わらないようだな、吹っ飛べ臯月！！」

鞭のようにしなって襲ってくる臯月に、秀は左腕で臯月を払うように腕を動かそうとする

「バカめ、左腕はもらったあ!!」

誰もが秀の左腕が切れたと思った瞬間だが、男の臯月は弾かれていた。

「何だと!？」

弾かれたことに驚きを隠しきれない男にこそぞとばかりに秀は風刃を飛ばしまくるが、ギリギリの所で如月でかわす

「ちっ、チャンスだったんだがな」

(どうなってるんだ?今は弾かれたと言うより、腕に触れられなかったぞ)

気持ちが悪い男は、弾かれた秀の腕を凝視する

ところが腕どころか秀の体にすら変化はなかった

「まだ同調率は40%ってどこか」

（まだ40%か……）

臯月を軽く弾きとばした力が40%ってことはまだ60%残っているということ

それが男にとっては怖いのだ、だからこそ男は今の内に決めておく方がいいのだ。

「如月、葉月」

秀！！

「分かってる、決めに來てる、シルフィー同調率を高めるぞ」

うん、いくよ秀！！

「おおおお！！」

「鳳凰紅蓮劍」

旋風刃を突き破った炎を剣に纏わせた突進だが、今回の突進は男自体に炎を纏っていた。

秀の腹めがけて突進してくる男に対して、秀は左腕を右の脇腹に沿えているだけだった

「なめるなあ!!」

秀の防御の姿勢に腹を立てる男は渾身の力を込めた突きを繰り出したがしかし、その突きは見事に秀の横を通り抜けた………左腕に沿っていくように

出来た隙を秀も見逃さずに、右手を男に向かって振ると、当たっていないはずの男の攻撃が男を切り裂いた

「ぐあぁ!!!!」

「よし、シルフィーこのまま押しきるぞ!!」

うん!!

「くっ、睦月、如月、皐月、鳴雷月、葉月!!」



「効かねえよ」

合わせれる限りの力を合わせた剣の攻撃は校庭の地面をえぐり、土煙を巻き上げ、学校にも少なからずの被害を与えていく中、秀だけが無傷であった。

「てめえ、これ直すのにどれほどの時間がかかると思ってんだよ！」

「お前を倒すことに校庭を心配する必要はない、必要なのは力だ！」

そう言った男はまた種二つの内の一つを呑み込んだ

「また魔力が上がりやがった」

一個目を呑み込んだ時とは魔力の上がり方が少なかったが、上がり方を見たら十分異常な上がり方だ

「如月、疾風迅雷!!」

如月のスピード+疾風迅雷でさらにスピードは天つ風・重のスピードを越えており、目では追えないほどだった

「シルフィー60%から80%に上げるぞ……」

ちよつと秀、80%何かに上げたりなんかしたら、秀の体が!!

「上げなきゃ、殺られちまつだろ」

ダメ……やっぱりできないよ

「突っ立ってる隙あるのかあ、雷電掌波!!」

「ぐああ!!」

「どうやら雷はダメージを受けるらしいな」

突破口を見つけた男は攻撃を雷主体の攻撃に変えた

如月と鳴雷月と奥山の能力を駆使することで、だんだんと秀を追い込んでいく。

「くっ、シルフィー同調率を上げるぞ!!」

ダメよ、80%も上げたりしたら秀の体がもたないよ!!

「早くしろ!!このままじゃやられちゃう!!」

秀の体が先にやられちゃうよ

「大丈夫さ……」

さっきまで荒げていた声を出していた秀はとても静かな声を出していた

どうしてそんなこと言えるの……

「そんなもん、俺だからだよ」

なんの根拠もない秀の言葉だが、シルフィーには信じられる言葉だった

“俺だから” それだけで信じられる二人の仲、ほんとうにいいコンビなのだ

そうだね、秀はいつもそうだったね、いくよ秀!!

「おおおお!!」

「ぬあああ!!」

同調率を60%から80%に上げた秀とシルフィーの気のようなものに吹き飛ばされた

「何だ!?!あのアイツから溢れ出る気のようなものは!?!」

「うああああ!!」

「睦月!!」

出方を見るしかない男は睦月で、球体を秀に落とすが、すべての球体は秀に当たらず、全て軌道が逸れて地面に落ちた。

（また軌道が逸らされたか……………まさか!？）

男が何かに気付くと同時に、秀は地を強く蹴ると、男の視界から消えていた。

「何!？あの精霊、スピードは上がらねえって言ってたくせに……………」

消えた秀に警戒した男は卯月を発動し、攻撃がいつきてもいいように、身構えている。

（さあ、どこから来る……………後、横、上か？）

消えたことによる不安により辺りを見渡す男の視界に秀が入ったのは真正面だった。

「っ!？」

真正面から来ると思わなかったのか、反応が一瞬遅れてしまい、見えない斬撃を受けた男は後ろにたじろく

「厄介だな、その同調状態は、内側から吹き出てる風のせいでのちらの攻撃が効かない」

「へえー気付いたんだな、風に」

「見えない斬撃を受けた時にもしやと思ったんだが、睦月の球体の軌道が逸れた瞬間に気付いたよ、お前の体には内側から外側に風が吹いているってな、攻撃が逸れたところを見ると、風の方を変えられるし、切られたのは風の刃を腕に纏ってるのだろう」

「……………」

たった数回のアクションでこれほどを見抜くとは、侮れない男だ

「黙りということとは当たりと見て間違いないな」

「さすがっていったところかな、でも忘れるなよ、今の状況は圧倒的に不利だぜ」

「やれやれ、それはちゃんと結果を見てから言っただな」

男は最後の種を取り出した。

「また魔力UPか……」

どこか呆れた口調でいう秀だが、男は種を違う目的使用するようだ

「お前の精霊契約に同調のような隠し能力があるように、俺にも力があるんだよ」

(同調は別に隠し能力なんかじゃないんだけどな)

などと頭で考えつつも、男は続ける

「アビリティシードには隠しコマンドみたいなもんがあるんだよ」

「種一つがソロ、二つがデュオ、三つがトリオ、今から呑む種で四つがカルテット」

(音楽かいな!)

軽くツッコミを入れるものも、男には届くはずがない

カルテットで少しとまってから、最後の言葉を口にした

「五つがゴッドだ!」

「.....」

少し間を置いてから、秀は大きく息を吸い込んだ

「音楽関係ねえじゃねえか! それにカルテットときたら普通次はクインテットだろ」



とうとう我慢がなくなり突っ込んでしまった。

かなりの大声で

「そうでもないさ、音楽にはいろいろ種類がある感情や思想を表現したりすることができるし、神に捧げたりな」

「神に………捧げる」

「しかしまあ神に捧げる何てなかなかできないんだ」

「なんで!?!」

「アビリティシードは五つまでしか使えないんだ、そして開花するにはそれなりに適性ってのがあるんだ」

秀は口を挟まず黙って男の話の話を聞くことにした

「アビリティシードを開花する人としらない人がいるんだ、その人間を探すのにどれほどかかったか………五年だぞ、五年」

(種の適性の人間が五人とも北合に……………偶然か?)

「つつーことで今度は同調率80%対カルテットだ!」

「いいぜ……………来な!」

三十九話 ヒートアップ

男は持っていた片手を高く高く放り投げた

「さあ、奏でようかカルテット!!」

落ちて来る種は男頭の中西吸収されていった

吸収されると同時に男の魔力が一個目同様爆発的に上がり、魔力だけではなく、男体自体にも変化が起きていた。

秀……あれ

「ああ、羽が生えてやがる」

男には左右四本づつの羽が生え、すぐに空中に飛ぶ

「ちっ、飛べるようになったか」

「今の状況は圧倒的に不利だ」

さっきの言葉をそっくりそのまま返された

根に持ってやがったなあやろう

「睦月、鳴雷月、皐月」

上空から降る無数の球体と雷、そして二つに気をとられていると皐月が襲う

80%の秀のスピードにも対応していて、カルテット状態の睦月の球体は風でも逸らせなかった

しだいに睦月が降らせる球体の数もスピードも上がっていて、鳴雷月の雷も数増えていた。

それを避けていたら、最悪のタイミングで皐月がくるからたまったもんじゃない

「ほらほら、どうした避けるだけじゃ勝てないぞ!!」

(くっそ、攻撃が適格すぎるし手数が多い、こうなったら……)

地面をおもつきり蹴り、バックステップでコンマ一秒の時間で風を

足に集中させ、一気に上空に飛んだ

「飛べるのがお前だけだと思っなよ」

「やるな、次は空中戦ときたか」

校庭に浮かぶ二人、もはや人を越えた戦い

空中でぶつかり合う二人、しかし戦局は徐々に秀がおされていた。

理由は簡単で攻撃を弾けなくなった今は、体に傷が増えていく。

睦月をベースとした大剣に如月のスピードの戦法に圧倒される秀

睦月のような大剣の重量感がある攻撃は破壊力抜群で外傷だけではなく内側にもダメージが蓄積されていく

「勝負あつたな」

「まだまだあ！！」

手刀を振るが、剣でガードされ、下からの蹴りに顎を蹴られ、体を

捻った帯電後ろ回し蹴りを脇腹にもらう

「があああ!!」

完全に攻撃を受けた秀は、ふらふらとそのまま地面に落ちてしまい、地面に体を強く叩きつける

(マズイ……そろそろ魔力が尽きる、同調率も低下してきてる)

魔力の残量が残り少ないうえに、長期戦に向いていない同調、今の同調率は80%から60%に低下していた

完全な劣勢状態に次にどう動くかを考えるが、考えすぎるがゆえに、男の睦月が放った球体に気付いていなかった。

秀!!

(しまっ……………)

思ったことを口にするともなく、無情にも秀のいた場所に無数の球体が降り注ぐ

人の原型をとどめさせないかのような無慈悲な攻撃だった

「……………あれ？生きてる」

完全にやられたと思った秀だったが、目を閉じていた間に場所を移動していた

（たしか目を閉じた瞬間、強い衝撃が……………ていつかなんだらう胸が重い）

仰向け状態の秀が、顔を上げると、そこには秀の家で寝てるはずの泉さんがいた

「い、泉さん、何でここに!?!」

「そんなの浅村君を助けに決まってるじゃないですか」

ちよつと秀、上!!!!

「ちっ、シンキングタイムぐらいくれよな!!」

泉さんを抱えた状態で、風を発生させ、その場所から移動する

「泉さん、危ないから下がってて」

「浅村君の治療が終わってからです」

初めて秋山と戦った時のように、体全身の治療のため、抱きつく泉さん

相も変わらずいろいろと恥ずかしい

抱きつくとすぐに全身の痛みが緩和され、傷もみるみるうちに塞がっていった。

「ありがとう泉さん、じゃあ行ってくるよ」

「戦う前に、ちょっといいですか」



ずいっと前に出る泉さん、男に何かしら言いたいことがあるよつだ

「もっくんなことはヤメテ下さい」

「ちょ、泉さん、そんなことでヤメルならせわないよ」

秀の言葉に耳をかさずに泉さんは続ける………衝撃的な言葉を含めて

「もっくんなことはヤメテ下さい………兄さん」

## 四十話 黒幕の正体

泉さんの言葉を聞いた俺はまるで時が止まったかのように動くことも、発することもあやふやだった

「な、何、い、いつてるんだよ泉さん」

声が震える、声が震えるのは否定してほしい事実からだろうか

「ふ、さすが妹といったところかな」

ゆっくりと仮面をとった男の正体は確かに泉 裕だった

俺はその事実を受け入れられず、茫然と突っ立っていた。

「兄さん、何でこんなことするんですか!」

「うるさい……」

「危ない泉さん!」

睦月で降らせたであろう球体にかわすために泉さんを抱えて場所を移動する

放った球体は脅しでもなんでもなく、しっかりと泉さんを狙った攻撃だった。

「ヒロ！！お前、自分の妹に何てことするんだ！！」

俺の叫びは届かず、皐月が二人を襲う

「聞く耳持たねえってか」

再び上空に飛び、男の攻撃をかわしながら接近し、限りある魔力を計算しつつ風を纏った

「絶空剣・乱舞！！」

風を纏った絶空剣・剣舞と変わりないと思ったヒロは卯月を構えた。

「おらあああ！！！」

自分の両腕の手刀を使うからか、剣舞よりも鋭い剣閃を繰り出し、  
剣舞よりも素早く、そして重い

がしかしヒロの卯月にビビが入るとこまではいいが、すぐにビビの  
箇所が修復されてしまう

「そんなものか浅村！！！」

「んなわけねえだろ！！！」

そう言っつて体をを捻り、足を出した

「何！？」

絶空剣・乱舞は手刀だけではなく足にも斬撃能力を与え、手数で圧  
倒する技である

そしてついに卯月を打ち破った

「そこだウインドエッジ!! ×2」

「ぐあああ!!」

秀のウインドエッジはヒロの両太もを貫く

すかさず、距離を詰め、思いっきりヒロをぶん殴った。

殴られたヒロはコントロールを失い地面に落ちた。

「さっきのお返しだ」

「くっ、まだ力が足りない、力が足りない!!」

「ヒロ!! 何故そんなに力を欲しがるんだ!!」

「力が欲しいんじゃない!! 俺は神になりたいんだ!!」

「人の命を奪つといて神になると、笑わせんな!!」

「圧倒的な力を持った存在の神、どれほど理不尽なことをしても許される神！！そんな存在になれば、もう二度とあんなことを味わうはずないんだ」

「………どういう意味だ？」

何を言っているか分からないと思う俺だったが、ヒロはそんな俺に対して攻撃の手を休め、重い口をゆっくりと開いた

## 四十一話 忌まわしき過去

今から10年前の話になるだろうか

その頃の俺と沙耶香は平凡な家庭で幸せに暮らしていた

四人家族で稼ぎこそ良くはなかったが、四人で助け合って生活をしていた

あの事件が起こるまでは

いつも通りの気持ちのいい朝、いつものようにリビングで俺と沙耶香はゆっくりと朝飯にありつきながら、朝のニュース番組を見る。

朝からニュース番組は空き巣やら、傷害事件などやら物騒な事件が報道されていた。

「次に強盗殺人事……………」

アナウンサーが次の事件を言い切る前に父の健太郎がテレビを切った

「朝から見るもんじゃないな」

飯を食べた後、沙耶香と俺はそれぞれ支度をした後、玄関に降りる。

「「いつてきまーす」」

「行つてらっしやい」

母の啓子に見送られ、俺と沙耶香は元気に家を出た

行きしに今日の給食や今日の時間割について話をふってくれる沙耶香  
いつも無邪気に話をふってくれる沙耶香は大切な大切な妹で、この  
笑顔を託せる男が出るまでは、俺が守ってみせる、そう誓っていた。

「じゃあねお兄ちゃん」

「おう、今日も一日勉強頑張つていいよ」

「それはお兄ちゃんもだよ」



そう言っつて沙耶香は小学校へ、俺は中学校へと向かっていく。

途中、沙耶香の方を見るととてく歩いて見ているのを見て俺は安心して足を進める

「おいこらシスコン、見とれてないで行こうぜ」

「誰がシスコンだ!!」

俺のことをシスコンと呼んだのは、俺の友人の亀山 光希

ちようど横路から来て、俺のシスコ………じゃなくて沙耶香を心配してるところを見られたらしい

「まあ行こうぜ、ここで言い争っついても時間の無駄だしな」

「だな」

俺と亀山の二人で中学校へ向かった。

いつものように、普段通り、日常通り、義務教育のため、ただ中学

校へと行くのだった。

校門前に着くと、校門にいる先生方や校門を通る生徒達がおはようございますと、声が飛び交う

そんな校門を通り、俺と光希はそれぞれの席に座り、座ってまもなくホームルームが始まるかと思って座っていたが、どうにも担任が来ない。

時間になっても来ない担任に不安になったのか、生徒達が少し騒ぎだしてる中、学年主任の教師がなにやら神妙な面持ちで入って来た。

「皆、今からグラウンドに移動してくれ」

いきなりの教師の言葉に教室はざわめいていた。

“意味わかんねー” “めんどくせー” “何があったの” “何で何で？” などと生徒がざわめく

そりゃそうだ、朝来たら教師の開口一番がグラウンドに出てくれだから仕方がない

「いいから黙って外に出ろ!!!」

教師の声で生徒全員が黙り、クラスから生徒達が出ていく

「ヒロ、俺達も出よう」

「ああ」

光希とともに教室を出た俺だが、俺はその時、胸騒ぎがしてしょうがなかった。  
グラウンドに出ると、学年別ではなく、何やら不変的な集まりをしていた。

「何だこの集まり方は？」

「ああ、これ多分集団下校の集まりだな」

「集団下校？あの緊急時に集まるあれか？」

「そうそれだ、でもそれ朝にするってことは……」

光希の顔が険しくなる、いろいろと考えられるが、マイナスではないだろう

そしてそうこう考えてる内に校長が前へ出てマイクを握る

「えー、皆さん、今朝集まってもらったのはとある事件がありまして、一時間程前にこの近辺で事件が………ありました」

校長の告白に俺達生徒は衝撃を受ける

そして、生徒達は騒ぎ始める

騒ぎがすぐに伝染し、生徒達の騒ぎが沈む気配はない

「とりあえず静まれ!!」

中学で一番怖いと言われる体育教員の怒鳴り声でやっと生徒達が静かにし始める。

やっと静かになったところで再び校長がマイクを握る。

「えー、皆さん落ち着いてください!!まず帰る地域それぞれ別れてください、教員が少なくとも3名つきますから安心して皆さんは

安心して帰ってください」

(結局事件細部は話さずか……)

だいたいの事件の話しすらしなということとは、危険なんだろう

おそらくPTA総会などで説明するのだろう

そのまま帰るグループに別れた後ついた先生を先導して進んで行った。

グループに別れた後、歩く俺はずっとあることを考えていた

「浮かない顔してんな、どうせ沙耶香ちゃんのこと考えてたんだろ  
シスコン」

「だから俺はシスコンじゃねえよ」

「でも考えてたんだろ？」

小さく頷く俺、くそ、悔しい……

三人の大人と明るい道を集団で歩く、これは犯人にとつたら驚異なはずだ

結局、警戒のために行われた集団下校は俺とグループがわかるまで何も起こらなかったし、怪しい人物像も見なかった。

やはり警戒のしすぎだろうか

「じゃあまたなヒロ」

「ああ、気を付けてな」

同グループのメンツに軽く手を振り、すぐその家を目指す

「沙耶香は帰ってるのかな」

ドアに手をかけて開け、家に入った。

「ただいま」

ヒロの声は玄関に響くだけで、誰も返しとこない

嫌な予感がした俺の脳裏に浮かぶのは今日の朝での出来事

玄関を駆け上がり、リビングの扉を開けた。

「ああ……………」

そこにはナイフを刺され、ピクリとも動かない母の啓子と黒装束をまとった男に身にまとった男が父の健太郎に馬乗りになり今にもナイフを突き刺そうとしていた

「止めろおおお！！」

黒装束に向かって突進し、黒装束の男を突き飛ばした。

すぐさま父親に駆け寄り体を揺らすが、父親は動かない

「てめえ！！俺家族に何をした！！」

男は無言でナイフを拾い上げ、ナイフを俺に突きつける。

人生で初めてナイフをつきつけられたことによる恐怖で脚がすくむ

徐々に近づいてくる男に対し、俺は動くことができない。

「何なんだよお前は!!」

「……………」

どうしても動かない体、まさに絶体絶命で、もう死ぬと思った時だった。

「ただいま」

(沙耶香!!)

沙耶香の声に体が反応し、何とか男の斬撃をかわし、リビングのドアに目をやると沙耶香が入ろうとしてきていた



「沙耶香、見るな!!」

沙耶香を抱き締め、顔を隠す。

しかし、一瞬だけ母を見てしまったのか、抱き締めた沙耶香の体は震えていた。

「沙耶香、走って逃げて助けを呼ぶんだ」

そう言って沙耶香をリビングから出した。

「さて、これであんたも終わりだぜ」

「……………」

黙ったままの男もさすがに焦ったのか、ナイフをたて、俺に向かって突進してくる

俺はナイフの位置を瞬時に見て、心臓じゃないことを確認すると、その突進を受け止めた

「っ!!!!!!!!」

「ここは死んでも通さねえぞ……………」

俺はバカな行動にあわてふためいている男をガツチリと掴む

「もうこれ以上俺の家族を傷つかせねえ！！」

相手の顔面めがけ渾身のストレートを叩き込むが、相手は全く効いていなく、逆に投げ飛ばされ、地面に叩きつけられる。

そして叩きつけられた俺に男はナイフが刺さった場所踏みつける

「があああああ」

「……………」

踏みつける力は内蔵がつぶされる強さ

まるで人間じゃないようだ

そして男はふみつけや蹴りを繰り返し、俺にダメージをあたえていく

もはや抵抗すらできなくなった

だんだんと薄れゆく意識の中で頭に浮かぶのは、やはり沙耶香のことだった。

(まあ、沙耶香が無事なら俺はいいんだけどな)

ただそう思っただけだった

「離して!! 離して!!」

「っ!?! 沙耶香!!」

「遅かったな……………」

「意外にすばしっこくてな」

沙耶香の襟を掴み、俺を殴っていた男と同じような黒装束を着た少しガタイがいい男がいた。

「てめえ！！沙耶香を離しやがれ！！」

「へえー、この子、お前の妹さんかあ、可愛いじゃねえか」

沙耶香をひょいと持ち上げ、顔を覗き込む

「何してやがる、沙耶香から離れやがれ！！」

「おい、金目の物は見つかったのか？」

「ふむ、まだ7割ってとこだから、まだ探すとするかな」

「じゃあ、お前は楽しんでけよ」

そう言った男は最後に俺を強く踏みつけると、我が物顔でリビングから出ていった。

「さてと俺は沙耶香ちゃんといいことしようかな」

「やめて離してー!!」

「何やってんだー!!」

さっきまで意識が飛びそうだったが一気に立ち上がり、男に突進をしようとしたが、今の体力では大した威力も出せず、逆に男に殴られ、床に横たわる

かなりの衝撃からか、意識が飛ぶ寸前までいていた

「お前はそこで見とくんだな……………」

男が言っていることの後半部分を聞き取ることができなかった

落ち行く意識の中で、俺はただ男に力なく

「や……………め……………ろ」

と、そう呟くしかなかった。



## 四十二話 刃の矛先

過去を話すヒロからは明らかにとてつもない憎しみが感じとれた

言葉の一言一句が強い憎しみに満ちていた

「そこから先は言うまでもないだろう」

「ヒロ……………」

「俺はあの日、あの忌々しい日に家族を失い、そして沙耶香は心に消えることのないキズを負った！！この気持ちがお前に分かるか！！全てを失った気持ちが！！」

「さあ、失った気持ちなんざ、失った人にしか分からないからな、俺がお前の気持ちを理解するなんて無理な話だ、けどな……………」

「けど？」

「お前は少なくとも全てを失ってはないはずだ」  
俺はそう言って泉さんを指さした

「ここにいるだろ、誰よりもお前を心配してる大切な妹さんが」

「浅村君……」

「お前は何も分かってないからそう言えるんだ!!」

ヒロの怒鳴り声がさらに大きくなる

「沙耶香はあれ以来から心のそこから笑ったことがない、実の家族が死んで、たった一人の家族が笑わない苦痛がお前に分かってたまるか」

「どんな理由があっても、人の命を奪っていいわけがない」

互いが互いの主張を否定し合う

両者の主張はこのまま平行線をたどっていった。

「結局はこっすらする他ないんだな」



同調を解いた俺は、グラウンドに投げ捨てた二本の木刀を拾い、物質憑依をする

「天つ風・重か……………」

「もう同調を維持して戦うのはキツイからな」

「ふ、正直な奴だ、睦月、如月、皐月、鳴雷月」

ヒロは上空に飛ばず、地上で技を繰り出す

同調で対応していたヒロが繰り出す攻撃を何とかかわしているものの、攻撃に転じることができない。

(一瞬でも中に入り込めたら……………一か八かやってみるか)

できるだけヒロに近づき、天つ風・重を振り上げ、グラウンドを砕くように天つ風・重を降り下ろした。

もちろんかなりの量の土煙を巻き上げ、ヒロと俺、両者の姿が隠れる

「ちっ、目眩ましか」

気配を探るヒロだが、気配を消した俺を探すのは困難なはずだ

予想通り、ヒロは気配を探るのをやめ、あたりをキョロキョロと見渡す

（くそ、一体どこから来るつもりだ）

警戒するヒロ、好機をうかがう俺

そしてその時が来た。

気配を探るのをやめ、あたりをキョロキョロと見渡すヒロだが、背後から出てくる何かには気づいた。

体を捻り目の端でその何かをとらえた

出てきたのは天つ風で体を捻ることかわした

（勝った！！）

睦月をその方向に向かって振り抜く

天つ風が出てくるということは俺がいるということを確認しているのだ

だが、ヒロが振り抜いた睦月は空振り、勢いあまってか体勢を崩した。

「残念だったなそれはフェイクだ!!」

逆方向から出てきた俺は完全にヒロの隙をつき、空破撃を打ち込んだがしかし、空破撃が直撃したとたんにヒロも剣も霧のように消えていた。

「残念それはフェイクだ……………」

(しまっ…………)

ヒロは上空から俺の背後に回っていた。

完璧にやられた、しかも使い手は違うけど、同じやられ方をした。

今まで霜月を一度も使わないことで、俺の頭から霜月は消えていたのだ。

後ろには剣を構えたヒロが突きを繰り出した

(終わりだ!!)

ヒロの剣は無情にも体を貫いた。

俺ではなく、俺の前の飛び出した一人の少女の体を……

「な、何で……」

「そ、そんな……」

剣を引き抜いたヒロはおぼつかない足取りで後退する

そして剣を引き抜かれた泉さんは倒れそうになり、俺はあわてて体を支える

「泉さん!!泉さん!!」

ぐったりとしている泉さんを俺は体を揺さぶるが返事はない

その光景を見たヒロは呆然と見ていた。

「……………」

「泉さん!!はやく治療術を!!」

「無理だ……………沙耶香の治療は自分には使えないんだ……………」

「だったら早く救急車呼べよ!!」

携帯を家に置いてきたため、役目をヒロに託した

しかしヒロは携帯を出すそぶりを見せず、ヒロは攻撃をしてくる

「い、韋駄天!!」

天つ風を腰にさし、泉さんを抱えたまた移動し降ってくる球体をか  
わした

「くっ、何しやがんだてめえは!!」

「分からないのか……その傷ではもう助からない」

「勝手に決めつけんなあ!!」

ぶちギレてる俺に対して何も言わずにただ攻撃してくるヒロ

「待てヒロ!!頼むから泉さんを!!」

「悪いな残念だが俺も急いでるんだ、沙耶香が生きてる内にな」

「どづいつ意味だ!？」

「おいおい、最初に言わなかったか？種は5つあるんだぜ」

「っ!！」

ヒロが言った意味が俺は分かってしまった。

今カルテット状態のヒロが吸収した種は4つ

つまりは最後の種を吸収するということ

そして今ここにいるメンバーは倒れている真也に俺と泉さん

こうなれば嫌でも分かってしまった

全身が何かに取り憑かれたように、固まってしまう感覚だった。

「まさか…………お前」

「察しがついたならなによりだ、説明する手間が省けたというやつだ」

その時、俺の中で何かが切れた音がした。

「泉さんから種を取るつもりか！！てめえ、どうなるか分かったんのか！！」

「だから言っただろ、その傷じゃ助からない、だから生きてる内に種を取り出さなければな」

じりじりと迫ってくるヒロに対し俺は泉さんを抱える手を強める

「させねえよ……………そんなこと」

「お前にはたしてできるかな？」

くくくつと笑ったヒロに対して沸くのは憎しみといつどす黒い感情だった。

「……………村君」



手の中で確かに動いたピクリという感触

「泉さん、大丈夫!？」

「うっ……………」

苦痛に顔を歪める泉さん

やはり傷が深いのだろうか、まあ貫かれたのだから痛がらない方がどうかしている

気がついたのはいいが、早くしなければ手遅れになってしまう

「浅村君……………」

「大丈夫、すぐに病院に連れていくから」

ニコツと笑い、なんとか元気づける

しかし口で言うことを達成するには正直難しい。

いや、難しいどころじゃない、今の状況では無理だ

「どうだ浅村、沙耶香を渡せ、そうしたらお前を俺の部下として迎えてやるう」

「人の命をもてあそぶような奴の誘いにのるとでも」

「交渉決裂だな……………如月」

「くっ!!」

今の状態ではヒロの如月には追いつけず、コンタクトの瞬間に傷を最小限におさえる

泉さんをかばうように抱え込んで戦うのは正直キツい

しかし、この手を離すわけにはいかない

「浅村君……………もう……………して」

「悪い、ちょっと黙っててくれるか、すぐに終わらせるから」

「浅村君……手を離して……」

「な、何を言っただよ、そんなことできるわけないだろ!!」

「でも……」

「黙ってる……これ以上続けるなら本気で怒るからな!!」

その一言で泉さんは黙る

「如月、鳴雷月」

「ちい!!」

急いで泉さんを降ろし、泉さんを奪われないように泉さんを守る

帯電した如月に悪戦苦闘する

攻撃される度に体に電流が流れ、大幅に体力が削られていく

秀！！

「浅村君！！」

「大丈夫だ、たいしたことない」

口では言うものの、正直もつそんなに長くはもたない

「いつまで持つかな？」

「お前があきらめるまでだ！！」

「は、しゃらくせえな、決めるか…………麒麟！！」

連が戦った奥山が使った最大の技の麒麟、しかし奥山が使った麒麟より一回りデカかった

(やばい！！洒落になって……………)

「があああ！！」

麒麟が直撃した俺は体の力が抜けていくように倒れていった。

「浅村君……………」

倒れていく俺に向かって叫ぶが、どこか力が弱々しい

泉さんの体力はもう限界に達していた

そしてそれを知ったのか、ヒロは泉さんのそばまで来ていた。  
そして秋山達にやったよう泉さんに手をかざした。

手をかざされたことによる恐怖感、それによって泉さんは震えていた。

「大丈夫だ沙耶香、すぐ終わるよ……………」

「……………いや」

手をかざしたヒロは、今にも泉さんから種を取ろうとしたが、ピタリとやめた

もちろん情が邪魔したわけでも、思いとどまってるわけでもない。

「しづといというか、よく生きてるな、麒麟を受けてなお立ってる  
とはな」

「言つたら、お前が諦めるまで諦めない」と

「しかし理解に苦しむな、何故そこまで他人を守る、自分の命をか  
けてまで」

「逃げるわけにはいかないんだよ……」

「何だと？」

「ここで逃げたら……ここで逃げたら俺の生を否定するこ  
とになるんだ！だから逃げるわけにはいかないんだよ！！」

もうすでに体はボロボロで血が滴り落ちる俺

いつ倒れてもおかしくはない状況、というかこんな状況で立っている方がおかしいのだ。

そしてその雰囲気がヒロを困惑させていた。

羽をひろげ、空に飛び空中に両手をかざすと11本の剣が空中に出現した。

中には睦月や如月があるということは、今まで出していた剣なのだろう。

「考えれば簡単なことだったんだ、お前を倒してから種を回収すればよかったんだな」

そういつてかざした両手をパンと合わすと、11本の剣が真ん中に集まり、巨大な一本の剣になった。

「七光聖剣！」

そして手を軽く振ると巨大な一本の剣は、俺に向かって飛んでくる

(くっそ……………体が動かねえ)

選手交代！！

瞬時に俺に憑依したシルフィーは、残りが雀の涙ほどしかない魔力を使い、風を発生させ、その反動で自らと泉さんを抱き上げ後退する。何とか剣の直撃をかわしたが、七光聖剣が刺さった瞬間、パッと光り、とてつもない爆発が起こった。

シルフィー！！選手交代！！

すぐさま憑依をとき、泉さんの上に覆い被さってから泉さんを爆発から守る

「ぐあああああ！！」

俺はそのまま、泉さんの上に倒れた。

「浅村……君」

「直撃は避けただろうが、さすがに効いただろ」



ヒロは空に飛んだまま、こっちを見ている。

七光聖剣はというと地面から抜け、元の位置に戻りふわふわと浮いていた。

「くっ……………」

「ほお、有言実行だな」

羽を羽ばたかせながらゆっくりと降りてくる。

(私のせいで、浅村君が……………)

倒れている、俺を見てなのか泉さんは罪悪感を感じていた。

そして、ヒロが地面に降りたのを見た泉さんは覚悟を決めた顔をしていた。

(いつも助けられてちゃダメ、私が……私が助けなきゃ!!)

覆い被さっていた俺を起こし、俺を支えるような形になった。

「さあて、沙耶香種を回収させてもらおうか」

10メートルほど離れた所からゆっくりと近づいてくる

「兄さん、私はあなたの計画を絶対に止める、止めてみせる!..!」

「一体どうやって?」

「止めるのは私じゃないよ、私じゃ止められないから」

その時の泉さんの顔は、よく覚えている

全く屈託ない笑みを浮かべていた、濁りのない、心の底から笑っている笑みだった。

「まさか!?!沙耶香!..!」

「泉さん……何を……」

「浅村君、兄さんを止めてくださいね」

それからは一瞬だった

泉さんはゆっくりと顔を近づけた。

そして

泉さんの唇と俺の唇が重なった……キスだった

“一生分の慈愛”

「っ！！！！！！！！！！」

慌てふためく俺だったが、すぐに体の異変に気がついた

体の傷口がみるみる塞がっていた。

塞がるだけではなく、魔力が体に戻ってきた。

いや戻ってきたというより、目の前にいる泉さんからもらった、いや託されたという感じだ。

やがて、泉さんは顔を離し、離れた瞬間泉さんは倒れ、倒れてきた泉さんを抱える

「泉さん……………一体何をしたんだ？」

「一生分の慈愛……………これは、キスした相手の傷や体力の完治、魔力を全快にするんだよ……………自分の命と引き換えにね」

時間が止まったような感覚がした

泉さんが……死ぬ……

「お願い………兄さんをとめて」

言葉の後半が聞き取りづらくなっていた

今の泉さんの容体は、素人でもわかる、虫の息だった

「泉さん!!泉さん!!」

必死に体を揺さぶる俺に対してヒロは呆然と立ち尽くしていた。

「浅村……君、最後に………聞いてほしいことがあるの………」

「断る!!最後なんて言葉なんて聞きたくない!!」

「聞きたくても、私は喋らせてもらつよ」

はあ、はあ、荒い息を吐きながら喋る

「ありがとう浅村君……私、浅村君に会え本当によかった」

そこから泉さんは思い出を語り始める。

俺が実行委員になって、二人で仕事をしたこと

初めて異性（俺）とご飯を食べに行ったこと

俺が泉さんの悪口を言われた時になかなかの行動にでたこと

泉さんから出てくるのは、俺と知り合ってからのことだった。

自分のことなのに、俺は恥ずかしくなかった、むしろ悔しかった。

あれだけ諦めないと言った結末がこれだ、絶対に認めたくなかった結末を認め、目の前の現実を受け入れる自分が悔しくて仕方がないだから今、泉さんの言葉を唇を噛み締めながら聞く。

しかし物事絶対に終わりをむかえるもの、泉さんの喋りは終わりをむかえる

「ねえ、浅村君……私が浅村君に会って一番よかったことって何だと思う」

「何だい？」

微笑みながら聞く

泉さんは、言葉を発する前に答えになってないけどねと前置きし、囁く程度の声量俺に言った。

“最後に浅村君を好きになれて本当に良かった……”

それが泉さんの最後の言葉だった。

「泉さん、ありがとう」

回復した魔力で遠くに移動し、泉さんの両目は手で閉じ、両手を組ませて胸にやる

「君の死は絶対に無駄にしない」

そう言って、俺はヒロと向き合う

「死んだのか、沙耶香は」

「ああ、死んだよ、俺なんかの傷を治すためにな」

うつむいたまま、ヒロの問いに答える

「まあそう気を落とすな、あの傷じゃあ助からんぞ」

「誰のせいだ……」

「ん？」



「誰のせいでその傷を作ったと思ってる!!」

声をあらげる、俺は完全に怒りが頂点に達していた

ヒロが泉さんの傷を作った張本人だということに、妹が死んだことに関し、何も感じてない様子がさらに俺を苛立たせていた。

「くだらん……」

「くだらねえだと……」

「ああ、くだらんな、お前にとっては一大イベントかもしれないが、俺にとっては種を取り損ねてしまった」

「ヒロ、てめえそんなこと思ってやがったのか!!」

「ああ、だから深く心が痛んだよ」

秀、コイツ!!

「バカは死なねえと治らねえとは言うが本当みたいだな……シル

「フイー同調だ!!」

了解!!アイツ絶対にぶっ飛ばしてね

「任せとけ!!」

同調をした俺を、見たヒロは再び空中に飛ぶ。

「どつせ俺には勝てないさ、七光聖剣!!」

「勝てるぞ」

「何?」

「やってみれば分かるさ、お前は俺に勝てないってことがな」

「やってやるさ、七光聖剣!!」

ふわふわと浮いていた七光聖剣がゆっくりと俺に照準を合わせる

七光聖剣の矛先からは禍々しさが感じ取れる

「行くぞシルフィー」

うん

体の力を抜き、だらーんと体をやる気のなさそうに構えていた。

そして前後に体を揺らし始めた

レインと戦った時、最後に出した構えだった、ゆういつ違う点といったら、目を閉じているところだった。

「ふざけた構え方をおおお、七光聖剣!!」

飛んでくる七光聖剣に対し、俺は体をギリギリまで揺さぶり続けた

そして七光聖剣が当たる直前で俺は目を見開いた。

「絕空劍・一閃……」

## 四十三話 終わりは悲しみと共に

一瞬の出来事だった。

七光聖剣を放ち、浅村に直撃する寸前まではよかった

しかし、当たる直前で浅村は消えていた。

さらに消えたという認識をしたころには七光聖剣は砕け、俺はコントロールを失い、地面に落ち、浅村は俺の真後ろにいた。

そして遅れてきてやってきた激痛と目眩に俺は踏ん張ることすらできずに、倒れてしまった。

「な、何が……お、起こったんだ？」

激痛と目眩のせいか、上手く喋れない俺

そして

「ケホっ、ケホっ、ゴホっ!!!」

グラウンドにド派手に吐血する浅村がいた。

秀、大丈夫？

「大丈夫、まだまだ戦えるさ、もういつちよ行くぞ」

でも絶空剣・一閃のスピードに体がついて行ってないよ

「けど、ヒロがこの技についていけないのも事実だぜ」

シルフィーの言ったことも俺の言ったことも事実、しかし今が好機、自分の体を労っている暇などない

現にヒロは立ってはいるが、目眩のせいか、体はふらついていた。

………わかった、でも死なないでよ

「当たり前だ、救ってもらった命だ、絶対に死にやしねえよ」

再び体の力を抜き、体を揺さぶり始める

全身の力を抜けるまではまだ時間がかかる中、ヒロの状態も回復している

「俺はお前と一緒に負けるわけにはいかない」

ヒロが右手を掲げると、再び七光聖剣が現れた

そして七光聖剣はヒロの手に握られた。

重くないのかなあ

「……………」

シルフィーからの問いに俺は答えない

全身に力を抜いている今の俺にはシルフィーの声は届いていなかった

「さあ最後の勝負を始めようか、お互い体力は限界だろうしな」

ふんだ、あなたは絶空剣・一閃の前ではなすすべないじゃないの

「どうかな……………ともかぎらないぜ」

七光聖剣を振り上げ、地面に叩きつけ、大量の土煙を巻き上げる。

俺がやったように

「おそらく絶空剣・一閃は直線的な動きを化け物染みたスピードで蹴散る技だろ、なら対象の位置がわからなきゃどうしようもない、さらに、今の状況を見ると、後一回が限界だろうな」

くっ……………あいつそこまで

」……………」

土煙に隠れるヒロ、目標を見失った

気配を消したヒロがどこにいるかわからない

秀、どうしよう!?!?

「悪いシルフィー、話しかけるな」



「……」

まだ体の力を抜ききっていない俺はシルフィーに黙るように促す

最優先はヒロを見つけることより絶空剣・一閃を出すために全身の力を抜くことだ

……

「……………」

次の攻撃で勝負が決まる

何があっても次の攻撃を決める！！

そしてそのときが来た

背後から瞬時に現れ、瞬時に距離を詰めた

秀、後ろ!!

「わかってるぜ!!」

「なっ!!」

ヒロが驚いたことは突き立てた七光聖剣が俺のわきで挟まれていること

そしてなにより……全身を脱力していたはずの俺が瞬時に脱力をやめたからだ

そして体を一気に捻り七光聖剣を奪い取る

「しまった!？」

いつけええ秀、ぶっ飛ばしちやえ

「ああ、でもぶっ飛ばすのは……そこだあ!!」

土煙を風で一気に吹き飛ばすと、ま反対の方向にもう一人ヒロがいた。

そして俺は脱力も何にもせず、絶空剣・一閃を繰り出し、ヒロの土手っ腹に拳を叩き込んだ。

叩き込むと同時に背後から出てきたヒロと七光聖剣は霧の様に消えていった

「勝負ありだな……」

「な、何故……」

激しい衝撃の音の後に訪れた静寂にドサリとヒロが倒れる音が響いた  
終わりを告げるブザーのように何度も何度も俺の耳に響いた

「ど、どうして絶空剣・一閃を……」

「ん、脱力してないことか？」

ヒロは首を縦に降る

「ああ、ありやフェイクだ」

「ふえ、フェイク？」

「体を揺らすことも、脱力することも全部フェイクだ、お前なら次にああするだろうと読んでな、霜月を使うこともな」

「何故そんなことをする必要がある、普通に絶空剣・一閃を出せばよかったじゃないか」

「なあに慎重にいっただけさ、そして結果がこれさ」

俺の言葉に、ヒロは口をあんどぐりとさせていた

それから笑いが聞こえてくる

「くつくつくつ、まったく脱帽するな戦場における知識は」

「ほかの知識はからっきしだけだな」

「ふつ、まあなにせよ俺は負けたんだな、煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

そう言ったヒロを俺は胸ぐらを掴み上げ、喉元に天つ風を突きつける

秀!!

「黙ってる……」

天つ風を持った腕をゆっくりと引いていく

そして

ドカ!!

「ぐっ………」

思いっきりヒロの顔面をぶん殴った。

「死んで全てを終わらせようと思つなよ」

「……………」

下にうつむくヒロ、おそらく俺に殺されようとしたのだろうがそうはいかない

「お前のやったことは絶対に許されることじゃない、人の命をうばってんだからな」

「だったらなおさら死んで償わせてくれ」

再び胸ぐらをつかみあげ、俺は声を張り上げる

「ぶざけんなよ！楽な道を選んでんじゃねえぞ、お前は生きてる

んだ、生きてんだったら生きて償えよ!！」

「それは無理な話さ」

「何？」

ヒロは手から秋山達から取り出した種を4つ出した。

「何するつもりだ？」

「アビリティシードを取られた人は死んじまうさ、しかし取り出した種を割ればその人は命を取りもどす仕組みになってるんだ」

そう言ったヒロは4つの種を粉々に砕いた

砕かれた種は光の粒子のようになり、散り散りに飛んでいった

「これで秋山達もじきに目をさますだろ、能力を使った時の記憶はないだろうがな」

「生き返るんならこれ以上のことはないな」

「ああ、これでもう逝ける……」

「何ふざけたこと言ってんだ！！忘れたとは言わせねえぞ！！お前の大切な家族の死をな！！」

「言つたる……無理な話だと」

「だから、どついう意味なんだ」

「お前は償えと言つたが、悪いが俺は出来そうにない」

「家族の死から目えそらしてんじゃねえぞ！！」

「無理だ……これからの償いの人生を沙耶香無しに過ごすなんて無理さ」

「お前……もしかして」

昔の話を聞いた時から思っていた。



攻撃した時や、躊躇なく種を取り出した時は、どこかしら思うところはあるが、今のヒロの言葉でようやく確信した

「妹さんのことが好きだったのか？妹してじゃなくて、一人の異性として」

「ふっ、今となってはなんの意味も持つまい」

軽く笑みを浮かべたヒロ、その顔に暖かな日の光が射し込む

「もう朝か……けっこう戦っていたんだな」

「ふ、それにしても、大分無茶苦茶にしまったな学校やグラウンドを」

「ま、まあな……」

見るも無惨にポツロポロのグラウンド、とくに七光聖剣が刺さった

ところはひどい、全生徒が夜通しで掘った穴になっている  
学校はほとんどの階の窓が割れ、壁のコンクリートは所々にヒビが  
走っている

この状況はおそらくどんな科学者でも説明は不可能だろう

「なあ浅村、一つ約束してくれないか？」

「内容によるかな」

「沙耶香がある場所に連れて行って欲しい、その代わりに、グラウン  
ドと学校を修復してやる」

「おいおい、この惨劇会場を修復できるのか？」

「まあ任せとけよ、さあ約束をするか？」

深く考え込む俺、さっきまで、命のやりとりをしていた相手

さてどうしたものか……真也もまだ倒れてるしなあ

「……………よし決めた」

すたすたと歩く俺は倒れている真也の体を思いっきり揺さぶった

「真也あー目を覚ましやがれ」

「う、う、う、う、酔っ……」

「お！？目が覚めたか、よかったよかった」

「ん？秀……全部終わったのか」

「ああ、でも泉さんが……」

「秀、それ以上は言わなくていい……」

自分の口に人差し指を当てる

「ありがとな真也、起きたついでで悪いが石月と連の所に行く  
れないか？」

「お前は、今からどうするんだ？」

「約束を果たしてくる」

「あいもかわらずお前の言葉は分からねえな………まあいい、行ってこいよ約束とやらを果たしてきな」

立ち上がった真也は、ゆっくりだが学校を出ていった。

「さあて、俺も行きますか」

「ああ、その前に修復をさせてもらっか」

ヒロは自分の額に手を当てた

すると、額から種が出てきた。

そしてその種をまた粉々に砕く

砕かれた種は、また光の粒子になり、学校全体に広がり、戦闘があったであろう爪痕が消えていった。

「す、すげえ!!」

「さて連れていってもらおうか」

「一体、何処につれてけばいいんだ？」

「場所は………だ」

「了解したが、お前はどつするつもりだ？」

「俺は………少し休ませてもらうよ」

「えっ!?!?ヒロもしかしてお前!」

俺の頭に死という文字がよぎる

「大丈夫だ、本当に休ませてもらうだけさ」

ぽんと肩に手をおいたヒロは俺に笑って見せた

「分かった、じゃあ行ってくるわ」

「ああ泉を頼んだぞ」

泉さんを背中に背負い、俺は指示された場所に向かって行った。

幸い魔力はまだ残っている、人の出入りが多くなる前には着きそう  
だ。

校庭の壁を飛び越え出来るだけ人気のない道に入った俺を見たヒロ  
は壁にもたれ込んだ

「浅村の奴、帰ってきたら怒るだろうな……………」

正面から射し込む暖かな日差しが眩しい

そんな眩しい朝日を目を細目ながらも見つめる

「ああ、朝日ってこんなに暖かったんだな」

細目ながら見ていた目をゆっくりと目を閉じる

そして深く深呼吸をしてから呟いた

「すまない浅村、やっぱり俺は償うことは出来ない……………」

四十四話 約束の場所（前書き）

これから短い話が続きます



四十四話 約束の場所

泉さんを背負って俺がやって来た場所は

一駅またいだ所にあるバカデカイ公園

その公園にある綺麗な湖だった

「ここがヒロに言われた場所だよな」

まだこの時間帯、人はほとんどいない

そして俺はヒロとの約束を果たしに行く、湖の中心に移動する

泉さんの冷えきった体を抱きしめる

「ごめんな泉さん、俺が不甲斐ないばかりに……」

泉さんを抱きしめる俺から嗚咽が漏れる

秀……………やるよ

シルフィーの言葉にコクリと頷く

抱きしめていた手をそつと離す

支えるものが何もなくなつた泉さんは静かに湖に沈んでいく

湖に吸い込まれるように沈んでいく泉さんを見ているとまた目の奥から涙が出てくるがそれをぐつとこらえる

まだ泣いてはいけない、まだ泣くわけにはいかないんだ

そつ自分に言い聞かせる

秀……………

「大丈夫だ……さあ帰ろう」

公園から出た俺は、また人気のない道を通つて学校に戻る

学校に戻れば、ヒロがいるはずだ、そこでまた今後のことを聞こうと

その時はそう思っていた。

「んな!？」

嘘……

学校に戻ると、そこには野次馬達がひしめいて、今シートをかけた人らしき形をしたものが運ばれていく

秀、あれって……

「……戻ろう」

ちよ、何でよ!!

「いいんだ……もういいんだよ」

………分かった

野次馬達を掻き分けて、家に戻るが、足取りはどえらく重い

駅に着いて、定期券を改札機に通して電車に乗る

電車に乗って、家まで俺とシルフィーはまったくの無言だった。

「ただいま……………」

弱々しい声で、家に入る俺を見つけた姉がドタドタと駆け出てくる

「大変よ秀、泉さんがいなくなっちゃったのよ!!!こんな手紙を残して」

「手紙？」

姉から手紙を受け取った俺は、手紙を書かれた文面を読み上げる

【助けてくれてありがとうございますがとうございました、最後に私がこの家にいたことは誰にも言わないで下さい】

「様子を見に行こうとしたら秀の机の上にあったの」

「家に帰ったんじゃないのかな？言わないで下さいってのは、年頃

の女の子が男の部屋で寝てたつてのを知られたくないからじゃないかな」

「まあそうだといいんだけど……」

納得はしてない様子の姉だが、空気は読めるらしく、そこからは何も聞かずに自分の部屋に戻っていった。

俺も自分の部屋に戻り、ベッドに倒れ込んだ

( することはたくさんあるけど、今は何もしたくねえ )

そのまま目を閉じると、夢の中に入っていた……

## 四十五話 葬式

俺が住んでいる駅から終点まで行った所に俺と石月はいた

俺は礼服、石月は喪服を着て……

### 【泉家葬式場】

二人が何故ここにいるのかというと

遡ること3日前になる

3日前

戦いの次の日、朝のニュース番組で取り上げられたのは学校で発見されたヒロについてだった。

第一発見者は学校で意識がもどった秋山で、ぐったりしていたヒロを見て警察に連絡したらしい

連絡を受けた警察は、次の日に泉家を搜索した結果ヒロ本人が書いた遺書が見つかったらしい

遺書には遺産相続的なことは一言も書かれていなかった

書かれていたことはたったの二つだけで、まず一つ目は

【沙耶香を殺したのは自分であり湖に沈めた】

と書かれたあつたらしい

警察が湖を搜索したところ、泉さんを発見したのだ、まあ発見されるのは当然だった。

今思えばヒロが湖に沈めてほしいと言ったのはこのためじゃないだろうか

そして、遺書に書かれたもう一つは

【葬式を開き、沙耶香と一緒に葬式を行ってほしい】

と書かれていたとのことらしい

そして何故そんな遺書の内容を俺が知っている理由はと言うと

昨日の朝にポストに全てが書かれた手紙が届いていたのだ

一切手がかりを残すことなく届けたというのだ

まったく、最後まで掴み所が分からないやつだ

などと、今までのことを簡単に説明したらこんなところだ

ちなみに何故石月がいるかというのと、俺達の戦いに僅かながらでも関わったことで、石月も知る権利を得たということもあるのだが

なにより重要だったのが、石月が泉さんととても仲の良い友人ということだった。

連と真也の二人は怪我やらなんやら、まあとにかく休まなければならぬ状態のため、参加できないということである。

長々な説明になったが、こういう経緯があり今にいたる



「さて行くか」

受付に行き名簿に名前を記帳する

浅村 秀とそう記帳した時だった

受付にいた人がその名前を見た人が後ろの人に耳打ちをしている

そして……

「君が浅村君かな？」

ガツチリした体格の角刈りの男性、年齢はヒロと同じといったところか

「あなたは？」

「初めましてかな？私は亀山 光希です」

「亀山 光希さんってヒロの友人ですよね？」

「ああ、やっぱり知っていたか」

「やっぱりって、どういう意味ですか？」

「……………場所を変えようか、君に伝えたいことがある」

首を縦に振る

「悪い石月、すぐ戻るよ」

「私のことは気にしないでください」

「ありがとう、行ってくるよ」

俺と亀山さんは、受付の裏へと消えていった。

## 四十六話 手紙

俺が連れてこらるた場所はまったく人気がない所だった

砂利が敷き詰められた場所のために、砂利道独特の音が鳴る

「それで、話っているのは何ですか？」

俺の問いに亀山さんは一拍おいてから答える

「唐突な話しになるが、実はこの前にヒロと飲んでて、その時の話なんだかな、こんな物を渡されたんだ」

胸ポケットから取り出した封筒を回転させるように俺に投げ渡す

「浅村 秀へ……………」

「それを君に渡してほしいと言われたんだ」

「ヒロからこれを？」

「ああ、まったく、久しぶりに飲みに行くことになったら、大した話もせずに、それを渡してくれとはな」

どことなく寂しそうな顔をする亀山さん、ヒロと話をすることすら久しぶりだったのだろう。

「さて、親友の約束も果たしたし戻るとするか」

俺の横を通りすぎ持ち場に戻ろうとする亀山さんを、俺は呼び止めた

一つだけ質問をした。

「亀山さん、あなたはもしかしてこの事件の詳しいのを知ってるんじゃないんですか？」

「そう考える根拠は？」

「ただの勘です、僕は泉　裕という人物のことを全然知りませんが、でも、ヒロは何も言わずに手紙を渡すような人だとは思えないんです、ましてや親友というあなたに対してはね」

俺の問いに対し亀山さんは、黙ったままその場につつ立っている。

やっぱり答えるのが難しい質問だったのか

そもそも確たる確証なんてものはないのだから

「すみません、出すぎたことを聞いてしまいましたね、忘れてください」

今度は逆に俺が亀山さんを横をすれ違い石月の所に戻ろうとしたが、俺の肩をガツチリと亀山さんが掴んでいた。

そして……

ドカッ！

「……って、やっぱり知ってたんですね」

「ああ………知ってたさ、だが知ったところで、どうにか出来た  
ってか!」

「亀山さん………」

「ヒロから全てを聞いたよ、初めは嘘だと思ったよ、でも、ヒロか  
ら見せられた時はビックリしたさ」

見せられたとはおそらく、能力のことだろう、秋山達からまだ種を  
とってない時と見ると、瞬間移動する能力だろう

確かにそんなものを見たらビックリして当たり前だろう

「君も同じなんだろう、そして………止められなかったのだろう」

亀山さんは声に力を入り声をふるわせる

そんな亀山さんを見た俺は

「止められなかったのは俺の責任です、すみませんでした……………」

その場で深く頭を下げる

「今更、私は君にどうしてほしいわけでもない」

「……………」

「とにもかくにも、私は失礼するよ」

そのまま過ぎ去っていく亀山さん

砂利の音が聞こえなくなるまで、頭を下げ続け、亀山さんがいなくなったであろうと確認したあと、頭をあげ、ヒロからの手紙を手にとる

戦う前からヒロが書いていた手紙

果たして何が書かれていれのだろうか



「……………」

手紙を開ける手が震えるが、意を決して手紙の封を切った。

## 四十七話 内容

浅村 秀へ

君がこの手紙を読む頃には、俺は生きてはいないだろう

理由は言わずもがな、この手紙を読む頃にはわかっているだろう

君が俺の計画を止めて良かったと思っっているかも知れないが、俺は最初からそう思ってたわけじゃない

俺は能力を手に入れた頃、理不尽な魔の手から弱者を守りたいと思っていた。

俺と沙耶香のような被害者を一人でも減らせるように

そう思ってたんだ俺の若かりし頃はな……

でも、それには限界があると気づいたんだ

力には圧倒的な力で対抗するしかないとな

だから、俺はアビリティシードをさらに使うことにした

被害者を増やしてでも、野放しにしてはおけない輩どもがいるかぎり、俺は力をふるうことにした。

だが不安だった、果たして俺にはそんな器があるのかと、もしかしたら俺よりもっと強い奴がいるかもしれないと、そう考えてたんだ

しかしその不安は秋山によって取り除かれた

（俺が秋山に完敗したことだな）

初めは圧倒的な力に諦めてくれるだろうと思っていたが、君は特訓を始めた

君がどれほどくだらない人と思ったときだったよ。

（余計なお世話だ！！）

そんな中、君が特訓を始めたと同じ時期に、アビリティシードの使いすぎにより秋山が暴走し始めた

（秋山が意味がわからない行動したのはアビリティシードの使いすぎによる暴走だったのか）

暴走のせいで多くの人が傷ついたのは本当にすまないと思っている、死人が出なかったことが唯一の救いだっただかもしれない

近いうちに君とは最終対決をしなければならないだろう

だがしかし、この手紙を読んでいるということは、俺の負けなのだろう

つまりは……

支配するためだけの力が、誰かを守る力に負けたということだろう

そこでだ

君はこれからも誰かを守る力があることに誇りを持って生きていてほしい

そして絶対に俺の様にはならないでほしい

「クロ………」

そして最後はお願いになるんだが、この願いは聞いてほしい

( 願 い ? )

手紙の最後の一行部分まできて、最後の部分には力強く書かれていた。

“ 沙 耶 香 を 宜 し く 頼 む ”

「 つ ! ? 」

その時時間が止まったような気がした

( どう っ い う 意 味 だ …… )

頭をフル回転させる

今までこんなに頭を使ったことがないくらい回転させていきついた

答えは一つだった。

「もともとニパターンあったんだ」

どついつの意味？

「つまりはどついつことだ」

片手を口元にあてる

「ヒロの計画には始めから泉さんから種をとるつもりはなかった」

「え！？じゃあヒロが残した遺書は？」

「まあ話を最後まで聞けって」

取るつもりはなかったが、俺を守ったせいで種を取ることになった

と計画が変更するところまで考えていたのだ

考えていた？

「あの遺書の問題は、泉さんが死んだことで成立する、じゃあ死んでいなかったら、戦って負けたのがヒロだけだったら」

そうか!!

「あの戦いで泉さんが生きていたとしたら、家に戻り遺書を見つける、自分は死んでないので、遺書を破棄する、これで成立だ」

じゃあ秀宛に届いた手紙は？

「あんなもん、泉さんが生きてたら何の意味もなさなただの紙だよ」

そうか……そうだったんだね

「……ひたってる場合じゃねえか、石月が待ってる戻ろっか」

うん、戻るのはいいけどしおらしい顔、してたらダメだからね

シルフィーに指摘され、両頬を叩く

石月の前でこんな顔はしてはいけない、あいつは人を心配しすぎる癖があるから

とにかくにも、戦いは終わったのだ。

一人の少女の命を引き換えに、もう一人計画を止めた

そして最終的に二人の死者が出るという、最悪の幕引きで終わったのだった……………





四十八話 カウントダウン(前書き)

第三章終了です

## 四十八話 カウントダウン

葬式後の帰り道、俺と石月間の空気はさほど重くはなかった

葬式が終わった後、石月は俺に亀山さんに呼ばれた理由などを聞こうとしなかった。

空気を読んでのことなのだろうか、石月なりの気配りなのだろう

亀山さんのことを聞かないだけで、普通のことを話してはいる

話をきりたくはないのだろう

「そつえば浅村君、一週間後に学校が始まるそつですよ」

「確かにそんなこと言ってたな」

「学校の友達と会うのは楽しみですけど、校外学習のほうも楽しみです  
ですね」

自分も用意を手伝ったからなのか、校外学習が楽しみなのだろうか

校外学習のようなイベントことは待ち遠しいの  
だろうか、しかし

「残念ながら、校外学習が決定したとしても、ずいぶん延期になりそうだな」

「え、何ですか？」

石月の問いに俺はポケットから財布を取り、透明のカードだった

カードには4：58と表記され、カウンタダウンは続いている

「異世界に行くんですね……」

「ああ、まずは服を着替えて来るか」

「冷静ですね、次の異世界にどんな危険がまつてるかわからないのに」

「今焦ったって仕方がないだろ、それに未来のことは誰もわからない」

「それはそうですね」

どことなく心配そうな顔をする石月を見た俺は、ポンポンと頭に手をおく

「大丈夫さ、お前は一人じゃないだろ」

親指で俺自身をさす

「はい そうでしたね、私は一人じゃない」

「うし、そうと決まったら石月も用意してきな」

はい、と元気よく返事をした石月は俺の家の前からとたとたと駆け足で自分の家へと走って行った。

「さて、俺も行くとするか」

家のドアに手をかけた時だった。

「っ……!!」

急に体全身に激痛がはしり、俺はその場で倒れてしまう。

「はぁ……あぁ……あ、もうガタがきやがったか」

秀……やっぱり同調が

「気にするな……そろそろ落ち着く」

ぜえはぁ、ぜえはぁと肩で息をする

まるでフルマラソンを完走したかのようだ。

「これが、同調のデメリットか……」

すばらしい物を得ようとすると、それなりの代価を支払わなければならない、これはこの世で生きていく限り、一生つきまとうルール

つまりは同調にも言えたことである

(ちっ、言われてたのとは段違いだぞラウル!!)

時は遡り、俺達がまだレーガルにいた最終日、ラウルと戦い終わった時だった。

「ふー、どえらく強くなったな浅村、これなら隊長クラスになれるぜ」

「名誉ある仕事だとは思っけど無理だったことくらいわかるだろ」

「ここにはいられないか」

「ああ、いやがおうでも次の異世界に行くんだろっな、夢を叶えるために」

「夢か……お前の夢は他の異世界に行かなきゃ叶えられないのか？」

ラウルの言う通りだ、異世界に行けば、俺の夢が叶えられると言うわけじゃない

次の異世界で俺の夢が叶うかもしれない、しかし逆に次の異世界でも、そのまた次の異世界でも夢は叶わないかもしれない、10回、20回、いや50回行っても叶わないかもしれない

だったとしても、そんな辛いことだとしても、俺は……

「微かな希望あるなら、どんなに小さな可能性があるなら、俺はその可能性にかける」

「なるほどな……ふ、じゃあそんなお前に俺が精霊契約の真の力を教えてやるっ」

「真の力？」

「ああ、精霊契約の隠された力……同調だ」



そこでラウルに教えられたのが同調だった

精霊と契約者の絶大な信頼関係がある場合にできる同調

そんな同調にもデメリットがある

「契約者の肉体の精霊化？」

「同調するのは契約者が精霊に合わせなきゃ発動できないんだよ」

「つまりは？」

「つまりは契約者が精霊と同じ存在に近づくってことだ」

「もっと噛み砕けない？」

「つまりは、人間が浮遊霊になっちまうだよ」

「っ！！！！！」

俺はラウルの言葉に絶句してしまった。

浮遊霊ってことは、俺が死んでしまっってこと

同調するにはそれなりの覚悟が必要ってわけね

「気にすんなよ、お前レベルの敵はそうそついないだろっし、精霊化だっって同調を繰り返すこととなる症状だ、一回や二回じゃなんともないさ」

「ありがとうラウル、同調はこの先必要不可欠の力になると思う」

「そっか……なら頑張れよ」

それがラウルがくれた言葉であった。

「はあ、はあ、はあ、だいぶ落ち着いてきたな」

無理しないでね秀

こくりと頷き、家に入る

入ってからは、すぐに自分の部屋に入り動きやすい服装へと着替える

おそらく、異世界に引き継がれるものは服装ぐらいなのだろう

着替えた後はベッドにダイブして体を休める

「さて、次はどんな異世界に行くのかな」

白い天井を見上げながら、あれこれと考えていると、俺はいつのまにか眠ってしまった。気がついた時には、カードの数字表記が00:09となっていた。

「はあー、石月が言う以上に俺は冷静なのかもしれないな」

ベッドから立ち上がり、リビングに降りる

リビングではテレビを見ながら夕食を作る母と、テーブルで携帯を弄くっている姉がいた

「あ、ちょうどいいところに来たわね秀、ちょっと手伝ってくれる」

「いいよ、具体的には何をすればいいの？」

「適当に一品作って」

「……………了解しました」

渋々ながらも、母の要望を聞くことにした俺だが、台所にたった直前、視界のすべてが光に包まれ、異世界へと旅立つのだった。

第四章一話 離れ離れ（前書き）

第四章スタート（^| ^） /

## 第四章一話 離れ離れ

「う、うーん」

眩い光に包まれて、目を閉じていた俺が目を開けたのは、家のリビングではなかった。

異世界へと来たのだから、当たり前といったら当たり前だが、これだけはたとえ何度やったってなれないだろう

「何処だここ？」

辺り一面が機材だらけで、部屋には表現できないインチのテレビが壁にはめ込まれている

言葉で表現するなら、漫画などによく出てくるラボみたいな所

しかし、ラボ内の辺りを見渡しても人一人見当たらない

つまりは、仲間の5人もいないのである

初めて異世界へと行ったときは6人全員が揃っていたから、自然と行動出来たものの、今度は俺一人ときたか……

ため息を一つ吐いてから、とりあえずは部屋を出て、広めの通路に

出た。

通路の壁も床もラボと鉄のような素材で出来ていて、戦艦の中にあるような感じがする。

まずは仲間集めから始めることにした俺は、通路を歩き始める。

歩き続ける途中でいくつかの部屋を見つけるが、俺は目も暮れずに歩く。

できるだけデカイ部屋を目指し、他の人達を待ってみるとするか

歩くこと10分、さすがの俺でも違和感に気づいていた。

「なあ、シルフィーおかしいと思わないか？」

うん、人がまったくいないよね

「これだけまっぴらに歩いてるのに誰もいないなんておかしすぎる」

ここが何かはわからないけど、休みとか？

「ラボ内の機材には電源が入ってたし、俺らが歩いてきた道は電気が点いてるだろ」

上を指差し、シルフィーに示そうと俺も上を向いた

「ん？……………」

へ……………」

俺が示した先には生物とは言い難い形をしていた。

ただの肉片の塊、バイオ ザードに出てきそうな生き物？がいた。

それが天井にへばりついていて、それが奇声を上げて襲いかかる。

「おわつとー!!」

バックステップで距離をとって肉片の襲撃をかわす

そして迎え撃つため腰から木刀を取ろうとしたのだが

(しまった、木刀がない!!)



またバックステップでかわした俺は、天つ風なしで戦うことになる。しかし天つ風がないと言っても、死闘を何度も繰り広げて来ただけに、飛びかかってくるだけの相手の攻撃など簡単にかわせる。

「ウインドエッジ!!」

放ったウインドエッジは肉片の腹部とふくらはぎに直撃した。

しかし、したはしたものの、肉片の塊は止まることなく、進み続ける

「こいつ!!」

秀、この肉片の塊、生きてないよ

「何!?!それなら話は早えな、風刃!!」

俺が放った風刃は、肉片の塊を真っ二つに切り裂いた

「ウオオオオオオ」

「うし、余裕だな」

上半身と下半身と肉片がボタボタと落ちる。

さすがに踏みたくはないと思い、肉片を飛び越えて再び歩き始めた時だった。

「ウオオ……………オオオ」

秀、こいつ……………

「さ、再生してやがる……………」

真っ二つになった上半身と下半身、肉片自らが動き、そして元通りになった。

「悪いが、ゾンビにつき合ってる暇はねえんだよ、韋駄天!！」

一気にトップスピードに乗ってあっという間にゾンビから離れて行ったが、行き着いた場所は行き止まりという最悪の場所だった。

「ウオオオオ……………」

「仕方ねえ、風刃で切り裂いてから逆方向に逃げるか」

風刃で構えて、ゾンビを待つ、曲がり角を曲がってきたら撃ち込んで逆方向に逃げる

何度も自分の頭の中で作戦を回す

そうしていると曲がり角から予想通りゾンビがやって来た………お仲間をたんまりと引き連れて

「おいおい、冗談だろ」

どじりするの秀……

「まとめて吹き飛ばす!!」

幸いにもここは通路のため、通路の幅の風を起こせば避けることは不可能だ

「吹き飛ばへ!!」

俺が起こした風によりゾンビどもは後方に吹き飛んだ

だが、吹き飛んだだけであって、すぐに立ち上がってこちらに向かってくる。

何かしらで致死ダメージを与えなきゃ駄目みたいだね

「あまりエグいのは見なくなかったんだが、背にはらは変えられねえか」

パンと両手を頭の上で重ね合わせる

魔力を両腕に集中させ、合わせた両腕を斜めに振り抜いた。

「断空刃!!」

振り抜いた両手から巨大な風刃を出し、通路にたむろっていたゾンビ達を全て真っ二つに切り裂いた。

「よし、じゃあ再生する前に行くか……韋駄天!!」

トップスピードでゾンビの山を越えた時

「っ！……！」

ゾンビ死体の山の中の最後尾から手が伸び、俺の足を掴んだのだ

そしてあまりにも急なことに死体の山に引きづりこまれる

そして体全身に気持ち悪い感触に包みこまれる

「くっそー、風よ……！」

風を発生させ、回りの気持ち悪い感触を吹き飛ばさせる。

ゾンビを吹き飛ばすのだが、吹き飛ばしきれなかったゾンビにまわりつかれ、足を噛みつかれる

「ぐっ、この野郎ウインド……！」

もはや、やり方など関係ない、ウインドエッジでゾンビの脳天をぶ

ち抜こうとした。

しかし、振りかぶった腕を他のゾンビに取られ、ウインドエッジを放つことができない

風で吹き飛ばそうとしても、がちり掴んだまま離そうとしない

まさになす術なしの状態、そしてすでに両肩をがちりと掴み、ゾンビが大きな口を開けている

全力で抵抗するものの、全く動かない

(くそ、ここまでか……)

覚悟を決めて目を閉じた瞬間、一陣の風が過ぎ去った。

そして過ぎ去ったと同時に、俺の両肩を掴んでいた感触がなくなる。

さらには俺を掴んでいた体の至る所の感触もゾンビの悲鳴と共になくなっていた

「……………」

おそろおそろ目を開けると、俺を掴んでいたゾンビはどこに行った

のか、分からないくらい消えてしまっていて

かわりに目の前にいるのは青色の髪の毛の長い後ろ髪を後頭部らへんで櫛で折り畳んでいる少女だった。

そしてその少女の手には扇子が握られていた。

「き、君は……………」

「ちっ、まだ生きていたか、風よ敵を貫け!!」

「マジかよ!?!風よ!?!」

目には目を、歯には歯を復讐法通り、風を風で打ち消す。

「そんな!?!私の風が打ち消された、あんた何者よ!?!」

「人間さ、少なくともゾンビではないさ」

「ゾンビ?ああロストのことね」

警戒レベルを下げたのか、構えていた扇子を閉じると、扇子がテレビの電源を切るように消える

「私の名前はソフィア・ハーツ、ソフィアって呼んで、あなたは？」

「俺は浅村 秀、呼び名なんざ何でも構わないよ、んでこっちが俺の相棒のシルフィー」

よろしく

「え、え！？ゆ、幽霊？」

ふわふわと浮いているのを見たら誰もがそう思っただろう

理解はしづらいと思うが説明をいれるか

「ああー、そのだな……………シルフィーは精霊でな色々サポートしてもらってたんだ」

「精霊？」



ソフィアの顔が険しくなる

「まあ細かい所はいいじゃねえか、とりあえず助けてくれてありがとう」

「どういたしまして、私は今から私の街に戻るけど、ついてくるわよね」

「お言葉に甘えさせていただくよ、拒否権はないみたいだし」

俺とソフィアは通路を進む

「そっぴゃさ、ロストだっけ？あれは何なの？」

「あれねー正直まだ分かってないのよ」

「分かってない？」

「ロストが出現する場所も、目的も分からないことだらけなのよ」

両手を広げて言うソフィア

本当にロストのことを知らないのだろうか？

疑問点は多く残っているが深くはつっこまないようにする

しかし、ロストの疑問点はつっこまないが、別の点にはつっこむ

「ここは一体何処何だ？」

「あんた？ここが何処だがしらないで来たの？」

ソフィアがやったように両手を広げ、肩をすくめてみせる

これでやり過ぎせるとは思っていないが、知らないものは知らない

「あんたってほんと不思議よね、まあ私の街に着くまである程度説明してあげるわ」

「おおサンキューな」



## 二話 ギルド

ロストどもを片付けた後、俺とソフィアはてくてくと歩きながら俺の質問に答えてくれる。

「まずここが何処かを説明するかより、私がここに来た理由を説明するわ……………」

ソフィアの説明を簡単に説明はこうだった。

ソフィアの街では、ギルドというのが存在するらしい

ギルドは数多く存在するらしく、その姿もそれぞれ違うとのこと

大抵のギルドははば多くのジャンルの仕事をしているが、特定のジャンルばかりの仕事をするギルドも存在する

例えば、ロスト討伐を専門のギルドや情報を専門としたギルドに護衛などを専門にしたギルドなどさまざまだ

ソフィアはその数あるギルドの一つに所属している。

そしてソフィアが所属しているギルドが俺がいた建物からロストの討伐依頼があつて今にいたる

俺がいた場所はロストを研究する場所で研究していたロストが暴れ、要請をしたということだ。

そしてラボから出た俺とソフィアが歩き、ソフィアの街に着いた。

ネシア

「ここが私の街のネシアよ」

一見旅番組などで、見たことがあるヨーロッパ風の街だった。

家が建ち並ぶ中、所々にはソフィアが言うギルドというものが建っている。

「この街にはいくつぐらいギルドがあるんだ？」

「うーん、だいたい30〜40ね」

「へえ、そんなにあるのか」

街の広さはレーガルの半分といったところか、そこにギルドとやらが、30〜40ならおおい方だろう

まあギルドがどんなもんかは分からないけど

などと会話をしている内に俺とソフィアはギルドに着いた

「ここが私のギルドよ」

左腕をバーンと広げて、自分のギルドを紹介した

ごく普通の家を

「家じゃん……………」

「取り合えず入って、飲み物ぐらいは出せるから」

ドアを開けて、違うのは靴を脱がないところ

うーん、靴のままとはちょっと気がひけるが、郷に入って郷に従え  
と言うし、仕方ないかな

ソフィアに付いて行き、俺が入ったのはリビングのような部屋

中央には大きなテーブル、壁づたいにはいくつもの棚があり、色々な書物やファイルが並べられている

広さでは12畳程ぐらいの広さといったところか

「さあ、座って」

「んじゃ、遠慮なく」

椅子を引いて座り、出された水を一口飲む

「さて、あんたを連れてきたはいいものどうするかな？ギルドの間は今出てるし……」

ん？何か今引つかかる言葉が……

「ああああー!!」

「な、何よ急に、びっくりするじゃない」

「ソフィア、俺みたいな、まるでこの世界に初めて来ました的な雰囲気かぶんぶんな人知らないか？全員で五人いるんだけど……」

五人、一人一人の特徴を言おうとするが、どうもうまく言えない

髪型までは言えるが、俺以外の五人がどういう格好をしていたんか知らない

結果……………

「全っ然わかんない」

「だよなあ」

頭と同時に、肩を落とす

仲間を忘れていたことと、仲間の手がかりを失って少し気を落とす。

「ただいまあ」

「誰か帰ってきたみただな」

「ああ、姉さんよ、ちなみに私のギルドのエースよ」

入って来たソフィアの姉はなんともまあ、美人だった。

きれいな金髪のロングヘア、どこぞのモデルですかと聞きたくなるような人だった。

「あらお客さん？」



「依頼先で拾ってきたのよ」

「おいこら、俺は捨て猫じゃねえぞ」

「そうよソフィア、彼にはちゃんと名前があるのよ………ねえ、浅村 秀君」

「「え!?!」」

「何で………こいつの名前知ってんの姉さん!?!」

驚き慌てふためく俺とソフィアに対し、ソフィアの姉はふふふと笑っていた。

「これで依頼完了ね」

ソフィアの姉の後ろから出てきたのは、俺がまさしく探していた五人だった。

「みんな!?!」

「浅村君（秀、浅うち）！！」

### 三話 再会はつかの間

無事に仲間とめぐり会うことができ、再開に感動したいところだが、俺はソフィアとソフィア姉に事情を聞かれていた。

聞かれる内容は何故あの場所いたかということ

飛ばされた場所があそこだったから、理由もへったくれもないのだ

しかし、そんなことで納得してくれるわけはなく、結局はリフレイン

「ねえ、もうちょっとまじな答えはないの」

「悪いな、これ以上の答えを期待してもらっても困るんだけど」

「他の5人は同じ場所で、あんなだけがあんなピンポイントな場所とは、偶然って怖いわね」

「そつだな、日頃の行動をあらためなきゃな」

「くっ、あんたね……」

こういふバトルでは誰にも負ける気がしない

「もう、ささっと理由を話なさいよ」

「即興で作った理由でいいなら話してやるよ」

「あんだねえ……………人をからかうのもいい加減に！」

左手に風を巻き起こした扇子を握り、バツと広げ、今にも振り抜こうとしていたが

ジリリリリリリ……

「っ……！」

壁に取り付けてある警報器のような物がけたたましく鳴り響く

慌てて扇子をしまったソフィアは、受話器のような物を取る

「……………了解しました」

がちやりと受話器を置く

「姉さん、ロスト討伐の依頼だよ、数的に私一人で大丈夫よ」

「あらそう、なら行ってらっしゃい」

「じゃあ、後よろしく、いってきます」

風の如く出ていった。

まったく騒がしい奴だ。

「さて、再開といきたいところだけど、気になってしょうがない顔してるわね」

またふふふと、綺麗な笑顔を向ける

「気になってるのはソフィア一人で大丈夫かどうかです」

「ふふふふ、なら……………」

???

ネシアから北東に移動したところにある平原に来ていた。

平原にはすでにロストの大軍がうろつろしている。

数で言ったら100位ほどか

これほどのロストをソフィア一人で倒すのだ

他に誰もいない、大軍のロストとソフィアのみ

「さあて、お仕事お仕事」  
扇子綺麗にバツと広げて前方にいるロストを吹き飛ばし、10体程  
消し去る

「これなら余裕余裕」

ばんばんと消し去って行って、残り50体程の時、

「っ！！！」

地面から手が伸び、ソフィアの足をガツチリと掴む

「離せ！！！！」

扇子をビュンビュン振るが、足首をガツチリと押さえた手はなかなか離れないでいる。

( どうして？こんな行動、いままでなかったのに )

じたばたと抵抗するが、手は離れず、体力だけが減っていく

さらに抵抗することに集中してか、前から来るロストの大軍に気づいておらず、ロストとの距離は1mまで縮まっていた。

「くっそ、消える！！！」

扇子を振り、風をロストに吹き付けるが消したのは5体程

しかも後方にいたロストがジャンプし、ソフィアに襲いかかる

「ちっ、邪魔よ！！！」

扇子を上空のロストに振り抜こうとしたソフィアだが

「ウオオオオ」

「っ!」

いつのまにか後ろをとっていたロストに腕を掴まれ扇子を振り抜くことができなくなっていた。

(しまっ……)

「ウインドエッジ!」

聞き覚えのある声と耳に入り、鋭い風が通り過ぎ、ロストを消し去った。

「あなたは……」

「よお、前とは逆の立場だな」





## 四話 増援

ゆっくりとソフィアに近づき、足元を掴んでいたロストの手を蹴り飛ばす。

「大丈夫かソフィア？」

「あ！？うん大丈夫……」

「うし、じゃあ見せてやるよソフィア、俺の相棒の力を」

ソフィア姉から借りた木刀を腰から抜き、天つ風に変える

「木刀が変わった……」

木刀が刀に代わったことに驚きを隠しきれない

「数はざっと見て40位か、なら30秒もいらねえな」

目指せ10秒

「無茶言つなよ……………韋駄天!!」

超スピードでロストに突っ込み、ロストを消し去っていく。

バツバツと切り捨て、あっという間に、ロストを殲滅させた。

「……………」

「シルフィータイムは？」

惜しいね、14秒

「まあ、タイムは残念だったが、これで依頼完了だなソフィア」

「え!?! ああ、うん」

心ここにあらず状態の返事をするソフィア

目の前で起こったことに、まだ整理できないのかソフィアはまだぼーっとしている。

無理もない、今の韋駄天のスピードは、常人では見えないスピードだ。

恐らくソフィアの目には、俺がいきなり消えて、ロストがバツサバツサと消えていくのが見えたのだろう

「歩けるか？無理だったらおぶって行ってやるぜ」

「な！？ば、馬鹿にしないでよ！！」

「ははは、ソフィアはそうでなくっちゃな」

「あ／＼／」

手を差しのべてよっ／＼とソフィアを立ちか上がらせる。

「そっぴや何であんたがここにいるのよ」

やっと平常心を取り戻したソフィアが言う

「んなもん、ソフィアを助けに来たに決まってるだろ」

「別に助けに来て何か言っていないわよ」

「死にそうになった奴がそれを言うかね」

「ぐっ………笑いたければ笑いなさいよ」

助けられたという行為が悔しいのか、俺に助けられたのが悔しいのか、ソフィアは酷くマイナス思考だ

まあ間違いなく後者だろうけど

「少しは素直になれよ、命はそう簡単に捨てていいものじゃないぜ」

「分かってるわよ、私今から考え事するから話しかけないでね」

「はいはい」

先に行くソフィアの後をゆっくりと付いていき、平原を抜ける

ネシア

ネシアに戻った俺とソフィアは、ギルドに戻る

「ただいま」

「あら、早かったのね、少しビックリしたわ」

全てを見通した顔をしながら言う

まあ、そう仕向けた張本人だから仕方がないのだけど

「依頼の報告は私がしておくから、ソフィアは休んできなさい」

「うん、ありがとう姉さん」

どこか疲れた表情を浮かべているソフィアは部屋から出ていった。

ロストの討伐で、やられそうになったのが、そうとうきいたのだろ

うか

「それにしても、浅村さんって何者かしら、正直言ってもこんなに早く終わると思っただけじゃなかったわ」

「スピードが俺の能力の取り柄ですから」

「ふふふ、面白い子ね、どう依頼の報告についてこないかしら？ギルドの仕事を引き受けから達成まで見届けてみたら」

そう聞かれ、断る理由もない俺達は首を縦に振る

「決まりね、じゃあ行きましょう」

椅子から立ち上がった俺達は家を出る

鍵を掛け、ソフィアの姉についていく

歩く途中、いろいろな方向からの視線を感じるが、その視線がソフィアの姉に向けられてるものだとすぐに分かった。

どこの世界も美人は目を引くものなんだな

そう思うと、何だか一緒に歩くのが恥ずかしいな、何か話題を振る

とするか

「そう言えば、ロストの倒し方を教えてくれてありがとうございませ  
す」

「気にしないでいいのよ、この世界で生きるには必要な知識だから  
ね」

ソフィアの姉から教えてもらったロストの討伐方法

ロストにはコアという物が存在していて、ロストはそれがなければ  
形を維持することが出来ないのだ。

つまりはそれを破壊すれば、ロストは形を維持出来なくなって消滅  
するのだ

だがしかし、コアはロスト一体一体違う箇所にあって面倒なのだ

しかしそんな面倒なことにもちゃんとある

それが目利きという技だ

目に魔力を集中させてロストをみることによって、ロスト内に存在  
するコアがどの位置にあるかを判断することができる。

後は見つけ出したコアを破壊するだけのこと



倒し方さえ知ってしまえば、こつちのもんである

それをソフィアの所に向かう前に教えてもらっていたからこそ、あの時ロストを難なく倒せたというわけだ。

「さあて、着いたわよ」

着いたのはドーム型の建物で、東京ドームのような建物だった。

建物内に入り、とある一室に入ると、ソフィアの姉から一人一枚の紙が渡される

「何ですかこれ？」

「貴方達、この建物に入るのが始めてでしょ、この建物に入るにはパスを持っているか、パスを持っている人が同伴しなきゃ入れないの、だからそのパスを作る為の書類よ」

ふむふむ、確かにパスの様なものを見せていたな

手渡されたペンで、何の疑いもなく、俺達は記入し始める。

この紙がまったく違う紙だということも知らずに

「出来ましたよ」

「はい、ありがとうございます」

俺達から紙を受け取ったソフィア姉は受付の様な場所に出した  
出された紙を受け取った女性は俺達を見ながら

「では今からそちらの方々は『飛脚の翼』の一員とのことで」

「はい、ありがとうございます」

「は？（x6）」

目が点となる俺達6人

何事もなかったかのように俺達を見るソフィア姉

え！？何かみたいな顔でこっちを見ている。

「いやいや、何言ってるんですか？」

「まあまあ、理由は戻ってから話すから」

結局俺達は6人は何も分からない状態で帰ることになった。

## 五話 加入

ギルド（家）に戻った俺達は、さっそくギルドに加入した経緯を聞く  
この世界のいろはを知らない俺達は分からないことだらけなのだ

「まずギルドに関して説明したいんだけどわかるかしら」

「ギルドに関しちゃ、ソフィアから大体は聞いているから大丈夫、聞きたいのは何で俺達がギルドに入ってるってこと」

「あらそう、ソフィアもいい仕事するわね、まあそれなら話は早い  
わ、私達のギルド、私とソフィアを合わせても合計5人しかない  
の」

表情一つ変えずにぺらぺらとしゃべるソフィア姉に片手を向け、制  
止させる

もう何となくだか分かってしまったからだ

まさにKK部状態、だからこそ今の状態が痛いほど分かる

仲間が少ないというのはなかなかのものだ

だからこそ俺は……

「いいですよ、ロストでもなんでもやっつけてやりますよ」

「あら、たくましくていいわね、何はともあれこれからよろしくね」

「はい……」

こうして俺達は今日付けで飛脚の翼の一員となった。

翌日

翌朝、朝食をとるソフィア姉妹と俺達六人

もくもくと朝食を食べる中、ソフィアは一人、俺をイライラした表情で睨んでいた。

（何なんだ？さっきからドスがきいた視線を感じるな）

パンをちぎる手がどうも猛々しい

「ソフィア、朝からそんな表情してちゃだめよ」

すました顔でパンをもぐもぐと食べながらソフィアに言う

「そんなことより姉さん、何でこの六人がギルドに加入してるのよ」

「何でってそんなのあなた自身が一番分かってるんじゃないの」

「そ、それは……………」

俺に助けられた時のことを思い出したのか、ソフィアは俺を見る

そしてパンをちぎる力と睨みがさらに強くなる

やはり相当悔しかったのだろう

これは早めに退散した方が得策かな

そう思った俺は一口大としては少し大きめのパンを放り込み、ごちそうさまと両手を合わせた

テーブルに置かれていた自分が食べた分の皿を重ね、台所に運ぶ

そして壁についている大きめの穴のような所にぶちこむ

ちなみに自動食器洗い機

その自動販売機にぶちこんだ俺は玄関に通じるドアに向かう

「浅村君、どっか出かけるんですか？」

ちょうど朝食を食べ終えた西脇が尋ねる

「散策がてらの散歩、この世界を見てみたいからね」

「じゃあ、私も行きます、私も見てみたいですから」

俺と同じように食器を自動食器洗浄機に食器を入れる

「行きましようか」

ドアの前で待つ俺に来た西脇はいつもの可愛らしい笑顔をする

ドアノブを捻り、出ようとした時

ジリリリリリ…！

「はい、飛脚の翼です」

電話を取るソフィア

「はい、そうですが……ええええええ！あ、はい、すぐに向かいます」

いきなり叫んだと思えば、慌ただしく受話器を置くソフィア

「姉さん、アスタが広場で一悶着起こしてるって！」

「あらあら、それは大変ね」

口ではそう言うものの、表情は眉一つ動かさずパンをほうばっていた

その表情からは全くと言っていいほど大変さが感じとれなかった。

「もう、私が行ってくる」

まだ半分ほどしか食べていない朝食をテーブルに、置いたまま立ち上がる

「ソフィア、朝食くらい食べてから行きなさい」



「こんな時に落ち着いて朝食なんて食べてられないわよ」

「まあ落ち着きなさい、ぴったしの人材がいるじゃないの」

顎をくいと俺の方向にやる

「確かに何でもやると言いましたけど……」

「そんな秀さんに問題です、男に二言は？」

「……………ないです」

## 六話 散策がてらの

外に出た俺と西脇はネシアの街を歩く

街並みはレーガルに似ていて、建っている建物はヨーロッパを思わせる感じ

歩いている道も、レンガみたいな石が敷き詰められてきた道

道沿いの店では果物や食料品が露店のような感じで売り出されていて、レーガルにいたころを思い出させる。

唯一レーガルと違うと言ったら、ギルドの存在だ

レーガルにもギルドみたいなものは存在はしたが、所詮はギルドもどきで、仕事内容もしれていた

まあなんやかんやとあるが、大体はレーガルに似ているネシアを歩く。

「広場ってどこかな？」

街沿いに歩く西脇にふと質問する

「えーと……あっちみたいですね」

西脇が指さした方向には人だかりができていた。

「なるほど、あれほど分かりやすいのはないわな」

人だかりにむけて歩き、俺と西脇は人混みをかくようにしてして進んで行く

「すみません、飛脚の翼です、通して下さい」

やっとのことで、人混みを脱出した俺と西脇

脱出した先にはかなりガタイのいい大男と、深みのある青色した髪をした男で

その二人が広場で互いに胸ぐらをつかみ合っている、なんともシュールな光景

「西脇、どっちがアスタさんかわかる？」

「うーん……わかりません」

「まあいいや止めてから聞くか」

取っ組み合いになってる二人の間まで近づいた俺は、交差している

互いの腕を解くようにしながら間に入る

「ストップ！！ストップ！！こんなところでケンカすんなよお二人さん」

俺の言葉に先に反応したのはガタイのいい大男

「部外者はすつこんでやがれ！！」

まあそうきますわな

「俺は飛脚の翼だ、部外者じゃないと思っぜ」

「嘘吐け、お前みたいな奴ギルドで見たことないぞ！！」

と反応したのは青髪の男、つまりはこっちがアスタか

そのアスタに昨日ギルドに入ったことと、止めに来たことを言おうとしたのだが

「仲間を呼ぶとはさすがは飛脚の翼だな、やることがすごい」

大男の発言にはかなりカチンときてしまった。

「おいおい、自分が弱いからって伏線はらなくていいぜ、弱いのに  
変わりはないんだからな」

「今何て言った……」

アスタの胸ぐらをつかんでいた手を離す

「短気だな プロテインのとりすぎでカルシウム足りてねえんじや  
ねえの」

「このヤロオオオ!!」

完全に頭に血のぼった男は拳をふりおろす

「よつと」

体を体を軽く反らし、大男の攻撃を簡単にかわす

そしてかわしたと同時に男の脇腹に蹴りを入れる。

「てめえ……殺す！」

大男は腰にぶら下げていた、金属製っぽい手袋を両手にはめ、再び拳をふりおろす

「何度やったって無駄だぜ」

バックステップで大男の拳をかわし、同時に距離をとる

大男はかわされたにも関わらず拳はそのまま地面に叩きつけた。

ドオオオン！！

「なっ！？」

大男が叩きつけた地面はべっこりと凹んでいた。

まるで巨大な鉄球が落ちたような感じ

「マジかよ……」

「驚いたか、これが俺の魔道具、クラッシュクロウだ」

(魔道具?)

「もう謝ったって許さねえからな!!」

「争い事は極力避けたいんだけどな……いた仕方がないか」

うん

いつも通り木刀を天つ風に変える

そして向かってくる大男との勝負を終わらせた

一瞬で大男の背後に移動し、頭を掴み、レンガ敷き詰められた地面に叩きつけた

「がはっ!!」

「勝負あり……だぜ」

上に乗った状態から、俺は降りる。

「まったく、血の気が多いのもどろろかと思つぜ」

大男に対し、ニヤツとした顔を向ける。

「くうああああ!!」

結構な感じで行ったにも関わらず、一蹴されてしまったせいかわけの分からないテンションになってしまった大男は立ち上がり、またもや向かってくる。

「こりゃ少し眠ってもらつた方がいいな」

鞘から刀を抜き、肩に乗せる

走ってくる男に対し、また背後に回り、空破撃をうち込もうとする

「空破撃!!」

背中に空破撃を直撃をする瞬間



ヒュオ!!

「っ!!」

俺の目の前に何かを通り過ぎ、空破撃が止まってしまった。

瞬時にバックステップで距離をとり、飛んできた何かの方向を見る

そこには、澄んだ黒色の長髪の人女性が立っていた。

左腕にボウガンを装着し、その腕をこっちに向けていた。

「ギルド間の抗争はダメって言うてるよね」

## 七話 マスター

「……………」

広場に沈黙が流れる中、一番先に口を開いたのは、大男だった。

「マ、マスター……………」

さっきの威勢はどこにいったのか、大男の声は震え、その震えが恐怖からきているものなのは確かだった。

「こーら、ギルド間の抗争はダメっていつも言ってるでしょ」

「し、しかし……………」

「ダメって言ってるよね」

続きを言おうとしていた大男だが、マスターと呼ばれた女性の一言で黙ってしまった。

タツパではあきらかに上の大男

それが黙るほどの人なのだろう

「どうも、お騒がせしました」

丁寧はペコリとこちらに頭を下げる

あまりの丁寧さに、さっきまでの熱が冷めてしまう

「広場の修理代は私たちが出しますので、今日はこれでご勘弁願います」

「別に、構わないけど」

「そうですね、ありがとうございます、では失礼します」

マスターと呼ばれた女性は再び丁寧に頭を下げると、大男を連れて広場をあとにした。

「さてと、俺達も引き上げるとするか」

物質憑依を解き天つ風を木刀に戻し、腰にさしこむ

そして西脇と一緒に、突っ立てるアスタに

「アスタさん、飛脚の翼の新メンバーの浅村　秀です、こっちの子が」

西脇　茜ですと軽く自己紹介をする

「こりゃどうもご丁寧に、俺はガルム　アスタ、助かったよ、どうしても守りたいものがあつたからね」

そう言って担いでいるリュックを二回ほど軽く叩く

「守りたいもの？」

首を傾げる俺と西脇

「ここじゃなんだし、ギルドに戻るうか」

そう言って、アスタを含めた3人で、野次馬達をかき分けつつも、大穴が空いた広場をあとにした

ギルド（飛脚の翼）

「「ただいま」」

少し疲れた感じで俺と西脇は戻った。

戻るとすでに全員が朝食を済ませ、部屋にいたのはソフィアと新藤の二人だった

「あ、お帰り、ずいぶんと時間がかかったね」

「なんつーか、一悶着を解決しようとしたら俺自身も一悶着起こしちゃってたな」

俺の話を聞いていたソフィアは半ば呆れ顔になっている。

「あんたって意外にトラブルメーカー？」

「あながち間違っていないかもな」

冗談をまじえながらも、ソフィアにアスタを連れてきたことを報告  
ちようどアスタが部屋に入ってきて、担いでいたリュックをテーブ  
ルにドサツと置いて、ため息を吐きながら椅子に座る。

「任務お疲れアスタ」

アスタの前に水を置き、任務完了を労う

「サンキューソフィア」

「き、気にしないで／＼」

につこりと微笑むアスタに、ソフィアは顔を赤らめ、その顔がアス  
タに見せないかのように、部屋を出ていく

そしてその光景を見ていた俺と西脇と新藤は、もちろん察していた。

「アスタさん、さっき言ってた守りたい物って何なんですか？」

「そうそう、ロスト討伐の依頼先で偶然見つけたんだ」

リュックの中をがさごそと探し、木箱のような物を取り出した。

サイズのにはテニスボール一個分ほど

「その木箱の所有を争っていたんですか？」

「厳密言えば、この中身なんだけどな、まあ連中が欲しがるのも仕方がないけどな」

そう言つて、木箱の蓋を慎重かつ丁寧に開け、中身をそつと取り出し、アスタは自分の手の平にのせて、俺達に見せてくれた。

「……………凄い」

「……………綺麗」

アスタの手の平にあるのは、とても澄んだ色をしたクリスタルだった

サイズは入っていた木箱に似合わないほど小さかったが、宝石類に何の興味もない素人の俺でも、クリスタルから目が離れなかった。

それほどまで、他者を引き込む代物であることに違いなかった。

「あのこれは……………」

「聞いて驚け、人の手が一切加えられてない、天然のコアだ!!」



## 八話 コア

「コア？」

アスタの口から出た単語に俺達3人とも首を傾げる

「お前らもしかしてコアを知らないと言っても言うのか？」

アスタは冗談で言ったつもりなんだろうが、こちとらまったく冗談ではなく、本気である

「えっ……マジで？」

まるでツチノコを見たような目でこっちを見る

「その子達が言ってるのは本当よ、ガルムさん」

「アシュリーさん」

「へー、アシュリーって名前なんすね」

今さらながらソフィアの姉の名前を知る

「ガルムさん、それが手に入ったコアかしら？」

「ああ、一点の曇りもない天然のコアだ」

「すばらしい……」

俺達と同じようにアシュリーもアスタの出したコアに見とれていた。

そして、何も知らない俺達は置いてきぼり

「あのーそろそろ説明の方を………」

「あら、ごめんなさい、ついコアに見とれていたわ、じゃあコアについて説明するわね、昼御飯もかねてね」

話についていけない俺達に、アシュリーは昼御飯を食べながら丁寧にコアを説明してくれた。

## 九話 コア2

コア それはこの世界で生きる人々にとって必用不可欠な物  
魔力を力学エネルギーに変える物質

コアにそのような力が備わっていると分かったのは200年前らしく、そのせいで各国で戦争、各ギルドで紛争があった。

そんなコアには、大きく分けて二つある

近代化によって人工的に作られたコアと、アスタが見つけたような天然のコア

近代化によって人工的に作られたコアのお陰で、戦争等は激減したが、なくなったというわけではない

その裏にあるのが天然コアの存在だ

人工的に作られたコアと天然コアでは天と地の差がある力の差で言っても1：100にもなる

さらには天然コアにはD、C、B、A、Sとランクがあつて1：100はランクがDの場合である

そんなこんなな為か、天然コアは高値で取り引きされ、ランクがSにもなれば、街の四分の一が買える値段になるらしい

まあSランクの天然コアなどここ100年近く見つかってないらし

く、天然コアを見つけても良くてこらしい

生活に欠かせないコアにはもう一つ重要なことがある

それが魔道具

コアが変化して特有の武器に変わることに

希なこと、人口の10%にもおよばない

つまりはギルドの中でも一握りしかできないでいる

その理由が適合だ

適合とはコアに人の魔力を加え、その人と魔力がコアの何らかに作用し魔道具化することコアその物が魔道具へと変化すること

何故適合という現象が起こるのか、適合が起こる魔力とは等々、まだ不明な点が多い。

だからこそか、コアは研究者の間でも高く取り引きされている

ソフィアの扇子や広場で戦った大男のクラッシュクロウも魔道具だ

ちなみに大男とアスタが争った理由は大男がコアを横取りしようとしていたらしく、ああなったとのことだ。

とまあコアのことざっと説明すれば、こんなところ

まだまだ解明されてない、謎が多いコア

しかし

この世界の人々にコアが、あんなことになるなんて、まだ俺達、いやこの世界の人達は知るよしもなかった………

## 十話 再度の散歩

コアの一通りの説明が終わる頃には、すでに昼食を食べ終わっていた

「なるほど、そりゃまあ争いにもなるわ」

食器を重ねて運び、自動食器洗浄機にぶちこむ

「さて、またで悪いけど、外ぶらついてきますわ、さっきあまりぶらつかなかつたし」

そう言って、俺は一人で外に出た。

どこにどう用事があるわけでもなく、ネシアを見渡しながら歩く。

「どこ見ても、ギルドばっかだな」

ほかにはないものかとキョロキョロとネシアを見渡す中、目を引く建物があった。

「城か………行ってみっか」

ただの興味本意だが、レーガル城を思い出した俺はかつかつと城らしき建物に歩いていった。

城に向かって歩くこと10分、俺は城前の城門まで来ていた。

大きさはほぼレーガル城と同じくらい

城門には目を光らせる門番のような人がいて、容易には入れなさそうだ

しかたなく引き返そうとした俺が後ろを振り向くと、ちょうど見知った顔と会う。

「あなたは、確か……マスターさんだったけ？」

「あら、そういうあなたは飛脚の翼の新メンバーでしたね、先ほどは本当に失礼しました」

お互い立ち止まり、マスターと呼んだ女性の方は丁寧にお辞儀をする

そして、それを追うように俺は慌ててお辞儀をする

「それで、どうしたんですか城に何かご用ですか？」

初めてなんで街探索です、と答えたいところだが、めんどくさくなるのが目に見えている

「悔しながら暇でね、ぼーっと散歩してたらここに着いてたんです、そっちこそ何か城に？」

と適当に答え、すぐに話題をあちらにむかわせる

「私は、ここの王室に依頼として呼ばれたのです」

「へー、凄いですね、王室の話はまた会った時に聞かせてください、じゃあこちらへんで」

会話を打ち切っておいたましようとした俺だったのだが

「まあまあ、せっかいですから話しませんか？」

「へー？いや、俺は……そういや、に、任務があるんだったー!!」

「ついさっき、暇って言ったばかりですよね？」



「あ、いや、その………忘れてたな〜あははは」

「そんなに、私とお話するのが嫌なんですか………うっ、うっ………」

いきなり涙を流し始めるマスター、そんな光景に周りの目を集める

「す、ストップ！！お話したいです、ちょうどしたいなと思ってたんです！！！」

慌てふためく俺を見たマスターは、ピタリと泣き止み

「そうですか、じゃあ行きましょうか」

とケロリとした感じで俺の手を引っ張っていく

「だ、騙された〜！！！」

そして結局城内に入った俺は、引っ張られるままに、城内にある力

フエっばい所に向かい合わせに座る

城の外側に位置した場所で外が見れる形になっていて、全面ガラス張りになっている

ウェイトレスに運ばれてきた水を一口のみ

「んで、何話すんですか？わざわざこんな所に連れてきたんだ、世間話じゃあないでしょ、俺の予想じゃ……………コアでしょ？」

「ふふ、やっぱりあなた凄いですね、あなたの予想通り、私はあなた達飛脚の翼が手に入れたコアについて話してもらおうかなって思ってたんです、でも……………」

俺と同じように水を一口飲んだマスターは続ける

「コアが何ランクかすら解ってなさそうですね」

「へー、よく」存じで

「普通に考えたら、コアのランクがこんなに早くわかるはずがないからね」

「なるほど、じゃあ何故俺を？」

「え？暇だからですけど……………」

悪びれることもなくケロリと言う

「帰る」

椅子からガタツと立ち上がったが、マスターはガツチリと腕を掴んで離さない

「じよ、冗談ですよ、え、え〜と……………そうだ私の任務について話そうと思ってたんですよ」

「あきらかに今思いついたように見えたのは俺だけですか？」

「と、とんでもない、まあ聞いてくださいよ」

疑いの眼でマスターを見つつも、マスターは自分の任務とやらについて話し始めた。

「へー王家の娘さんの警護ですか……」

「任務を受けたのはちょうど一週間前で、今日が打ち合わせをするからとかなんやでしたね」

「王家の娘さんが何者かに狙われる……嫌なご時世になったもんですな」

「ほんとそうですね……さて、そろそろ時間だから行きますね」

運ばれていた残りすくないコーヒーを飲みほして立ち上がる

そして丁寧におじきをした時

「しゃがめ！！シルフィー！！」

天つ風で横一線にマスターの寸分上を切り払う

「ウオオオオ……」

俺が切り裂いたのはどこから現れたのか？ロストだった。

ロストはそれだけではなく、俺達がいたカフェ中に現れる。

現れたロストはカフェにいた人達をめがけ襲いかかる

「きゃあー！！」

「韋駄天！！」

目の前のテーブルを乗り越え、人に襲いかかるロストを切り裂く。

消してもカフェ中にうじゃうじゃいるロスト、障害物と我先にと逃げる人が邪魔で韋駄天を使ってもロストがなかなか減ることはない  
自分がこうしてちんたらしている間にも、人が襲われているのだ

「くっそ！このままじゃ」

そう言って、唇を強く噛み締めた瞬間、上に何かが放たれた……そう認識した瞬間その何かが弾けた

ロストめがけて降り注ぎ、あっという間にロストを全滅させた。

「はあく、すつげーな」

天つ風を木刀に戻し腰に差し込んで、ロストを全滅させたマスターに向かつて拍手を送り、周りもつられて拍手を送る

その拍手を受けたマスターは、少し恥ずかしながらもぺこりとおじきをし、顔を上げた時

「きゃあー!!」

「うわあああ!!」

「誰か助け、ぎゃあー」

あらゆる方向から悲鳴が聞こえ、俺とマスターはすぐさま移動する

「何が起こってるんだ？」

「分からない、でも何か異変が起こってるのは確かみたいです」

カフェから出て、城内はカフェとは比べ物にならない数のロスト

で溢れていた。

「わんさかとめんどくせえな」

俺が木刀を天つ風に変えると、マスターが俺の方をちょんちょんと叩く

「すみませんが、ここ任せてもいいですか？」

「ん？いいですけど、どうしたんですか？」

「何かはわかりませんが、胸騒ぎがしますので、私は王家の娘さんの所へ行ってきます」

「なるほど、なら道開けるんで、そこを通って下さい……………吹き飛ばし！」

両手を重ね合わせ、風を放ちロストの大群の中で一本の道を作った。

「行け！」

「すみません、ありがとうございます」

風で開けた道を全力で駆け抜けた後、複雑な構造の城に消えていった。

「さて、お仕事お仕事と 韋駄天!!」

ロストが溢れかえっているが、さっきのカフェみたく障害物がないため、バツバツとロストを切り裂いていき、二分足らずで殲滅させた。

そしてすぐさまロストに襲われた人に駆け寄る

「大丈夫ですか？」

「あ、はい動けます」

「そうですね、なら早く外に出ましょう、何だかよくわかりませんが、城内は危険です」

男性を立ち上がらせ、城から出た時、信じられない光景が目に入っ



「何だよ……これ」

つい30分ほど前までは平凡だったネシア中にロストが溢れていた  
すでにギルドの人達が、ロストと戦っているが、数が数なため、い  
っこうに減る気配がなく、むしろ増えている感じた。

「加勢したいのは山々だが、まずはこの人を安全地帯まで運びたい  
な」

>じゃあ飛脚の翼に戻ろうよ、連にギルドのメンバーがいるはずだ  
から<

シルフィーの意見に賛成した俺は男性を抱え込み、飛脚の翼へと向  
かった。

## 十一話 疾走の果てに

男性を庇いながら飛脚の翼に向かう中、ロストは俺と男性を見逃してはくれず、あらゆる方向から襲いかかってくる

（右足…左わき腹…頭部）

利き目で瞬時にコアの位置を見極め、天つ風で切り裂いたり貫いて破壊する。

最小限の動きでロスト倒し、続々と現れるロストを倒す行動に移していく。

一体いくつのロストを倒したのか分からないくらいロストを倒していき、やっとのことで俺と男性は飛脚の翼に着いた。

「ただいま！！みんな無事か！！」

叩きつけるようにドアを開けた。

「あ、浅村君！！無事だったね」

「石月、皆無事か？」

「うん、ソフィアとアスタはロスト討伐に行ってるけど、北合組は全員いるよ」

「そうか、セシリアさんいるかな？」

「あら、呼んだかしら」

ちょうど階段から降りてくるセシリアさん、本当にタイミングがいい

「良かった、この人の保護お願いします」

連れてきた、男性をセシリアの保護を頼む

「保護って誰を？」

「誰をつてこの人……あれ？」

ついさっきまで一緒にいたはずの男性がそこにはいなくなっていた。

連れてきたはずの男性はそこにはいなかった

「あれ？さっきまで一緒だったのに」

玄関にいるのかなと思った俺は玄関のドアを開けた

「ウオオオオオ……」

（ロストか！！）

腕のなぎ払い攻撃をしゃがんでかわす

そして利き目を使ってコアの位置を調べる

（さあて……どこだ……あれ？）

ロストのコアの位置を調べたのだが、途中俺は気づいてしまった

> どうしたの秀？<

「コイツ……………コアがない！」

> う、嘘でしょ！？<

「それにコイツ……………このロスト……………」

> ロストがどうかしたの？<

「……………俺が保護した人だ！！！」

体は完全にロストなのだが、体には俺が保護した人の服の切れ端が所々に付いていて、保護した男性と俺に判別させた

「もう意味わかんねえよ……………連頼んだ」

「任せろ、凍りつけえ！！！」

俺の声に素早く反応した連はロスト？の下半身を凍り付けにし床と接着し、身動きがとれない状態にした。

そんなロスト？を見て俺達はただ呆然としていた。

ロストならば良かったもののこの場合はそう上手くいかない

「セシリアさん、このロストって、もしかしてなんですけど」

「あなたが保護した人を見てないから分からないけど、そう見ていいわね……」

俺が全部言い終前にセシリアさんは低いトーンで説明してくれた。

「人がロストになることがあるんですか？」

「あるわ、人がロストになることを言うわ、主にロストからの攻撃で怪我した場合にその傷口からあるウイルスが入るの」

あきらかに立ち込めていた空気が一気に冷えるのが分かる

「ルーズウイルス、通称Rウイルスよ」

「Rウイルス……」

「ロストからRウイルス貰うと、たとえ生き残ったとしても次期にロスト化してしまうことがあるの可能性で言うと、1〜2%ほどだけだね」

その1〜2%が今の状況に当てはまるといふことか

しかし、せつかく生き残ったのに、ロスト化してしまうなんて

「利き目を使ったのにコアが見つからないんです、この場合どうすればいいんですか、いやどうすれば助けられますか」

なんとしても救いたい、そう強く願う俺だが、セシリアはそんな俺

に冷たい口調で言った

「殺すしかないわ、その人を救うにわ」

「そ、そんな、何か方法はないんですか？」

「ないわ、ロスト化の何が怖いのか、それは人間だからなのよ、通常のロストとは違いコアがないこと、別に関係はないけど、殺さないかぎりその人は成仏できないわ、それに」

セシリアさんは声のトーンを変えることなく続けながら、棚から紐でくくられた札とダーツの矢を取り出した

「ここで、殺さなきゃ、他の人が傷つくわ」

取り出したダーツの矢に札をくるくると巻き付け、ロストに向け振りかぶる

その時

《助けて……………》

「っ！……！」

セシリアさんが投げた矢はロストに当たることなく、後ろの壁に刺さった。

いや当たることなくではなく、好意的にそらされたのだ……風によつて

「何のつもりかしら浅村君」

「10分、いや五分でいい、俺とセシリアさんの二人っきりにしてくれ、この部屋で頼む」

俺が頭を深々と下げると、セシリアさん以外の皆は部屋を後にした

「浅村君、何をするつもりなのかしら、それと何で矢をそらしたの？」

再び矢に札をくるくると巻き付け始めるセシリアさん

返答次第ではすぐに矢を放つつもりのようだ

「ロスト……いやあの人が助けてって言ったんだよ」

「へ？」

「確かに聞こえたんだよ、助けてくれって、だから俺はそれに応えたいんだ」

「百歩譲って聞こえたとしても、どうやって助けるっていうの」

「それは……」

「あなたには悪いけど、ロスト化したのを倒す方法なんて聞いたことないし、おそらく存在しないわ」

助けるすべがないとの絶望の一言

セシリアさんの言葉は俺を絶望の淵まで突き落とした。

脱力したように、椅子に座る俺を見たセシリアさん

「もういいわね……」

「……………」

俺は何も答えない、いや何も答えられない

俺は何もできることもなくただただ下を向いて目を閉じた

“あきらめないで……………”

「っ！……！……！」

いきなり声が聞こえてくる、いや頭の中に入ってくる感覚だ

“まだ助ける方法はあるよ”



「助ける……方法」

「浅村君、悪いけどもう終わりよ」

セシリアさんは矢をロストに投げた

「風よ!!」

セシリアさんは投げた矢を俺はまたもや風で吹き飛ばした。

「あきらめなさい、助ける方法なんて……」

「あるさ」

セシリアさんが言い終わる前に俺は言った。

俺は椅子から立ち上がり、うつむいていた顔を上げる

さっきまで絶望の淵まで叩き落とされた顔ではなく、にこやかに  
にかんだ顔で

「助ける方法はあるさ」

“ どんなに ”

「 どんなに 」

“ 危機的な状況でも ”

「危機的な状況でも」

“「助けれる!!!」”

俺は天つ風を構え床に固定されたロストにゆっくりと近づく

そして魔力を集中させていく、浄化の風のように

「何をするつもり？」

《やめてくれ……殺さないでくれ》

「大丈夫、安心してください、必ず助けます、だからあなたも信じてください」

「あなた……まさかロストの声が聞こえるの!？」

俺は天つ風を両手持ちし、天つ風を振り上げた叫んだ

「行つくぞおおお凜!!!」

俺が叫んだのはシルフィーではなく、一人の少女の名前を

天つ風を一気に降り下ろし、ロストの皮一枚を切るような繊細さで切った

「グオオオおおお……」

皮一枚を切られたロストは切り開かれたように開き

その中から、男性が倒れ込むように出てき、俺は床に落ちないよう  
に腕で受け止めた

そしてその光景をセシリアは信じられないような目で見ていた。

十二話 報告(前書き)

携帯の不具合でなかなか繋がりませんでしたf( ^ー^ ) ;

## 十二話 報告

「ロスト化したのを元に戻しました」

渴れた声が部屋で後ろ向きに座っている男に向けられる。

灯りがつかない暗闇の部屋で男は何も答えずに、黙ったままだ。

暗闇の部屋にぴったりの沈黙を被ったように黙りこんでいる

しかしそんな男を気にした様子もなく続ける

「その男の名は浅村 秀、コアランク不明、魔道具名不明、能力は刀+目に見えないほどの速度で動く（仮）飛脚の翼の新加入者ですね、報告は以上です……では」

「待てスネイク……」

椅子を後ろ向きに座っていた男が枯れた声で喋る

枯れた声は力が感じられないが、どこことなくだが威圧感がある

スネイクと呼ばれた男は手にかけていたドアノブから手を離し、男の方を向く

男は依然後ろを向いたまま一言スネイクに命じた

「了解しました、このアルバール・スネイクにお任せください」

スネイクはそう言って、一礼すると部屋から出ていった。

ドアが完全に閉まる音がすると

「ふふふ、めずらしいわねキルジが他人に興味を持つなんて」

「ふ、お前も一緒だろ、とにかくこれから面白くなる、とくに浅村秀を中心にな」

ロストの異常発生の日より3日後、俺はいつも通り飛脚の翼で過していた。

ロスト化したのを元に戻したことにあまり触れずに3日が過ぎた。

あまり触れられないことにビックリしていたが、おそらくセシリアさんがいろいろとしてくれたのだろう、本当にありがたい。

ちなみに異常発生したロストの方だが、ネシアの全ギルドの総出の結果、なんとか殲滅することができた。

謎のロストの異常発生によるネシア襲撃事件

多くの人が犠牲になったこの事件で、一つ大きな謎が残っていた。

それはネシアの城から王家の娘とマスターの失踪

この事件をきっかけに、二人は忽然と姿を消したのだ。

今もまだ失踪は続いている、3日経つ現在は、城の兵士で捜索をおこなっているが成果はまったく上がっていない。

そのせいか、マスターのギルドはかなりの混乱に陥っている。

「はあ~~~~」

深くため息を吐いたのは西脇

テラスで一人、ぼーっと街を見ていた。

（凜って誰だろ？）

浅村君が部屋で叫んだ時に確かに聞こえてきた凜という名前

石月さんでも新藤さんでもなく、そして私でもない名前

男の子か女の子も分からないがはずなのに、凜という名前が聞こえてきた時、胸がチクリとしたので私は確信しました。

ただの勘といったら堪になるんですが、女の勘をなめてもらったら困ります、あまり当たったことはないんですがね

とにもかくにも浅村君が言った凜という名前は女の子なんです

でも肝心な関係が分からないのです、もやもやが残る嫌な感じ

親戚なのか、昔の友達なのか、それとも……恋人なのでしょうか？

いや、恋人なんてありえない、あの朴念仁代表の浅村 秀が恋人なんて……

よそう、考えれば考えるほど悪い方向に考えてしまっつ。

とりあえず今考えたことは忘れよう、それにもうすぐ昼食だし、手伝いに戻ろう

「よお西脇、何黄昏てんだ」

「っ！……あ、浅村君！？」

「そんなに驚いてどうした？」

「あ、いえ、別に、あはははは」



いきなり現れた浅村君にしどろもどろになってしまっ。

何でこうタイミングが良いような悪いような時に出てくるんですか！

と心の中で言うものの、内心は素直に嬉しい

「気にしないでください、少しぼーっと外を眺めてたんですよ」

嘘をついた、聞きたいという気持ちがあったけど、聞くに聞けなかった。

のだが……

「ふーん、てつきり何か思い悩むことがあったのかなと思ったよ」

「っ……！」

「ん？ははあん、凶星ってとこだな」

「そ、そんなことないよ」

「そんな震えた声じゃ、説得力ねえな」

確かに彼の言う通りだ、確かに私の声は震えていた。

「まあ、悩むのは悪かないけど、しんどくなったら相談にのってあげるからさ」

その時、浅村君は軽い冗談のつもりで言ったつもりのはずだが、私はその言葉を真摯に受け取った。

「……………もらいます」

「ん？」

「だったら、相談にのってもらおうじゃないですか！」

「に、西脇、どうしたんだよ、何かやけになってないか？」

浅村君の言う通りやけど、でもここまで言ったら私はいくしかないのだ

少しおどける浅村を気にすることもなく、私は言葉をぶつけた。

「凜って誰なんですか？」

「……………」

## 十三話 ぶつける想い

「……………」

浅村君は私の問いに答えない、ただ、私のさらに向こう側を見つめていた。

まるで、私がそこに存在してないかのよう

「あの……………」

私はたまらず声をかけようとしたが、どうにも続きの言葉が出てこない

すると

「はははは、どうしたんだよ、いきなりそんなこと聞いて、どうせ聞いてもしょうもないことだから気にすんなって」

彼は何の冗談だよと言わんばかり笑いながら、話していたが、彼が笑っていないということはすぐにわかった。

浅村君にとってはそれほど知られたくないのだろうか？

しかし、たとえそうだとしても私は知りたいのだ

「しょうもないことなんかじゃないです、私はどうしても知りたいんです！浅村君が言った凛って名前の人がどういう人なのかを」

自分でもびっくりするくらいの声量を出した私は、はっと我にかえる

「す、すいません……」

「いやいいよ、でも西脇、凜っていうのはほんとに知っても知らなくともどうでもいいことだと思っよ」

妙に説得力のある言葉と落ち着きよう、何だか浅村君だけズルいで

さっきまで取り乱していた自分がバカみたいです。

そう思っていると、どうにかして目の前の朴捻人に何かしてやりたいな事をしたい。

「逆に西脇が何を理由に知りたいたいんだ？」

「うっ、それは……」

浅村君の問いに戸惑う私

(ここまで、それにこれまで色々アプローチかけたのにわかんないんですか！)

と叫びたいところだがグツとたえてみる。

「じゃあ、教えたら教えてくれますか？」

「それはダメだ」

「何ですか！」

つつい声を張り上げる

一方的な情報提供は等価交換の原則ではない

今ここで等価交換の原則を持ち込むべきではない

となどと考えさせられてる内に浅村君のペースに乗せられている。

悔しい、とても悔しい、多分私がどれだけアプローチしても、この気持ちは浅村君には伝わらない気がする

こんなにも想っているのに……二年前から

浅村君は全くと言っていいほど気づいてないでしょうけど、私はあの時からずっとあなたを想っているんですよ、あの時からずっと……

……

## 十四話 始まりは二年前

（2年前）

私が中学生の時の話です、ちなみに浅村君や連さんとは違う総山中学校でした。

当時私は中学三年生で、その頃は北会高校なんかよりもずっとずっと上の高校を目指していました。

「茜カラオケ行かない？」

友達の女の子グループの一人が誘う。

同じ受験生同士なのに怖くないのだろうか

ちなみにこの女の子グループは北合よりしたの高校を目指している。

「ごめん、行きたいけど今日家庭教師なんだごめんね」

「ならしょうがないね、茜ももう少し息抜きしたらいいのに」

「そういうわけにはいかないの、じゃあまたね」学校から出た私は家に帰る。

家庭教師が来るのは5時、それまでに家で復習だのなんたらをやっておこう

「自宅」

「ただいま」

「おかえり茜、先生もう来ているわよ」

「えっ！？な、何で？」

いつも5時ぐらいに来るはずなのに

そのまま階段を駆け上がるり、自分の部屋に入る。

「すみません、遅れてしまって」

部屋に入って開口一番に謝る

部屋には眼鏡をかけた長身の茶髪男性が机の上でテキストの準備をしていた。

林 和樹、大学生で私の家庭教師だ

「いやいや、謝るのは僕の方さ、早く着きすぎたからね」

「いえいえ、さあ先生、早速始めましょうか」

鞆から筆箱を取りだし、鞆をベッドに置く

それからキャスター付の椅子を引いて座る

「じゃあ、まずは国語からだね」

私は言われたページ数を開き私にとって運命の日を動かし始めたのだった。

場面は変わり

一駅越えた所にある蒼川中学校

その裏側でのこと

「ぐっ……………」

苦痛の声が出たのは、右ストレートをもろにくらったガタイのいい男子

そんな巨体の男子が膝から崩れ落ちるほどのストレート

「めんどくさいなコイツら」

「まあチャレンジ精神は日頃から持つべきだから、悪くはないぜ、でも……………」



後ろから来た男子を後ろ回し蹴り一発で倒す

「喧嘩売る相手は考えた方がいいぜ」男子を一人倒して残りは二人、危機を感じたのか一斉に襲いかかる

「俺は右な秀」

「あいよ、じゃあ俺は左か」

そう言つて俺と連も2人に向かって走り出した。

〈5分後〉

「はあ、はあ、はあ……………ふう〜」

「いっちょあがりだな」

手をパンパンと合わせるようにして決める

「くっそ……………化け物達が」

ぐったりしている男達が対照的な俺と連に言葉をぶつける

「化け物呼ばわりするんだったら、始めから喧嘩売るなってんだ、じゃあな」

脇に投げ捨てたブレザーを拾い上げる

どこをどうとつてもただの喧嘩

しかしなぜ、俺と連がこうなっているかというのを簡単にいつと時間遡ること2時間前

（二時間前）

「好きです付き合ってください!!」

「ふへ？」

二時間前、俺は告白されていた。

相手は同じクラスの柊さんという女の子で、ちょうど今の席で横の席に座っていた。

少し茶色がかった髪のボブカットの女の子で、毎年行われるミス蒼川で去年2位に入るほどだ

「えーと……どうして？」

なにぶん、柊さんから好意をよせられることには記憶がなく、告白の経緯がわからなかった。

さらにはミス蒼川の子がなんでまたという心境だった。

「一目惚れなんです／＼」

「へ！？」

あまりにも唐突で、こっぴടずかしい言葉に驚く。

「一年生の時に浅村君のことを初めて見た時に、か、カッコいいな  
と思って、それから何をする浅村君もカッコよくて、今年やっと一  
緒のクラスになったんです」

「あ、ありがとう……」

「そ、それで、去年ミス蒼川に入ったら告白しようって決めてたん  
です」

「な、なるほど……」

柊さんの言葉に俺は上手く言葉を返せない

告白されたのは初めてなのかもしれないが

「だから……」

「うおっ!?!」

いきなり抱きつかれた俺はどうすることもできず、ただオロオロしている。

そしとそんなオロオロしている俺を見た柇さんはOKサインと見たのか、片手を顔にそえ、ゆっくりと顔を近づける

わかっているとは思うが柇さんは目を閉じている

後数十センチという距離の時だった。

「柇さんから、離れるこの野郎!」

背後からする大声の方向には二時間後倒される男

男は大声とともに背後から殴りかかってくる

「おわつと!」

体をうまく回転させて間一髪でかわす

「あつぶねえな!何すんだよ」

少し怒りじみながら言う

まあいきなり殴りかかれたら当たり前だ

「お前みたいな奴が柊さんに近づくんじゃねえ！」

(別に近づいたわけじゃないんだけどな……)

完全に血がのぼっている男に何を言っても聞くはずもなく、男に呼ばれた俺は柊さんを置いて裏に呼び出されたという感じ

裏に行くと、そこには数人がいて、来ると同時に連がどこからか騒ぎを聞きつけたという

ざっと説明すればこんな感じだ

抜け抜けの部分があるが、そこは説明するのもめんどいので排除と  
いうことで

さて回想はここまでにしておき、進行形に話をもどそう

一通りの騒ぎを片付けた俺は用事があると言って、連と別れて柊さんの所に急ぐ

幸い早めに終わったこともあり、柊さんは告白した場所において、心

配そつに窓の外を見ていた。

「柘さん、ごめんね」

「浅村君!」

またもや抱きつかれた。

柘さんは泣きながら抱きついて、離れる様子がない

俺はそんな柘さんをただただ撫でていた。

こんなにも自分を心配してくれる柘さんがいるという優しさを噛みしめながら

「良かった……無事で……無事で良かった」

「ありがとな心配してくれて、でもあの程度じゃ俺はやらねはしな  
いから、頑丈だから とりあえず帰ろうか」

「……………うん」

まだ柘さんが落ち着いていなかったが、俺と柘さんはとりあえず学校から出た。

すでに夕暮れから夜へと変わっていく時になっていた。

「柘さん、家は何処なの? 今日みたいなことがあるから送ってこつ  
と思っただけだ」

「ありがとう、じゃあお言葉に甘えさせてもらおうね」

柘さんは俺の方に体を寄せて、腕を絡めて密着した

「っ！！ひ、柘さん？」

「ふふふ、さあ行く浅む……いや行く秀」

また場面は変わり

「うーん……多いですね」

目の前にあるのは私の身長をゆいに越すほどの本棚

各種の科目、レベル順に並べられていて、様々な種類の参考書があった。

「ゆっくりと選べばいいよ、時間はたくさんあるんだから」

私と林さんは参考書を選びに来ていた。

家から少し離れたところにある大きな書店にてだ。

林さんがわざわざ車を回してしてくれたようで、勉強が終わった後、参考書が必要だとなって現在にいたる。

この本屋に入ったのは初めてで、あまりの大きさとその大きさに準じていた本の量に圧巻を覚えました。

そんな大量の参考書の中で一つ私の目を引く物があった。

背伸びをして本棚からすーっと引き抜いてパラパラと捲る。

「ん？それが気に入ったのかい」

「はい、かなり分かりやすくまとめられていますし、なによりレベルがぴったしだと思っんですけど」

「なら、それでいっこうか」

持っていた参考書を林さんが取ると、そさくさとレジへ行き会計を済ませ、本屋から出た。

「すみません、今日はありがとうございました」

「気にしないで、さて帰ろうか」

本屋を出た私は林さんの車に乗った時だった。

「……………あれ？」

車に入り、キーをさし込み捻ったのだが、なるはずのエンジン音は



ならない

何度も何度も捻るが同じくエンジンは鳴らず、鳴る気配もしない  
つまりは………

「ごめん、エンストだ」

「困りましたね、歩いて帰りますか」

「ほんとにごめんね、そうしょうか」

このハプニングに見舞われた私達は車から出て本屋から出る

時間はすでに9時を回っていて、辺りも真っ暗で外灯の光が一際目立つ

私は本屋で林さんと別れ、お互いに別の方向に歩いていく。

ここから歩いて30分ほどかかる距離に落胆しながらも歩いていった。

その後ろから不気味な視線が向けられてるにも知らずに………

「ふふふふふふ」

林さんと別れてから10分が経ったでしょうか、私は人通りの少ない道を歩いていました。

買ってもらった参考書を大事そうに両手で抱え込みながら歩いてました。

人一人いない、静かな夜道を歩く私、もうすぐで人通りの多い道に出るといった時でした。

「っ！！！！！」

いきなり誰かに腕を掴まれ、強く掴まれた方向に引っ張られる

いきなりのことので驚いた私は声が出せず、その方向の細い横道に連れ込まれてしまった。

さらには口を押さえこまれ、ことの重大さを把握した私だけ声を発することができない

「ん、んん、んんん！！」

「へへへ、捕まえた」

バツと首を回し、目の端でまるで獣の様な目をした男性がいました。

そして、その男性は手を私の胸に当て強く揉まれる

「んん〜!〜!」

両手両足をじたばたさせるが、まったくびくともしません

その間胸は揉まれて、今にでも死にそうな最悪な気分でした。

そして男の手はついに下の方に進んでいきました。

目から涙を流して、必死に叫び声をあげたのですが、口を押さえられていたも、まったく声を出せない。

私は必死に叫びながらも、心の中でも叫びました。

(誰か助けて!〜!)

「おい、何やってんだよ!〜!」



十四話 始まりは二年前（後書き）

ちょっとありがとうございますかね？

## 十五話 動きだす恋

涙目になりながら私は目に映ったのは浅村君でした。

男は驚いたのか、私を拘束していた手が緩む

そして私はその一瞬を逃さず、浅村君の胸に泣きながら飛び込む

「うおっ！！何だ、ついにモテ期がきたか？」

私はその時浅村君が何を行ってるのかは分かりませんでした。

ただ目の前にいた人に助けを求めた、それだけでした。

しかし、浅村君は状況を把握したようで、男に敵意の眼差しで睨む。

「おいおい、いい歳こいて犯罪に手を出すのか？家族が悲しむ……  
つて、こんなことするんだ、家族すらいないか」

相手の感情を完全に逆なでる

「つくく／＼／／」

浅村君の言葉に、顔を真っ赤にした男は、馬鹿にするなど言わんばかりに走ってくる。

「待ってて、10分で終わらせるから」

そう私に優しく囁いた浅村君は、男と同じく走っていった。

〈5分後〉

「……………」

「まったく、昼の奴らより手応えがねえな」

浅村君の前でぐったりしている男

10分の予定の半分の5分で終わってしまった。

「さて、警察に引き渡すか……………」

ポケットから携帯を出し、簡潔に電話先に伝えると

浅村君はすぐさま私のもとに駆け寄り、優しく抱き寄せて背中をさすってくれた

「大丈夫かい？どこか怪我してる？」

「あ、いえ大丈夫です」

あまりの展開に私は呆然とした状態で最低限な受け答えしかできませんでした。

それから5分もしない内に警察官が到着し、私と浅村君はそれぞれ別の人達に事情を聞かれて、その日に家まで帰されました。

家に到着した時、お母さんが泣いて私を抱き締めたことは覚えていましたが、そのこと以外は一つしか覚えていませんでした。

それは人生初のパトカーに乗った時に警察官の人達が話していたことです。

「えーと、この子の名前が西脇 茜ちゃん、助けた子の名前って何だったけ？」

「確か蒼川中の浅村 秀って子でしたよ」

(蒼川中の浅村 秀さん)

浅村 秀さん、それが私を助けてくれた人の名前



蒼川中の浅村 秀さん、私と同年

私は蒼川中の浅村 秀さんに興味をしてみました。

そして私は浅村 秀さんに会いたくて仕方ありませんでした。

「……………はあ」

深い深いため息をつきました

## 十六話 回想後……

私には二年前にそんな過去がありました。

私はそれから学校つたいに浅村君を知り、彼の志望校が北合高校だと知り、私は北合高校にめでたく入学したのです。

浅村君とは入学式であつたんですが、残念ながら浅村君は私のことを忘れていて、まったく気づきませんでした。

しかし、私はあの日のことを言おうとはしませんでした。

何故ですか？

そんなの決まっています。

二年前のあの日から浅村君は私にとっての運命の人なんですから。

運命の人には気づいてほしいんです。

だから私は浅村君に言うことはありませんし、これからも言うこと  
はないでしょう。

私は二年前から浅村君を思っていたんです。

だからでしょうか、私は浅村君から発せられた凜さんという名前が  
チクリと刺さったのわ

何にしろ、私のこの気持ちは変わらないのです。

そしてこれからも変わることはないでしょう。

おっとっと回想はここまでにしておきましょう。

「……………」

二年前のことを思い出した私は、なかなか言葉がでない。

「どうした西脇？大丈夫か？」

浅村君が心配するが、私はそれでも次の行動に移せない

「西脇ー？おい」

「……………」

なかなか行動に移せない私を何度も何度も呼び掛ける浅村君

目の前で手を振ったりしてくれるが、私はそれにも反応しない

「……………」

「……………西脇！！」

「ふえっ？」

ドオン！！

轟音が鳴り響く

いきなり浅村君に抱き寄せられると、次の瞬間2、3メートル移動していた。

私が出た所は土煙が舞い上がっていた。

「正体表しやがれ！！」

パツと手を振り払うと、風が吹き、土煙を吹き飛ばした。

土煙を吹き飛ばすと、凄く大きく、湾曲した剣が突き刺さっていました。

そして剣の持つ所に大人の男の人が立っていました。

黒髪の短髪で、全ての髪をさか上げている。

そしてその人はとても低い声で言いました。

「よく避けたな……」

「自分でも思うよ、夢叶えるための旅を続けてたら、なるようになるな」

この状況で、よくこつも喋れますね

「西脇、お前は戻って皆に安全な所に避難させてくれ、後ギルドの皆と連に応援頼んだぜ」

「えっ、ちよつと浅村君!!」

そう言って浅村君は、いつも通り物質憑依をして、敵へと走っていた。



## 十七話 謎の男

「韋駄天!!」

キーン!

「おっと…」

韋駄天のスピードで切りかかったが、天つ風は男の右手で防がれる。

「何!!」

金属でも入れてんの!!

「おっとっと、そんな単純な攻撃じゃ俺は倒せないよ」

いまだに剣の持つ所に立ったまんまの男

振りきろうとしたのに相手は動いてすらない、それほどの相手なの  
だろう

「ならっ 絶空剣・嵐!!」

「おっと」

後ろに一歩ジャンプした男は地面に降りた

やっと動きやがったか

「さて、そろそろ動くか……………」

片手でバカでかい剣に触れると、剣がみるみる小さくなり天つ風と同じ大きさになる

そして男は距離があるのに関わらず剣を振り抜いた。

「蛇腹剣!!!」

(この感覚は!!)

覚えのある感覚に襲われた俺は反射的にしゃがみ体を丸めた

距離があるにもかかわらず男が振り切った剣は、俺の背後を通りすぎた。

そう、剣が伸びたのだ

あの時のように……………」

「ほう、初見でかわしたのはお前が初めてだ」

「こつこつというのは俺は初見じゃないからな」

「頼もしいねえ」

蛇腹剣をまた構え、振り抜こうとした時だった。



「氷槍・包!!」

そう、男の回りが氷の槍に囲まれた。

親友の最近のお気に入り技だ。

「連、みんな!!」

後ろには連とギルドの皆が立っていた。

どうやら西脇がやってくれたようだ。

「さて、アンタは誰だ？それと目的は？」

「名前はスネイク、目的は上からの命でお前にアクセスを図れとのこと」

「……………」

「ん？どうしたのだ？いきなり黙って？」

敵ならここは

お前らに教えることなど何もない!!とか

……………と黙秘するとか

こっちの質問にまさか答えるとは思ってなかったため、俺はついっ  
い黙ってしまった。

まさか敵さんが素に答えるとは……

「えっと……上って誰のことだ？」

「さあてな……質問は一回までだ、俺は帰らせてもらっつ」

「どの状況で言ってるんだよ」

「ん？どの状況かね」

パキィ！！

「な！？」

「氷槍が全部砕けた！」

「では失礼させてもらっつよ」

よっこらせと言わんばかりにゆっくりと立ち上がるスネイク

スネイクすばやくテラスから飛び降りると、その姿はもう消えていた。

## 十八話 後の衝撃

スネイクが消えた後、俺は連とギルドメンバーと話をしていた。

題目は突然襲撃してきたスネイクのこと

スネイクという男はギルドメンバーも知らないらしい

俺にアクセスをしにきたというよくわからない理由

何を決めるにしろ、判断材料が少なすぎるため、俺達は結局は何も決まらなかった。

いつも通りの日常をただたんに過ごすということだった。

〜それから時は過ぎ〜

晩御飯を食べ終わった俺達は、各自の部屋に戻って休憩していた。

昼間に話していたスネイクのことなど忘れて

これから、起こることなど知らずに……………

そして深夜

いつもながら眠れずにいた俺はぼーっとしていた。

「はあ」

この世界また戦うことになるとはな

昨日も戦えば、また今日も戦った……

(今日も眠れねえな……)

ドタ……

(ん？今ドアが……侵入者か!!)

ベッドから起きた俺は、木刀を持って部屋を静かに出る

部屋を出ると、前にはアスタとセシリアさんがいて、二人も気配に感ずいたようだ

「おっ、浅村」

「あら、起きたのね」

「ええ、まあ……つとそんなことより侵入者ですかね？」

「そうだな、間違いなく誰か侵入してきただろうな、そして奴さんは」

親指を立ててビツと二回、リビングの方を指した。

リビングには灯りがついていて、間違いなく、誰かがいることを証明していた。

「せーので俺が開けるから、浅村が一気に入って速やかに侵入者を捕まえる、いいか？」

「大丈夫です、問題ないです」

「いくぞ………せーの!!」

ボタン!!

「韋駄天!!」

ガツ!

「あっ………」

一気に部屋に突入した俺だが、目の前の机に足を引っ掛け、そのまま壁にぶちあたった。

「……………はっ！！侵入者は……………あれ？」

辺りを見渡した俺だが、侵入者らしき者は見当たらない

「動かないで……………」

頭にボウガンが突きつけられていた

精一杯横目で横を見るとそこには失踪したマスターが横に立っていた。

「な、何で……………あなたが」

「お願い騒がないで、騒ぐとこの子は顔に矢が刺さります」

「わかったわ、言う通りにするから、落ち着いて」

マスターを制止するセシリアさんだが、マスターは今だ気をゆるしていない

それが一番近くにいる俺がわかる

「……………私の要求は一つ、この子を……………頼み……………」

「お、おい、あんた！」

いきなり倒れたマスターを急いで支え、床に倒れないようにする

そして倒れたマスターの背中にはボロボロになった何かの布で膨ら

みのある何かが包まれていた。

(何だこりゃ?)

俺はそおつとその包みを摘み、ゆっくりと剥がした。

「っ!!!!」

俺はその時、次の言葉がなかなか出てこなかった

ポロポロの布にくるまれてる剥がした時、この世界での運命は大きく動き始めたのだ

まさかその包みの中が……………

「凜……………」

だったとは知るはずもなく、そしてそれが新しき出会いと、悲しい  
真実を知ることとなる





## 十九話 衝撃の再開

「嘘だろ……………」

今自分が見た光景が信じれず、俺は否定の言葉しかでなかった

そして

「凜!?!」

「ちよっとまったあ!」

「ぶほっ!?!」

俺は凜に抱きつこうとしたのだが

横から入ってきたセシリアさんに阻まれる

そしてそのままガツチリと捕まれ、凜に近づくことができない

「ちよ、おい、離してくれ!?!」

「待つのはあなたよ、王家の娘に何するつもり!?!」

「王家の娘だ?ぶざけるなあれは凜だ、白羽 凜なんだよ!?!」

必死に暴れるが、セシリアの拘束は解けない

あまり腕つぶしが良くない体型なのに、俺が出れないのは、何か秘

密があるのだろうか

まあ、そんなことはさておき、俺はついには風を発し、セシリアさん吹き飛ばそうとした

しかしその時

「いい加減にしろ!!」

ドカ!!

横からアスタの拳が入る

「ぐっ………何すんだよアスタ!!」

「それはこっちのセリフだ!!まずは落ち着けよ!!」

セシリアかわり、アスタが俺を押し倒し、そのままガツチリとおさえる。

これでは動けない

「くっ、ふざけるな………風よ!!」

体から風を発し、アスタを天井まで吹き飛ばす。

「痛って………浅村てめえ!!」

バリン!!

アスタは俺に飛びかかり、俺達二人は窓ガラスを割り、そのまま外に出る

「上等じゃねえか、こうなりやとことんやってやるよ」

「今の俺は容赦しねえから、逃げるなら今のうちだぜ」

スツと木刀を構える

「新顔が……なめるなあ!!」

互いが走りだし、中央でぶつかる瞬間

「いい加減にしろ（なさい）!!」

「へ!?!」

二人を止める声があったとたん、横から風と氷の鷹が飛んでき、アスタと俺に直撃した

「……………」

黙ったままの二人はもちろん俺とアスタ

それも正座をした状態で、目の前に明らかに怒っている6人と顔は笑っているが、一番威圧感と恐怖のオーラを纏った女性が一人

「何でこうなったか分かってますよね」

「……………はい、すみません」

「そんなにすぐ謝るんだったら、しないでくださいね、だいたい…」

そう言って後ろを向いて降りたセシリアさんは俺達二人にいい始めた。

「くっ、お前のせいだぞ浅村」

「な！？アスタが突つかかるから悪いんだろ！！」

セシリアさんに聞こえない程度のボソボソで喋っていた俺達だが

「そこお！！喋らないで」

「「はい…！」」

びしっと固まり、そのまま正座の状態のままセシリアさん達の説教は2時間におよんだ



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2940j/>

---

ANOTHER WORLD ~ 叶えたい夢のため ~

2011年10月2日19時49分発行